
感染者の沈黙

原案・文章：岡田健八郎 キャラクターアイデア：岡田健八郎の兄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感染者の沈黙

【Nコード】

N1037X

【作者名】

原案・文章…岡田健八郎 キャラクターアイデア…岡田健八郎
の兄

【あらすじ】

あれから半年後。

今度は街が汚染される。

狂暴化した生徒達による無差別殺人【大羽中学校封鎖事件】
事件の事実隠蔽され、人々は真実を知ることが無かった。

事件の生存者達は東京で新たな生活を始めていた。だが、事件の元凶<DEMONYO

ーウイルス>による脅威は終わっていなかった。突如封鎖される東

京。武装する自衛隊。東京内でウイルスによる新たな＜感染＞が始まった。さらに、闇に潜む謎の生命体の影も忍び寄っていた。あの事件の恐怖は、始まりに過ぎなかった――

すべてが前作を超えた！

脅迫と衝撃が増殖するサバイバル・アクション第2弾

会話

大澤博士は静かに待合室に入り、内閣総理大臣と相沢陸将の後ろにたたずんだ。2人とも、研究室を見下ろす大きな窓の前にはりつくようにして立っていた。

「彼女は何だ？」総理が尋ねる。

「フランス人だとは聞いたが」陸将が答える。「くそ、彼らが邪魔でよく見えないな」

「何をしてるか見えるか？」

「心配いりませんわ、総理」大澤博士は甘い声でなめらかに言った。総理がびくつと身体を痙攣させ、振り向いた。

「君か！驚いたよ、博士」白髪交じりの総理は言った。大澤はいつも思うのだが、この総理は報道陣のカメラの前に立っているとき以外はとても神経質に見える。1国の総理大臣が女の私に驚くなんて皮肉だわ。彼女は笑みを隠し、2人の前へ立った。

「申し訳ございません総理。私が居ることに気づいているかと」

総理は笑いをあげた。「こんな薬品だらけの研究所のせいかな。私は少々薬品恐怖症気味でね」

相沢陸将が言った。「いつでも新鮮な空気が吸えますよ」あら、この陸将も驚かされたことに機嫌を損ねているわ。大澤はそう思った。「それよりも彼女は何だね？」総理は尋ねた。

「今回の封鎖事件の出来事は覚えていますか？」

総理は思い出したくない過去をむしり返されたような口調で言った。「ああ。未知のウイルスが学校内に流行しことだろ？国民には公表してないが」

総理は陸将を向いた。

「そういえば、あの封鎖に関わった者の処罰はどうした？」

陸将は冷静な声で言った。「たいして重い処罰はしてません。矢も得ない状況だったので」

総理は大澤に向き返した。

「それで、その封鎖事件と彼女の関係は？」

大澤はからかう目で総理を見つめた。

「彼女の血液中や唾液中にウイルスが検出されました」総理は驚いた。

「感染しているのか？」

「ええ。でもどういうわけか彼女は免疫を持っていて発症はしません」

総理は窓から女性を見た。

「まだ中学生だな。彼女は免疫を持ってるのだろうか？なら早く家族の元へ返してやらないのか？」

大澤は総理の無知さに驚いた。

「確かに免疫は持ってます。しかしそれは発症させてないだけで、彼女は非感染者ではなく保菌者です」

陸将は聞き返した。「保菌者？」

「そうですわ。彼女の唾液やか血液を他者が触れたりしてしまったら、その人はウイルスに感染します」

総理は同情の目で少女を見た。「つまりウイルスの運び屋か」

「彼女を元に何をしているのだ？」陸将は訪ねた。

「彼女の血液を元にワクチンの開発を試みています」

総理は大澤に向いた。「成功するのか？彼女を永遠にこの研究所に閉じ込めておくわけには行かない。開発は早くしてくれ」

「大丈夫ですわ総理。近年の医学はかなりの発展を遂げてます」

陸将は総理に尋ねた。「総理。あの＜作戦＞は承認していたただましたか？」

総理は陸将から目をそらした。「ああ、国会で正式に承認した。建設も早く取り掛かるだろう」

「思ったより早かったですわね」大澤は驚いた声で言った。

「国会も大流行を恐れてるのだろう」陸将はそう言った。

総理は大澤に向いた。「彼女の細胞サンプルを採取して家に帰すこ

とはできるか？」

「可能ですわ」

「ならそうしてやれ」

総理は窓から少女を見つめた。
「いことを願う」

「できれば、あの作戦が発動されな

転人生（前書き）

【前作の登場人物】

相沢信二 あいざわしんじ

大羽中学校学校封鎖事件の数少ない生存者。あの出来事がトラウマになっており、毎日悪夢にうなされている

相沢信也 あいざわしんや

信二の父親。陸上自衛隊に入隊しており、階級は陸将。前作では名前のみの登場

相沢茜 あいざわあかね

信二の妹で信也の娘。重い病気を患い、入院中。

相沢信一 あいざわしんいち

信二と茜の兄で信也の息子。SATの狙撃手 スナイパー。

【新たな登場人物】

安藤真人 あんどうまこと

転入した信二の初めての友人。友情は大切にする人物。陸上部所属。結構異性から人気ある。イケメンで運動神経抜群。一人称は俺

梶尾聖夜 かじおせいや

大柄の肉体派男子。成績はそれなりに良い。部活はサッカー部。クリスマスに生まれたため「聖夜」と名づけられる。普段は常に不機嫌。猫アレルギー一人称は俺。

坂本真希 さかもとまこと

はちゃめちゃ生徒会長で眼鏡をかけた女子。信二に興味を示す。

帰宅部だが、相当なタフで学校内では人気がある美女。猫好きで口癖は「ニャー」一人称は私。

実は空手を習っており、黒帯。常に上機嫌。

なみかわごえもん
波川五右衛門

剣道部所属の男子。相当な実力者で町内大会を何度も優勝。物静かで堂々な性格のため、周囲からは現在に生きる侍と呼ばれる。口癖は「油断は死を招くぞ」一人称は拙者。

佐々木奈々子（ささきななこ）

剣道部所属の女子。ポニーテールのロングヘアーで美女だが、五右衛門に匹敵する実力者。口癖は「隙だらけだぞ」一人称は私。

よしかわゆうや
吉川裕也

落ちこぼれで、冴えない男子。友人も少なくいつもクラスでは孤立する。部活は美術部だが、美術は苦手。一人称は僕。

くろさわまと
黒澤真斗

左右不对称のツインテールをした美少女。無口で性格は純粹で嫉妬しない。滅多に笑顔を見せないため、彼女の笑顔はレアと言われている。帰宅部だが剣道、柔道、空手の達人。一人称は私。

たけだまつえ
武田松江

渋い男子。自分のことを大佐と呼ばせる。柔道を習っている。一人称は俺

おたくだ
尾田句田

ゾンビオタク。赤いコンタクトレンズを持っている。一人称は僕。

あやせ
綾瀬マユ

学校内ではアイドル的存在の優等生女子。男子からは人気、女子から妬まれている。なぜか信二を気に入った。一人称は私。

ジャン・ヤ・トリエン

ベトナム人の優等生。傲慢な性格。一人称は俺様。

へびだにこだい
蛇谷古代

元自衛隊の教師。基本的に面倒見が良く、声も洪いたため生徒から人気がある。担当教科は社会。安藤達の担任。一人称は俺。

いしかわのりこ
石川紀子

広報委員。信二を【大羽中学校封鎖事件】の生存者だと睨み、インタビューする。一人称は私。

こじまかみ
小島香美

金持ちのお嬢様っ子。プライドが高い。一人称は私_{わたくし}

転人生

3年1組の安藤真人はいつも通り、教室の窓側の席に座っていた。

「今日も平和だね」そう呟いた。

「隙だらけだぞ」何者かがそう言って真人の右肩を竹刀で叩いた。

「いってえよ！ 奈々子！」 佐々木奈々子が竹刀を肩に担ぎ、真人を睨んでいた。

「平和ボケしてるなよ。人間はいつどこで死ぬか判らないからな」平和ボケって・・・戦争が無いからすりゃあ平和ボケするよ。おかしな女だな。

「五右衛門！ この女子に一言言ってくれ！」 真人は、自分の2個後ろに座る波川五右衛門に助けを求めた。五右衛門は真人を見つめた。

「油断は死を招くぞ」

「五右衛門まで・・・」 真人は絶望した。

「今なら間に合う。剣道部に入れ」 奈々子はそうアドバイスした。

「無理だね。もう陸上部に入ってる。陸上部が廃部しない限り、俺は陸上部をやめない」

真人は隣に座る坂本真希に助けを求めようとした。「生徒会長様。

お願いです、この女子に正義の裁きを」

真希は、眼鏡をかけ直した。「楽しそうじゃない♪ 別に、私が制裁する必要ないじゃん♪」

この生徒会長はいつも上機嫌でテキトーすぎる。真人はそう思った。

「武田！ お前ならわかってくれるだろう？」

武田松江は不機嫌そうに咳払いする。「大佐と呼べ」

「大佐！ 頼みます！」 真人はそう言った。

「女性に暴力は振るわない。俺のポリシーだ」 畜生！ 真人は心の中で叫んだ。

スライドドアが開き、黒澤真斗が入ってきた。真佐江の席は真人の斜め後ろだった。

「おはよう！」と真人が言うと、「・・・おはよう・・・」と真斗が小声で返した。

相変わらず無口だな。真人はそう思った。

「ああ！もうマジありえねーし！あいつ後でぶっ飛ばす！」

梶尾聖夜が不機嫌そうに真人の後ろに座った。

「どうしましたか？」

「稲葉と坂本が俺のことをバイオレンスパパって言いやがった！」と不機嫌そうに言った。

「私、言っさかもとりゆうせいてニヤいよ？」と真希が言った。

「お前じゃない。2組の坂本流星だ」と聖夜は答えた。

「それと「ニヤー」はやめてくれ。俺猫嫌いなんだ！」

「ニヤんて事を言うニヤ！猫可愛いのに！」

「俺は猫嫌いなんだ！」

「ニヤー♪」

聖夜は指と首を鳴らした。「てめー、マジで殺すぞ」

「望むところよ」真希は眼鏡をかけ直した。

真人は、真希の背後から虎、聖夜の背後から龍が現れたように見えた。「幻覚か？」

スライドドアが開き、石川紀子が入ってきた。

「朗報！朗報！」紀子は大きな声で言った。

「新種ゲーム機が販売するのか？」ジュン・ヤ・トリエンが面白半分で冗談を言った。

紀子はむかつとした。「違うわよ！」

「じゃあ何だ？」聖夜は不機嫌そうに言った。

「転人生が来るのよ」そう言った瞬間、クラスメート全員紀子を見た。

「マジで！」と男子が聞いた。

「男？女？」とトリエンが聞いた。

「男だよ」と紀子が言った。

「男か・・・イケメンかな♪」と真希は言った。

その瞬間、チャイムが鳴った。「皆、席に座りなよ♪」と真希は言った。

真人は、転入生が気になった。今年初めての転入生だな。愛想いいかな？

担任の蛇谷古代が入ってきた。渋い声で真人達に言った。「今日は新しい仲間が来るぞ」

スライドドアが開く。

1人の少年が入ってきて、黒板の前に立った。

「相沢信二です。神奈川から越してきました。これからよろしくお願いします」

真人は転入生を見た。イケメンだな……。近く的女子達の囁き声が聞こえた。

「結構イケメンじゃん」

「頭良さそうね」

「超、私好みじゃん」

「思いつきりアタックしようかな」

「無理無理。あなたじゃ無理」

女子共が騒ぎ出した。だから女は面倒だ……。ってどっかの男子が言いそうだな。真人はそう思った。

「信二君の席は・・・じゃあ窓側の一番前に座ってもらおう。男子達、下がれ」

窓側の男子達は席を下げた。蛇谷は、新しい席を窓側の一番前に置いた。信二はそこに座った。

それにしても、神奈川から東京まで引っ越すなんて、ご苦労なことだ。真人は1個ずれたことで、隣が真斗になり、斜め後ろが紀子になった。真希が信二に話しかけた。

「君、ちょっとテンション低いね」

「そ、そうですか？」信二はそう答えた。

「前の学校で何かあった？」

信二は少し黙った。真希にとってこの沈黙こそが答えだった。

「ごめん・・・答えなくていいよ。私が悪かった」

信二は真希を見た。「別にあなたは悪くない。前の学校でトラウマ級の出来事があったね」

「トラウマか・・・ごめんね。振り返りたくない過去があるんだね」
「・・・はい」

紀子は真人に話しかけた。

「ねえ、あの転校生怪しくない？」紀子は小声でそう言った。
「そうか？」

「絶対怪しい」

真人は呆れた。「怪しいなら、お前の意見を聞かせろ」

「＜大羽中学校封鎖事件＞を覚えてる？」そう紀子は質問した。

真人は覚えていた。大羽中学校封鎖事件は、警察特殊部隊によって中学校が封鎖され、自衛隊が校内に突入、大勢の生徒を射殺した事件だ。警察や自衛隊からの公表は無く、生存者も数名しか居ない。前代未聞のこの事件で一時期ウィルス流行説までできたが、真実は今だ不明だ。

「でも、事件から半年以上立ったぞ。生存者はとくに社会復帰してるだろ？」

「でも、あの事件で精神がおかしくなって、精神病院で治療してたかも」

真人はため息をついた。「だったらどうする」

「決まってるじゃない」紀子はウィンクした。「取材するのよ。真実を突き止めるの」

再びスライドドアが開いた。

赤い瞳をした生徒が入ってきた。真人はまたかとはかりに呆れ、信二を見た。

真人は信二の反応に驚いた。

信二は赤い瞳をした生徒に恐怖を感じていた。「まさか・・・！」

小声で信二はそう言った。

「尾田。コンタクトはずせ」

「へーい」

尾田句田は赤いコンタクトをはずした。信二はそれを見て安心した。真人は紀子に話しかけた。

「あの転入生の反応みたか？」

「ええ。絶対何かあるわよ。私たちが知らない秘密が」

紀子は興奮した。

「これは大スcoop間違いなし。謎の転入生の正体は？」

取材

1時間目の数学が終わった。

紀子は信二の席へと向かった。信二は紀子を見た。眼鏡にカメラに手帳、いかにも取材陣らしい。そう信二は思った。

「どうも。クラスメートの石川紀子です」紀子は信二を握手した。

「ど、どうも・・・相沢信二です」

紀子は、胸にあるポケットから何かを取り出した。小型録音機だった。

「信二君、2，3質問します。まず、あなたの前に居た学校は？」

信二は首を横に振った。「すみません。それは言えません」

「では、転校理由は？」

「家庭内の事情です」

「どんな事情ですか？」

「それは、秘密です」

紀子は単刀直入に聞くことにした。

「あなたはく大羽中学校封鎖事件＞の生還者ですか？」

信二は一瞬黙り込んだが、すぐに答えた。「いいえ」

「本当に？」

信二はため息をついた。「あなたは、あの事件の事実を知りたいのですか？」

「はつきり言えば、そうですね」

「なら、インターネットでく感染者の牙＞を検索するといい」

紀子は、聞き返した。「感染者の牙？」

「大羽中学生が投稿した封鎖事件の真実ですよ」

紀子は録音機を止めた。「ありがとうございます」

「で？収穫は？」真人は呆れ声で言った。

「感染者の牙をネット検索しろ・・・だってさ」

真人は渋い顔した。「感染者の牙？帰って検索するか」
紀子は真人に笑顔を見せた。「別に、今でも検索できるわよ」

―第1技術室―

第1技術室は、いわばパソコンルームだ。

「ごめんねー真希ちゃん。いろいろコネを使ってもらって」紀子はそう言った。

「別にいいよ。私もちょっと気になるし♪」真希は愛想の良い声で答えた。

「ほんとに、お世話になるわー」

技術室には、真人、紀子、真希、真斗、聖夜、トリエンが居た。

「何でお前らも居るの？」真人はそう聞いた。

「だって、気になるもん」全員、そう答えた。

紀子はパソコンの電源をつけ、インターネットを開いた。

「えっと、感染者の牙っと」紀子は検索した。

「あったあった」

紀子はクリックした。

聖夜は画面を見た。「どうやらネット小説らしい」

「題名が感染者の牙で、あらすじは、この物語は真実です。大羽中学校封鎖の真実を書きます。作者、和真・・・鳥円！」

全員、トリエンを見た。「違うよ！俺じゃないよ！俺ベトナム人！」

「分かってるわよ。それよりも小説を読もう」

全員、小説を読み始めた。

―数分後―

「こ、これって・・・」と紀子。

「明らかに・・・」と真人。

「いや絶対に・・・」と聖夜。

「フィクションだニャ♪」と真希。

真希を除いて、全員失望のムードになった。

「トリエン！てめー、ふざけたこと投稿するな！」聖夜はトリエンを殴った。

「違うよ！俺じゃないよ！俺はネット小説なんか書かないよ！」

「とにかく、教室に戻りましょう。時間の無駄だったわ」紀子はそう言った。

「そうかな？私は結構、面白かったけど♪」

全員、技術室を出て、教室へと戻った。

「やっぱり本人から聞くのが一番ね」紀子は言った。

「でも、本人は否定してるぜ？」真人はそう答えた。

「分かってないわね。嘘ついてるのよ」

「嘘？」

「そう・・・私は彼に、あの事件の生還者か？って聞いたの。違うなら普通即答なんだけど、彼は一瞬黙り込んだのよ」

「ああ！なるほど！」

「だから彼は絶対、あの事件の生還者で、事実を知っているはず」

「でもどうやって？」

紀子はウィンクした。「簡単よ！彼の友人になるのよ」

「友人？」

「そう・・・彼と友人になり、友情を深めて行って、親しい仲間になるの」

「なっってどうする？」

「分かってないわね。親友だから打ち明けられる秘密もあるもんでしょう？」

真人は目を丸くした。「じゃあ、あいつと親友になって、あの事件の真実を語らせよう？」

「そういう事」

「でも親友なんて、そうそうなれるもんじゃないぜ」

「そこで、あなた出番よ」

「お、俺！？」

「だってあなたは友情を大切にする人じゃない」

「でも、相手はまだ得体も知れない人物だぜ」

「そこを何とかしなさいよ」

「んな無茶な」

「お願い・・・ふふふ」

真人はため息をついた。面倒な事になってきたぞ。

信二は、社会の歴史の教科書を忘れたことに気づいた。隣に座る真希に頼み込んだ。

「お願いします。教科書を見せてください」

真希は笑顔で答えた。「うん！いいよ」そう言って自分の席を信二にくつつけた。

「ありがとうございます！」

「お礼はいいよ。私は坂本真希。以後よろしく♪」

「こちらこそ、以後よろしくお願いします、坂本さん」

「敬語は使わなくていいよ。堅苦しいから。それに私のことは真希って呼んでね♪」

信二は真希の人柄を気に入った。この人とならうまくいきそう・・・そう思った。

取材計画（前書き）

【追加登場団体】

狐狩り

東京都渋谷で拡大中の不良集団。番長と6人の幹部は信二達の通う中学校に居る。

【追加登場人物】

液田井蛇尾

狐狩りの番長。自分を総督や総統、あるいは首謀者と呼ばせる。格闘技の達人。一人称は俺様、あるいは我輩。

雑賀輝夫

狐狩り幹部。読唇術の達人で奇想天外なトリックを見せる。催眠術も得意。一人称は俺。ガスマスクをしている。

須田恵子

天才和弓手。和弓だけでなく、長弓、短弓、クロスボウをも得意とする。一人称はあたし。

蛸田宗助

情報収集の達人。液田井の右腕。一人称は私。

鳥山恭介

巨漢。鳥を飼いながらしている。丸太を軽々と振り回す力がある。一人称は俺。

猫野良太

自称射撃と拷問の天才。実は本物の回転拳銃を持っている。液田井

の左腕。一人称は私。季節問わず常にトレンチコートを着ている。

おおやまもえ
大山萌

狐狩り新人幹部の女子。詐欺と掏りの達人。一人称は私。

取材計画

今日も晴れている。俺——すなわち東京都渋谷区第9新中学校に通う安藤真人は非常に悩んでいる。昨日転入してきた少年相沢信二と、どうやって親友になるか・・・非常に難題だ。なぜ親友になりたいか？理由は簡単だ。クラスメートの広報委員会の石川紀子に頼まれたからだ。もし断れば、俺の弱み——すなわち秘密が大暴露される。それだけは避けなくては！

「おはよう」

俺はいつも通り挨拶しながら教室へ入った。獲物（信二）はまだ登校していなかった。俺に気づいた友人達は俺に挨拶した。

「信二君、ちょっと来て」紀子は俺の腕を引っ張りながら教室を出て、廊下へ連れて行った。

「で、何か方法を考えた？」

「いや、まだ親友になる方法は考えていない」

「それじゃない」

へ？

「親友作戦は時間がかなり掛かる。他に効率のいい作戦考えた？」

「もし他の作戦考えたら親友作戦は凍結か？」

「いいえ、継続よ。あなたは親友作戦で情報収集して。私は他の作戦で情報収集する」

そういうことか。1つの作戦で時間をかけるより、2つの作戦で時間をかけた方が効率が良い。

「了解」

「あなたはなるべく他の作戦を考えて。私も考える。じゃ、解散」他の作戦か・・・またまた難題だ。ただでさえ親友作戦で頭が痛くなりそうなのに、その上他の作戦を考えろ？俺の頭が火山になるよ。

「うーん・・・」俺はついついというなり声を出してしまった。

「どうしたニヤ？」真希が話しかけてきた。

「いや、なんでもない」

生徒会長の坂本真希は常に上機嫌。語尾にニャーが付けばさらに上機嫌。そして語尾にニャーと♪が付けば最高上機嫌だ。

「今日は上上機嫌ですね」

「ニャー♪」

おっと、生徒会長を相手にしないで作戦を考えなくちゃ。
チャイムが鳴る。

「1時間目が始まるぞ♪」

「分かってる」

1時間目は社会だったな。しまった！今日から歴史だった！

しかし安藤はひらめいた。

待てよ？ここで俺の前に座ってる信二から教科書を見せてもらえば、
それがきっかけで友情が芽生えるかも！ふふふ・・・我ながら良い
案だ。
プラン

「・・・どうしたの？・・・ニャニャして・・・」

？」真斗が話しかけた。

しまった！無意識で笑っちゃった。

「い、いやゝ教科書を忘れて、やけくそになってるのさ」

「そうには・・・見えない・・・」

「そうか」

「教科書・・・見せてあげる・・・」へ？

真斗は机を安藤に寄せた。

「い、いいよ！女子に見せられるの恥ずいし」

「遠慮しないで・・・」

計算外だ！ニャニャしなければ良かった！

そういうしているうちに1時間目が終わった。俺の計画も終わった。
・・・

紀子は真人の机に来た。「で、何か思いついた？」

「いや、まだだ」

「実は提案があるんだけど」

提案？ 一体何を思いついたんだ？ 「言ってみろ」

「＜狐狩り＞に力を借りない？」

「狐狩りだって!？」

狐狩りは今渋谷でP T Aや警察から問題視されている不良集団だ。

暴行はもちろん、拘り、かつ上げ、

万引き、麻薬売買、盗品など、もはやヤクザレベルまでの犯罪に手を染めている。この集団は、他の不良集団を吸収して拡大している。この学校にも幹部6人と狐狩りの総統が通ってきている。

「駄目だ! 危険すぎる!」

「でも、向こうには情報収集のプロが居るでしょう？」

「蛸田だな？ でも向こうは犯罪組織だぞ! 中学生ヤクザだぞ! マフ
イアだぞ! 軍隊だぞ!」

軍隊は大げさだと思われるが、狐狩りの入団者数は相当なものだと聞く。

「でも金さえ払えば何とかしてくれるかも？」

「傭兵じゃないんだぞ!」

紀子はため息ついた。「OK。じゃあ、あなたが明日までに何か作戦を考えてくれればやめる!」

「おお! 考えるとも!」

この日1日、何も思いつかなかった。

狐狩り

頭の中で目覚ましが鳴り響いたとき、真人はフランスのヌーベル美術館で美人のフランス人と一緒に楽しみながらレオナルド・ダ・ヴィンチの【モナ・リザ】を鑑賞している夢を見ていた。

彼はぱっとはね起き、目覚ましを止めた。そして時刻を見た。

「午前8時12分・・・まずい！遅刻する！」

真人は急いで制服に着替えた。顔を洗い、歯を磨き、駆け足で食卓に向かった。

「真人、朝ごはんは食パンと目玉焼きだから」真人の母は食器を洗いながら言った。

「時間が無いから今日は食べない！」真人の左頬に何か掠った。包丁だった。母が包丁を投げた。「食べなさい・・・」

「は・・・はい」その答えに母は満足したのか、とびっきりの笑顔を見せた。

2階から誰かが降りてきた。「やばい！遅刻する！」

真人の姉の真佐子^{まさこ}が来た。

真佐子は目玉焼きを食パンに乗つけてそれを持って、玄関へ向かった。

「じゃあ行って来ます！」朝食を食べながら高校へ向かった。

真人も食べながら登校することにした。

登校中真人は考え事をしていた。

「何か大切なことを忘れている気がする・・・」
思い出した瞬間、口に銜えていた食パンを落とした。

「取材作戦・・・考えるの忘れてた」

このままじゃ狐狩りに力を借りる事になってしまう。気が重一中、彼は登校した。

案の定、紀子は真人を待ち構えていた。

「真人君、何か考えた？」

「何も・・・」

「じゃあ、狐狩りの出番ね。第1校長室へ行きましょう」

「2人で？」

「護衛は雇ってるわよ」

「護衛？」

紀子の後ろに、五右衛門、奈々子、聖夜、真希、真斗、トリエンが居た。

「何でお前らが？」

「拙者らの・・・」

「弱みを・・・」

「握られちまって・・・」

「・・・断れ・・・」

「無いんだ・・・」

「ニャー♪」

そういうことですか・・・

真人と紀子と護衛たちは第1校長室に向かった。

「ねえ、やめようよ」トリエンはそう提案した。

「なぜ？」

「だって、職員達が恐れて乗っ取られた校長室を手放して第2校長室を建設するくらいの大物集団なんだよ？交渉がうまくいくわけがない」

「諦めてもいいけど、あなたの秘密を大暴露しようかな？」

トリエンは何か言いたかったがやめた。

第1校長室に着いた。扉に異様なオーラを感じられた。扉には狐のシルエットがプリントされた旗が貼り付けられていた。紀子はノックをして扉を開けようとした。室内から凄まじい殺意が感じられた。紀子は唾を飲んで扉を開けた。

中に広がっていた光景は・・・！！

2人の男女が将棋をしていた。態度から見て男子が優勢だった。男子はガスマスクをしていた。

「うゝゝん」女子はうなり声を上げていた。

「降参か？」

「まだだ！これでどうだ！」女子は角行を動かした。

「次で王手だ！」

ガスマスクをした男子は飛車を動かした。

「王手」

「ちよつと待て！？」

「将棋に待ては無しだ」

「ぐぐぐ・・・！」

女子はどこを動かしても王将を取られてしまう。「こ、降参だ！」

「じゃあ、今日の夕食はお前のおごりだ」

「ボス、お客だよ」

「入れろ」

真人達は校長室内に入れられた。

ボスと呼ばれる男は、校長席に堂々と座っていた。金髪のオールバック型の髪型をし、サングラスをかけた多少大柄の男だ。

「何のようだ？」ボスはいかにも悪役っぽい声で言った。

紀子はボスの存在感にも動じずに言った。「まず自己紹介をして」

「雑賀輝夫。札幌出身で超能力者だ」ガスマスクの男は呼吸音混じりの声で言った。

「ちなみにガスマスクは沖縄のアメリカ屋で買った」

「町内で最も腕のいい和弓手の須田恵子。どんな弓も扱える」女子

は言った。素晴らしい肢体を持った長身の女子で、体にぴったりした制服は、深い谷間が除くほど大胆に、胸元が開いていた。スタイルなら真希は負けていない。この女子も巨乳のようだが、こちらは真希が若干勝っているな。

「私は新宿出身の蛸田宗助です。情報網なら私の得意分野です」この男はネクタイをつけて身だしなみもしっかりしている。顔はまあまあだな。「ちなみに私は英語とロシア語とフィリピン語が得意です」

「巨漢のシャーマン鳥山恭介。黒魔術を勉強している。皆からは鋼の獣^{ビースト}と呼ばれている」
慎重は二メートル近くある大男だった。スキンヘッドだ。

「最後は私は猫田良太。尋問の専門家、銃の腕もたつ。大阪出身だ。ここでの生活に慣れちゃって大阪弁が言えなくなった」夏なのにトレンチコートを着て、黒い手袋をしていた。

「夏なのにトレンチコート？」紀子は聞いた。

「トレンチではない。ダスターコートだ」

この男は長身のダスターを着て、長いブロンドの髪、中学生なのに顎鬚と長い口髭を生やしている。

「その髭は本物？」

「もちろん。発毛剤を長年使用していた。西部劇に憧れている」

「そして俺が狐狩り総督の液田井蛇尾だ。総督、総統、首謀者、あるいは総司令官と呼んでくれ」

ここで真人は悟った。幹部は全員サイヤ人の集団だ。

「妙な事は考えるな」蛇尾・・・ではなく総督は言った。

「ここに居る幹部全員、元番長だ」

向こうは総督を合わせて6人。真人達は8人。数では真人達が勝っていた。

「私達は交渉に来たの」

「交渉の前にお前たちも自己紹介しろ」猫田がそう言った。

「じゅ、ジュン・ヤ・トリエンです。ベトナム人です」

「俺は梶尾聖夜。サッカー部」

「拙者は波川五右衛門。剣道部」

「私は佐々木奈々子。同じく剣道部」

「私は坂本真希。生徒会長で帰宅部♪」

「私は・・・黒崎真斗・・・帰宅部」

「私は石川紀子。広報委員会」

真人も自己紹介しようと喋りかけたが、紀子が喋りだした。「彼は安藤真人。私の相棒で陸上部」

「広報委員会が何のようだ？まさか取材か？」

「違うわよ。あなた達を堂々取材する広報委員会が何処にいますか？」

猫田は総督に向いた。「総督、あれは嘘です！拷問しましょう！拷問許可を！」

「落ち着け。雑賀。どうだ？」

「彼女は嘘を言ってますね」

「よく分かるわね」

「雑賀は読唇術と催眠術の達人だ。幼稚園の頃から修行してたらしい」

「広報委員の石川以外は全員彼女の護衛だ」雑賀は見事当てた。

鳥山は笑った。「はっはっは！面白い護衛だ。どう思う猫田？」

「くくく！面白い！ベトナム人は鬼畜な兵士だ？サッカー部は足技に自信があるかな？剣道部2人は侍かな？帰宅部2人は楽勝だな。陸上部は逃げ足がいいかな？」

「侮ってはいけない。剣道部2人はかなりの実力者です」

「本当か？蛸田？」

「間違えありません。特に男の方は町内大会、および県大会で何度も優勝しています」

「で、護衛をつれて何のようだ？」

「あなた達の力が借りたいの」

「我輩たちの？」

「ええ。もちろんタダとは言わない」

「はっはっは！俺達を傭兵か何かと勘違いしているのか？」

「くくく・・・面白い女だ。どう痛めつけようか？」

紀子は写真を出した。相沢信二の写真だ。「彼は【大羽中学校封鎖事件】の生存者かもしれない。私はあの事件の真相が知りたいの」
総督は信二の写真をじっと見つめている。

「はっはっは！くだらん。引き受けるんでも？」

「くくく・・・馬鹿な女だ。どう痛めつけようか？」

紀子のため息をついた。「もし、あの事件の真実を知ったら、マスコミに売りつけられるわよ？ニュース番組に出れるかもよ？有名になれるかもよ？」

「はっはっは！俺達はすでに東京中で有名さ」

「くくく・・・アホな女だ」

総督は写真を返した。「悪いがあきらめてくれ」

真希は紀子の肩を叩いた。「仕方ないよ。あきらめて帰るニャ♪」
校長室内が静かになった。

「ニャ・・・ニャーだと？」

総督を除く全ての男子の口が一斉に開いた。「」「萌えっ！！」
「」

真人は耳を疑った。は？萌え？

「生徒会長様！どうかこれを！」雑賀は猫耳を渡した。

「付けてください！」

真希は猫耳を付けた。

「「「さらに萌え！」」「」」

「う、美しい・・・！」

「私の情報網でもこんなに可愛い女子は見つからなかった！」

「はっはっは！我らがアイドルが生まれた」

「くくく・・・素晴らしい！」

真人は呆れた。「アイドルなら、綾瀬マユが居るだろ？」

「あいつでは」

「どうも」

「しっくり」

「来ない」

男子全員真希を見た。

「だが、彼女は眼鏡キャラだし」

「ツインテールだが、首くらいの長さで、俺達好みの長さで髪型だし」

「スタイル良いし」

「巨乳だし、声可愛いし」

真人は呆れた。こいつらはオタクか・・・

須田は怒り出した。

「お前ら変態か！ボス、何か言ってください！」

「・・・萌え・・・」

「そうでしょ！ボス！」

「ここは一先ず！」

「引き受けましょう！総督」

「はっはっは！賛成だ！」

と言うわけで交渉が成立した。真希のおかげで。

「真希を連れて正解だったわね」紀子は上機嫌だ。

「まさかオタクだったとは」聖夜は珍しく面白いものを見た顔をしている。

「よく分からない連中だ」五右衛門も驚いている。

「びっくりしたわ」奈々子も驚いている。

「・・・世の中不思議・・・」真斗も驚いていた。

「ニャー♪」真希は超上機嫌だった。いまだに猫耳を付けている。

狐狩り（後書き）

余談

―放課後―

「俺の名は、メガトロンだ！」総督はそう叫んだ。

「総督、やはりメガトロンではしっくりきませんね」

「ここでリクエストを聞こう」

「クライシス！」

「ボス！」

「魔王！」

「大魔神！」

「よし！俺は大魔神王クライシスボス！」

「―「かっこいい！」―」

「お前ら何やってんの？」

「暗号名を作っている」

「俺の名は究極の超能力者、アーススクリーム雑賀輝夫」

「私は最高の情報屋、サイドウエーブ蛸田宗助」

「俺は巨漢のシャーマン、アイアンビースト鳥山恭介」

「私は射撃と拷問の天才処刑人、ダブルフェイス猫田良太」

「そして！俺様は、最強、最凶、最狂、大魔神王、クライシスボス液田井蛇尾」

「須田、お前のも考えた」

「―「お前は20世紀最強の征服者、スカイライン須田恵子！」―」

「・・・幼稚・・・ダサイ・・・本当に中学生？」

信二の視点

富士山の遥か頂上から、同年齢のフランス人が笑いながら呼びかけている。「信二君、早くして！まったく、男子が女子より体力が無いってどういうこと？」その笑みは天使だ。

登りつめようとするが、両脚が重かった。「待ってくれ。頼むよ……」

のぼるうちに、辺りが暗くなっている。早く追いつかなくては。ところが、フランス人に追いつくと、フランス人は赤目で信二を見つめていた。鋭い鮫のような歯を信二に向け、恐ろしい叫び声を上げながら、信二の首筋を噛み付いた。

信二は悪夢からはっと目を覚ました。ちゃんと自室のベッドで寝ている。安心して再び眠りに付こうとベッドに寝転んだが、隣に赤目のフランス人が信二を見つめていた。

再び信二ははっと悪夢から目を覚ました。自分の左頬を抓る。紛れも無い、現実の痛みを感じられた。痛みは本来好きではないが、この痛みは特別好きだ。夢か現実か分かるからだ。

信二は冷房が効いた部屋で寝ていたはずなのに、汗を大量に掻いていた。

「はあ……はあ……今度こそ現実だな……」

自室を出て1階の台所へ行き、冷蔵庫から牛乳を取って飲んだ。

「あの事件から半年以上するのに、なぜこう毎日悪夢を見るんだ？」

また悪夢を見るかもしれない。何か楽しいものが見たい。信二は自室へ戻り、BDで何か面白いものを探した。

ブルーレイディスク
「トムとジェリー……これにしよう」

再生機の中にいれ、ディスクを再生した。

見始めてから数分後、何者かが玄関を叩いた。信二は悪態つきな

がら、玄関に向かった。

「どなたですか？」

返事は無かったが、まだドアを叩いている。

「あの、どなたですか？」

返事は無いがまだ叩いている。

「いい加減にしてください！」

ドアを開けて、来訪者の顔を見た。そこには兄、信一が立っていた。赤目だった。

「はっ！」信二はBDを見ながらいつの間にか寝ていた。

「また悪夢か……」

時計を見た。時刻は午前5時46分。もう寝るのはやめることにした。

信二は顔を洗って、歯を磨いた。パジャマを脱ぎ、制服に着替えて、朝食を作った。

「今日は目玉焼きにしよう」

炊飯器が炊き上がりの音を発した。炊飯器から炊き上がった米を出して、2段弁当の1段目に隙間無く入れた。「おかずは冷凍でいいや」

弁当を完成させ、朝食を食べた。

家中のコンセントを抜き、学校へ行くことにした。

「午前7時28分……間に合うな」

家から出て、しばらく歩いていると、バス停が見えた。バスももうすぐ着きそうだった。

信二は歩きでも学校へ行けるが、今日はなぜかバスに乗りたかった。自分の通う中学校の前にもバス停がある。今日はバスで登校しよう。朝のバスは席が沢山空いていた。出発してから数分経った。信二は次のバス停の名前は聞いてなかったが、ある言葉が心に響いた。

『心の悩み、問題を解決する吉田心理カウンセラーにお越しの方はこちらが便利です』

信二は無意識に停車ボタンを押した。恐らく心理カウンセラーと言う言葉に引かれたのだろう。

信二はバスを降りた。ちよつと歩いた先に吉田心理カウンセラーという看板をつけた建物が見えた。

「どうしたの君？」

信二は突然後ろから話しかけられた、驚いた。「い、いえ。ここにカウンセラーがあつたんだなつて」

信二に話しかけた男は、天然パーマの髪を無茶苦茶に掻いた。若い眼鏡の男だ。

「何か悩みでもあるのか？」

「はい：ちよつとね」

「じゃあ、少し話しよう」

「はい？」

「おつと、自己紹介まだだつたね。僕は吉田幸三^{よしだこうぞう}」

「じゃあ、あなたがこの院長？」

「そうだよ」

信二は幸三に連れられて、建物に入った。中は思ったより綺麗だ。

幸三は、紅茶を出した。

「それで、どんな悩みがあるかな？」

信二は紅茶を喉に流し込んだ。正直、紅茶は好きではなかった。「

悪夢を見るんです」

「悪夢？」

「：はい。ある日を境に毎日悪夢を見えています」

「どのくらい経つ？」

「半年以上……」

幸三は驚いた。「半年以上も悪夢を見ているのか？」

「はい。いい夢なんか、もう見ていません。悪夢ばかりです」

幸三は興味本位で聞いた。「どんな悪夢だ？」

信二は深く息を吸った。「生々しい夢です。他の人たちが僕を殺しに来る夢です」

「殺しに？」

「ええ。皆赤い目をしてます」

「何か、トラウマになるような出来事はあった？例えば家族から虐待されたとか」

信二はまた深く息を吸った。「……実は、人が死ぬ瞬間を見たんです」

また幸三は驚いた。「人が死ぬ瞬間！？」

「はい……」

幸三は納得した。悪夢を見るわけだ。「どんな光景か覚えてる？」

「ええ……昨日のように覚えてます。心臓麻痺や何かで死ぬ瞬間ではなく、大量の血が流れる生々しい瞬間を……」

幸三は半ば同情した。「君みたいな若い子の心に深い穴が開いたのか。これから暇な時間に来て欲しい。君の事をもっと知りたい」

「分かりました」

「今日はもう学校へ行きなさい」

幸三は信二を見送った。

思い出

信二は走って登校していた。校門に着いた時には、時刻は8時45分：登校時刻は40分、5分遅れだ。

廊下を走っていると、誰かに当たった。「いってーな！」

「ごめんなさい！」走りながら謝った。

スライドドアを開けて教室に入った。

「信二君、遅刻だぞ！どうした？」

「寝坊です」

クラス中から笑いが出た。

「信二君ったら意外と不真面目」

「転校早々寝坊とは」

「マジうける」

蛇谷は生徒を黙らせた。「まあいい。席に座れ」

信二は席に座った。

再びスライドドアを開けた。

「ういゝす」

「森田！また遅刻だぞ！」

「いいじゃないっすか？」

「規律はちゃんと守れ」

「やでゝす。俺の人生俺の好きに生きます」

森田はシャツ出しをして、若干リーゼントヘアだった。蛇谷は次の授業で使う道具を取りに教室から出た。森田は信二を見た。

「てめー！廊下でぶつかった奴だな！」

クラス中で囁き声が聞こえた。

「森田に当たるなんて」

「転校早々ついてないな」

「可哀そうに」

「終わったな」

真希は信二の耳元で囁いた。「いざとなったら助けてあげる」
「え？」

森田は信二の胸元を掴んだ。

「てめー！痛かったぞ！」

信二は面倒くさかった。「ごめんなさい……って言ったじゃん」

「ごめんで済めば霊柩車は要らん！」

「救急車じゃなくて？」

「なぜ警察や裁判や救急車じゃないと思う？」

「なぜ？」

「てめーが死ぬからだ！」

森田は信二の右頬を殴った。

「慰謝料払え！」

「なんで払わなきゃいけないんだ！別に苦痛レベルじゃないだろ！」

「骨が折れたよ！」森田は右脚で信二の横腹を蹴った。

「ひどい！」

「そこまでにしるよ！」

「うるせーよ！お前らは黙ってろ！」

真希が立った。「そろそろいい加減にしたら？」

「うるせえ坂本！今の俺ならお前に負けないさ」

信二は血が混じった唾を飲んだ。「いいですよ坂本さん。止めなくても」

森田は信二を睨んだ。「ほう、俺に叶うとでも？」

「信二君？」真希は不思議がった。

「森田さん。世間はあなたのことを何と言うと思います？」

森田は首を傾げた。「なんと言うんだ？」

「社会のゴミ」

森田の堪忍袋が切れた。「てめー！殺す！絶対殺す！」

殺す……その言葉を聞いた瞬間、信二はある過去を思い出した。殺意が満ちた過去が……！

「ふ……殺すか……ふふふ」

信二は笑いながら立ち上がった。

「てめー何がおかしい！マジ殺すぞ！」

「殺す……君ごときが人を殺す」

森田は右手で殴りかかった。だが信二は右手で受け止めた。

「は、放せ！」

だが信二は力を入れた。森田の？まれた腕に軋む音がした。

「い、痛てー！放せ！」

「お前は人が死ぬ瞬間を見たことがあるか？」

さっきまでの愛想の良い声ではなく、怒りに満ちた恐ろしい声だった。

「ひ、人が死ぬ瞬間！？」

「人はまず、死ぬ瞬間を見ると、放心状態になる。そして放心状態から戻るといろんな感情を感じる。

恐怖や罪悪感や後悔などな。そして、それを克服すると……」

信二は森田の腕を放した。

「人は殺人鬼になる」

森田は信二の目を見た。その瞬間、森田は恐怖を感じた。信二から本気の殺意を感じた。こけ脅しや威嚇や見せ掛けではなく、本当の殺意と殺気を……！

「き、今日は見逃してやる！」

森田は自分の席に戻った。

クラス中の皆が驚いた。

「あの森田が退いた……」

「喧嘩しなかったぞ」

「森田を退かせたのは誰以降だ？」

「真希ちゃん誰も」

信二は黙って席に座った。

蛇谷が戻ってきた。「皆、授業の準備したか？」

真希が信二に話しかけた。

「君、すごいね。あの森田を暴力なしで退かせるなんて」

「あなたも退かせたのでは？」

「ぶちのめしただけ。その日から因縁つけられた」
ぶちのめしたって……女は怖いな。

紀子は真人に話しかけた。「やっぱりあの人は封鎖事件の生還者なんだわ！」

「なぜそうなる？」

「だって、人の死ぬ瞬間って、封鎖事件でも自衛隊が一般生徒を射殺したって。その時のことでしょう」

「結びつけるな」

その日1日はいつも通り授業が終わり、下校の時間が来た。

「あ、そうだ」蛇谷は信二に何か紙を渡した。

「入部届けだ。部活を決めなくちゃな」

「はい」

奈々子が信二の席に来た。「剣道部はどうだ？君ならきっとできる」
聖夜が来た。「いやサッカー部だ。運動神経良さそうだからな」

「考えときます」信二はそう言って教室を出た。真人は信二を追いかけた。

「相沢君！待って！」

信二は真人を見た。「何でしょうか？」

「君、今朝のあれはすごかったね」

「どうも」

「陸上部に来ないか？きっといい成果を出せるぞ。家でゆっくり考えるといい」

「検討します」

信二は校門を出た。だが何を考えたか、バスに乗り、駅まで行った。そして電車でどこかへ行った。

―神奈川県藤沢市―

何度か乗換えをしてたどり着いた。そしてしばらく歩いていくと、ある学校に着いた。

大羽中学校。信二にとって忌むべき場所であり、かつて友人達との思い出の場所。

あの事件以降、この学校は黄色いテープを張ったままだ。

中には入れなかったが、近くで看板を見つけた。

『この学校は、今年11月に取り壊しをします』

「取り壊しか……」

悲しい気もしたが、早く壊れてほしい気もした。ここで＜感染＞があった。現実のものとは思えぬ感染が……

信二は、しばらく故郷を満喫して帰ることにした。だが、後ろから誰かに話しかけられた。

「信二君？」

後ろを見た。中年の肥満の女が居た。「覚えてる？ 菊池です。小学校の頃の先生」

思い出した。見た目は不細工だが、結構いい先生だったな。

「小学校の頃に君は物静かな子だったね」

「今もそうです」

「何かおごろうか？」

「いいです。もう帰るんで」

「そう、さようなら」

「さようなら」

信二は菊池と別れを告げて帰った。再び電車に乗り、東京まで帰った。辺りはもう暗かった。

信二は、人気の無い道を歩いていると、何者かの気配を感じた。勇気を振り絞って後ろを見た。

フードを被った男が立っていた。夏なのにマフラーもしている。だが、人間らしい生気が感じられない。

「まさか……な」

男は顔を上げて信二を見た。
その瞬間！

わめき声を上げながら信二に走った。

「嘘だろ！」

信二は男から逃げた。

「まさか！まさか！」

男はわめきながら信二を追った。信二は左の建物と建物の間を通った。間から出ると、真っ直ぐ走った。次の角を左に曲がると、今度は右に曲がった。

だが、無情にも行き着いた先は行き止まりだった。

「誰かに助けを求めるべきだったな」

だが、信二は風邪気味だったため、大声は出せなかった。

信二は道に戻ろうとしたが、追跡者が信二を見つけた。

「絶体絶命！」

信二は、力を振り絞って走った。追跡者もわめきながら信二に向かって走った。そして正面衝突——ではなく、信二は体当たりを繰り返した。追跡者は尻餅をついた。

「今だ！」信二は追跡者の頭を思いつき蹴った。そして走った。

追跡者も立ち上がり、信二を追った。

信二は火事場の馬鹿力で走った。必死の思いで走った。

だが、追跡者は信二に追いついた。

信二は、追跡者の腹部に思いつき殴った。

そして逃げた。攻撃で体力を削るより、逃げることに専念した。

突然、ある記憶がよみがえった。

大勢の狂暴な人間から逃げていた記憶が…

信二は必死の思いで走った。追跡者のわめき声は遠ざかっていく。だが、ただひたすら、信二は走った。走っている。それが最後の記憶だった。

提案（前書き）

【追加新登場人物】

おおさわちふゆ
大澤知冬

生物学者。かなりの優秀な学者で美人だが、少々変態な所がある。
京子曰く、ノーベル賞を取ってもおかしくない。

さかもとぎょうこ
坂本京子

真希の実の母。優秀だが、才能を発揮しきれない。研究員用の宿舎で泊まっているため、家には帰っていない。スタイルの良い美人。

さかもとりょうじ
坂本良治

真希の実の父。ウイルスの関しては優秀。京子同様家には帰っていない。

提案

信二はベッドの上で目を覚ました。

「……んん……」

眠りが浅かったのか、まだ意識がはっきりしない。

「ここは……?」

信二ははっきりしない意識の中、何かに抱きついた。

「ん……?」

抱き枕だな! 信二は抱き枕を抱いた。だが、両手で何か握った

「んん! ?」

両手に柔らかい感触が走る。実にさわり心地が良い。

「ほほ」

だが、前にも似た状況があった。思い出せないが……まさか!

信二はゆっくり目を開けた。

誰かの後姿が見えた。その人に抱きついてしまったらしい。

その人は女だった。

「うわああああ!」

信二はベッドから落ちた。

その女性は起きた。「うゝん……なんだ、もう朝か」

聞き覚えのある声だ。

「おやや、信二君は何で落っこちたのかな?」

真希だった。

「なぜ真希さんが……?」

「真希でいいよ。ここ、私の家だよ」

よく部屋を見渡すと、確かに女子らしい部屋だった。

「なぜ僕が、真希さんの部屋に?」

「真希でいいよ。家の前で倒れてから、慌てて中に入れて寝かしたの」

家の前で倒れていた? はて、昨日何があったのだろうか? 思い出せない

い。

「昨日、何があったの？」

こっちが聞きたいくらいだ。昨日は確か……故郷から帰った後に何か……思い出せない。

「すみません。思い出せません」

真希は気の毒そうな顔をして、テレビをつけた。

「・・・昨夜、変質者が警察に逮捕されました」

信二はテレビに釘付けになった。

「変質者は、わめき声を上げながら、通行者を殴る蹴るなどの暴行を加え、さらに拘束してくる警察にも暴行を加えました。変質者の精神は完全に錯乱しており、警察は、新種の麻薬か何かを摂取したと見て、捜査を始めました」

「へー怖いわね」真希はそう言った。

信二は全てを思い出した。そうだ！昨日は見知らぬ男に追いかけられたんだ！

信二はテレビの時間を見た。午前8時40分。

「やばい！学校遅刻した！」

「今日休みだよ？」

そうだ！今日は土曜日。部活以外の人は休日だ。

「真希さん。ご家族は？」

「真希でいいよ。基本的に両親は仕事で帰ってこないんだ」

「じゃあ、いつも1人？」

「そういう事。君は？」

「俺も」

真希は同胞が居たと言う目で信二を見た。そしてある提案をした。

「私達。同居してみない？」

「え？」

「一緒に住もうって話だよ」

信二は返答に困った。「僕達はまだ中学生だよ！」

「年なんて関係ないよ。私、料理は出来るし」

「僕だつて」

「でも、どうせ作ってないでしょ。食べる人がいないと作り甲斐が無いからコンビニの弁当ですましてるでしょう？」

図星だった。信二はこれ以上反論出来ない判断した。だが、孤独でいる寂しさを無くしたかったのも事実だ。

「：分かりました。けど嫌らしいことはしないで」

「分かってる♪今日は私んちに泊まりなさい♪」

「博士、今回の実験はどうします？」京子は大澤に尋ねた。

大澤は甘い声で、京子を惑わすように言った。「そうね、血液採取してからにしましょう」

「はい。分かりました」

大澤はからかう目で京子を見つめた。「そういえば、旦那さんは？」京子は返答をためらった。「あれを研究中です」

「そうねえ、彼も徹夜で働いているはずだから、疲れたんじゃないかしら？」

「そうですね」

「私、彼の性的欲求を満たして上げましょうか？」

京子は、頬を赤くした。「何てこと言うのですか!!」

「ふふふ・・・冗談よ」

相変わらずこの人は苦手だ……

「それで、どちらの方で実験しますか？」

大澤は迷った素振りをした。「第1号にしましょう」

「つまり彼女ですね」

「ええ。あの可愛い実験台」

実験台……まだ若い子なのに。

「第2号の様子は？」

「だいぶ大人しいです」

大澤は、両手をアルコール消毒し、研究室に入った。

実験台の上には、マスクをした少女が縛りつけにされて寝かされて

いた。

京子は、注射器で少女の腕から血液を採取した。

「このような事をしてお詫びします。あなたは危険なウイルスの保菌者なので」

「分かってます……」少女は悲しげな声で答えた。

京子の心が痛んだ。

大澤は京子の耳元で囁いた。「今日の午前中に新ワクチンで実験よ」「分かっています」

2人は研究室を出た。

迷彩服を着た男が待ち受けていた。

「大澤博士！なぜ感染者が外部に現れた！？」男は明らかに怒っていた。

大澤は子供を相手にするような態度を取っていた。「相沢陸将殿。落ち着いてください」

「落ち着いていられるか！もし大流行が起きたら元も子もないぞ！」

「感染者が外部に現れた事実はありません」

「嘘をつくな！」

「今日のニュースをご覧になりましたか？現れたのは感染者ではなく、変質者です。感染者が出た証拠はありません」

「事実の隠蔽はお前らの特技だろ？」

「そんなに疑うなら、私達の研究所のセキュリティを確認してください」

相沢陸将はしばらく大澤を睨んだ。「まあいい。今回は大目に見よう」そう言って大澤から離れていった。

大澤は京子に囁いた。「感染源は？」

「調査中です」

大澤は舌打ちをした。今回は誰も感染しなかったが、感染源は知っておかないと。

―血液提供所―

最近出来た、血液を売りつけることが出来る巨大な病院のような場所だ。

そこへ1人の男が入った。カードを取った。67番だ。男はベンチに座った。隣には、フードを被った男が座っていた。

「血液売ったことあるか？」男はフードの男に話しかけた。フードの男は首を横に振った。

「俺は何回もある。何回でもOK！」

名簿を持った女性が来た。「岡本大輝さん。来てください」

フードの男は立ち上がった。そして男に親指を立てた。

大輝は女性にどこかに連れて行かれていた。細い1本通路だ。

「1年以内にピアスやタトゥーを入れましたか？」

「いいや」大輝は咳きした。

「親切の方はいらっしゃいませんか？」

「いない」

「持病は？」

「ない」

「もしもの時の緊急連絡先は？」

「ないね」

「ご家族は？」

「いないと言っただろ？」

目的地に着いた。大輝は急に不安になった。「家族が居ないと血液は売れないのか？」

女性はパスワードを打ち込んだ。鉄製の自動扉が開いた。

「そうではありません。実はあなたの血液に異常が見られて」

「異常？」

部屋は真ん中に1つの鉄製の椅子があった。その椅子の近くに男が立っていた。

警備員が大輝の腕を掴んだ。

「何をするんだ！」

扉が閉まった。「お前は何者だ？」

大輝は椅子に座らせた。

女性は微笑みを見せた。「あなたの血液型は初めてです」

男性も笑みを見せた。「朗報と悪報がある」

男性はチューブを取った。チューブは吸引機に繋がっていた。

「朗報はあなたの未知の血液型は闇市場では高く売れる」

男性はチューブに針をつけた。

「悪報は、あなたは死ぬ」

大輝は泣き出した。3人は笑ってその姿を見た。

だが、大輝は突然笑い出した。3人とも戸惑いを見せた。

大輝は女性を睨んだ。大輝の目は、白目の部分が黒く、黒目の部分が白かった。そして瞳孔は爬虫類のようだった。

大輝は女性の首を右手で絞めた。そして、首筋を噛み付いた。

男性は扉まで走り出した。警備員は拳銃式スタンガンで大輝を撃った。だが大輝は痺れている素振りを見せなかった。大輝は警備員の肩を掴み、投げ飛ばした。警備員は壁に当たった。壁のコンクリートにひびが入った。

大輝は男性に近づいた。男性は必死にパスワードを打ち、扉を開けた。

だが、大輝は男性の顎を右手で掴んだ。瞳が赤くなった。

「朗報と悪報がある」

大輝は、鮫のような鋭い牙を見せ付けた。

「朗報は今日の俺の飢えは凌げる。悪報は、お前は死ぬ」

大輝は監視カメラに気づいた。監視カメラに向いた。

「見ているか？お前らには反吐が出るぜ」

大輝は男性を見た。

そして、首筋を噛み付いた。

部屋中に男性の悲鳴が響いた。

信二と真希は一緒にマクドナルドで昼食を食べていた。

「真希さん。女子なのにビックマックだなんて？」

「真希でいい。だって食べた気がしないもん。君だって男子なのにチーズバーガーだなんて」

「チーズバーガーはアメリカで人気なんです」

2人は冗談交じりの会話を楽しんだ。

2人目の転入生

月曜日の朝

真人は教室に居た。「まだ信二君との距離は縮まっていない。これからどうする?」

本当に困った作戦だ。

紀子は真人に近づいた。「で、信二君との距離は?」

「100%中、0,001%」

紀子はため息ついた。まったく、先が思いやられる。

「広報委員石川紀子は居るか?」

鳥山と猫田がやってきた。

「おい、あれ狐狩りじゃないか?」

「紀子、今度は狐狩りに手を出したか?」

「アーメン」

紀子は、そんなクラスメートの囁きを無視して、2人の不良の元に来た。真人も着いてきた。

「で、何のようよ?」

「はっはっは! 相変わらず気の強い女だ」

「くくく・・・俺達狐狩りと同等になったつもりか?」

2人の不良は校長室へ連れて行った。校長室には液田井……ではなく総統と蛸田が待っていた。

「石川広報委員。情報がある」総統は悪役っぽい声で言った。

「朗報?」

「蛸田、言え」

蛸田はファイルを持って説明した。

「2つあります。1つ目は、信二君は、あの事件の生還者の可能性が高くなってきた」

紀子は興奮気味だった。「そうこなくちゃ!」

「2つ目は?」

「2つ目は、君たちのクラスにまた転校生が来る」

これは朗報だ。真人はそう思った。

「男子か、女子か？」

「美女だ」

ほほゝまたまた朗報だ。

「もうすぐチャイムが鳴るわ。戻りましょう」

信二は走って登校していた。寝過ごしてしまった。真希は生徒会の仕事があったから先に登校していた。チャイムが鳴った。また遅刻しそうだった。廊下を走っていると、誰かにぶつかった。外見上、森田ではないことは確かだった。だが、走ることに夢中だったため、顔は見えていない。

「あ、待って」女子だった。

「ごめんなさい！」

信二は走りながら謝った。教室に着いた。

「あれ、まだ先生は来てない？」

信二は自分の席に座った。

「危うく遅刻しそうだったね」真希が話しかけた。

「ええ、まったくですよ」

スライドドアが開き、誰か入ってきた。

女子だった。自信に溢れた歩き方をしていて。ツインテールの髪型をしていて、人気アイドル風のルックス、巨乳、まさに男子のツボを抑えたような容姿だ。いわゆる美人。

まったく、この学校は美人が多いなこと。信二はそう思った。だが、周りの男子達は興奮していた。

「おお！やっ和我らがアイドルが旅行から帰ってきた！」

「ああ、幸せ！」

「1枚写真を取らせてください！」

きもい！まるでオタクだ！

「あの、真希さん。あの人は？」

真希は信二の耳元で囁いた。「綾瀬マユ。容姿端正、成績優秀、運動神経抜群、歌もうまい、家事も出来る、まさにこの学校のアイドル。あの子を泣かすと、学校中の男子を敵に回すよ」

近代の男子は怖いな。

マユは笑顔で返事を返していたが、信二を見ると、男子の声を無視して信二の下に来た。

「あなた見かけない子ね」声もアイドルらしい。だが信二の好みではなかった。真希の方がまだ好みだな。あるいは……

「最近転入して来たんです。たぶん、転入当日あなたはいなかった」ふふんとばかりに、マユは信二をじろじろ見た。

「ふふふ、不思議な子」

信二は頭が痛くなりそうだった。

「今日から付き合ってください」

ええー！！信二だけでなく、クラスメート全員が驚いた。

「どういうことですか！マユさん！？」

「そうです。そんな男より俺と！」

「いや俺と！」

信二も納得できない。なぜ初対面の女子が男子に告白するんだ？

「あ、あのうくなぜ僕を？」

「一目ぼれ」

もう頭がおかしくなりそうだ。

蛇谷がやっと来た。「綾瀬、来たのか？席に座れ」マユは席に座った。

「えーと！今日も転入生が来る。皆、仲良くしな」

また全員騒ぎ出した。

「男かな？女かな？」

「美人がいいな」

「美少年でしょ？」

真人と紀子は、すでに性別を知っていた。

「入れ」

スライドドアが開き、女子が入ってきた。

美少女だ。ロングヘアで、白い肌、可愛いルックス、真人にとっては綾瀬とは負けず劣らずの美少女だ。まるで天使。だが、無口そうだな。感情が表に出ていない。

だが、信二は興味が無いのか、窓の外を見ている。

男子達は囁き声で話した。

「あのこ、めっちゃ可愛いじゃん！」

「うんうん！綾瀬さんとは違う可愛らしさだ」

「やべ、超俺の好みだ」

「俺、思い切ってアタックしようかな」

「無理無理。俺くらいじゃないと」

蛇谷は呆れた顔で男子達を見た。「うるさいぞ。黙れ」

転入生は自己紹介をした。

「立花裕香です。これからお世話になります」可愛い声だ。

信二が名前を聞いた瞬間、転入生の顔を見た。

「立花！」明らかに驚いていた。

立花は信二を見た。「信二君！？」こちらも驚いていた。

クラス中も驚いていた。

蛇谷は2人に聞いた。「面識はあるのか？」

信二と立花は縦に首を振った。

「ええー！！」クラスメート全員驚いた。

真希が尋ねた。「一体どういう関係？」

立花が答えた。「昔の友人です」

信二が訂正した。「いや、幼馴染だ」

他の人も質問しようとしたが、信二と立花がこれ以上聞かないでくれと言う目をしたので、やめた。

紀子は真人に話しかけた。「もしかして、あの娘も事件の生還者か

も」

真人は呆れた。「だから、結び付けるな」

信二と立花は屋上に居た。

「お前も東京に来たのか」

立花はうなずいた。「ええ…」

「久しぶりだな」

「ええ…」

相変わらず無口だな。「まあ、仲良くやっていこう」

「ええ」

「懐かしいな。あの時の友人達が」

「ええ…」この時だけ、悲しそうな声だった。信二にもこの気持ちは分かる。

立花が信二に質問した。「もう、あの＜感染＞は起きないわよね…」

「たぶんな」

感染…この言葉で急に不安に駆られた。

信二は近いうちに感染が出てきそうな予感がした。

「出来れば、あの＜感染＞は起きてほしくないな」

2人目の転入生（後書き）

【追加登場人物】

たちばなゆうか

立花裕香

転入生。【大羽中学校封鎖事件】の生還者。好意を抱いていた男が事件で死んだ。

動き出す歯車（前書き）

【追加登場組織】

本州生物科学研究機構

東京都内にある生物科学研究を専門とする機関。活動内容は非公式であり、バイオセーフティーレベル4の施設を持つ。

動き出す歯車

京子は急ぎ足で研究所内の廊下を走っていた。まったく、この研究所の内部構造は複雑すぎる。最近の空母も内部構造を複雑化していると聞いているが、何もうちの研究所まで複雑化しなくても……すると、ある立て札が見えた。第1会議室：ここだ！

扉を開け、中に入った。

中では既に十数人の自衛官、研究員代表達が会議をしていた。

「遅いぞ、坂本君」自衛官の1人が注意した。

何なら、内部構造を簡単にしろ！と思ったが、口にはしなかった。

京子は謝りながら、大澤の隣に座った。大澤は耳元で、甘い声で言った。「遅いわよ？次遅れたら、あなたの旦那さんを貰っちゃいましょうか？」

京子は鳥肌立った。「やめてください！うちの主人は浮気はしない人なんです」

「うふふ、冗談よ」この人の冗談は本気に見える……

若い唯一の女性自衛官がファイルを整えて喋り始めた。女性自衛官は存在感を誇っていた。「正直言って、こんな事態は初めてです」

大澤は首を傾げた。「何のことですか？」

自衛官の1人が言った。「研究所側で研究している新種ウイルスの感染者が都内で現れた」

京子は心配な気持ちで大澤を見た。だが、大澤は余裕そうだ。「ニュースキャスターが語ったように、あれは新種の麻薬か何かを摂取した変質者です」

自衛官が全員笑った。「もっとましな言い訳は出来ないのかね？」京子はこの言葉に同感だった。言い訳するならもっとうまくできないのかしら？

だが、大澤は自信満々だった。京子は驚いた。一体この自信はどこからくるのかしら？

大澤は口を開いた。「何なら、うちのセキュリティを確認してください。蟻一匹通しませんよ」

自衛官は質問した。「なら、なぜ警察に拘留されていた変質者の身柄を引き取ったのだね？」

「新種の麻薬に興味がありました」

1人の自衛官が遂に怒りを露わにした。「ふざけるな！！麻薬何かを研究するために、この研究所があるわけではない！」

大澤は笑いをこらえていた。京子は大澤の精神がどうなっているか気になった。大澤博士は1回精神病院に行ったほうがいい。そう思った。

女性自衛官は再び言った。「私は変質者の正体なんてどうでもいいのです。でも、そちらが研究している新種ウイルスが大流行したら、どう責任を取るのですか？」

大澤はまたしても余裕そうだった。「異種への感染は見られません。ウイルスは霊長類のみに感染します。東京に野生のチンパンジーなんて居ませんし、人が感染しても、感染者を即時隔離すればいい」女性自衛官は負けまいと喋った。「確かにそうですが、あのウイルスはあまりにも危険です。未知の部分が多く、感染者を狂暴化させるなんて。そして何よりもワクチンや抗ウイルス剤がありません」確かにワクチンが存在しない。ここはどう言い訳するのだろうか？

大澤は微笑みを見せた。「安心してください。空気感染はしません。接触感染のみです。ウイルスは感染者の血液中や唾液中でしか存在しません。つまり、感染者とセックスしない限り、感染しません」下ネタを言えるくらい余裕がありますね。うん。

「でも・・・」言い終える前に、誰か入ってきた。

「松永3等陸佐。何を恐れている？」相沢信也陸将だった。半そでの迷彩服を着て、まだ力を入れていないのにかなり発達した筋肉が目立った。顔も端整だ。その圧倒的存在感とカリスマ性を誇っていた。

渋い声で女性自衛官に話しかけた。「松永3等陸佐、一体何を恐れ

ている？」

先ほども存在感を誇っていた女性自衛官松永3等陸佐も、相沢陸将の前では小さく見える。

松永はしばらく間を空けたが、口をあけた。「大流行……いえ再発です」

相沢は松永を見つめた。「再発はありえない」

松永は少しむっとした。「けど再発したら？」

相沢信也はため息をついた。「あの＜作戦＞を発動するまでだ」

「大羽封鎖事件の二の舞ですよ？」

「大流行を防ぐためだ。政府の承諾済みだ」

京子は一瞬身震いした。あの作戦に政府が承諾したなんて……

信也は大澤を見た。「大澤博士、ワクチン開発はどこまでいった？」

大澤は甘い滑らかな声で言った。「まだ第2段階です」

「完成まではまだか？」

「はっきり言えば、そうですね」

会議は終わった。大澤は京子を連れて、バイオセーフティーレベル4の施設に向かった。

「ワクチン開発、思ったより手惑いますね」京子は皮肉っぽく言った。

大澤はいつもの惑わすような声で答えた。「黒木博士が居ればな……」

黒木博士？聞いたこと無いわね？「誰ですか？」

「黒木大輝」いつもの惑わすような声ではなかった。どうしたのだろう？

「生物学者でとても優秀な学者だった。同世代の人は皆エイズのワクチン開発もできそうな人だって言われたくらい。けど、彼は別のウイルスを研究してた。それが何かは不明だけど」

この博士は人を尊敬しない人物だ。その博士からまさかあの言葉を聞けるなんて……

黒木大輝……一体どういう人物なのかしら？

真人は物凄いスピードで数学の宿題を進めていた。今日は数学の宿題の提出日だった！

聖夜が真人を見た。「すごいスピードだな。真人」

「話しかけないでくれ！宿題を終えてなかったんだ！」

本当にやばい！うちの数学の教師って提出日守らないと怒るんだよな。めっちゃやばい！

真斗が真顔で真人の様子を見ていた。真顔で見られると何か怖い。

真人はやっと宿題を終えた。だが真斗が真人に言った。「1番と5番と9番が間違えてるよ……」

真人は指定された問題を計算しなおした。確かに間違っていた。

「サンキュー真斗」

「……サンキュー……？」

こいつ、サンキューの意味も分からないのか？「ありがとうだよ」

「発音間違ってる……」

発音の問題か！確かにアメリカ人はサンキューって言うな。

「ありがとう」

聖夜が不機嫌そうに言った。「何かおなら臭くね？」

「真人、お前か？」真人は首を振った。

「黒崎、お前か？」「違う……」

「武田、お前か？」「大佐って言え。違う」

「トリエン、お前か？」

トリエンは笑いながら言った。「お前のおならじゃね？」

「どういう意味だ？」

トリエンはおならをする真似をした。そして手を尻につけた。「これ、おなら」

そして、腕を股に通らせて自分の顔に近づけた。

「お前は自分でおならをしたんだ。そして、お前のおならは自分の股を通して、お前の鼻まで来たんだ」

全員笑った。「トリエン面白い!」

聖夜はより不機嫌になった。「トリエン、マジ後で殺す!」

真人は忠告した。「殺したら少年院行きですよ」

「真人!お前も殺す!」

真人は「ひく助けて」と言いながら真斗を見た。真斗が一瞬笑っていた。

今日についてる。宿題が終わったし、真斗のレアな笑顔も見れたし。

―午後9時24分―

サンガラスをかけた男が、どこかのお店の裏側で煙草を吸っていた。若い女性が近づいてきた。しめしめ、お客さんだ!

「いつものお願い」そう言って、2000円を渡してきた。

いつものね。男は粉の薬みたいなものを渡した。

女は早速歩きながら、粉を吸った。

男はまた煙草を一服吸った。これだから、これはやめられねえ。

ふと、フードを被った男が、男に首でこっちに来いと合図した。

男は行った。そこは、人気の無い歩道橋の下だった。

男は、フードの男に言った。「俺は野良^{のら}。お前は?」

「岡本だ」

野良は質問した。「夏なのにフード付きトレンチコートにマフラーって暑くないか?」

「暑いね」

おかしい奴だ。野良はそう思った。

岡本は質問した。「何がある?」

「コカイン、アヘン、ヘロイン、何でもあるぜ」

「何でも？」

「ああ。ここだけの話、麻薬販売はやめられないね。1度でも麻薬に手を出すと、そいつは中毒者になってな、麻薬を欲しがる。だから売り上げもあがる。いい利益だよ」

岡本は興味なさそうに言った。「さっきの話は本当か？」

「何が？」

「何でもあるって？」

「ああ本当だ」

「何でも？」

「ああ」

「本当に？」

「ああ」

岡本は微笑した。「じゃあ貰うよ」

よし来た！野良はそう言おうとしたがやめた。「何が欲しい？」

「お前だ！！」

岡本は野良の肩を掴み、近くの違法駐車している車に投げ飛ばした。

野良は車のガラスを割って車内に突っ込んだ。岡本はドアを開けて、

野良を車内から引きずり出し、無理やり立たせた。

「俺はお前が欲しい。俺の偉大なる計画の為に！」

岡本の周りには、3人フードを被っていた人が居る。

「お前には、俺の駒になってもらう」

岡本は野良の首筋を噛んだ。

そして、自分の唾液を送り込んだ。

野良は、道路に倒れこんだ。全身に激痛が走る。

口から大量に血が吐き出る。頭痛がしたが、数秒で終わった。

車のサイドミラーで自分の顔を見た。

目が赤かった。

その瞬間、意識が途絶えた――

保菌者（前書き）

【追加登場人物】

少女

中学生くらいの外国人。新種ウイルスの保菌者で本州生物科学研究機構にて監禁されている。

保菌者

少女は、真っ白な部屋の閉じ込められていた。寝台、トイレ、流し、テレビがある。ドアには強化ガラスの窓があった。一体、こんな所に閉じ込められてどれくらい経ったのだろうか？半年以上経ったかな？あの日以来、外の世界を見ていない。

今日の実験時刻は午後5時、今は午前9時……まだまだ時間は沢山あるわね。

友人も家族も親しい大人も居ないこの部屋で、彼女はテレビをつけた。

「ニュースです。昨夜東京都渋谷にあるナイトクラブで乱闘が発生しました。目撃者証言によると、午後8時ごろに怪しい格好をした集団がクラブ内に入り、近くに居る男性を突然暴行を加え、止めに掛かった男性らにも暴行を加え、乱闘に発展しました。なお、暴動を起こした集団は逃亡、噛み傷などの重傷を負って8人が病院に搬送されましたが、搬送先の病院で2人が死亡しました。なお――」

ふん。最近の日本は物騒ね。

そう思った瞬間、電灯が消えた。一体どうしたのだろうか？

外の警備員の声が聞こえた。「一体どうした？」

「停電です！」

「停電！？なぜ緊急用発電機は？」

「正、副、予、全ての発電機が起動しません！原因は不明です！」

「とりあえず研究員を安全な場所に移動させろ。何人か集めて発電機を見に行こう」

「＜保菌者＞は？」

「ここは安全だ。今はほっとけ」

警備員達が走っていくのを確認した。

この施設は、ほとんどがコンピューターに制御されていると聞く。

もしかして――

少女は独房とも言えるこの部屋の扉を引いてみた。すると、扉はあっさり開いた。

少女は外の世界目指して、研究所の扉に向かった。だが、道に迷った。

「どうしよう？」

警備員らしい人物が近づいてきた。少女は仕方なく、近くの女性用トイレに入った。

トイレの流し台にバッグが置いてあった。

バッグの中をあさってみると、財布が入ってあった。盗みは本来したくは無いが、＜外の世界＞では金は必要だ。この際、仕方が無いな。

トイレには窓があった。窓を開けてみた。ここは1階だったため、すぐに外に出れる。少女は迷い無く、窓から外を出た。

外は青い大空が広がっており、太陽が堂々と地上を照らしていた。

「綺麗、空がこんなに綺麗だったなんて・・・」

少女は大空を眺めていた。心の浄化という言葉は、こんな時に使うんだ・・・

外の世界は今は真夏なため、気温はかなり高いが、ずっと冷房の効いた寒い研究所に居た少女にとっては、この暑さは暖かく感じた。本当に久しぶりの外の世界をもっと満喫したかったが、一刻も早く研究所から離れなくては！

少女は走り出した。当ても無く、ただひたすら走った。

小さな洋服屋の年老いた男性店主は緩やかな動作で煙草に火をつけ、その味を楽しみながら、新聞を読んだ。

ナイトクラブの暴動、政治家の賄賂問題、小学生の殺人事件などが載っていた。まったく最近の日本人は腐っている。いや、人間はいつの時代でも腐ってるな。わしを驚かせるまともな人間は出てこないのかね？

彼は煙草をもう一服、深々と吸い込むと、新聞紙を投げ捨てた。

その時、店に誰が入ってきた。

「いらっしゃーい」大きな声で言った。お客は中学生くらいの外国人の金髪少女だった。

「おや、お前さん学校はどうした？」

少女は、少し間を空けて答えた。「病院から抜け出てきたんです」
滑らかな日本語だ。

確かに格好は病院の入院患者みたいだな。「お客さん、病院から抜けちゃ駄目でしょう？」

「残りの人生を、外で過ごしたいの……」その声は悲しげだった。
その瞬間、店主はこの娘の言動と姿で、自分の孫を連想した。かつて病室で死に、人生の最後まで外の世界を満喫できなかった孫を・

少女は口を開いた。「服をください。どんな服でもいいです」

店主は迷い無く言った。「それなら、このワンピースがいい」

店主は白いワンピースを差し出した。胸元にはピンク色のリボンがあった。

「着てみてくれ」

少女は更衣室でワンピースに着替えた。そして更衣室から出た。

その姿を見た瞬間、店主は恋心と似た感情を抱いた。「本物の天使だ」と言おうとしたが、声が出なかった。

「おいくらですか？」少女は財布を出し、金を払おうとした。

「いいよ。老いばれ爺からのプレゼントだ」

少女は驚いた顔を見せた。「いいんですか？」

「ああ。どうせ誰もそのワンピースを買いはしないよ。今時ワンピースなんか流行らないからさ」

少女はとびっきりの笑顔を見せた。「ありがとうございます！」その笑みは魔術だ。この少女には今時の少女には無い、本物の美しさと魅力があった。少女はお辞儀をし、またお礼を言って去っていった。

不思議な少女だった。彼はレジに戻った。レジには2000円が置

いてあった。きっとあの少女の仕業だな？「まったく、お釣りの500円を渡し損ねたな」

彼は、腐った世の中で、まともな人に出会えて満足した。「世も捨てたもんじゃないな」

煙草に火をつけ、一服吸った。

少女は歩き続けた。世の中親切な人も居るものね。彼は元気にしているかしら？

もう1度会いたいな……

あなただから話せること

真人は国語の授業を受けていた。後ろでは聖夜が不機嫌そうにペン回していて、隣では真斗が真剣にノートを書いていた。まったく、いつも通りだな。唯一変わったことと言えば、信二君と真希がお互いに分からないことを教えあっていた。楽しそうだな・・・遂に授業が終わった。もうすぐお昼ご飯だ。楽しみだな。スライドドアが開き、誰かが入ってきた。

「よう！真人」

「尾田か」

尾田は今日も赤いコンタクトレンズをしていた。

真人はいい加減呆れてきた。「その悪趣味なコンタクトはずせよ」

「ああ、悪い悪い」そう言いながらはずさなかった。

「今日は妙に機嫌がいいな」

「実は、学校の登校中に女の子とすれ違ったんだ」

聖夜と武田とトリエンが近づいてきた。

「どんな女の子？」トリエンは興味津々だった。

「白いワンピースを着た外国人。同年齢だと思うけどその子無茶苦茶美人で思わず見とれちゃって」

トリエンは羨ましがった。「いいな俺も会いたい」

聖夜も珍しく興味津々だった。「言葉で表すとどのくらい美人だ？」

「綾瀬さん以上だよ！！」

綾瀬は勢い良く席を立った。「私以上ですって！？」

「ああ。そうだなってお前を言葉で表すと天使、だが俺が今日会った人を言葉で表すと女神」

綾瀬は明らかに苛立った。「お前の目は節穴か！何ならなぜ同年齢の奴が学校サボってるんだ！ああ」

「す、すいません」

女子ってこえー。真人ははっきりそう思った。その瞬間、何者かに

肩を竹刀で叩かれた。

「いてえ！」

「隙だらけだぞ」

「奈々子！いい加減にしてくれ！」

奈々子は余裕な顔を見せた。「いい加減にしてるぞ。本気で叩いたら肩が外れる」

「五右衛門！真の武道の道を教えてやれ！」

「油断は死を招くぞ」

畜生！何で俺の友人はろくなのがいないんだ！？

真人は真斗を見た。微かだが笑っていた。

「黒崎真斗！人の不幸を笑うな！」

「……ごめんなさい……」少し泣き目だった。

「い、いや俺が悪かった。ごめん・・・怒鳴ったりして」

聖夜は上機嫌になった。「おっと、真人が女を泣けさせている。これはどう思いますか、大佐？」

「紳士として最低だな。真人」

真人は焦り始めた。「悪かった！俺が悪かった！」

またスライドドアが開いた。

真希が開けた主を見た。「小島ちゃんがアメリカ旅行から帰ってきたニャ♪」

全員、驚いた。

真人は小島香美に話しかけた。「香美、帰国はもう1カ月後じゃなかったけ？」

「予定が変更になって、今日になりましたわ」

小島香美は美しく長い黒髪を持ち、アイドルスターのように愛くるしい容姿で、中学生らしからぬ威圧感があった。

彼女は信二に気づき、近づいてきた。

「あなた、転入生？」

「はい」

「わたくしは小島香美ですわ」

信二はこういうタイプの女性は苦手だ。たぶん

「わたくしが友達になって差し上げますわ」

信二は耳を疑った。「今何て？」

「この学校でエリート中のエリートであるこのわたくしが、あなたの友達になって差し上げると言ってるのですわ」

やっぱり苦手なタイプだ。今の日本は男尊女卑が弱まってきてるから、女子が段々生意気になってきてるんだよな。こいつも結構なやつーか、自信溢れすぎていて苦手だ。

あの申し出を断っておこう。「いえ結構です」

その瞬間、クラス中が「やっちゃったよ」と言うムードに包まれた。

「あっあっあなたねえ！？このわたくしの申し出を断ると！？？」

「ああ」きっぱり言った。

「きいゝゝゝ！！なんと言う侮辱！屈辱！許しませんわ！」

香美は信二を引っかき始めた。

「やめろ！おかしいぞお前！」

真希は信二の腕を引っ張って、廊下に逃げた。

「待ちなさい！」

香美は信二と真希を追いかけた。「思いつきり逃げるよ！信二君！」

「は、はい！」

気づけば小島は追いかけていなかった。信二と真希は屋上で休憩していた。

「彼女はプライドが高いニヤ。プライドを傷つける言動は控えめに・

・」

「はい、以後気をつけます」

信二は、座り込んだ。

「それにしても君、逃げ足速いね」

「前の学校で散々逃げ回ったんです」

「一体何があったニヤ？」

信二はしばらく考え込んだ。この人ならもしかして・・・

「秘密を守ってくれるなら、前の学校のこと話します」

真希は首を縦に振った。「秘密は漏らさないニャ」

信二は深く息を吸った。「僕は……」

次の言葉を出そうとするたびに、頭の中で恐ろしい奇声が聞こえた。

「大丈夫？」

「僕は……」

「深呼吸して」

「僕は……！」

「落ち着いて」

「僕は……元大羽中学校生徒です」

「……！！」 真希は明らかに驚いていた。

「あの事件の生還者です」

「まさか、噂が本当だったなんて……」

「これから話すことは全部真実です」

「話して。あそこで何があったの？」

「感染と殺戮です」

信二は、立花の事を伏せながら、事件のことを話した。未知のウイルス、感染者、狂暴化、無差別殺戮、学校の秘密、友人の死・・・聞き終えた真希はまだ全てを鵜呑みできなかった。「まさか……ね」

「今すぐ信じろとは言いませんが、事実です」

真希は眼鏡をはずした。「ちよつとショッキングだね・・・」

「ええ、とても」

「私以外に誰か話した？」

「まだ誰も」

真希は一瞬黙り込んだが口を開いた。「なぜ私だけに話したの？」

信二は答えた。「昔の友人に似ていたんです。外見的ではなく中身が。僕の最初の親友で、あの事件で何度も僕達を助けてくれた。けど死んでしまった……」

「理由はそれだけ？」

「後、僕に優しく接してくれたから。一番信頼できるから。だから、あなただけに話せたんです」

真希は眼鏡を掛けた。その瞬間チャイムが鳴った。

真希は信二に手を差し出した。「じゃあ、この事は他言無用でね。信二君」とても易しい声で言った。

「ええ、そちらもね」

真希は微笑んだ。「改めてよろしく♪」

「こちらこそ」

信二は手を握った。

本当に信頼できる、新たな親友ができた。

全てが変わる瞬間

信二は1人で下校していた。真希は生徒会の仕事ですぐには帰ってこない。

今日は妹のお見舞いの日だった。

確か、俺が東京に引越すから、妹も東京の病院に移ったんだよな。

信二は妹の入院している病室に向かった。

妹は確か個室棟だったな。

妹の居る部屋に着いた。

「失礼します」

「お兄ちゃん！」ベッドに寝ている茜が出迎えた。

「久しぶりだな信二」信一も居た。

信二は驚いた。まさか信一兄さんも着ていたなんて・・・

「今日は珍しく2人の兄ちゃんが来たね」茜は嬉しそうだった。

信一はうなずいた。「これで父さんも来れば文句は無いが」

信二も同感だった。父さんがお見舞いに来たことなんてあっただろうか？

3人の家族は楽しい時間を過ごした。

「おっと時間だ。先に帰るよ、茜、信一」

「じゃあね、お兄ちゃん！」

「達者でな」

信二は茜の顔を見た。何と、右目が茶色、左目が青色になっていた。

「どうした？その目」

茜は呆れた。「今頃気づいたの？確か、こっこっこ」躓いていた。

信一が変わりに答えた。「虹彩異色症だよ。どうやら遺伝子に異常が起きたらしい」

信一は別れの挨拶を言って、病院から出て自宅……ではなく真希の家に向かった。

その時、誰かにぶつかった。

「ごめんなさい！」向こうから謝ってきた。

どこかで聞いたことある声だ。

信二はぶつかってきた人物の顔を見た。その瞬間、心の奥底から何かが湧いてきた。

「お前は！」信二は思わず言ってしまった。

向こうも信二の顔を見て驚いた。「信二君!!」

「ソフィー！ソフィーなのか！」

そこに立っていたのは白いワンピースを着ていたソフィー・ヴェルネだった。以前会った時よりも肌は白くなっていたが、堂々と輝く金髪、青い目、優しい綺麗な顔立ち、間違いない。あの時のソフィーだ。

「やあ！」信二は嬉しさのあまりについつい言ってしまった。

ソフィーは、嬉涙を流しながら信二に抱きついた。「信二君！会いたかったよ!!」

信二はソフィーの頭を撫でた。

「俺もだ、ソフィー」

2人は近くの喫茶店に入った。

「本当に久しぶりだな」信二はまだ嬉しさのあまり落ちつかなかった。

ソフィーもまだ感動していた。「本当にね」

信二は単刀直入に言った。「てつきりフランスに帰ってたかと」

ソフィーは返答に戸惑った。「えっと、えっと、あの、その、だから、そう！そういう事！」

日本語がめちゃくちゃだ：

「何で前より肌が白いんだ？」

これも戸惑った。「えっと、美肌あゝサロン？に通っていたの！うん」

これ以上問いただすのはやめよう。それより今は再会を楽しもう。

「今日はおごるよ。何がいい？」

「とりあえず紅茶」

信二は店員を呼び、紅茶2つとサンドイッチを頼んだ。

信二は紅茶を喉に流し込んだ。なぜ、好きでもない紅茶を頼んだんだろう・・・

「元気だったか？ソフィー」

ソフィーは紅茶を飲みながら答えた。「うん、元気と言えば元気」

信二はサンドイッチを一口食べた。

ソフィーは笑みを見せながら聞いた。「信二君？今の学校はどう？」

「まあまあだな。でもすぐに1人親友ができた。お前は？」

「わ、私はえっと、その、うん！まあまあ・・・かな？」

明らかに様子が変だ。まあいいか。

「それより信二君！今日は信二君の家に泊めてくれない？」ソフィーは単刀直入に言った。

「お、俺の家？今友人と同居してるんだ」

「友人の家でもいい」

「どうしたんだ？」

ソフィーは返答に戸惑った。「い、家出！家出したの！モルモットみたいな生活に嫌気が刺して」

「友人に聞いてみる」

信二は携帯電話で真希に電話をかけた。

「はい、真希です」

「信二だけど」

「どうしたの？信二君？」

「友人がお前の家に泊まりたいって」

「いいよ♪1人でも多いほうがにぎやかになるし♪」

「サンキュー」

「ニャー♪」

信二は電話を切った。

「じゃあソフィー、うちに……じゃなくて友人の家に行こう」

ソフィーは顔を輝かせた。「いいの！？ありがとう！」

「礼は友人に言ってくれ」

2人は自宅・・・ではなく真希の家に向かった。

信二は玄関を開けて、ソフィーを中に招き入れた。

「真希さん居ますか？」

「居るよ」真希の声が2階から聞こえた。

「じゃあ行こう」

信二はソフィーを連れて2階に行った。

そして、ドアを開いた。

中には真希・・・だけでなく、真人、紀子、真斗、聖夜、トリエン、尾田、綾瀬、武田、立花が居た。

「ごめん・・・ばれちゃった」真希は左目を閉じながら謝った。

「どうしたの？信二君？」ソフィーは部屋に入ってきた。

その瞬間、男子達が興奮した。

「この人だ！この人が俺の言っていた美人だ！！」尾田は叫んだ。

「めっちゃ美人だ！！綾瀬以上！」トリエンも言った。

「んだと！こらあ！」綾瀬はトリエンの後頭部を思いっきり殴った。
トリエンは気絶した。

「立花ちゃん、久しぶりね」ソフィーは立花に近寄った。

「久しぶり・・・」立花は表情こそはいつものままだが、心の中では喜んでいた。

「信二君、悪いけど全員私の家の泊まりに来たの」真希は信二のそう言った。

「マジで!？」

紀子は信二に近寄った。「マジよ。中学生男女2人が嫌らしい事しないように監視に来たの。全員ね」

信二は苦笑いした。これはすごくにぎやかになるだろうな・・・

本州生物科学研究所

大澤は不機嫌だった。

「で、保菌者は？」

京子は答えるのをためらった。あの人が真面目に聞くときは決まっ
てマジ切れしているときだ。

「逃げました。＜2人＞とも」

大澤は近くに落ちていた本を蹴り飛ばした。

「あの、自衛隊と政府に報告はしますか？」

「するわけ無いでしょう！！無能なのかお前は！！」

「すみません！」

大澤は舌打ちした。まさか2人とも逃げたとは・・・少女のほうは
最優先に捕獲しましょう。

全てが変わる瞬間（後書き）

【追加登場人物】

ソフィー・ヴェルネ

大羽中学校封鎖事件の生還者。実は事件中に新種ウイルスに感染したが、事件の犠牲者の1人が完成させていたワクチンのおかげでウイルスに免疫ができ、保菌者になる。度重なる実験の影響で体内色素に異常が発生して、肌が白化する。

全てが変わる瞬間2

この日もいい天気だった。空は雲ひとつ無く、空気は暖かった。

信二は2時間目の英語の授業を受けていた。実のところ信二は眠くて眠くて仮眠を取りたかったが、席が一番前のため、寝てしまったら先生に注意される。だから寝れない。

だが、ソフィーの再会の喜びは今も残っている。だが、それは信二だけではなかった。

昨日、真希の家で泊まった男子達は美少女達と一夜を過ごした。皆幸せそうな顔をしていた。

トリエンを除いて――トリエンは昨日一晩中気絶していた。

後ろでは真人がノートを書いている――振りをして寝ていた。

よくもまあ堂々とね――

右席の真希が話しかけた。

「ごめーん、教科書の英文の訳を見せてー」

「・・・今度は立場の逆転だね？」

「だって英語苦手だもん。それに今日あたるかも」

「はい、訳文を書いたノート」

「ありがとう♪」

英語の教師である女性が真希に英文の訳を指示した。真希は信二のノートを見ながら訳した。

信二は校庭を眺めた。

授業が終盤に差し掛かった頃、校庭で何か騒いでいた。

校門からフードを被っていた1人の男が入り込んで、校庭で体育の授業でハードルをしていた生徒達に向かってゆっくり歩いていた。

授業中の生徒達は男に警戒していた。夏場なのに男はトレンチコートを着ていた。

男が止まると、さらに校門からサングラスをかけた6人の男達が入ってきた。

異常に気づいた女性体育教師が、不審者を追い払うために近寄っていった。

信二はその日なぜか双眼鏡を持っていたため、双眼鏡で男達を見張った。

「相沢君、相沢君！」英語の教師が注意してきた。

「相沢君こっち向いて！」

「うるさい！！」信二の怒鳴り声には迫力があつたため、先生は信二を恐れた。

生徒達も信二を不審がった。

「何、あの人？」

「頭おかしいの？」

「気持ち悪」

信二は無視した。異変に気づいた真希と真斗が窓に近づき、外を見た。

窓側の男子達も外を見た。

信二は双眼鏡で男達を見張っていた。

体育教師はフードを被っていた男を説得して学校から出てもらおうとしていた。

フードを被っていた男は数歩下がって男達の中心に立った。

信二はサングラスの隙間から男達の目を確認した。

赤目だった・・・

「先生！逃げて！」信二は思わず叫んだ。

体育教師は信二を見上げた。

その瞬間だった！

男の1人が奇声を発しながら体育教師の喉元を噛み付いた。

「嘘だろ！！」その状況を見ていた窓側男子達が叫んだ。

校庭から悲鳴が聞こえた。フードを被っていた男以外の男達が奇声を発しながら他の生徒達に襲い掛かった。

真希は英語教師に向かって叫んだ。「先生！不審者が生徒達を襲っています！警察を呼んでください！」

英語教師は窓から外を見た。「ほんとだわ！」

駆け足で職員室に向かった。

クラスメート達が窓際に駆け寄って外を見て、絶句した。

生徒達が男達に暴行されていた。いや、厳密に言えば何人かは噛まれている。

「一体何なのよ!？」

「俺が知るか!？」

「マジでやばいじゃん！」

もはや授業なんて関係なかった。隣のクラスからも驚きの悲鳴が聞こえた。

全教室、廊下に設置されているスピーカーから、教師の声が流れてきた。

『校庭に不審者がいます！全教師は校庭に向かってください！生徒の皆さんは担任の指示に従って、速やかに避難して下さい！これは訓練ではありません！繰り返します——』

担任の蛇谷がやって来た。「坂本！お前は皆を体育館まで誘導しろ！俺は不審者の対応にあたる！」

真希はうなずいて、皆に振り向いた。「皆出席番号順に並んで！」

全員パニックを起こして一斉に教室の出入り口に駆け寄った。

信二も廊下に出た。信二の苗字は相沢あいざわのため、一番前に並んだ。

「じゃあ、付いて来て！」真希はクラスメートを連れて体育館に向かった。

体育館に向かう為の出口が見えてきた。他のクラスメートも、信二のクラスメートに付いて来た。

だが、体育館を繋ぐ出入り口に、血まみれの男子生徒が立っていた。

「君！大丈夫？」真希は近寄ろうとした。

「待ってください！」信二は真希を止めた。

「何？」真希は信二に振り向いた。その瞬間、男子男子生徒が奇声を発しながら真希に襲い掛かってきた。信二は男子生徒の顔を殴った。そして目を見た。

赤だった・・・

信二は男子生徒の顎と後頭部を掴んだ。そして180度回転させた。男子生徒の首の肉と皮が引き裂き、骨が飛び出した。生徒達は悲鳴をあげながら、無茶苦茶に散らばった。

真人は信二の肩を掴んだ。「お前！何やってるんだ！？人殺しだぞ！」

信二は言い返した。「向こうも人殺しだ」

「何を根拠に――」

「前にもこんな事が起きたんだ！」

「前にもっていつだよ！？」

「大羽中学校封鎖事件」

それを言った瞬間、クラスメート全員の動きが止まり、信二を見た。

「俺はあの事件の生存者だ」

真人は信じられなかった。紀子の推測が正しいなんて――

紀子は逆に喜んだ。

「あの事件で一体何が？」聖夜は訊ねた。

「殺戮だよ。いいか、皆、荷物をまとめて学校から出る。そして自宅に帰るんだ。渋谷、東京から出るぞ」

誰かが聞き返した。「何だよ！」

「これはく感染＞なんだ！！」信二は怒鳴った。

「感染って、何の感染だよ！？狂犬病？」

「もっと厄介なウイルスだ。感染者は凶暴化する。感染条件は感染者の唾液と血液が体内に入ることだ。感染拡大を防ぐため恐らく渋谷は封鎖される。悪ければ東京そのものかもな。そうなる前に東京から出るんだ！」

全員、何か言いたかったが、言えなかった。「これ以上質問が無ければ家に帰れ！」

信二がそう言った瞬間、全員玄関に向かった。

立花が信二に駆け寄った。「なぜ感染が始まったの？」

「分からない。だが逃げたほうがいい」

信二は、立花と真希を連れて、信二の家に向かった。

「信二君！一体何のウイルスなの？」真希は走りながら聞いた。

「今だ正式発表されてない新種ウイルスだ！」

信二の家に着いた。3人はすぐに中に入り、玄関の鍵を閉めた。

ソフィーがワンピース姿で出迎えた。「どうしたの？信二君？」

「＜感染者＞が現れた」

ソフィーが驚いた。「DEMONYO^{デモニョ}ウイルスの感染者？」

「そうだ」

4人は2階に駆け上がった。

「マスクは付けたほうがいい！経口感染は防げる」

信二はリュックに食料を詰めた。ついでに包丁も持った。

「信二君」立花が言った。

「何だ！」

「外に誰がいる・・・」

もしかして感染者か？信二はもうひとつ包丁を持って立花に渡した。

「もし感染者が入ってきたら、躊躇わずに殺せ。いいな？」

立花はうなずいた。

信二は包丁を持って、玄関を出た。

その瞬間だった。

ガスマスクを付けた自衛隊員が信二を取り押さえた。

「何をする！？やめろ！」

89式小銃を装備した自衛隊員数名が信二の自宅に入って行った。

真希、立花、ソフィーが連れ出された。

自衛隊員の1人が無線で通話した。

「保菌者は無事確保しました」

1機の軍事用ヘリコプターUH-60JA通称ブラックホークが降りてきた。

中から大澤と京子が出てきた。

「お母さん!？」真希が驚いた。

京子も驚いていた。「真希、なぜここに?」

大澤は勝ち誇った足取りでソフィーに近づいた。

大澤はソフィーを睨んだ。「いけない子、家出なんかしちゃ駄目でしょ?」明らかにからかっている口調だ。

「研究所に連れて行って」

自衛隊員はソフィーを無理やりブラックホークに乗り込ませようとした。

「やめて!放して!信二君!信二君!」ソフィーは抵抗しながら信二に腕を伸ばした。

「ソフィー!」信二も腕を伸ばした。

大澤は信二の腕を無理やり下ろさせた。「僕ちゃんはバスに乗・る・の・よ・ね♪」

自衛隊員は近くの停車させていたバスに3人を乗り込ませようとした。

「信二君!!信二君!!」ソフィーはブラックホークに乗らされた。変わりに信二達はバスに乗らされた。バスの前後には軽装甲機動車が、バスの左右には偵察用オートバイに乗った自衛隊員が配備されていた。

「良い旅を」大澤はそう吐き捨てて京子と共にジープに乗った。

ブラックホークは離陸し上空へと姿を消した。

軽装甲機動車が動くと同時にバスと定差長オートバイも出発した。バスの中には信二のクラスメートが沢山居た。

真希は真人に話しかけた。

「真人君、一体何が起きているの?」

真人は首を振った。「分からない。突然自衛隊が手当たり次第皆をバスに乗せたんだ」

信二には答えが分かっていた。感染拡大を防ぐための緊急措置だな。まさに、あの事件と状況が似ていた。今日はまずい日になるな。

緊急隔離

信二達を乗せたバスが、目的地に着いた。

そこは、どこかの高等学校の校庭だった。

校庭には、大きなテントが張っており、何かを閉じ込めるように、沢山のフェンスが建っていた。

校舎には、ビニールのようなものが覆われていた。

ガスマスク、戦闘用防護衣、89式小銃を装備した自衛隊員が信二達をバスから降ろした。

校庭には大勢の一般市民が信二達同様何も聞かされずに強制的に校庭に集められていた。

拡声器を持った自衛隊員が話していた。

「困惑しているのは分かりますが、前の人について行って検査を受けてください。検査は全部で4つあります。繰り返しです——」
信二たちは言われたとおりに前の人についていくと、テントに向かっていた。

テントの前では、自衛隊が化学剤検知器で市民を検査していた。

尾田が信二には話しかけて来た。「何がおきてるんだ？」

「たぶん、感染者と非感染者を区別するための検査だろ」

信二は尾田を見た。何と、赤いコンタクトをはずしていなかった。

馬鹿！はずせ！そう言おうとした瞬間、自衛隊員の1人が尾田を見た。

「感染者だ！感染者出現！」

数人の自衛隊員が尾田を取り押さえた。

「やめてくれ！俺は感染者じゃない——！」

だが、手錠をはめられて、校舎へ連れて行かれた。

信二は同情した。自己責任だけだな。

信二は第1検査を終えた。

今のところ、連れて行かれた知人は尾田だけだな。

テント内に入れられた。テント内は道が2つに分かれていた。

2つの道の前で2人の自衛隊員が市民1人1人の目を何かの形態装置で検査していた。

信二の番が来た。

「異常なし、右に進んで」

信二の知人たちも異常がなかった。

「異常あり！充血確認！」

トリエンが左の道に強制的に進められた。

「待ってくれ！石鹸が目に入ったんだ！」

トリエンの必死の叫びは誰も聞かなかった。

信二たちは第3検査の所に向かった。

ここでは、体温計のような装置を頭に付けて、体温を測定していた。

「……あれは何……？」 真斗が信二に尋ねた。

「体温測定だろ？」

「…私、風邪気味なの…」

信二たちの番が来た。信二の体温が測定された。

「平常値、前に進んで」

聖夜と真斗の体温が測定された。

「引かなかった！平常値より高い」

2人が校舎に連れて行かれた。

「待ってくれ！俺バスの中でストレッチしてたんだ！」

「…やめて…！」

信二は自衛隊員に怒鳴った。

「あの2人は大丈夫です！女子の方は風邪を引いているんです！」

「2人は感染の疑いがある。緊急隔離する」

信二は強制的に前に進められた。

第4検査は唾液検査だった。

信二が綿棒を口に入れられた。そして、信二の唾液を計測していた。

「陰性、校門に向かって」

信二の残りの知人も陰性だった。

だが、見知らぬ幼女から陽性が出た。

「陽性だ！感染者だ！」

幼女の母親が抵抗した。

「やめて！この子は感染してない！そもそも何の感染なの！？」

無情にも幼女は校舎に連れて行かれた。

「やめて！連れて行かないで！検査し直して！」

「ままー！やだ！怖いよ！」

全ての検査で異常がなかった人はカードを渡され校門に進められた。校門では、沢山の高速バスが停車していた。

「検査で異常がなかった人たちはバスに乗車してください。ただし、許可証がなければ乗車できません」

なるほど、このカードは許可証か。

だが、信二はまだバスに乗る気はなかった。

「信二君乗らないの？」真希は信二に尋ねた。

「ああ、しばらく様子を見てみよう」

信二のクラスメートは全員、バスに乗車した。信二はまだ外に居た。

「検査に引っかけた人はどうなるの？」

「たぶん、隔離されるか、殺されるか」

だがなぜ感染が発生したんだ？そういえば、自衛隊がソフィーのことを保菌者と言っていたな。

まさか、彼女が？

「信二君、いい加減のろうよ」真希が話しかけてきた。

「ああ……そうだな」

信二はバスに乗った。

バスの運転手も自衛隊だった。

席は多いため、信二は座ることができた。

信二が座り込んだ瞬間、1台の大型トラックが信二たちの居るバスの反対の校門から進入し、大勢の市民が閉じ込められているフェンスに突っ込んだ。

フェンスが壊れたことで、市民たちが脱出した。

1人の自衛隊員がバスに乗り込んだ。

「市民が逃げ出した……」

言い終える前に自衛隊員が何かに後ろから襲われた。目が赤かった。

「感染者だ！こいつを撃つてくれ！」

運転手の自衛隊員が拳銃で感染者の頭を撃ちぬいた。

よく見ると、トラックが進入してきた校門から、大勢の市民が奇声を発しながら校内に侵入してきた。

「感染者達だ！バスを出せ！」

バスが順に出発した。

校庭に居た自衛隊員たちは、89式小銃で応戦していた。

感染者に襲われた自衛隊員がバスに乗り込み、入り口を閉めた。

「こちら緊急隔離班！隔離は失敗！感染者が多数出現！」

『了解、事態が収集不可能な場合、全隊を撤退させろ』

「了解！^{アウト}交信終了」

自衛隊員は運転手を見た。「発進させろ！」

信二たちの乗ったバスが発進した。

信二は安心と不安の両方を感じた。

隔離された知人たちは無事だろうか？

信二たちを乗せたバスが交差点に差し掛かった瞬間、大きな衝突音と共に、バスが横転した。

大型トラックがバスに突っ込み、衝突を起こした。

中に居た大半の人が席から放り出された。

信二は、頭を強く打ち、気絶した。

隔離失敗

―避難用バスが出発する数分前―

真斗は目を覚ました。校内の教室だった。

立ち上がろうとしたが、体が動かなかった。ベルトらしいものでベッドの縛り付けられていた。周りを見てみると、他にもベッドに縛り付けられている人たちが、並ばれていた。自分は一番端だった。何があったか思い出そうとした。

確か、体温検査に引っかかって、そのまま無理やり校内に連れて行かれて、ベッドに寝かされて、防毒服の人たちに人工呼吸器のようなものを口に付けられて……そこで意識が途切れたんだ。

自分の隣を見ると、聖夜が寝かされていた。まだ目を覚ましていない。

「……聖夜君……？」呼んでみても返事がない。当たり前か……

よく見ると、防毒服を着た隊員が、1人ずつ血液採取していた。教室の出入り口には、同じく防毒服を着た隊員が89式小銃を装備して、警備していた。

一体何が起きているのか思い出そうとした。

そういえば、信二君が感染が始まったと言っていたような……思い出せない。

すると、自動車が走っている音が聞こえた。

聞こえたと思ったら、今度は何かが壊れる音がした。フェンスかな？血液採取していた隊員が警備している隊員を見た。

「何があった？」

「今は関係ありません博士。採取を続けて」

博士は採取を再開した。

今度は銃声が聞こえ始めた。

「一体何が起きてるんだ？」

「今は採取を……」

廊下に居る隊員が騒ぎ出した。

「感染者が襲撃してきた！」

「数は？」

「大勢！」

「退却！総員退却！」

警備していた隊員が博士に怒鳴った。

「感染者が出現した！我々も撤退しよう！」

博士と隊員が廊下に出た。

真斗は首を限界まであげて、窓から外を見た。ここは2階らしいわね。

外では、校庭に止めてある6機ヘリコプターCH-47J/JA愛称チヌークのプロペラが回転し、大勢の自衛隊員がチヌークへ走っていた。

博士が真斗のベッドのそばに無線機を忘れたおかげで、無線機から音声聞こえた。

『感染者が襲撃。隔離は失敗しました。本隊は撤退を開始します』

『了解、撤退完了後、陸将自らが本作戦の指揮を取る』

『了解』

『全員乗り込みました！』

『了解、離陸する』

チヌークが次々と離陸していった。

『博士が無線機を紛失した、盗聴防止のため周波数を変える』

『了解』

無線機からは雑音しか聞こえなくなった。

真斗は、隊員が居なくなったことでベルトをはずそうともがき始めた。

「……駄目か……」

うなり声が聞こえた。聖夜が目を覚ましたようだ。

「うーん、目覚めが悪いな」

「……聖夜君……！」

「黒崎か！良かった無事だったか！ここはどこだ？」

「……隔離されたみたい……」

「そうか……」

聖夜がもがいた。

「くそ！きつく縛ってるな、誰かの助けが必要だな。そういえば自衛隊は？」

「……さっき撤退した……」

「撤退？なぜ？」

「……感染者がどうのこうのって……」

廊下から、何かが引きずられる音が聞こえた。

「誰か来る！」

1人の教師らしい人物が、教室内に入ってきた。

「数学の工藤先生だ！先生！」

同じくベッドに縛り付けられていた少年が大声で呼んだ。

真斗のクラスメートの1人だ。

長身の工藤がその生徒の近づいた。

「先生？」

工藤が何かを構えた。スキだった。

「先生何を！」

工藤はスキを生徒の腹部に突き刺した。

生徒が絶叫を上げた。

「見るな！」

聖夜がそう叫んで顔を襲われている生徒から逸らした。

生徒の腹部に4つの穴が開き、そこから血が流れ出した。

「先生……やめてくれ……ごふっ」

生徒は血を吐いた。工藤は再びスキを生徒の腹部に突き刺した。

スキが刺さる鈍い音と生徒の絶叫が何回か聞こえた。

生徒はすでに死んでいた。

工藤は生徒の隣の男性に近寄った。

男性は目を覚ましていない。

工藤は男性を通り過ぎて、男性の隣の女性に近寄った。

「お願いやめて、助けて助けて助けて――」

工藤はスキを女性の喉に刺した。声帯をやられ、女性が喋れなくなった。

工藤は女性の喉をもう1度スキで刺した。

女性が死ぬまでスキを抜くことはなかった。

工藤は聖夜に近づいた。

「先生辞めてください！マジで先生辞めたほうがいい！」

工藤はスキを構えた。そして突き刺そうとした。

「止めて――！」

真斗は無我夢中で叫んだ。

工藤は動きを止め、真斗を睨んだ。工藤の目が赤かった。

工藤は聖夜を殺すのをやめ、今度は真斗を殺そうと近寄った。

「先生！マジで辞めたほうがいい！俺マジで切れますよ！堪忍袋が切れますよ！」

工藤は聖夜の言葉を無視して、真斗の横に立ち、スキを構えた。

真斗は目を閉じた。どうせ命乞いをしてでも聞くはずがない。これが運命なら受け入れよう……

工藤はスキを真斗の腹部めがけて突いた！

だが、突然工藤が悲鳴を上げた。

工藤の背中に鎌が刺さっていた。

立花が刺していた。

立花は鎌を抜き、今度は後頭部を刺した。

工藤は絶叫を上げて倒れこんだ。

立花は真斗と聖夜を縛っているベルトをはずした。

「たくっ何だよこの糞数学先生が！何人も人を殺しやがって！」

立花は工藤の目を確認した。

「彼はもう普通の人間じゃない。感染者になってた」

聖夜が首を傾げた。「感染者？」

「今朝、信二君が話したでしょう？人を狂暴化させるウイルスが発

生してるって」

「じゃあ、工藤が感染してたのか？」

「ええ、この真っ赤に染まった瞳が感染した証拠」

「詳しいな」

「前にも同じ状況になったから」

「前にも流行ったのか？」

「大庭中封鎖事件、あれがそうよ」

立花は工藤の後頭部から鎌を抜いた。そして、工藤が所有していたスキを聖夜に渡した。

「これでどうしろってんだ？」

「感染者が現れたら刺して」

「人殺ししろってか？」

「感染者の会ったら。選択肢は2つ。殺すか、殺されるか」

「逃げるって選択肢は？」

「感染者は疲れ知らずなの。体力に自信があっても、感染者から逃げるのは武器がないときにして」

聖夜は他の人を開放しようとした。

「この人の襲われなかった人は解放しないで」

「なぜ？」

「感染者は感染者を襲わない」

聖夜は舌打ちしながら廊下の出た。

真斗は立花にお礼を言おうと思った。

「……あの、ありがとう……」

「あまりお礼は言わないで……いくら感染していても、人殺しをすると、心が穢れていく」

「……大羽中学校事件で何かあったの？……」

立花は返答にためらった。「好きな人を殺した……」

それだけ言って廊下に出た。

封じ込め作戦

信也は、1つ1つ書類を確認していた。
すると、誰かがノックしてきた。

「入れ」

自衛官が中に入ってきた。

「報告します相沢陸将殿。感染が始まりました」

信也はため息をした。

「なぜ今まで黙っていた？」

「その、感染者の緊急隔離だけで事態が収まるかと・・・」

「それで今まで独断で行動していたと？指揮は誰が取っていた？」

自衛官は黙り込んだ。

「誰だ！言え！」

「大澤博士です・・・」

信也は驚いた。

「部外者が指揮を執っていたのか？」

「正確には和田一等陸佐が執っていましたが、大澤博士が和田に指示をしていたんです」

信也は立ち上がった。

「司令室に向かう。だが無線を貸せ」

自衛官は無線を渡した。

「全隊員に繋がってるか？」

「はい」

信也は喋りだした。

「相沢陸将だ。全隊員に告ぐ。全幹部レベルの者は司令室に向かえ」
無線機から応答が来た。

『幹部レベルのものは全員指令室に来ました』

「全指揮官はロックダウンを確認しろ」

『ロックダウン、確認しました』

信也は司令室に入った。

室内の人は全員立ち上がり、敬礼した。

「東京都内で生物学的災害が発生。バイオセーフティレベル4のウイルスが漏れた」

幹部たちは息を呑んだ。

「感染者の緊急隔離は失敗した。これより緊急軍事機密作戦を実行する」

「了解」

信也は席に座った。

「全隊を武装させろ」

「了解、全隊に告ぐ。武装せよ」

「了解」

「武装完了しました」

信也はうなずいた。

「全兵器を使用可能にしろ」

「使用可能です」

「全狙撃主は出動準備」

「了解」

「政府関係者を避難させよ」

「避難用ヘリが向かいました」

信也はうなずいた。

国会議事堂で大勢の議員が会議をしていた。

だが、ガスマスクをした自衛隊員が議事堂内に入って会議を中断させた。

「全員、避難用ヘリコプターに乗り込んでください！」

総理大臣が質問した。「一体どうしたんだ？」

「バイオセーフティレベル4のバイオハザードが発生しました！緊急封じ込め作戦が実行されます！」

それを聞いた瞬間、大勢の議員が議事堂外に待機しているヘリコプ

ターに向かった。

総理は自衛隊員に話しかけた。

「本当に実行されるのか？」

「はい、しかし指揮権はあなたにあります。どうしますか？」

総理は悩んだ。

「指揮は彼に任せよう」

「なら、早くヘリに乗って」

総理はヘリコプターに乗った。

信也は報告を待った。

「陸将殿、政府関係者の避難が完了しました。指揮権はあなたにあると」

信也は満足した。これからは俺のやり方で進めよう。

「これより、緊急機密作戦＜封じ込め作戦＞を始める。以後、本作戦を暗号名＜真紅計画＞と呼称する」

幹部たちは返事にためらった。「・・・了解」

信也はしばらく黙り込んだ。心の準備が必要だ。

「コードレッドを実行する」

「全部隊に告ぐ、コードレッドを実行、第1段階に入る。東京を封鎖せよ」

『了解、＜壁＞を発動させます』

真紅作戦

信二は目を覚ました。
ベッドの上だ。

「良かった！目を覚まして」
真希がそばに居た。

「っ何があっただんだ？」

「トラックがバスに突っ込んできて、バスが倒れたんだよ！皆パニックを起こして、君は気絶してたんだニヤ」

頭が痛い。強打したんだな。

信二は部屋を見渡した。真希の家だ。部屋の隅には、自衛隊の89式小銃1丁と9mm拳銃が2丁、それに携帯無線機があった。

「あれは？」

「事故が起きた時に自衛隊員2人は死んだんだよ。必要になると思って2人から剥ぎ取った」

信二は不思議に思った。

「よく1人で運べたな」

「1人じゃないよ」

真希の部屋の扉が開いた。

「信二君、目を覚ましたか」

真人だった。

「君があれを運んだのか？」

「俺だけじゃないよ」

担任の蛇谷も居た。

真希が説明した。

「聞いてみれば元自衛隊だって聞くから、きっと銃の扱いにも慣れてると思うて」

なるほど、元自衛隊か。これは強力な戦力になるな。

「しかし驚いたな。自衛隊もあんなに大胆なことをして」蛇谷は渋

い声でそう言った。

「感染拡大防止のためでしょうね、きっと」

蛇谷はしわを寄せた。「感染拡大？」

「DEMONYO^{デモニーヨ}ウイルスが漏れたんでしょう」

「DEMONYO？タガログ語で悪霊って意味だな。一体どんなウイルスだ？」

「感染者を狂暴化させるウイルス。感染者は殺人衝動が抑えられなくなつて、他者を襲う」

「空気感染は？」

「接触感染のみです」

蛇谷は安心した。

「だが、よく知ってるね」

真人が信二の代わりに答えた。「大羽中学校封鎖事件もデモニーヨウイルスのせいだったそうです」

蛇谷はうなずいた。「やはりな、SATと自衛隊が出動したんだ。とんでもない事だとは思ったが」

真希は間違えてリモコンを踏みテレビをつけた。

『前代未聞です！見てください！東京が、巨大な壁に覆われています！』

全員、テレビに釘付けになった。

『壁の入り口には自衛隊が検問をしています！全員ガスマスクをしていて都内で良からぬ事態が起きたと暗示させます！』

チャンネルを次々と変えてみた。

『自衛隊は全員小銃を装備していて、装甲車のようなものも出動しています——』

『東京は完全に隔離されました！一体何が——』

『ヘリコプターの立ち入りも許可されず、もしヘリコプターで都内に入れば撃墜すると——』

『東京から出るには、埼玉県、千葉県、神奈川県と繋ぐ検問を通るしかなく——』

『あの壁がどうやって現れたか——』

『目撃者によると、壁は地面から生えるように現れたと——』
信二は蛇谷に聞いた。

「＜元＞自衛隊に聞きたいです。一体なんですか？あの壁は？」

蛇谷は首を振った。「分からない、俺が辞めたのはずいぶん前だから・・・そうだ！」

蛇谷は無線機を取った。

「連中の周波数を割り出して、情報を聞こう」

蛇谷は交信している周波数を探した。

真希は信二の容態を確認した。

「大丈夫そうね」

「ああ、あの程度でくたばらないよ」

真人は信二に聞いた。

「なあ、感染した奴が元に戻ることはあるか？」

信二はため息ついた。元に戻るなら、東京は封鎖されないよ……
「ないね、たぶんワクチンも出来てない。出来たら隔離や封鎖はしないよ」

「そうだな」

「よし、連中の周波数が分かった！」

無線から音声が届いてきた。

『…バス…1台…来て…い…』

蛇谷は周波数を直した。

『コードレッド真紅計画第1段階が実行された。第2段階実行も時間の問題だ』

『感染者の隔離は？』

『中止だ。東京そのものを隔離した。都内の隊員は全員撤退した』

『都内のマンホールは？』

『時間が掛かったが、全て溶接した』

『実弾使用は？』

『射殺許可が出てる』

真希は首を傾げた。

「コードレッド？」

『指揮権は誰に？総理か？』

『相沢信也陸将だ』

「父さん！？」信二は思わず呟いてしまった。

蛇谷が驚いた。「相沢陸将の息子だったのか？」

『でもマジで真紅計画が発動するのか？』

『その言葉、そっくりそのまま返す』

『そろそろ私語を慎もう』

『そうだな、じゃあ周波数を元に戻そう』

『じゃあ、また後で』

雑音しか聞こえなくなった。

「くそ！私語のための周波数だったか！」

蛇谷は再び自衛隊員が使っている周波数を探した。

信二は真希に聞いた。

「戸締りは？」

「玄関の鍵は閉めたし、1階の窓のシャッターは閉めた」

信二は外を見た。

外は驚くほど静かだ。

真希の携帯電話がなった。

「もしもし？」

『もしもし真希ちゃん？』

紀子からだ。

「紀子、今どこ？」

『学校、皆学校に逃げ込んだの。今は要塞化してるわよ。あなたは？』

「自宅」

『自宅は危険よ！今すぐ学校に着なさい。学校は安全よ。他に誰がいるの？』

「信二君と真人君と蛇谷先生」

『とにかく、学校に着なさい』

電話が切れた。

「紀子が学校に着なさいって」

蛇谷は首を振った。「行動は少人数がいい。多人数では危険が大きくなる」

「どんな危険？」

「感染者に見つかる危険だ。よし、今度こそ」
無線から音声が聞こえた。

『司令部より全部隊へ、司令部より全部隊へ。真紅計画第2段階に
スナイパー入る。狙撃手を感染地に派遣する。狙撃手は狙撃ポイントを確保せよ』

『了解、しかし狙撃対象は？』

『目が赤い人だ』

『了解』

信二は蛇谷に聞いた。

「コードレッドって何ですか？」

「分からん」

信二はため息ついた。これではコードレッドがどんな作戦か分からない。

すると、1人の小学4年生くらいの少女が入ってきた。

「彼女は？」

「隣の少女。親と喧嘩して家に帰りたくないってうちに来たの」

「ふーん」

その時、外から物音が聞こえた。

信二は隣の家を見ていた。

数人の自衛隊員が隣の家の人を家から出した。

「やめて！なにをするの！」

「奥さん落ち着いてください。検査をするだけです」

自衛隊員は体温計のような装置を隣の主婦の頭につけた。

「奥さん、隣の家は住んでいますか？」

「住んでるけど、両親はめったに帰宅しないし、1人娘は今学校に

居ると思う」

「なぜ学校に？」

「学生たちは皆学校に逃げてるって聞いたけど」
装置から警告音が聞こえた。

「平常値より高いです！」

自衛隊員が主婦をどこかに連れて行こうとした。

「やめて！検査だけって言ったじゃない！」

少女はその状況を見ていた。

「お母さん！」

信二は少女を抑えた。

「よせ！今言ったら殺されるかもしれない！」

すると、隣の家から太った中学生くらいの少年が奇声を発しながら
自衛隊員に突っ込んできた。

「感染者だ！」

自衛隊員の1人が89式小銃で頭を撃ち抜いた。

「孝太！^{こっちゃん}」

主婦が少年の死体に駆け寄った。

自衛隊員は主婦を撃った。

少女は叫ぼうとしたが、信二が口をふさいだ。

自衛隊員がM2火炎放射器で2人の死体を燃やした。

「よし、この地区を終わらせよう。散開！」

自衛隊員が散らばった。

自衛隊員の1人が真希の家に近寄った。

鍵が壊れ玄関が開く音が聞こえた。

「丁度いい。1人捕まえれコードレッドについて聞こう」

蛇谷が真希の部屋から出た。

そして、自衛隊員を引きずって入ってきた。

「真希、鍵閉めろ」

真希は部屋の鍵を閉めた。

蛇谷は自衛隊員のマスクとヘルメットをはずさせた。

スポーツ刈りの髪型をした隊員が目を覚ました。

すかさず蛇谷は隊員の首をつかんだ。

「あなたは？」

「お前の運命を決める男だ。妙な真似をしてみろ？この喉笛を潰すからな」

信二は自衛隊員の89式小銃を持った。かなり重かったが信二は辛うじて構えられた。

少女は自衛隊員に寄っが真人が止めた。

「よくも兄さんと母さんを！」

「感染者だと思ったんです」

「兄さんは障害者で興奮すると奇声を上げる癖があるのよ！」
蛇谷は聞いた。「なぜ体温を測定する？」

「感染者は非感染者よりも体温が高いと聞いて」

「なぜ射殺した？」

「現状ではワクチンがなく、感染者は治療不可能のため、殺すしかないって上から聞いたんです」

「誰の命令だ？」

「分かりません」

「なぜだ！」

「我々の指揮官が誰なのかわかりません。我々は別の命令を受けてますから」

「別の命令？」

「コードレッド第2段階が実行される前に保菌者を探せと」

信二は言った。「保菌者ならもう捕まえただろ？」

「保菌者は2人居るんです。もう1人がどこにいるか検討もつかない。それに保菌者を乗せたヘリがまだ帰ってきてないし通信が出来ない」

信二は驚いた。蛇谷は質問を続けた。

「コードレッドって何だ？」

「暗号名…真紅計画の英語呼称。感染地となった東京を封じ込める

作戦です」

「具体的な内容は？」

「分かりません。詳しい内容を聞かされません。ただ発令される命令を実行しろと。具体的な内容を知るのは政府関係者と幹部レベルの自衛官のみです」

すると、真希が蛇谷に言った。「また1人入ってきた」

「くそ！」

「なあ、頼める義理はないが、俺を見逃してくれたらあなた達の事は言いません」

真人が抑えながら言った。「先生、こいつはちくります！」

「絶対言いません」

「信じられるか、殺りましょう」

蛇谷は考え込んだ。「いや、開放しよう」

「正気ですか？こいつを解放したらちくられる！」

「このままじゃ発見される。こいつは喋らない」

自衛隊員は小声で言った。「マスクはずしたら死ぬのかな？」

「そう言われたのか？」

「付けとけとしか」

蛇谷は隊員にマスクとヘルメットを渡した。

自衛隊員はそれをつけた。

「銃を返せ」

信二は銃を隊員に渡した。

「かたじけない」

隊員は立ち上がった。「すまないと思ってます」

そして部屋から出た。

「誰だ！」

「撃つな！俺だ！」

「感染者は居たか？」

信二たちは緊張した。

「どうだ？」

「影1つありません」

「よし、本隊は撤退を開始している」
2人は去った。

生徒達の国境

「自衛隊の玄関の鍵を壊されちゃった」

真希はそう皆に言った。

「これからどうします？先生」真人は皮肉っぽく言った。

蛇谷が考え込んだ。

「学校へ行きましょう」信二はそう提案した。

「駄目だ、数が多いと危険も大きくなる」

「ですが、戦力も大きい」

蛇谷は何か言いたかったが、信二の提案を吞んだ。

「分かった。ここよりは少し安全だな」

蛇谷は部屋の隅に置いてあった89式小銃を取った。

「予備の弾倉は？」

「机の上に」

蛇谷は9mm拳銃を信二と真人に渡した。

「まともには使えないと思うが念のためだ」

2人に2つずつ予備の弾倉を渡した。

「真希は無線を持ってくれ」

蛇谷は真希に無線機を渡した。

真希は包丁を持った。

「それじゃ、いくぞ」

蛇谷は先頭に立ち、家から出た。

「大丈夫だ、行こう」

信二は蛇谷の見事なステルス行動に感心した。さすがは元自衛隊なだけある。

蛇谷は小銃を構えながら歩いていた。

無線機から音声が聞こえた。

『全狙撃手は狙撃地点に着きました。狙撃対象は？』

『赤目の奴らだ。外に出てる赤目は撃て。テレビやラジオで外出禁

止令を出した。外出している奴は少ないだろ』

『了解』

蛇谷は壁には張り付いた。

「壁に張り付きながら、姿勢を低くしろ」

蛇谷はほとんど音を立てずに歩いた。信二たちも姿勢を低くしながら歩いた。

「待て！」

蛇谷は4階建ての建物の屋上に指を刺した。

「あそこに狙撃手が居る」

そういいながら、信二たちを誰かの家の塀の入り口に入れさせた。

「そこに隠れてろ」

そう言って、蛇谷も塀の入り口に隠れ、小銃を構えた。

信二は顔を出して様子を見た。

1人の男が歩いていった。

目は普通だ。非感染者だな！

「先生、一般市民です」

「分かっているが、大声を出すとこちらの位置を悟られる」

男が歩いていると、銃声が鳴り響いた。男の頭が撃ち抜かれた。

「くそ！感染者と間違いやがったな！」

また銃声が鳴り響いた。今度は蛇谷たちの隠れている塀に当たった。

「くそ！あいつ感染者と非感染者の見分けが付かないのか？」

蛇谷は白旗を出し、塀から出して振った。

2発の銃声が鳴り響き、塀の当たった。

「どうやら、あいつ見分けなんて始めからしてないようだな。相沢、あいつ今何発撃った？」

「たぶん、4発」

「よし」

蛇谷はまた白旗を出した。銃声が鳴り響いた。

蛇谷はすかさず小銃を構え、狙いを定めて1発撃った。

「双眼鏡あるか？」

信二は双眼鏡を渡した。

蛇谷は双眼鏡で確認した。

「死んだぞ、安全だ」

信二は一安心した。真人は小声で怒鳴った。「殺したんですか!」

「障害になるからだ」

「だからって」

「正当防衛だ。それにあいつだって人を殺した」

真人はそれ以上言わなかった。

「もうすぐ学校に着くぞ」

信二たちの通う学校が見えてきた。

よく見ると、1階の窓ガラス部分が板で打ち付けられていた。

「窓が木の板で塞がってるな」

「玄関は?」

「玄関の窓部分も板で塞がってる」

信二たちは玄関に近づいた。

「おや?開いてるな」

信二たちは玄関から校内に入った。

すると、バッド、ラケット、包丁などを構えた生徒、職員が信二たちを囲んだ。

「これって、外の方が安全ジャン」真希がさりげなく呟いた。

紀子が来た。

「彼らは大丈夫よ」

全員、武器を下ろした。

真人が近づいた。「お前がリーダーか?」

「まあ、実質的にはね」

蛇谷が聞いた。「ここを要塞にしているのか?」

「ええ。トイレもあるし、レトルト食品もあるし、非常用食料もあるし、水もあるし」

レトルト食品と非常用食料はまとめて食料って言え。信二はそう思

った。

「ここは安全よ」

信二たちは2階の自分たちの教室に入った。
クラスメート全員居た。尾田を除いて……

「尾田君は？」

「…殺された…感染者として…」

信二は同情はしたが、自業自得だと思った。

真人と紀子は第1校長室に向かった。

ドアをノックした。

「合言葉は？」中から声が聞こえた。

「猫耳最高」

ドアが開いた。

中には狐狩りの幹部メンバーが居た。

「何のようだ？」液田井……ではなく総督が聞いた。

「暇だから来たのよ」

真人はメンバーの装備を見た。

総督は無装備だな。いや、よく見れば棘付きメリケンサックを付けている。

雑賀は大鎌を持っていた。

蛸田は斧を持っている。

須田は弓矢を装備している。

鳥山は巨大な丸太を装備している。

猫野は本物の回転式拳銃だ。

「マジで怖い集団だな」

真人はそう言った。

メリケンサックは分かるが、斧、大鎌、弓矢、拳銃はすごすぎる！

「狐狩りの全勢力をここに集結させたから安全だ」総督は断言した。

「変質者など我々の敵ではない」雑賀はガスマスクの呼吸音交じりで言った。

「私の弓の腕はスナイパー並みだよ」須田は自信ありげに言った。
「私たちのところに居れば安全だ」蛸田が言った。

「はっはっは！まさに特殊部隊だ！」鳥山がそう言った。

「くくく・・・私が一番助かるけどね」猫野が言った。

確かに校長室に居れば安全かもな。そういえば、校長室の前で大勢の不良集団が金属バットやメリケンサックやハリセンなどを持って警備してたな。

「友人たちを連れてここに来るといい」総督は言った。

「大事なお客さんだからね」須田は惑わすような声で言った。

「はっはっは！まさに用心棒」鳥山は笑いながら言った。

「くくく・・・どう痛めつけてやろうか？」猫田は論外。

真人は友人たちを連れて行くことにした。

こいつら、案外良い奴らだな。

信二は立花の隣に座った。立花は血まみれの鎌を持っていた。

「殺したのか？」

「うん」立花は悲しげに言った。

当然だよな。感染者とはいえ、人を殺したからな。しかも前の事件で友人を殺したからな・・・

信二は立花が十字架のネックレスをつけていることを気づいた。

「それ、絃輝のか？」

「・・・ええ・・・」

「唯一の形見か」

「・・・ええ・・・」

絃輝・・・彼を思い出した瞬間、2人は悲しみが込み上げた。

信二の友人たちの中でも感染者と勇敢に戦い、感染者になった男。そして、立花の手で殺された男。

「あいつの話題はやめよう」

「いいの。彼は私を何度も救ってくれたから」

「でも悲しくなるだろ？」

「・・・うん・・・」

信二は頭を撫でた。

「あいつの唯一の形見は大事にしろ」

「・・・うん・・・」

信二は立ち去った。

すると、2人の中学生の兄と小学5年生くらい妹が階段で話していた。

「兄ちゃんが守ってやるからな」

「でも・・・」

「大丈夫だ」

真希と蛇谷がやって来た。

「どうしたの？」

妹が真希に言った。「兄ちゃんが怪我してるの」

「どんな怪我」

「お父さんに肩を噛まれたの」

信二が驚いた。「お父さんはどうやって噛んだ？」

「わめきながら」

信二はゆっくり座った。言いたくないが、仕方がない。

「お兄さん、残念ですが、あなたは感染してます」

兄が驚いた。「一体何に？」

「人を狂暴化させるウイルスに」

「嘘よ！嘘よ！」妹が兄に抱きついた。

「発症したら、俺は父さんみたいに人を襲うのか」

「残念ですが・・・」

「嘘よ！」

妹は泣き始めた。

兄は眼から涙を流した。「もし俺が死ねば、妹は家族を全員失う」

兄は信二を見た。

「感染は確実か？」

真希は否定した。「確実のはずじゃない」

「いや、确实だ」

信二は半ば同情していた。

「感染した人は短期間で発症して、親しかった友人や家族を襲う。嘔むだけで感染する」

兄は妹の頭を撫でた。

「これが現実です」

兄は信二を見た。

「妹を頼む」

「お兄ちゃんの嘘つき!」

妹はどこかへ走り去った。

真希は妹を追いかけた。

兄は泣き出した。だが、すぐに泣き止んだ。

「人生は・・・死ぬその瞬間まで・・・愛しい」

信二はうなずいた。

「ろくな成果を出せずにこの世に去るのか・・・」

信二はうなずいた。

「生きることは・・・素晴らしい・・・そう思わないか?」

信二は黙ってうなずいた。

「妹を守ってくれ」

そして兄は下を向いた。

蛇谷は信二をどこかへ向かわせた。

「名前は?」

兄は答えなかった。

顔を上げた瞬間、兄の眼は真っ赤に染まっていた。

「許せよ」

蛇谷は小銃を構えた。

兄が奇声を発しながら蛇谷に向かって走った。

1発の銃声が鳴り響いた――――

選別不能（前書き）

【追加登場人物】

相沢信也

信二、信一、茜の実の父親。陸上自衛隊に入隊しており、階級は陸将。冷静冷酷。

織邨直人
おりむらなおと

陸上自衛隊天才狙撃手。階級は1等陸曹。

山根冬樹
やまねふゆき

陸上自衛隊ヘリコプターパイロット。専用ヘリはニンジャ。

選別不能

織邨直人は、20階建てマンションの屋上から対人狙撃銃レミトンM24SWSのライフルスコップで地上を覗いていた。

『まったく、つまらない戦闘だぜ』

同僚の声が無線から流れた。

「かったるい訓練よりましだろ？」

直人はそう返事した。

『けどよ、ずっと狙撃銃で地上を見張っていると、訓練の方がましに思えてくる』

いつもは、訓練よりじつとしてるほうがいいって言ってるのにな……

「そんなに敵がほしいなら、俺の場所の正面にあるマンション13階の一番端の部屋を見ろよ」

しばらく沈黙が続く。

『あのデブオナニーしてやがる！』

無線から同僚の声が響いた。

すると、別の同僚の声が流れた。『マジかよ、俺達が汗流して皆から狂暴な男達から街を守ってるのにね』

また別の声。『なら、あのデブの1発撃ちこみましょうか？』

「よせよ、裁判所に送られるぞ」

『心配しないでください先輩。凄腕弁護士を雇いますから』

『そんな金あるのかよ？』

『おい皆、また外出している奴が居る』

『どこだ？』

『直人のマンションから見て、12時の方向の駐車所に止めてある車に隠れている』

直人は面倒くさそうに見た。確かに男が居た。

「本当だな」

『ちゃんとテレビとラジオで外出禁止令を出したから、あいつは感

染者だな』

『直人、お前の獲物だ。手柄は譲るよ』

直人はスコープで外出者の顔を見た。普通の顔だ。

「あいつは感染者じゃない。撃ったら裁判所行きだ」

『マジかよ！未感染者かよ！つまんね〜な！』

『お前は人を殺したいのか？』

『先輩、悪趣味ですね』

『うるせー！！』

直人は呆れて笑った。

「1発脅してみるか？」

『おう、やってくれ』

直人は1発撃った。銃弾は男の足元のコンクリートに当たった。

男は一目散にどこかへ逃げた。

『ははは！あいつだせ〜』

『確かに今の逃げる姿は傑作だな』

『吹いてしまいました』

すると、また別の声が聞こえた。

『よう、直人。お前が良く見えるぜ』

「山根か！今どこだ？」

『上を見ろ』

上空を見ると、UH-60JA愛称ブラックホークが飛んでいた。

「お前の愛車は今日も元気だな」

『ああ、このプロペラが人を切り裂きたいって俺に泣き叫んでるぜ』

『こえ〜』

『てか、どうやって引き裂くんのだ？』

『やろうと思えば出来るんじゃないですか？』

直人は苦笑いした。だは、さっきから不思議に思うのだが、なぜ、ずっとこの地区は沈黙を守っているのだ？不気味なくらい静かだ。

『そういえば……』

「どうした、山根？」

『大勢の市民がどこかの小学校の体育館に逃げ込んだってな』

「今は関係なし」

直人は狙撃銃で正面のマンションの一部屋一部屋を覗いた。

この部屋は留守かな？

お、隣の部屋は若い男女が熱い性交をしてるな。

隣は勉強中。

その隣は着替えている。スカートを脱ぎ、下着姿だ。ブラジャーをはずそうとしてる。早く！早く！

だが、直人は覗くをやめた。かわいそうだ。そっとしておこう・・・すると、無線から焦った同僚の声が聞こえた。

『おい皆！大勢の市民が走ってくる！』

同僚の言うとおりに、大勢の市民が無茶苦茶に逃げていた。

よく見ると、血まみれの市民も何人か居た。

『みんな聞け！市民が避難していたどこかの体育館で感染者が出てきたらしい！』

無線から、司令部の男の声が流れた。

『全狙撃手に告ぐ！真紅計画第2段階実行だ！感染者のみを狙撃しろ！非感染者や味方は撃つな！』

直人は狙撃銃を構えた。

大勢の市民の中から、目の赤い市民を見つけた。そして、狙いを定め、引き金を引いた。

銃声が響くと共に、感染者の頭部から血と肉片が飛び散った。

「1人射殺」

他の狙撃手も銃撃を開始した。

『2名殺した！』

『こっちは3人だ！』

『4名射殺』

『まだまだ獲物は沢山居るぜ！』

『いいから撃て！』

直人は2人目の感染者を見つけた。そして撃ち殺した。

「2人射殺」

『5名射殺!』

『先輩! あなたは未感染者を撃ったんですよ!』

銃声が少なくなってきた。

『くそ! どれが感染者か分からない!』

『早く撃て! 感染者が増えてるぞ!』

大勢の狙撃手は撃ちまくった。だが、撃たれた市民の中には、未感染者が紛れていた……

作戦司令部にて信也は狙撃手の会話を聞いていた。

『誰が感染者だ!』

『市民が多すぎる!』

『駄目だ! 狙いが定まらない!』

司令部のモニターに、街中の監視カメラの映像が流れてきた。

映像には、逃げ惑う人々と感染者が映っていたが、どれが感染者か見分けが付かなかった。

「全狙撃手、なぜ発砲しない?」

『どれが感染者か分かりません!』

選別が困難になっているのか……なら、こういうときのための措置は1つ……

信也は口を開いた。

「総員に通達せよ、目標の選別を中止。地上の全市民が目標だ」

現地隊員に指示を出す自衛官が戸惑った。「それって、あの――」

信也は冷静な声で言った。「もう1度言う。選別中止。全市民を射殺せよ」

「それって、あの――」

「もう1度言う。選別中止。全市民を射殺せよ」

「それって、あの――」

「早くしろ!」

「り、了解!」

自衛官はマイクを握った。
信也はその様子に満足した。

『全狙撃手に通達。目標の選別を中止、地上レベルの全市民を射殺せよ』

直人は耳を疑った。選別中止って、まさか・・・

「もう1度お願いします」

『繰り返す！地上の全市民が目標だ！例外はなしだ！繰り返す！例外はなしだ！』

「それって無差別発砲じゃないか！！」

直人は狙撃銃を構えた。俺は目標を選別する！

だが、市民が多すぎて、感染者が見つからなかった。

同僚の声が無線から流れた。

『直人！なぜ撃たない！無差別発砲しろと命令されたろ！？』

「俺達は自衛隊だ！軍隊じゃない！」

『甘ったれるな！こっちの命が危ない！』

直人を除く全狙撃手が発砲を始めた。

直人は感染者を発見した。

「見つけたぜ」

感染者を射殺した。

逃げ惑う女性が見えた。何してる？早く逃げろ！そう心の中で叫んだ。

だが、女性の後頭部から血が噴出した。

直人は驚いた。

何してるんだ！彼女は感染者じゃないんだぞ！

よく見ると、感染者、非感染者関係なく、次々と人が撃たれている。直人はスコープで感染者を探した。

すると、1人の幼女が見えた。制服を着ているから幼稚園児だな。

幼女は自分の家族を探しているかのように彷徨っていた。

幼女めがけて感染者2人が走っていた。

危ない！そう思った直人は反射的に引き金を引いた。1人死んだ。もう1人も即座に射殺した。

直人は狙撃銃で幼女を探した。

「居た！」

幼女を発見した。

と同時に幼女の頭が撃ちぬかれた。

直人は思わずスコップから目を離した。

地上では、銃声と共に次々と市民が射殺されていた。

まるで戦争のように・・・

『本部！本部！俺は弾薬が尽きそうだ！』

『弾丸が持たない！』

『市民が多すぎる！』

『了解、GH-47J/JAを飛ばす。撤退の準備をしろ』

撤退用のチヌークが来るって？

数分しないうちに6機のチヌークが飛んできた。

『こちらチヌークパイロット。着陸の場所を確保してほしい』

『了解、では広場の感染者を射殺する』

銃声と共に、マンションとマンションの間にある広場の市民が射殺されていた。

『こちらチヌーク。着陸する』

チヌークは着陸し後ろのハッチが開いた。

狙撃手達が次々とチヌークに乗り込んだ。

『これで全員か？』

『まだ1人足りない』

『直人！返事しろ！直人！』

直人はあえて返信ボタンを押さなかった。

『まずい！市民の軍勢が来る！離陸しろ！』

チヌークは離陸し、上空へと飛んだ。

真人は、目の前に広がる死体の山を見て絶句していた。

「畜生！何が自衛隊だ！そこの軍隊と変わらないじゃないか！こ

こが本当に日本か!!」

すると、1人の少女が目に入った。白いワンピース姿の少女。何かを求めるかのように走っていた。

「……美人だな……」

真人は屋上から1階に降りようと、エレベーターに乗った。

まだ生存者は大勢居るはずだ。彼らを見殺しには出来ない。

そう思って、彼は生存者を求めて1階を押した。

「負傷死者は？」信也は自衛官に尋ねた。

「行方不明者が1人」

「誰か分かるか？」

「織邨直人1等陸曹です」

信也は少し失望した。彼はかなりの天才狙撃手だ。彼を失ったことは大きい。

「まあいい。真紅計画第3段階実行の準備をしろ」

老婆

信二は玄関を開けようとした。

「どこへ行くの？」

立花がいつの間にか後ろに居た。

「……病院：だけど？」

「じゃあ、私も行く」

信二は驚いた。

「危ないぜ、外は感染者だらけだ」

「感染者なら、嫌ってほど会ったから」

信二は困った。こいつは案外頑固だからな。

「よ、お二人さん」

2人は声の主を見た。真人だった。

「2人でどこへ行くんだ？」

「病院」

「丁度いい、実は俺達も病院へ行く必要があるんだ」

信二は驚いた。

「どういう意味だ？」

「実はクラスメートの何人かが高熱を出して。この学校の保健室には薬がないからね」
なるほどね。

「なら、俺が行くついでにとってきますよ」

「1人じゃ危険だ。1人より2人。2人より3人の方が心強い」

「でも……」

「大丈夫だ。足手まといにはならない」

信二は立花を見た。

「どう思う？」

「彼の言い分にも一理あるわ」

信二は決心した。

「分かりました。けど、僕は足手まといだと思ったら捨てますから」
「上等だ」

3人は玄関を出て、校門を通った。
外は驚くほど沈黙を守っている。

「静かだな」信二はつぶやいた。

「感染者が全員殺されたのかしら？」

「あるいは狙撃手が全員死んだか」

信二は歩き始めた。

「どこの病院に行くんだよ？」

「黙って付いて来い」

2人は信二に付いていった。

それにしても本当に静かだ。嵐の前の静けさか？
だが、沈黙を破る声が聞こえた。

この声は老婆か？

信二は、声のする方向を向いた。

1人の老婆が、自宅の玄関の前をほおきで掃いていた。

「幸せはく歩いてこない♪だくから、歩いてゆくんだね♪」

信二は信じられなかった。この老婆正気か？

「2人との隠れてろ」

2人は近くに停車していたワゴン車と壁の間に隠れた。

信二は老婆に近づいた。

「おばあさん、何してるんですか？」

「何って、見てのとおり掃除だよ！」老婆は大声で怒鳴った。

「おばあさん落ち着いて！大きな声を出さないで！」

「うるさい！掃除の邪魔をするな！」

老婆は、ほうきで信二を叩いた。

「おばさんやめて！」

その時、恐ろしい奇声が聞こえた。

信二は奇声のする方向を向いた。

感染者7人が奇声を発しながら走ってきた。

信二は玄関のドアが開いていることに気づいた。

「2人とも！来い！」

2人は玄関から老婆の家に入った。

信二もドアの前に立った。

「おばあさん！早く入って！」

老婆は鼻歌しながらほうきを掃いた。信二は老婆を連れ込もうとしたが、もう目の前まで来ていた。

信二はすぐに玄関のドアを閉めた。そして、覗き穴で外の様子を見た。

感染者が老婆を取り囲んで殴る、蹴るなどの暴行をしていた。

「あんた達！何様のつもりだい？やめなさい！やめて！やめておくれ！」

倒れこんだ老婆をまだ感染者は蹴っていた。

そして、1人の感染者が老婆に乗っかり、首筋を噛み付いた。

老婆は絶叫を上げた。

感染者達はドアを向いて、体当たりを始めた。

信二はドアの鍵を閉め、チェーンをかけた。

階段を駆け上がり、2階の部屋に入った。

部屋には2人が居た。

信二は部屋のドアを閉めて、鍵を閉めた。

「信二君どうしたの！？」

「感染者だ！」

「数は？」

「7人」

信二は、ドアの横に棚があることを気づいた。タンスを倒し、ドアのバリケードにした。

何分経っただろうか・・・

玄関を叩く音が聞こえなくなった。

「あきらめて帰ってくれたかな？」

信二は、タンスをドアから退け、廊下に出た。

「もう安全だ」

2人はほっとした。

信二は、部屋の横にもう1つ部屋があることに気づいた。その部屋のドアを開けてみた。

部屋の真ん中に、少年が椅子に縛られていた。

「大丈夫か！」

信二が駆け寄ってみると、少年が顔を上げた。目は赤かった。

少年の足元に、ノートが落ちていた。

小学2年生。俺より年下じゃないか。

少年は奇声を発した。

なるほど、状況が読めた。こいつは、あの婆さんの孫か何かで、孫が感染したことで、発狂したんだ。

信二は、静かに部屋を出て、ドアを閉めた。

2人は、庭の物置に居た。

「すげーな、これ」真人はナタを出した。

立花は、アイスピックを取り出した。

信二が、物置に着いた。物置の中には、斧や鋤などがあった。

信二は斧だけをもらった。

立花は、リュックに缶詰などの食料を詰めていた。

信二は、包丁をベルトに挟んだ。「じゃあ、そろそろ行くぞ」

そう言って玄関に出た。玄関前では、老婆が首から大量の血を流して死んでいた。

真人と立花が後から出てきた。

「じゃあ、行こうぜ」真人は陽気言った。

緊張感のない奴だな。頼りになるだろうか？

信二達は、目的地である病院に着いた。

「不思議だな」

「何が？」

「ここまで来るのに感染者と一回と出会わなかった」

「運が良いな」

「そういう問題かな？」

信二は2人を向いた。「じゃあ、2人は薬を集めて」

「あなたは？」

「病院内を探索してくる」

信二はそう言って、個室棟に向かった。

そして、ある病室に入った。

病室内には誰も居なかった。

「やっぱりな」

信二はそう言って、病室を出ようとした。だが、物音がした。

信二は振り向いた。ベッドの下から何かが這い出てきた。

「お兄ちゃん！」

茜だった。

「茜！」

信二は茜をベッドに寝かせた。

「どうしてまだここに？」

「変な兵隊さんが皆を連れて行くから、怖くなってベッドの下に隠れたの」

安心するべきだか、しないべきだか？

「歩けるか？」

茜は立ち上がろうとしたが、すぐに倒れた。

「いつもベッドに寝てたからな」

信二は、茜を抱きかかえた。廊下を出ると、車椅子が丁度目の前にあった。

「こいつはありがたい」

「うん」

信二は茜を車椅子に座らせた。

「じゃあ、行くぞ」

そう言って車椅子を押した。

しかし、自衛隊の連行に逃れたことで安否の確認が出来たのは安心できたが、危険極まりない街に残されたことで余計心配だな。複雑な気分だ。

2人がやって来た。

「信二、そいつ誰だ？」

「俺の妹だ」

「これが、病院に行きたがっていた理由ね」

「相沢茜です。よろしくお願いします」

茜は礼儀正しく挨拶した。

「自己紹介する状況じゃないが、俺は安藤真人」

「立花裕香、よろしくね」

「じゃあ、学校に――」

信二が言い終える前に、何か鉄のような物を引きずる音がした。

廊下の奥からだ。

音が段々近づいてくる。

3人は武器を構えた。

音の正体が現した。

つるはしだった。つるはしを持った少年・・・と思う人物が信二達に近寄った。

夏用のポールシャツを着て、黒い制服のズボンを履き、頭を包帯で肌を露出しないくらいに巻いていた。

「何だよ……あいつ」真人はつぶやいた。

つるはしを持った少年が、人間か感染者か分からない中途半端な奇声を上げながら、信二達に向かって走った。

発狂者

包帯で顔を隠した少年が、つるはしを振り回しながら、信二達に走っていった。感染者なのか、未感染者なのか判断が出来ない中途半端な奇声を発しながら。

信二は斧を構えた。

「逃げる！！」信二は叫んだ。

と、同時に少年はつるはしを横向きに振り回した。信二は反射的に頭を下げた。

つるはしの先が信二の髪の毛をかすった。

が、少年は右足で信二を蹴り上げた。

信二は倒れてしまった。そして、つるはしを振り上げた。

まずい！信二は心の中で叫んだ。

真人が、少年を羽交い締めで抑えた。

「畜生！お前は感染者なのか！？」

真人は叫んだ。どうやら感染者なのか分からないようだ。

少年は後頭部で真人の顔を頭突きした。

真人は怯み、少年を解放してしまった。

少年はつるはしを無茶苦茶に振り回した。

「危なっ！」真人は避けた。

「くそ！持たない！」もう駄目だ！おしまいだ！

そう思った瞬間、少年が突然倒れた。

よく見ると、右脚に鎌が刺さっていた。

「早く逃げて！」立花が少年の脚に投げたのだ。

信二と真人は走り出した。立花は茜の車椅子を押しながら走った。

「エレベーターだ！乗ろう！」信二はエレベーターのボタンを押し、

扉が開いた。

全員エレベーターに乗り込んだことを確認すると、すぐに1階を押した。

扉が閉まり、全員、一安心した。

「しかし、あいつは感染者だったのか？」真人は信二に尋ねた。

「分からない。中途半端な奇声だったから」

「でも、暴れるだけの無能には見えなかったな」

「これから彼をどう呼ぶの？」立花はそう言った。

真人は悩んだ。「うーん、いつそ、半端野郎ってのは？」

「包帯男」茜がさり気なく言った。

信二は意見をまとめた。「分かった。あいつを感染者じゃないことを前提して、妨害者と呼ぼう」

エレベーターの扉が開いた。

信二達は病院から出ようとした。

が、病院入り口のシャッターが閉まっていた。

「これからどうする？」

「裏口があるはずだから、そこから出よう」

信二達は裏口に出ようと振り向いた瞬間、立花の頭に何か横切った。さっき立花が投げた鎌だった。

信二達の目の前に、妨害者が居た。

「くそ！あいつの横を走れ！」信二は叫ぶと同時に、斧で妨害者の頭を割ろうとした。

妨害者はつるはしで、それを防いだ。真人はその隙に、妨害者の横腹をナタで切ろうとした。

妨害者は素手でナタの刃を握り、受け止めた。

立花は、茜の車椅子を押して、妨害者の横を通ろうとした。

妨害者は、車椅子を蹴った。

茜が車椅子から落ちた。

「茜！」

信二は茜のもとに駆け寄ろうとしたが、妨害者はつるはしで信二の足を引っ掛けた。

信二は倒れてしまった。

真人はナタで足を切ろうとした。だが、また刃を握られて失敗した。

立花は茜を車椅子に座らせて、再び押した。

信二の後に続いた。真人は妨害者の頭を右手で1発殴りつけた。妨害者は倒れこんだ。

信二達は、受付を飛び越えて、職員たちの待機室に入った。

そして、裏口が見えた。

「やった！」

信二がそう言って裏口を空けた瞬間、白衣を着た男性感染者が信二に掴み掛かった。

「畜生！」信二は感染者の腹を力いっぱい蹴りつけた。

感染者は外に飛ばされた。信二は裏口を閉め、鍵を掛けた。

来た道を引き返そうとしたが、妨害者が走ってきた。信二は待機室の扉を閉めた。

妨害者は木造の扉をつるはしで壊し始めた。

「どうするの！？」立花は信二に聞いた。

「立花は茜を頼む。真人」信二と真人は、武器を構えて女子2人の前に立った。

妨害者は扉を破壊し、室内に入った。

同時に感染者も裏口の鍵を壊し、室内に入った。

感染者は、信二達ではなく、妨害者に向かって恐ろしい奇声を発しながら走った。

妨害者は感染者の右足をつるはしで刺した。

感染者は一瞬怯んだが、妨害者のつるはしを奪い、投げ捨て、掴み掛かった。

妨害者も感染者に掴み掛かった。

あいつは感染者じゃなかったのか！信二は瞬時に理解した。

信二は感染者が破壊した裏口から外に出ようとした。

だが、複数の感染者が外に待機していた。

信二は裏口では脱出できないと判断し、来た道を引き返した。

感染者と妨害者が、まだ掴み合いをしていた。

信二達は、またホールに出た。出入り口では、やはりシャッターが

閉まっていた。

見渡すと、階段も防災シャッターが降りていて、通行不可能だ。馬鹿な！来た時には下げってなかったのに！

感染者達が院内に侵入してきた。信二は3人を連れえてエレベーターに乗った。適当にボタンを押し、扉を閉めさせた。

信二は、エレベーターという、聖地に居ることを確認した。

真人は震えていた。「あいつ、感染してなかったのか」

「でも、なぜ私たちを襲ったの？」

「さあな、発狂したんじゃないか？」

発狂……そういえば、あの老婆も発狂していたな。

極限の絶望や失望感で都内で精神がおかしくなった奴らがいるのか？

発狂者達、いかれたもの達、つまり、あの少年も発狂者達の1人で、

殺人鬼になってしまったのか？なら、都内にはもっと発狂者達が居るはずだ。厄介だな……

「で、どうする？1階は感染者に制圧されたぞ？」

「非常階段を使う」信二の答えは早かった。

「なるほどね」

エレベーターの扉が開いた。

「よし、さっさとこの糞忌々しい病院から出よう」

亜矢子（前書き）

これまでの発狂者^{クレイジーズ}

老婆

孫が感染したことで発狂。感染者に殺害される。

妨害者

正体不明の殺人鬼少年。顔を包帯で隠し、つるはしで信二達を殺そうとしたが、感染者に襲われ、生死不明。

亜矢子

「畜生！暗いな！」

信二達は、5階の廊下に居た。懐中電灯がなければ、進めない暗さだ。それに殺風景だ。幸い、信二達は懐中電灯を持参していた。茜には、廊下にあった非常用懐中電灯を渡した。

いくつもの病室の扉が閉まっていた。どれも、窓部分に鉄格子が取り付けられていて、まるで重大犯罪者が閉じ込められているようだ。

ここは明らかに危険な患者と閉じ込めるための階だった。

狭い廊下だったが、エレベーターのすぐ横に、オフィスと書かれた部屋があった。

中は意外に広く、大量の資料が散らばっていた。

机の上には、パソコンが置いてあり、画面には1部屋1部屋の映像が映っていた。

部屋の中心にあるテーブルに1つのファイルが置いてあった。

立花はファイルを取った。

「読んでくれ」

立花はファイルを読み始めた。

おにつかあやこ

「鬼塚亜矢子12歳。心臓を患ったため緊急入院。心臓移植後、症状は良くなっていたが、人形などの破壊行為、他者をおもちやと見なす精神、他者を傷つけることに喜びを感じる等、精神的に問題が発生、緊急隔離の措置を取った。なお、15歳未満の入院患者を見せたところ、3人の少女を気に入った。1人目は足立良子、壊し甲斐ある、2人目は小野翼、彼は脳に障害を持ってるため、彼のリアクションが受けるなどの問題発言した。3人目は相沢茜、先の2人と違い、彼女との面識はないと判明。気に入った理由は、一目惚れだと。彼女の精神は完全にサイコパス化しており、精神治療を受ける必要がある。なお、彼女の父親は暴走族だと判明、彼女の異常

な性格が家庭環境に原因があると思われる」

信二は聞き終えた瞬間、一瞬恐怖に襲われた。俺の妹に一目惚れだと!?!? ふざけた患者だな。

ふと、信二は全員の顔を見た。

「茜はどうした?」

いつの間にか、茜が居なくなっていた。

「そういえばいない」

「どこへ行ったのかしら?」

まさか……な……いや、もしかして――――

茜は目を覚ました。そこは、見知らぬ部屋だった。学校の教室くらの広さはあったが、天井には傷だらけのマネキンや人形がぶら下がっていた。

「目、覚めた?」

茜はベッドに寝かされており、ベッドの横に、見知らぬ少女が座っていた。

肌は白く、髪は長く生えており、顔は少女らしい可愛らしさがあった。声も幼い甘えん坊らしい声だった。ただ、唯一おかしい所といえば、目が猫のように黄色だった。ピンク色のワンピースを着ていた。

「ふふふ、実際に見ると可愛い子ね、うん」からかうような口調で言った。

茜は恐怖よりも不思議さを感じた。この少女から人間らしい生気が感じられなかった。

「あなたは誰?」

「あたし? そう……あなたはあたしを知らないのね。でも、あたしはあなたを知ってる」

「会ったこともないのに?」

「あいざわあかね、それがあなたの名前でしょ?」

茜は驚いた。と言うより喜んだ。

「すごい！よく知ってるね。私、病室からあまり出たことないのに！どうやって分かったの？」

「ふふふ、ひ・み・つ」

茜ははっと思い出した。

「私、どうしてここにいるの？」

「あたしが連れてきたの」

茜は驚いた。と言うより不思議に思った。

「どうやって？」

「あなただけ廊下にいたから、後ろから、睡眠薬を染み込ませたハシカチを口につけて眠らせたの」

「睡眠薬？」

「眠れる薬のこと」

少女は、薬の入ったビンを見せた。

「そういえば、あなたの名前は？」

「亜矢子」

「苗字は？」

「教えたくない」

茜は首を傾げた。「なんで？」

「だって、苗字を馬鹿にされたことがあるから」

「私は馬鹿にしない」

「本当に？」

「うん」

「約束する？」

「うん」

「あたしの苗字は鬼塚」

「おにつか？どこがおかしいの？」

「鬼塚の鬼は、桃太郎に出てくる鬼と同じだって言われた」

「血から強そうでいいじゃん」

亜矢子はくすくす笑った。

「やっぱり、思ったとおりの性格ね」

「何が？」

その瞬間、マネキンのひとつが動いた。

「ちよっと黙らせてくる」

亜矢子は鋏はさみを持って、マネキンの所へ行った。茜は動いたマネキンを良く見た。その時は、冗談抜きで驚いた。動いたのはマネキンではなく、裸の若い女性だった。女性は、両手を縄で縛り付けられていて、宙吊り状態だった。全身に沢山切り傷があり、どれも痛々しいものだ。

他にも3人、若い女性が両腕を縛られ、宙吊り状態になっていた。

「その人たちは？」

「あたしをいじめてた看護婦。ちよっと懲らしめてるの」

亜矢子は、鋏で、若い女性の右乳首を切り落とした。女性は、絶叫を上げた。だが、口をガムテープで塞がれているため、声はあまり出なかった。

茜は自分の右胸を両腕で抑えた。「なんで看護婦さんをいじめるの？」

「あたしをいじめた仕返し。正直見てて気持ちいいのよね」

亜矢子は、鋏で椅子に縛られている看護婦の喉に突きつけた。

「やめて!!」茜は思わず叫んだ。

亜矢子は不思議そうに茜を見た。亜矢子にとって、殺しを静止させた茜がおかしくて仕方がないのだろう。「なぜ？赤の他人でしょう？」

「でも、でも、人殺しは良くない、と思う」

「あのね、今は人々が次々と殺人鬼に変貌してるの。この人達だってそうなるかも。そうなる前に殺す、いわゆる、正当防衛って奴よ」

「せいとうぼうえい？」

「相手が殺しに掛かって来る時、自分の身を守るために殺すことよ」
亜矢子は、鋏の刃で、椅子に縛り付けている看護婦の首を切り裂いた。首の皮が引き裂かれ、筋肉が露出した。

「うーん、まだまだね」

亜矢子は深く首を切り裂いた。首から大量の血が噴出した。

茜は吐き気に襲われた。動脈を切られた看護婦は約3秒で意識がなくなった。

「人の体は不便よね。動脈を切ったら3秒で意識がなくなるんだから」

亜矢子は、水道に行き、鋏に付いた血を洗い流した。そして、茜の方向を見た。

「あかねちゃん、一緒に遊ぼう。おもちゃで遊ぶ？」

茜は顔を覆い隠しながら聞いた。「おもちゃ？」

「看護婦のことよ」

茜は怒りと恐怖に支配された。「人をおもちゃにするなんて！あなたは、えっと〜悪魔よ！」

亜矢子は微笑んだ。「お父さんが言ってたよ。人間の本質は悪魔と変わりないって」

そして、鋏を力一杯握った。

「なら、鬼ごっこしよう。あたしが鬼ね」

亜矢子は目を瞑った。

「い〜ち、に〜い、さ〜——」

茜は危機感を感じてベッドから立ち上がろうとした。だが、長い間ベッドの上で寝ていたため、歩く感覚を忘れていた。茜は立つこと出来ず、床を這いずりながら出口を目指した。

「よ〜ん、ご〜お、30秒数えるよ？」

茜は手を思いっきり伸ばし、ドアノブを捻ってドアを開けた。ドアを開けた先には、学校の理科室のような風景が広がっていた。沢山の縦長テーブルが並んでおり、テーブルの上には薬品が入った試験管がずらりと並んでいた。

「にじゅう！にじゅういち！にじゅうに！——」

茜は残り時間で部屋から出ることは不可能と判断し、近くのテーブルの下に隠れた。

「30！もういいかい？」

答えたらこちらの位置を悟られるため、答えなかった。

「じゃあ、いくよ」

茜は両手で口を塞いだ。足音が近づいてくる。

「あかねちゃん、どこ？」

鉄の音が聞こえた。

足音が止まった。

神様お願いします、どうか見つかりませんように！茜は心の底から願った。

亜矢子は再び歩き始めた。

ほっと安心した

そして、理科室の扉が開き、亜矢子が出て行くのを確認した。

茜は、テーブルから出た。

そして、亜矢子が出た出口から廊下に出た。

廊下は暗く、狭かった。

茜は座り込んだ。

早くお兄ちゃん来ないかな？それにしても、この病院は怖いわね。

茜は、廊下の奥から来た。

「あやかちゃんじゃない人こないかな？」

そう願った瞬間、聞き覚えのある音が聞こえた。

何か、硬くて重いものを引きずる音が、廊下の奥からする。

茜は音のする方向を向いた。

音の主が、姿を現した。

妨害者だった。感染者との交戦を逃れ、はるばるこの階に来たのだ。つるはしを持って……

妨害者はつるはしを引きずりながら、茜に近づいた

ドアを閉め、鍵を掛けた。

そして、亜矢子と出会った部屋の戻った。

ここのドアも閉め、鍵を掛けた。
そして、ベッドの下に隠れた。

理科室のドアが壊れるの音を聞いた。

その数十秒後、亜矢子の部屋の扉が壊れ始めた。

神様！仏様！天使様！お兄ちゃん！助けて！

ドアが壊れた。茜は口を塞いだ。

妨害者は室内に入った。

茜の隠れてるベッドを素通りし、宙吊りの看護婦に近づいた。

看護婦達は、悲鳴を上げた。妨害者は、つるはしで、看護婦の1人の腹を刺し、引き裂いた。胃や腸が露出し、大きく裂けた腹から垂れ落ちた。

妨害者は、2人目に近づいた。今度は背骨を砕いた。

3人目は、滅茶苦茶に刺した。

茜は見えないが、音を聞くだけで吐き気に襲われた。

音が止んだ。

もう行ったのかな？

そう思った瞬間、妨害者が、ベッドの下を覗き込んだ。

茜は思わず悲鳴を上げた。

妨害者は、腕を伸ばしてきた。

茜は奥に詰めたが、とうとう、妨害者に腕をつかまれた。

そして、引っ張り出された。

茜は、短い人生の終わりを悟った。

亜矢子（後書き）

【追加登場人物】

おにつかあやこ
鬼塚亜矢子

職員から問題視されていた少女。性格は残酷かつ攻撃的。精神異常サイコパ者であって、発狂者ではない。

真紅計画第3段階（前書き）

【追加登場人物】

石倉洋いしくらよう

陸上自衛隊員。まじめで信頼されている。階級は准陸尉。

永田健勝ながたけんしょう

陸上自衛隊員。自由とサッカーを愛する男。階級は陸曹長。

矢倍代音やばいよね

陸上自衛隊員。不幸な男。階級は2等陸曹。

尾崎六祖おぎきろっそ

陸上自衛隊員。平和を愛し、戦争を嫌う。階級は1等陸曹。

真紅計画第3段階

「総員戦闘準備」

石倉は89式小銃の点検をした。装甲弾使用12.7mm重機関銃M2を搭載した軽装甲機動車の後部座席に乗っていた。運転は永田が担当し、助手席には尾崎が座っていた。銃器担当は矢倍が担当した。

石倉達が乗っている機動車は車両隊の先頭に立ち、後ろには8台の新型73式大型トラックが、隊員を乗せて走っていた。上空にはブラックホークが2機、隊員を乗せ、飛んでいた。

「なあ、永田、お前サッカーが好きなんだろう？」

尾崎は銃の点検をしながら質問した。

「そうさ、これからサッカーはなでしこジャパンの時代だ」

永田は興奮気味の声で言った。

「なでしこジャパン？何それ？」

「知らないのか？呆れたな、女子サッカーチームだよ！」

「俺はサッカーに興味がない」

「今からでも遅くはない。なでしこについて教えてやる」

「いいよ、面倒だ」

「遠慮するな」

永田はなでしこについて、情熱的に語り始めた。

石倉は、あまりにも永田の声がうるさく感じた。

「永田、少し静かにしろ」

「いいじゃないですか？こいつのサッカーの考えかたを変えてやつても」

再び情熱的に語った。

本当にサッカーについてはうるさい奴だ。六祖も何でさっカーにつ

いて質問したんだ？やりきれないな。

石倉はイヤホンを耳に付け、音楽を流し始めた。

「やっぱり、『ゼロの調律』はいいな」不意につぶやいた。

矢倍が大声で怒鳴った。

「隊長！1本道の入ります！」

だが、石倉は大音量で音楽を流していたため、聞こえなかった。

「隊長！返事してください！」

六祖はイヤホンをはずした。

「隊長、1本道に入ります」

石倉はやっと話しかけられていたことに気づいた。

「分かった六祖、矢倍、警戒を怠るな」

石倉は音楽を止め、89式小銃をしっかりと握った。

無線機から、存在感のある声が流れた。

「現地派遣部隊に告ぐ、真紅計画第3段階に入る」コードレッド

石倉は返信ボタンを押した。

「了解、第3段階の詳細を教えてください」

「感染者の殲滅だ。実弾使用の許可を出す。現場指揮は石倉、お前に任せる」

「了解、任せてください」

石倉は現場責任者として送られた。この作戦における責任は重要だ。さつきははつきりと任せろと言ったが、石倉は複雑な気持ちだった。感染拡大を防ぐために、感染者を殲滅するため、部隊が派遣されたが、感染者を殺害することは、市民を殺害するのと同じだ。まして、人殺しなどしたことのない隊員が突然ここに送られたのだから、皆不安を感じているだろう。しかも、詳しい情報は与えられず、一体何の感染かさえも分からない隊員が大半を占めている。ただ、ガスマスクを渡され、感染者には噛まれるなどしか言われていない。

「隊長、一体何の感染ですか？」

矢倍は、周囲を見渡しながら質問した。

「狂犬病に似た感染が広まっていると」

永田は笑った。「狂犬病ならぬ狂人病か」

「まあ、そんなところだ」

尾崎は地図を確認していた。

「このまま500m走ると、広い道路に出ます」

尾崎の言ったとおり、500m走っていると、広い道路に出た。

石倉は、無線機で現地派遣部隊全員に連絡した。

「広い道路に出た。気を引き締めろ」

しばらく走っていると、突然永田がブレーキを掛けた。

「どうした！永田！」

「前に障害物がある」

永田の言うとおり、燃えた車が何台もあり、道路を封鎖していた。

「どういうことだ？」

石倉は、疑問に思った。

「総員に通达、戦闘態勢入れ」

そう言った数秒後トラックから大勢の自衛隊員が降り、車両を囲む

ようにそれぞれの配置についた。

矢倍を残して、石倉達も降りた。

「隊長！前方から大勢の市民がこちらに走ってくる！」

1人の陸自隊員が叫んだ。確かに前方から大勢の市民が走ってくる。

石倉が不審に重い、双眼鏡で覗いた。

市民達の目の色は赤かった。

あれが感染者か

「総員射撃準備！！」石倉は怒鳴った。

それを聞いた全自衛隊員が銃を構えた。全員、深呼吸をした。

『こちらブラックホーク1号、隊員を降ろす』

ブラックホーク2機の扉が開いた。そして、ロープが降りた。

『行け、行け、行け』

隊員が1人ずつロープで降り始めた。

1号機が最後の一人を降ろそうとした瞬間、近くにあったビルの屋上から、サラリーマンの格好をした男性が、降りようとした隊員に飛び掛った。

男性は、信じられない飛距離で隊員に抱きついた。

「くそ！やばい！」

隊員はロープから手を離してしまった。そのまま、落ちた。

「くそ！1人負傷した！」石倉は怒鳴りながら、落下した隊員の所に向かった。

隊員の横には、頭が潰れたサラリーマンが倒れていた。

「くそ、動いてない、衛生要員！！」石倉は怒鳴った。

左腕に赤十字標章を付けた隊員が駆け寄った。

「どうしましたか！？」

「負傷した！！」

「殴られたんですか！？」

「いや、落ちた」

「何ですって！？」

「ヘリから落っこちた！！」

衛生要員は、耳を負傷した隊員に口元に近づけた。

「虫の息だ！早く治療しないと、取り返しの付かないことになる！」

石倉は叫んだ。「担架だ！担架を持って来い！」

2人の隊員が担架を持ってきた。

「こいつを車両に乗せろ！」

隊員は負傷した隊員を担架に乗せ、急いでトラックに向かった。

「隊長！市民が近づいています！」

もはや、感染者達は目の色が確認できるくらい近くまで来ていた。

「車体や壁にしろ！」

そう叫んだ。

「撃ち方用意！！」

隊員達は銃を構えた。

「撃ち方始め!!」

そう言った瞬間、一斉に銃声が鳴り響いた。

89式小銃は命中精度ではアメリカ軍正式採用銃のM16には負けるが、反動面ではM16より軽い。

非常に撃ちやすい銃だ。その銃で自衛隊員たちは、1発もはずすことなく、弾丸を次々と感染者に当てた。

「隊長！撃っていいですか！」

矢倍は叫んだ。

「ありったけの弾丸を撃ち込め！」

そう叫んだ瞬間、50口径の機関銃が火を噴いた。装甲弾は元々、車体に穴を開けるための弾であり、対人用ではない。そんな弾丸に撃たれた感染者は、瞬時にして固体から液体に変わった。

石倉は撃ちまくっていたが、弾丸が切れた。その時、鎌が飛んできた。

石倉は軽装甲機動車の後ろに隠れ、鎌を避けた。そして、装填した。よく見ると、見知らぬ隊員が、震えながら隠れていた。

「お前！ここで何してる！」

隊員は震えた声で言った。

「こ、こんなのは、あ、あんまりだ・・・俺に人殺しは出来ない！」

石倉は、フルオートに変えた。

「甘ったれるな！お前は人を殺したくないそうだが、あっちはお前を殺したがつてるぞ!!」

「ど、どうして皆殺し合うんだよ？」

「死にたくないからだ！お前は死にたいか！」

「し、死にたくない・・・！」

「なら撃て！」

「撃ちたくない・・・」

石倉は舌打ちした。まったく、馬鹿な奴だ・・・

「なら、予備の弾丸を弾倉をよこせ！俺が変わりに撃ってやる！」
隊員は、赤子のように泣き始めた。

「人殺しなんかしたくない！俺は自衛隊員だ！軍隊じゃない！」

石倉は、我慢できず、隊員の左頬を殴った。

「俺だって人殺しはしたくない！だが、あっちが殺しに掛かるんだ！ここは戦場と変わらない！戦場では殺すか殺されるかだ！」

隊員は、泣くのを止め、しっかりと歯を食いしばった。

「よ、よし！やるぞ！」

そして、車体から出て、射撃を始めた。

石倉はそれを見て、満足した。

だが、感染者の数は、予想以上に多かった。

『こちらブラックホーク、航空狙撃支援を開始します』

ブラックホークに乗っていた狙撃手が、狙撃を始めた。

石倉は、落下した自衛隊員が乗っているトラックに向かった。

トラックの後ろでは、尾崎が護衛のように立っていた。

「落下した奴の容態は！？」

衛生要員が報告した。

「最悪です、鎖骨、肋骨、腸骨、肩甲骨などを粉碎してる。瀕死の重症だ」

近くに通信機を背負った隊員が居た。

「本部に報告！負傷者が出てる！至急増援と救助を要請！」

「了解！」

通信隊員が通信しようとした瞬間、右脚に鎌が刺さった。

「あー！！くそったれ！いてえー！！！」

石倉は通信隊員を引きずって、通信機を取った。

「HQ（本部）！HQ（本部）！」

『こちら本部』

「こちら現地派遣部隊！2名の負傷者が出た！感染者と交戦中！感染者の数が予想をはるかに上回っている！弾薬が持たない！至急、増援と救助を要請する！」

一瞬、沈黙が続いた。

『増援は出せない、現状勢力で対処せよ』

「現状勢力だけでは持たないと言ったろ!!」

『繰り返す、増援は出せない』

「救助は!？」

『救助は検討中だ。今しばらく待て』

通信が切れた。

くそ! 命令してるだけのお偉いさんが!!

よく見れば、感染者に囲まれていた。

石倉はMK2破片手榴弾を出し、ピンを抜いた。

そして、前方に投げた。

「手榴弾行っただぞ!!」

隊員達が、身を隠した。

手榴弾の中の火薬が発火し、爆発が起きた。爆発で大勢の感染者が死ぬか、重症を負った。破片が飛び散り、鉄の破片が、感染者の喉などを引き裂いた。

石倉は、自分が乗っていた軽装甲機動車に向かって走った。

中から、あるものを取り出そうとした。

その時、斧を持った感染者が走ってきた。

石倉は機動車の後部座席に乗り、ドアを閉めた。感染者は扉を斧で叩いたが、防弾性の車体のため、斧が折れた。

永田が感染者を射殺した。

石倉は、後部座席の自分のバッグから小さなものを取った。

傷痕手榴弾だ。

傷痕手榴弾を前方に投げた。

手榴弾が爆発し、あたりの道路は火の海と化した。

感染者達は、前方を通れなくなった。通ろうとすれば、全身が瞬時に燃え盛るからだ。

「隊長! 本部から応答です!」

尾崎は叫んだ。石倉は、尾崎のところへ行き、通信機を取った。

「どうぞ」

『こちら本部、救助は出せない。負傷者をブラックホークに乗せ、近くの基地まで戻れ』

「本気ですか!？」

『負傷者のみの撤退だ。無傷のものは現地で感染者を殲滅せよ』

「弾薬が足りないんだ!」

『これは命令だ。以上』

通信が切れた。

「どいつもこいつも!これだからお偉いさんは嫌いだ!!」

信二は無線機でブラックホークの操縦士と交信した。

「ブラックホーク1号機、応答せよ」

『こちらブラックホーク1号機』

「負傷者を乗せ、近くの基地まで飛べ」

『了解、だが、着陸地点がない』

確かに、地上では感染者に襲われる可能性がある。近くの建物の屋上は、ブラックホークを着陸できる広さがない。

どうすれば……

すると、遠くの高層ビルが見えた。屋上もかなり広そうだ。距離も800mくらいか……

「800m先の高層ビルの屋上で待機してろ!」

『了解、待っている』

ブラックホーク1号機が高層ビルに向かって飛んでいった。

「全員トラックに乗れ!!800m先の高層ビルに向かう!!」

それを聞いた隊員達は一斉にトラックに乗り始めた。

石倉達も、軽装甲機動車に乗った。

「永田!飛ばせ!!」

機動車が走ると同時に、後ろのトラックも走り始めた。

精神発狂者 対 精神病質者

茜は、妨害者にベッドから引きずり出された。

妨害者は足で、茜を逃げないように抑えた。

そして、つるはしを振り上げた。

茜は、走馬灯のように短い自分の人生を振り返っていた。

人生の大半が、入院生活。

友人は居なく、話し相手はお見舞いに来る信二と、看護婦だけ。

まさに、孤独な人生だった。

人生の最後も、孤独に終わるのか……

妨害者は、奇声を上げながら、今にもつるはしを振り落としそうだった。

茜は目を閉じた。これが運命なら、素直に受け入れよう。

そして、目を瞑った。

その時、突然妨害者が苦痛を表す奇声を発した。

「何が起きたの……？」

茜は目を開けた。

亜矢子が、鋏で妨害者の左腹部を刺していた。

「あたしとあかねちゃんの遊びの邪魔をしないで」

そして、鋏を抜いた。

妨害者は倒れこんだ。

「大丈夫、あかねちゃん？」

亜矢子は、左腕を差し出した。

武器を向けたり、首を絞めたりするのではなく、ただ、差し出した。

茜は素直に受け取った。

亜矢子は、茜を立ち上がらせて、ベッドに座らせた。

「あの、どうして私を助けたの？」

亜矢子は微笑みを見せた。

「助けておかしい？」

「だって、私を殺そうとしたじゃん」

亜矢子は首を傾げた。

「殺そうとした？ いつ？ あたし、ただ、あかねちゃんと遊びたかったんだけど」

なんてこと：完全に思い違いだった。まさか、本当にただ、遊びたかっただけなんて：

「ね、次何して——うぐっ！」

亜矢子が言い終える前に、突然うめき声を上げた。

妨害者が、後ろから亜矢子の首を左腕で絞めた。鋏を持った亜矢子の右腕は、右手で掴んで抑えた。

亜矢子は、左手で妨害者の腕を放そうとしたが、腕力では敵わなかった。

妨害者は奇声を発しながら、腕に力を入れた。

亜矢子は苦しみのうめき声を発した。

茜はベッドから降りた。そして、這いずった。

亜矢子は、右手の鋏を落とした。

まさか、腹を刺されて平然とする奴が居たなんて：意識が薄れ始めた。

突然、妨害者が力を緩めた。

茜が、鋏で妨害者の左腿を刺したのだ。

妨害者は、亜矢子を放し、左腿に刺さった鋏を抜き、捨てた。

亜矢子は鋏を拾った。

妨害者はつるはしを拾い上げた。

そして、亜矢子に向いた。

亜矢子は鋏をしっかりと握った。

亜矢子と妨害者の対決。

それはまさに、精神病質者^{サイコパス}と発狂者^{クレイジーズ}の対決だった。

両者とも、殺人鬼だ。殺意を敵に向けた。

妨害者は、つるはしを亜矢子の頭めがけて横に振った。

亜矢子はしゃがみ、妨害者の攻撃を避け、右腕の鋏でまた腹部を刺そうとした。

妨害者は、左腕で亜矢子の腕を掴み、それを防いだ。

そして、右手のつるはしを構えた。

亜矢子は左腕で、妨害者の股間を殴った。

妨害者は情けない声を上げて怯んだ。

すかさず、亜矢子は右手に力を入れた。。

鋏は妨害者の腹に刺さった。

妨害者は、奇声を発しながら、両膝を床に着いた。

亜矢子は立ち上がった。

そして、鋏を妨害者の首に刺した。

妨害者は、絶叫を上げながら、倒れこんだ。

「もう大丈夫よ」

亜矢子は、殺意のない、優しそうな微笑を見せた。

茜は、亜矢子が本当に子供なのか疑問を持った。

言動こそはいいが、行動と戦闘は、およそ子供らしくない。

「どうしたの？」

「なんでもない」

茜はそう言った。本当は吐き気がしてるが、この際嘘を言ったほうがいいと思った。

「じゃあ、散歩に行こうよ」

茜は、耳を疑った。散歩？遊びの次は散歩？

亜矢子は車椅子を持ってきた。

そして、茜を座らせた。

「じゃあ、外に行こう」

亜矢子は車椅子を押した。

はたして、この少女を信じていいのだろうか？

茜は悩んだ。少なくとも、今はまだ殺されないかも……

第3の発狂者

これまで、2人の発狂者クレイジーズが現れた。1人目は名無しの老婆であり、孫が感染したことで発狂した。2人目は妨害者と呼ばれる少年であり、病院内で目の入った人を殺していた。

どれも信二達の前に現れたが、実は別の場所でも発狂者クレイジーズは居た……

聖夜は、機嫌悪そうに学校を見回っていた。

たく、坂本（流星）の奴、こんな大変な状況だったのに、あいつ、俺をまたヴァイオレンスパパと言ってからかいやがって!! マジでむかつく! そう思っ、近くのゴミ箱を倒した。

「やあ!」

後ろから誰かが話しかけた。

聖夜は思わず驚きの声を上げた。

真希が居た。

「んだよ、坂本か」

「驚いた?」

「い、いや」本当は驚いていたが、黙っていることにした。
女に驚かされたなんて、いい笑いものだぜ。

奥から、女性の声が聞こえる。

「誰だろう?」

「まあ、行ってみるか」

2人は声のするほうに行った。そこは、多目的室だった。

中には前髪が、目の上に綺麗に切れている、小柄の女子が居た。左頬は火傷の様な跡があり、肌は普通の女子に比べ、黒かった。

「あいつ、誰だ?」

「あの子は川原あゆみ。2年2組の女子」

「よく分かるな」

「生徒会長ですから」

2人は川原に近づいた。

「川原さん、何してるの？」

川原は、不気味な微笑みを見せた。

「私は川原あゆみじゃない」

「じゃあ、誰だ？」

川原は、両腕を広げた。

「私は雷光を操る至高神ゼウスとアトランティスの支配者海の神ポセイドンに従える大天使ガブリエルよ」

2人は瞬時に悟った。この人は普通ではないと。

よく見ると、川原の足元には魔方阵が書かれている。

「えっと、ガブリエルさん、あなたは何をしているの？」

「無知で哀れな者達の魂を浄化し、救済するために地上に降り去ったのよ」

真希は、一度興味本位でギリシャ神話とキリスト教を勉強したことがある。ゼウスとポセイDONはギリシャ神話の神であり、ガブリエルはキリスト教の大天使の1人である。つまり、彼女はギリシャ神話とキリスト教を混ぜ合わせてるのだった。

「川：じゃなくてガブリエルさん、一旦落ち着いてください」

川原は、ペンダントを見せ付けた。

「この聖なる水晶は悪なるものを見極める力がある」

どう見ても、ただのガラスの玉だった。

「大悪魔サタンを打ち破りし熾天使ミカエルよ、旅人の守護天使ラファエルよ、私に力を与えたまえ」

聖夜は絶句していた。こいつは明らかに正気じゃない。異常だ。サタン？ミカエル？ラファエル？わけが分からない。

「おお！なんてこと！」

川原は、聖夜を指差した。

「あなたは墮天使の首領にして地獄の支配者サタンの化身か！」
は？

川原は、真希を指差した。

「あなたはアダムの最初の妻、妖艶な悪魔達の母リリスの娘か！」
は？

川原は顔を天井に向け、両手を天井に伸ばした。

「神罰の実行者ウリエルよ、全能の唯一神ヤハウエよ、私に悪魔を
撃ち滅ぼす力を与えてください」

聖夜と真希は呆れてどう反応すればいいが分からなかった。

その時、川原は包丁を出した。

「サタンの化身！リリスの娘よ！そなた等を最強の墮天使ルシファ
ーを切り裂いた黄金の剣で滅ぼさん！」

それは本物の包丁だった。

「よ、よせ！」

だが、川原は包丁で聖夜の首筋を切り裂こうとした。

聖夜は間一髪避けた。

この女は明らかに正気じゃない！

川原は、多目的室のドアの閉め、鍵を掛けた。

「主よ！邪悪な魔物達を聖地に閉じ込めました！」

この女は明らかに役なりきっている！

川原は、包丁で真希の腹を突き刺そうとした。

真希は、両腕で刃を受け止めた。

「危なっ！」

真希は刃を放さなかった。

「くっ馬鹿な！黄金の剣が止められるなんて！」

川原は力一杯包丁を押した。

包丁が段々真希の腹に近づいていく。

「や、やば！」

真希は生命の危機を感じた。

聖夜は、川原の腹を力一杯殴った。

「ぐぐっ！おのれ！汚らわしい悪魔め！！」

真希は包丁を振った。

聖夜は今度は軽々と避けた。

川原是真希の腹を再び刺そうとしたが、真希は空手の下段払いで払った。包丁は、川原の腕から滑り落ちた。

「私、実は空手の黒帯なんだ」

川原は悔しそうな顔をした。「おお！神よ！私に悪魔に勝る力を！」

真希は川原の顔を思いっきり殴った。黒帯のパンチの威力はすさまじく、川原は気絶した。

「ふう、これで一安心」

真希は手でほこりをはらった。

2人はガムテープで川原を縛った。

それにしても、こいつはほんとに正気か？ゼウスだの、ポセイドンだの、ガブリエルだの、サタンだの、ミカエルだの、ラファエルだの、ウリエルだの、ヤハウエだの、ルシファーだの、訳の分からない用語だの、本当に気持ち悪い女だったな……………

「こいつは何だったのか？」

真希は考え込んだ。

「たぶん、発狂したんじゃない？」

発狂：つまりきちがいになったのか！

この女は発狂者クレイジーになったのか？

感染者だけで厄介なのに、発狂者まで現れたら、もっと厄介だな。

真人達が居なくなったが、無事だろうか？

2人は、川原を置いて、教室に出た。

第3の発狂者（後書き）

【追加登場人物】

川原あゆみ

学校内に現れた発狂者。クレイジーズ自信を大天使ガブリエルと名乗り、聖夜達を悪魔と呼び、黄金の剣――（ただの包丁）で殺そうとした。

決着

信二、真人、立花の3人は、茜の行方を探していた。

信二は不安になっていた。推測に過ぎないが、茜連れ去ったのは恐らく、鬼塚亜矢子だろう…

だが、この階は全て調べつくした。

「他の階に居るのかしら？」

「1階はまずないな。感染者だらけだからな」

そう言えば、妨害者はどうなったんだろう？あの数の感染者相手に無事のはずがない。

信二達は、再びエレベーター付近の待機室に着いた。

「次はどの階を探索する？」真人は信二に聞いた。

どの階と言われてもな。

信二はちらっとモニターを見た。その時信二は絶句した。

1階のホールは感染者に埋め尽くされていた。

1階は完全に無理だな…まったく、茜はどこだ？

立花が近くのドアを開けてみた。

「信二君、来て」

信二と真人は立花の所に向かった。

立花が、部屋の中のある場所に懐中電灯を照らしていた。

そこには、天井に丸いマンホールほどの穴が開いてあり、ロープがぶら下がっていた。

「相沢、お前の考えを言ってみようか？」

「頼む」

「ロープに上ってみよう」

「残念、正解は茜を探そう」

信二はロープで上がってみた。

部屋の上は、理科室のような空間が広がっていた。

2つの扉が部屋の前と後ろにあった。

2人も上がって来た。

「驚いたな」

「ええ…」

信二は、前の中学校の理科室を思い出した。あの『化け物』との初交戦だったな。

信二は1つに扉に向かった。

扉はすでに壊れていた。

中は、傷だらけのマネキンが多くぶら下がっている部屋だったが、よく見ると、裸の女性の死体もぶら下がっていた。どれも無残だった……

床には大量の血が広まっており、血だらけの鋏が落ちていた。

よく見ると、何かが引きずった後があった。

信二は、前の出来事があったか、吐き気はしなかった。

立花は吐き気に襲われた。

真人は吐き気……ではなく吐いた。

「この部屋から出よう」

信二達は駆け足で出て行った。

もう1つの扉に向かった。こちらも壊れていた。

出てみると、狭い暗い廊下が奥まで広まっていた。

信二は暗い所に飽き飽きしていた。

「まあ、まっすぐ進んでみよう」

信二達は進んだ。

茜は亜矢子と共に屋上に居た。屋上は青空が広がっていた。

「ねえ、次は何して遊ぶ？」 亜矢子は茜に尋ねた。

茜は、出来るだけ亜矢子を怒らせない遊びを考えた。

「かくれんぼ」

亜矢子は首を振った。「さっきやったじゃない」

茜は再び考え込んだ。確かにさっきやった。殺人系は出来るだけ遠ざけよう。

「じゃあ、おままごと」

亜矢子は力のない笑みを見せた。

「あたしはやったことないから」

亜矢子はあつと言った。

「じゃあ、拷問ごっこ」

茜は首を傾げた。

「ごうもん？」

「拷問とは、相手に肉体的苦痛を与え、無理矢理情報を聞き出すことである」

亜矢子はご丁寧に教えた。

「にくたいてきくつう？」

亜矢子は呆れた。

「肉体的苦痛とは、まあ、簡単に言えばすごく痛いこと」

茜は血の気が引いた。

「わ、私は、あんまし人を傷つけない……」

茜は今の発言に後悔した。もしかしたら今の発言で怒りを買ったかもしれない。

だが、亜矢子の反応は茜の予想を反するものだった。

「人を傷つけることや、殺すことが嫌いなのか？」

「う、うん。でもあやちゃんがやりたいなら……」

「じゃあやめる」

茜は驚いた。やめる？ どういうことかしら？

「やめるって？ どういう意味？」

「文字通りよ、人殺しも傷つけることもやめる」

また驚いた。

「どうしてやめるの？」

「だって、あかねちゃんは嫌いでしょう？」

「う、うん」

「だからやめる」

私が嫌いだからやめる？ どうしてだろう？ これは素直に喜ぶべきだ

ろうか？

「じゃあ、部屋に戻ろうか？」

「う、うん」

亜矢子は車椅子を押そうとした。

その時、屋上の入り口である階段から、何か鉄のような物を引きずる音がした。

妨害者だった。

妨害者が、首に包帯を巻きながらやってきた。愛用のつるはしを持つて…

残念な事に茜も亜矢子も丸腰だった。

「嘘でしょう…首を刺されて生きてるなんて…」

亜矢子は、初めて動揺を見せた。

妨害者は、悲鳴に思える奇声を発しながら、2人に近づいた。

再び、精神病質者サイコパスと発狂者クレイジーズが対峙した。

妨害者は奇声を発しながら、つるはしを構えた。

亜矢子は茜を守るように立った。

妨害者は奇声を発しながらつるはしを振り下ろした。

亜矢子は後ろに下がることで避けた。

つるはしはコンクリート製の床に突き刺さった。

亜矢子はこの隙に、茜の車椅子を引っ張って入り口に向かった。

妨害者は左足で亜矢子の足を引っ掛けた。

亜矢子は転んでしまった。

茜の車椅子は出口とは違う方向に進み、フェンスにぶつかった。

妨害者は、亜矢子の腹部を思いっきり蹴った。

亜矢子はいきなり声を漏らした。妨害者は両腕で、亜矢子の両肩を掴み、無理矢理立たせた。

そして、今度は腹部に右拳で殴った。そのまま右、左、右とフックを繰り返した。

だが、やられるばかりの亜矢子ではなかった。

亜矢子は、右足で妨害者の男の急所を思いっきり蹴った。

妨害者は情けない奇声を発した。

亜矢子は何度も男の急所を蹴りつけた。そのたびに妨害者は情けない奇声を発した。

妨害者が男の急所を抑えながら両膝をついた。

亜矢子は妨害者の横を通り過ぎて、つるはしを引っこ抜いた。

妨害者が振り向いた。

亜矢子は、妨害者の右脚目掛けてつるはしを振り下ろした。

つるはしは、右脚に突き刺さった。

「これで歩けないはず」

亜矢子はつるはしを放した。

だが、妨害者はつるはしを抜いた。

そして、普通にあるいた。普通に。

「嘘！」

妨害者は、つるはしで亜矢子の右脚を突き刺した。亜矢子の右脚の骨が砕けた。

亜矢子は苦痛のあまり、声も出せずに倒れこんだ。

今度は、右手を刺した。

次は右肩。

さすがに亜矢子も抵抗が出来なかった。

そして、頭を刺そうとした。

茜は車椅子を走らせて、妨害者に体当たりした。

妨害者は、ぶつかった衝撃で車椅子に座っている茜の腿ももの上に座ってしまった。

茜はすかさずフェンスに向かって走った。

車椅子はフェンスにぶつかった。

妨害者は、車椅子から離れるため、フェンスに上がった。

茜はそれを狙っていた。茜は妨害者を押し上げた。

妨害者はフェンスを越え、そのまま落下した。

屋上は7階の高さがあった。

妨害者は、地面にぶつかった。

病院からの脱出（前書き）

【病院内に居た人物】

相沢信二

安藤真人

立花裕香

相沢茜

鬼塚亜矢子

妨害者

【死亡者】

妨害者

死因…転落死

【重傷者】

鬼塚亜矢子

病院からの脱出

信二は、屋上に駆け上がっていた。廊下の窓から誰かが屋上から落下するのを見た。

「頼むから、茜じゃないように!!」

信二は祈った。もし、茜が無事なら、俺はキリスト教に入信しよう。屋上に着いた。

居た! 茜がちゃんと居る! だが、もう1人誰か居るな…

茜の車椅子を、少女が押していた。明らかに、その少女は重症だ。

信二は駆け寄った。

「大丈夫か! 茜!」

「お兄ちゃん!!」

茜は兄の再会を喜んだ。

「君も大丈夫か!」?

「…ええ…」 息が荒かった。

右肩、右手、右脚から、血が流れ出ていた。

信二は、その少女を負った。

そして、茜の車椅子を押した。

「お兄ちゃん、私警察に捕まるかな?」

「どうして?」

「さっき、人を落としたの…」

「向こうは殺しに着たか?」

「うん」

「じゃあ、正当防衛だな」

信二達は、真人達と合流した。

「その子、大丈夫?」

「いや、息が荒い」

信二は、どこかで傷の治療をしようと思った。

「ここは暗いから、他の場所にしよう」

茜は信二に向いた。

「なら、3階がいいと思う」

「なぜ？」

「薬も包帯もベッドもあるから」

信二は感心した。よく知ってるな。

エレベーターに乗り、3階を押した。

立花は、信二に質問した。

「さっき落ちた人は？」

「妨害者だ」

「へ、いいざまだ」

「それにしても、よくば……きゃ！」

立花は悲鳴を上げた。エレベーターはすでに指定の階に着いていたが、開いたドアから自衛隊員が89式小銃を構えていた。ガスマスクをしていて、表情が伺えない。

「噛まれた奴は居るか？」

自衛隊員は、呼吸音交じりの声で聞いた。

「いいえ、でも重症の奴は居る」

自衛隊員はしばらく銃を構えていた。

「分かった、降りて来い」

自衛隊員は信二達を薬品室に連れて来た。

「俺の名前は織邨直樹。陸自の狙撃手だ」

薬品室の端にベッドが置かれていた。

「負傷者をそこに寝かせろ」

信二は少女をベッドに寝かせた。

「幸い、ここには色々な薬品がある。麻酔や解毒剤などがある。モルヒネもな」

信二は、モルヒネが何の薬品か分からなかった。

「あいつに鎮痛剤を打ってやれ」

直人は注射器を信二に投げてきた。

「あの……俺は注射のやり方が分かりません」

「悪かった。俺が打つ」

信二は鎮痛剤を直人に渡した。

直人は鎮痛剤を少女に打った。ある程度の医療技術はあるようだな。
「注射できるんですね」

「当たり前だ。俺は衛生要員を目指してたんだ。けど、いちいち薬品の名前を覚えられないし、心臓マッサージをやるうとすると力を入れすぎて肋骨を折うかもしれないし、だからやめた」
軽い口調から嘘っぽいが本当かもしれない…

「あの、そのガスマスクはあまり意味ありません」

直人は信二に向いた。

「なぜ分かる？」

「ウイルスは接触感染型です。空気感染はしません」

「ははーん、さては、あの事件の生還者だな？」

「はい」

「やっぱりな。どっかで見た顔だなと思ったよ。俺も現場に居たんだ」

直人はガスマスクをはずした。

「でも、経口感染は防げるかもしれません」

「いいや、ガスマスクは息苦しいし、視野も狭くなるからお荷物だ」

直人は、シップを少女の傷口部分に着け、包帯を巻いた。

「ここにある薬品は持てるだけ持て」

直人は、大きなリュックを3人に渡した。3人は薬品を詰め始めた。
信二はてっきり自衛隊員は全員撤退したとばかり思った。

「撤退しなかったんですか？」

「ああ。他の奴は撤退した」

直人は銃の点検をした。よく見ると。狙撃銃を背負っていた。

狙撃手：そういえば、俺の兄さんも狙撃手だったな：妙な偶然だな。

「荷物をまとめろ。すぐにここを出る」

真人は直人を睨み付けた。

「出るって、1階は感染者だらけですよ？」

「俺はロープを持っている。ロープで窓から降りるんだ」

「非常階段は？」

「あそこは駄目だ。俺は非常階段から侵入したが、後から大勢の感染者がやってきてな」

信二は別に驚きもしなかった。前にもあったことだ。

「おい、信二君。少女を背負ってくれ。その女子は車椅子を押して。ナタを持ったお前は1番後ろだ」

直人は銃を構えながら、薬品室を出た。信二達は、その後ろを付いた。

直人は、廊下の窓を開けた。そして、ロープを下げ、窓の反対にある柱に結び付けた。

「俺が先に下りて下の安全を確保する」

信二は質問した。「待ってくれ、この少女とあ、車椅子はどうすればいい？」

「ロープは後2つある。2人を背負って自分の体と結び付けろ。車椅子は、そうだな、最後の奴が一旦ロープを上げて結びつけて、下に下ろせ」

直人はそう言って、ロープで降りた。

信二と真人と立花は無言でじゃんけんした。信二が1番目に勝ち、立花が2番目、真人は負けた。

「じゃあ、俺は茜、安藤は少女を頼む」

「分かった」

信二と真人は茜と少女を背負って、ロープで落ちないようにした。

「よし、俺が先に行く」

信二はロープでゆっくりと降りた。

続けて立花も。

真人はロープを一旦上げ、車椅子を結びつけゆっくり下ろした。

「よし、お前も降りて来い」

真人は降りた。

案外簡単に脱出できたな。

信二は近くに停車している車を見た。車のガラスは全て割れており、屋根が少し凹んでいた。

「何かが落ちたのか？」

茜は驚いた。

「嘘、彼はここに落ちたはずよ」

「彼？」

「ぼうがいしゃ」

信二は驚いた。6階の高さから落ちて生きてるのか？

驚いてるもつかの間、窓が割れる音がした。

病院内の感染者が窓を割って続々と外に出た。

「くそ！まずい！逃げろ！」

直人が言ったと同時に、信二達は走った。茜は立花に車椅子を押してもらった。

感染者は奇声を発しながら信二達を追った。

直人は振り返り、89式小銃を単発で4発撃った。4人の感染者が撃ち殺されたが、まだ大勢居る。

近くにワゴン車があった。しかもドアが開いて。

「ワゴンに乗れ！」

直人は怒鳴った。信二は助手席、残りは後部座席に乗り、ドアを閉めた。さすがに車椅子は捨てた。

直人は運転席に座り、鍵を探した。

「鍵がない！！」

感染者達はワゴン車を囲み、ガラスを叩き始めた。

「仕方ない！！」

直人はカバーをはずし、中のコードを引きちぎり、ショートさせようとした。

映画であるようなシーンだ。

車のエンジンが掛かった。

「シートベルト着用！」

直人はベルトを着用した。

「3、2、1発車!!」

車が走り出した。直人は次々と感染者を跳ね飛ばした。これも映画でよくあるシーンだ。

「安全な場所を知ってるか」

「はい」

安息の学校

「…そうか、お前達の学校は安全なんだな？」

直人は運転しながら聞いた。

「はい、多分」

信二は力なく答えた。実は信二も、自分達の学校が安全だとは思いつけない。感染者は恐れを知らない連中だ。きっと、板で塞がっているバリケードだって破るに違いない。でも、なぜか言ってしまった。

サイドミラーで後ろを見た。感染者はもう追ってきていない。

信二は気分を変えようと、ラジオをつけた。

『……渋谷区は危険地域に指定されました……』

信二は聞いた。

『自衛隊は渋谷区を嚴重に封鎖しました。東京は依然、巨大な壁に覆われており、中の様子が確認できません。この騒ぎに、都内感染説まで流れ出しました。政府関係者、および陸上自衛隊の正式発表はありません』

渋谷、すなわちここは、危険地に任命されたのか……てことは、ここは感染現地…

その時、後ろから奇声が聞こえた。

サイドミラーで後ろを見ると、数十人の感染者がワゴン車を追っていた。

「織邨さん！追ってきてます！」

「つかまれ！！」

直人はスピードを限界まで上げた。車のエンジン音が大きくなった。だが、感染者も速度を上げた。

感染者たちは追い続けた。獲物の首筋を食いちぎるまで、彼等は追いつける。

「連中は陸上選手か！」

直人はそう怒鳴った。車に追いつけるのは、信二が知ってる限り、どこかのジャマイカ人だ。

感染者は、どこかのジャマイカ人ほどではないが、かなりのスピードで追っていた。

突然、直人は急ブレーキを掛けた。車は音を立てながら止まったが、感染者たちは急には止まらなかった。全力で走ったまま、何人か車体にぶつかって倒れた。

直人はすかさず車を走らせた。

感染者たちは追跡を中止した。

「なぜあいつら止まったんだ？」

直人はサイドミラーで感染者の行動を見ていた。

信二は窓を開け、顔を出して外を見た。

感染者たちの中心に、フードを被った居た。

信二は目を擦った。どこかで見たような……！

信二は思い出した。感染者が学校を襲ったときに居たフードの男と同じ格好をしていた。

「あいつ、何なんだ？」

信二は、フードの男の正体が気になった。感染者のリーダーか？

「車で行くには目立ちすぎる。一旦安全な場所で捨てて、徒歩で行こう」

直人は、ビルの裏で車を止め、全員を降ろさせた。

信二は茜を背負った。

少女は、真人に背負われた。

直人は先頭に立ち、歩き始めた。

ビルから出ると、案外学校が近くに見えた。

「あそこか？」

「はい」

直人は銃を構えながら歩き始めた。信二たちが学校に行くまでの間、不思議に感染者と遭遇することはなかった。

直人は、職員玄関を開けた。玄関の手前では、バッドを持った青

年が見張っていた。

「じ、自衛隊……！」

明らかに恐れていた。

「1人負傷者が居るんだ。保健室へ連れて行ってくれないか？」

「わ、分かった」

青年は茜と少女を抱えて、職員玄関のすぐ横の事務所の横にある保健室に入った。

「案外あっさり終わったな。この旅」真人はさりげなく呟いた。

「俺は職員室に行くか」直人は階段を駆け上がって、職員室を探した。

信二、真人、立花は、自分のクラスの教室に戻ることにした。

廊下や教室内は、大勢の生徒、市民、教師が居た。

皆、状況を把握しきれて居なかった。

渡り廊下で紀子が待ち構えていた。

「あなた達、どこに居たの？」

「病院っすよ」真人はいい加減な感じで答えた。

「病院？」

「薬を取りに」

「……まあいいわ。とりあえず、戻りましょう」

紀子は信二達を連れ、教室に戻った。

教室では、多くの生徒が自席に座っていた。信二たちも、自分の席に座った。

「大丈夫、信二君？」真希は心配そうに聞いた。

信二は、気まずい気持ちで答えた。「ぴんぴんしてます」

ぴんぴんしてるって言ったら、ぴんぴんしてる。

まあ、しばらくここに居れば安心かな？

朗報

―その頃、陸上自衛隊現地派遣部隊―

「入り口は死守しろ！感染者を近づけるな！！」

石倉は、高層ビルの入り口付近に停車していた車を盾にしながら、銃を撃っていた。

入り口の前には、軽装甲機動車がバリケードのように止め、機関銃を撃っていた。陸自隊員は防衛体制で戦っていた。

尾崎がやって来た。

「負傷者2名が無事戦線から離脱しました！！」

石倉は銃を撃っていたため、聞こえなかった。尾崎は怒鳴った。

「隊長！！負傷者2名が離脱しました！！」

石倉はやっと気づいた。「そうか！！分かった！！」

尾崎は報告を終えると、ビル内に入った。

「撃ち続ける！！敵はまだ大勢居る！！」

石倉は1つ不満なことがあった。戦場と違って敵は銃を持っていない。だが、全員命知らずの連中で、噛まれれば、それで終わり。まったく、どっちがいか分からん！！

感染者たちは、奇声を発しながら次々と突撃してきた。

「隊長！！機動車の機銃の弾丸が切れた！！」

永田が叫んだ。

「車内に予備弾倉のベルトがあるはずだ！！」

永田は車内に入った。ベルトを持って機銃を装填した。

感染者が1人機動車の車体を上がり、機銃の前に立った。

「くたばれ！！」

永田はゼロ距離で機銃を撃った。フルオート射撃で放出された弾丸は、感染者の腹部に次々と貫通した。腹が裂け、内臓が飛び出した。感染者を1人殺したことを確認した永田は、感染者を次々と撃った。

撃たれた感染者は、映画のように死体は残らなかった。全員、体が引き裂かれた。

「や、やめろおおお！」陸自の1人が感染者に首を噛まれた。感染者は、首の筋肉を食いちぎった。

陸自の傷口から血が噴出した。

石倉は即座に感染者の頭を撃ちぬいた。噛まれた隊員に、大勢の感染者が飛び掛った。

感染者たちが、陸自の服を引き裂き、隊員の腹部に指をめり込んだ。そして、腹を引き裂いた。胃や腸が露出した。

「許せ!!!」

石倉は、陸自の頭を撃った。

「隊長!!! 感染者の数が多すぎる!!! このままじゃ弾薬が持たない!!!」

石倉は周りを見た。感染者の数はすでに陸自を大きく上回っていた。これまでか。石倉はそう実感した。

「ビルに入れ!!! 交戦中止だ!!!」

陸自は次々とビル内に入った。

「永田! お前も入れ!!!」

「時間を稼ぎます!!!」

永田は機銃を撃ち続けた。石倉は、通信機が機動車内にあることを思い出した。

機動車まで走り、中に入った。

「あった!」

後部座席に通信機があった。

「永田! ビルに入るぞ!!!」

永田は機銃から離れ、ビルに向かった。石倉も外に出ようと思った瞬間、感染者が一人襲ってきた。

石倉は頭を撃ちぬいた。

そして、一目散にビルに走った。

石倉が入り口に入ると同時に、ガラスの扉が閉まった。

感染者たちはガラスの扉に体当たりしたが、びくともしなかった。

「1階のガラスは全て強化ガラスでした」

尾崎が丁寧と言った。あれを見れば誰だってわかるわ。

「念のため、シャッターを閉めろ」

受付の制御版でシャッターを閉めた。

石倉は生き残った隊員の数を見た。自分を入れて9人か。少ないな。

「本部より通信です」

隊員の1人が通信機を持ってきた。

『こちら本部。現状報告を』

「生存者9人。弾薬不足。感染者の数は大勢。渋谷はもう駄目です」

『現在位置の報告を』

「分かりません。見知らぬビル内です」

『了解、こちらで位置を特定する』

しばらく沈黙が続いた。

『位置の特定に成功した。撤退用ヘリとニンジャを送る』

撤退用？つまり……

「つまり撤退できるんですか？」

『そうだ。真紅計画は第4段階に入る。^{コードレス}現地隊員は全て撤退させろと命令だ』

丁度、ヘリコプターのプロペラ音が聞こえた。

『こちらニンジャ。何か合図を頼む』

うれしい通信だ。

「屋上に行く」

石倉がそう言って隊員たちを連れて行こうとした。

そのときだった。

窓が割れる音がした。

感染者たちがビル内に入り込んだ。

「急げ！屋上に出ろ！」

石倉が言う前に隊員は走っていた。

石倉は感染者を次々と撃ちぬいた。

感染者たちが続々と侵入してきた。

「来い！この俺が相手だ！」

石倉は撃ち続けた。が、弾が切れた。

「小銃がなくなっちゃって、拳銃があるぞ！」

ホルスターから拳銃を出そうとした。

その時、後頭部に激痛が走った。

そして、意識が途絶えた――

亜矢子と母の再会

信二は、茜と少女の様子を見るため、保健室に入った。

「よお、茜」

「お兄ちゃん」

茜はベッドで座っていた。少女は眠っていた。

「そう言えば、この子の名前は？」

「亜矢子」

信二は驚いた。看護婦の報告書で最重要危険患者に指定された人物じゃないか：

「何もされなかったか？」

「うん」茜は正直に答えた。自分は何もされなかった。むしろ、助けられた。

信二はその答えに安心した。

亜矢子が目を覚ました。

「大丈夫かい？」

信二は亜矢子の近くに駆け寄った。

「：誰：？」

「俺は相沢信二。茜の兄だ」

「ここはどこ？」

「学校の保健室」

それを聞いて安心したのか、再び寝込んだ。

信二は保健室から出た。保健室前では、綾瀬が待っていた。

「相沢君：だったよね？」

「何でしょうか？」

「保健室にいるのは誰？」

「俺の妹の茜と亜矢子って少女だ」

「亜矢子！？」

突然、見知らぬ女性が聞き返した。30代後半くらいか……？

「亜矢子って、鬼塚亜矢子？」

「ええ、はい」

信二は困惑していた。この人どうしたんだ？

「会わせて！今すぐ！」

信二は仕方なく、案内した。

亜矢子は、女性を見て、驚愕していた。

「亜矢子！！」

「…お母さん…」

信二は驚きはしなかった。だが、亜矢子の反応は興味深かった。亜矢子の母親は、再会を喜んでいた。だが、亜矢子はその反対だった。信二には、亜矢子が母との再会を嫌がっているように見える。

「お母さんはお前と会えて嬉しいよ」

「そう？あたしは嬉しくない」

やはり、そうか。信二は椅子に座った。

「亜矢子、どうしてそんなこと言うの？」

「あたしは、お母さんとお父さんが嫌いなもの随分とストレートに言うな。」

「あなた、本気で言ってるの？」

「ええ」

「なんでそういう言うの！私達があなたをどれだけ心配したか！」

亜矢子は母を睨みつけた。

「じゃあ！お母さんとお父さんはあたしに優しくしたことあるの！？」

母親ははっとした。

「毎日勉強勉強！友達と遊ぶ時間さえくれない！ちょっとした間違いで怒って怒って！正直、入院生活のほうがまだ良かったよ」

信二は納得した。なるほどな、この母親と父親は強制的に勉強させていたのか。

「…ごめんね、亜矢子」

「謝れば、あたしが許すと思う？2人とも死ねばいい」

母は、突然泣き出した。ハンカチで涙を拭いた。

「何で泣くの？きもい」

母は、震えた声で言い出した。

「亜矢子…お父さんとは…会いたくても…会えなくなったのよ」

「離婚でもしたの？好都合よ」

「違うわ…あなたの…私の…父さんは死んだの」

「死んだ？」

「ええ…今日、私を逃がすために…」

こんな母子の対話をしている間に、信二は意外な事実に気づいた。それは、亜矢子の態度や言動で、まったく父の死を悲しんでいないことだった。眼にもまったく涙がたまっていない。表情ひとつ変えていない。それどころか、むしろ笑っていた。まるで面白い話を聞いているように。

「いいさまね。うっとうしい糞爺が死んで清々した」

その時信二は、偶然亜矢子の膝を見た。膝の上には、右手が乗っていた。勿論、ぱっと見ただけではたいした発見ではなかった。

が、同時に、信二は亜矢子の右手が激しく震えているのに気づいた。感情の激動を強く抑えるためか、右手を強く握っていた。包帯が血で滲んでいた。

信二は悟った。顔こそ笑っていたが、実は全身で父の死を悲しんでいた。

この子も人だった。ただ強がるだけの少女だった。

騒ぎ

信二は、亜矢子がサイコパスではなく、ただのか弱い少女だと思
った。

すると、1階の北校舎で何やら騒ぎがあるのか、慌しかった。
気になった信二は、1階の北校舎に向かった。

北校舎玄関前では、大勢の人々が集まっていた。信二は真希を見
かけた。

「どうしたんですか？」

「やばいことになっちゃったニヤ」

玄関を背にして、1人の中学生少女が、まだ幼い男の子を抱えれカ
ッターナイフを向けていた。

「やめろ！あゆみ！」

「馬鹿な真似はよせ！」

「お前！犯罪者になるぞ！」

大勢の人々が、川原を囲んで説得していた。

「これは殺人ではない。魂の救済だ」

川原は、まだ自分を神の使いガブリエルだと思い込んでいる。

「黙示録の戦争が始まった。醜い悪霊に摂り憑かれた愚かな罪人達
が、犠牲者を求めて彷徨っている。彼らに魂を奪われる前に、私が
魂を救済する！」

信二は瞬時に悟った。こいつは完全に狂っている。

「何が救済だ！」

「ただの殺人だぞ！」

「狂ってる！」

川原は真顔のままだ。

「信仰を持たぬものたちよ、この男の子が救済を証明する！」

川原はカッターを幼い男子の首に突きたてた。

「よせ！」

「やめろ！」

「馬鹿！」

信二は走った。間に合え！

「唯一絶対神よ！大天使ミカエルよ！この者の魂を悪魔と堕天使からお守りください！」

駄目だ間に合わない！

その時だった。

川原の後ろの玄関の木の板で塞がっていたガラス部分が破壊された。感染者が木の板を破って川原の胴体を掴んだ。

「神よ！お助けください！」

川原は感染者によって外に引っ張り出された。

外は、大勢の感染者が学校を囲んでいた。感染者たちは、川原を囲み、殴る、蹴るなどの暴行を始めた。「神よ！天使達よ！私をお救いください！」

その時、川原は過去の記憶が走馬灯のように次々と頭に映し出された。

母親は、川原を幼少の頃からうっとしがっていた。父親はよく酒を飲み、酔うたびに川原に暴行を加えていた。両親は川原を毛嫌いし、川原の妹を大切に育てた。

そんな川原を守り、育ててくれたのは祖母だった。

だが、祖母は死んだ。川原の目の前で、感染者に殺された。

「おばあちゃん、助けて……」

川原は意識が朦朧としていた。感染者たちの暴行が止まった。何か引きずる音がした。

川原は、かすれた視界で、はつきりとそれを見た。

巨大なギロチンのような斧が、川原に振りかざされた。

「おばあちゃん、大好き」

「皆さん！武器を持って2階へ！」

信二は叫んだ。感染者が次々と、板で塞がっている窓を破って校内に侵入した。

武器を持った青年達は、感染者達と戦い始めた。

信二が真希を連れて逃げようとする、と、玄関の扉が破壊された。そこには、紺色の頭巾を被った全身分厚い脂肪に覆われた巨漢が立っていた。ギロチンの刃をくくりつけた巨大な斧状の武器いわゆる断頭斧を持っていた。顔は完全に隠れていて、表情が伺えない。背中や肩には無数の釘や針が刺さっていた。血まみれのエプロンを着けていた。

「何だ：あいつ：」信二は驚愕していた。

が、感染者が巨漢を通り越して中に侵入してきた。

信二は真希を連れ、2階に逃げ込んだ。校内はすでにパニック状態だ。

信二は、叫んだ。

「全員教室内に入って！ドアを閉めて鍵を掛けるんだ！」

だが、パニックに陥ってるため、全員聞く耳を持たなかった。

全員、無茶苦茶に走った。

感染者が1人、階段を駆け上がり、信二に掴みかかった。

「しまっ——」

真希は反射的に、感染者の頭を回し蹴りで蹴りつけた。

感染者は倒れこんだ。

「行こう！」真希は言った。

「あ、ああ」

真人が友人達を連れて信二の下に来た。

「外は感染者だらけだ！どうする？」

紀子は眼鏡を掛け直した。

「第1校長室に行きましょう」

「そうだ！紀子天才！」

その時、何か引きずる音がした。あの巨漢が2階に来た。全員驚愕した。そして、共通の言葉をつぶやいた。

「何だ：あれ：」

巨漢は迫力があつたが、動きは鈍かった。
あれなら逃げ切れる。信二は確信した。

「第1校長室へ行きましょう！」

全員、第1校長室目指して走った。巨漢は手当たりしだいの人たち
を斧状の武器で切りつけた。

信二はただ、走った。

処刑人

信二達は第1校長室に向かって走っていた。だが、茜を連れ忘れているのを信二は気づいた。

「皆さんはさきに校長室へ！」

信二はそう言って、保健室に向かった。

「あ、どこに行くの？」真希は信二を追った。

保健室に信二は茜を抱き抱えた。

「どうしたの？お兄ちゃん」

「暴漢達が出てきたのさ」

亜矢子はすでに母親に連れて行かれていた。

「信二君、早く行こうよ」真希が入ってきた。

「ええ、そうしましょう」信二は茜を抱えながら走った。

が、保健室の出口に男子生徒感染者が現れた。

真希は感染者の頭を両手で掴み、感染者の頭を下げると同時に膝を勢いよく感染者の顔にぶつけた。

感染者は倒れこんだ。

「さ、行こう」

信二達は校長室に向かった。北校舎の1階は既に感染者だらけだ。

信二は無我夢中で真希について行った。感染者と出会ったたびに、股を蹴って走った。

「もうすぐ校長室よ！」

信二はその言葉に安心感を感じた。

感染者が信二を追っていた。掴まれそうになった。

「まずい！」

その時、感染者が突然倒れた。よく見ると、右目に矢が刺さっていた。

「早く入りな！」須田が和弓を構えながら言った。

信二達は校長室に入った。同時に扉が閉まった。

好調室内には、ある程度の生徒が居た。

信二は茜を下ろし、真人に話しかけた。

「ここに行き着いた人は？」

「えき：じゃなくて総統、雑賀、須田、蛸田、鳥山、猫田、俺、聖夜、トリエン、真斗、綾瀬、石川、小島、佐々木、五右衛門、武田、立花、吉川」

吉川？聞かない名前だな。

「最後の誰だ？」

「部屋の隅っこに座ってる男だ。クラスメートだが、空気みたいな奴だ」

信二は部屋の隅の男を見た。ニキビだらけの顔で、出っ歯だ。なるほど、確かにぽつと見た感じだと友達になりたくないほどの容姿だ。存在感も薄すぎるな。

「蛇谷先生と織邨さんは？」

「見かけてない。一番頼りになるけどな：どこだろうか？」

俺は拳銃を隠し持っている。信二はそう言い聞かせた。拳銃は万が一のときに使おう。

「武器は？」

「メリケンサック、弓、大鎌、斧、丸太、鎌、ナタ、金属バッド、彫刻刀、回転式拳銃」

「リボルバー？」

「あそこのカウボーイっぽい男が持ってる」

確かに中学生の癖に長い顎髭を生やしたコートを着た男が回転式拳銃を持ってる。最近の不良は怖いな。

「まあ、ここに居れば安全だな」

「事情が変わった」

部屋の中の人が信二を見た。

「どういう意味？」

「でっかいギロチン斧を持った巨漢が感染者を引き連れてきた。鉄

製の玄関を壊すほどの攻撃力を誇ってる」

「あの頭巾野朗か」

「あのデブ頭巾野朗だ」

何人かはあの巨漢を見た。圧倒的な迫力を誇っていた存在だ。

「あいつは何者なんだ？」真人は信二に聞いた。

「分からない。だが、感染者であることは確かだ。名前を付けよう」

「名前なんか居るのかい？」

「いちいち巨漢って呼ぶのはなんかな」

校長席に座ってる液：ではなく総統が悪役っぽい声で言った。

「処刑人」

「くくく…さすがはボス、発想が早い」

「はっはっは、まったくだ」

「ボス、由来は？」

「ギロチンと言えば、昔の処刑で使われてた。それだけだ」

その時、感染者たちが校長室の扉を叩いた。

「ここも長くなさそうだな」

武田はそう言って、校長室の窓を開けた。

「どうする気だ？大佐」

武田はロープを落とした。

「ロープで脱出する」

信二、真人、立花はまたかとばかりに首を振った。

「俺が先だ。アディオス」

武田はロープで降りた。

総督を除く狐狩り幹部メンバーも全員降りた。

ほとんどの人物が降り、校長室はもう、信二、茜、総督しか残っていない。

総督は、校長席を扉の前に移動させた。

「お前達は先に行け」

信二は、茜を連れて降りようとした。

その時、何かが引きずる音が聞こえた。

「この音は？」

「きっと処刑人だ！」

総督は扉から離れた。

扉が木っ端微塵に破壊された。

処刑人が扉を破壊したのだった。

感染者が次々と室内に入ってきた。総督はメリケンサックで次々と感染者を殴りつけた。

信二は茜を背負った。

「しっかりつかまってる！」

だが、感染者の1人が信二に抱きかかった。信二は茜を落とし、窓から落下した。

「お兄ちゃん！」

総督は茜を抱えた。

「掴まれ、お嬢さん」

総督はロープで滑り落ちた。

信二は無事だった。高さが2階だったのと、落下先が柔らかい土だったのが幸いだった。

「転校生、自分の妹はしっかり管理しろよ」

総督は茜を信二に渡した。

「あ、ありがとうございます」

その時、感染者たちが1階の窓から出た。

「礼はいらん！逃げるぞ！」

信二と総督は走り出した。先に下りた連中がどこに居るかは知らなかった。

校舎を曲がった先に、信二が誰かとぶつかった。

「あ、信二君」真希だった。

「皆はどこに？」

「体育館。窓に鉄格子があるから安全だって」

「今はな」

信二達は体育館に向かった。校舎内からまだ悲鳴が聞こえる。

体育館の正面扉が開いていた。信二達は飛び込んだ。

館内の真人と聖夜が即座に扉を閉めた。

信二は体育館の扉と窓を見た。

扉は鉄製、窓は鉄格子付き……ここは安全そうだな。処刑人が居なければ……

再突入

石倉は眼を覚ました。目覚めの悪い朝だな。

だが、そこは自宅のベッドでも宿舎でもない。テントの中だ。テント内にベッドが並んであり、マスクをつけた白衣の男が立っていた。

「具合はどうですか？」

「24時間マラソンに出場した後みたいな気分だ」
つまり、くそって意味だ。

「それはいい」

石倉は頭を働かせようとした。

「ここは？」

「安心してください。東京都の外側、つまり安全地帯です」
だろうな。天国にしちゃあ、ちと殺風景だったしな。

「大変だったそうですよ。あなたが気絶していて仲間が必死になって運んだそうです」

「気絶？はて、俺はどうなったんだっけ？今日1日の記憶が全部吹き飛んでる。」

迷彩服を着た男が来た。

「あ、石倉さんは無事に目覚めました」

「そうか」

男はそう答えた。

石倉は訳が分からなかった。一体今日何があったんだ？

「石倉君、私は前原一等陸佐だ。今作戦の現場責任者で現場司令官だ」

「作戦？一体何の作戦ですか？」

前原は白衣の男に向いた。

「軽い記憶喪失です」

前原は再び石倉に向いた。

「では、順を追って説明しよう。今東京は封鎖中だ」

石倉は耳を疑った。東京は日本の首都だ。国会議事堂も東京にある。首都東京を封鎖するなんて前代未聞だ。日本はついにおかしくなったのか？

「封鎖って、何のためです？」

「特殊軍事機密作戦」「真紅計画コードレッドが発動された」

コードレッド？どこかで聞いた名前だな…確か…

思い出そうとすると、頭痛が走る。

「大丈夫か？」

「はい、たいしたことありません」

「よろしい。真紅計画コードレッドは第3段階まで実行されたが、今は停止中だ」
「ちよつと待ってください」

石倉は止めた。意味の分からないまま話が進められて、頭が混乱していた。東京封鎖もコードレッドも第3段階も、全て理解していない。

「コードレッドって何ですか？そもそもなぜ東京が封鎖されたんです？」

「呆れたな。そこまで忘れたか」

前原は頭を抱えた。一体どこから説明すればいいのか迷っている。

「真紅計画コードレッドは、政府の承諾済みの陸上自衛隊専用緊急作戦の暗号名だ」

政府の承諾済み？つまり、大規模な作戦か。

「正式作戦名は封じ込め作戦。陸自の全総力が結集される大規模な軍事作戦だ」

軍事ってのは聞きなれないな。自衛隊は軍隊じゃないし。

「この作戦の発動条件は、感染の発生だ」

石倉は感染という言葉聴いて不安に襲われた。自衛隊が大規模な作戦を行うほどの危険な細菌が発生したと悟ったからだ。

「今、東京都内では、伝染病が流行ってる。感染者は人が変わった

ようになる」

「ある種じゃ、狂犬病に似てますね」白衣の男が付け足した。石倉は頭の中で整理した。

今、陸自はコードレッドという大規模な軍事作戦を実行してる。

東京で伝染病が流行ったから、東京は封鎖された。そしてその伝染病は狂犬病と酷似してる。

「事情は分かりましたが、私に何の用ですか？」

「用件を言う前に紹介したい人物がいる」

前原は横に一步ずれた。そこには、30代後半から40代前半くらいの男が立っていた。

「厚生労働省から来た専門家の――」

「坂本良治です」

厚生労働省から来た？よほどの大事件だな。

前原は咳払いをして言った。

「君の部隊に博士の護衛をしてもらいたい」

「護衛？」

「君の部下は君の判断を任せると」

「待ってください、何の護衛ですか？」

「東京都内に突入してもらう」

石倉は首を絞めたやりたかった。まだ状況が完全に把握し切れていないのに、突然護衛をしろと言われたら、断るのが通だ。だが、本人の意思関係なく答えてしまった。

「はい、任せてください」

自分でも不思議に思った。本心は行きたくないのに、口が勝手に答えたのだ。石倉は自分の声帯を潰してやりたかった。だが、痛いから辞めといった。

「いい返事だ。5分後に突入して貰うからな」

前原は石倉に敬意を込めて敬礼した。石倉も敬礼し返した。

「石倉陸曹長は誠に光栄であります」

もちろん本心ではなかった。やけくそに言ったのだ。

「うむ、期待してる」

前原はテントの外に出た。

「護衛、よろしくお願いします」

良治はそう言って外に出た。

石倉はベッドから降りて、ブーツを履いた。

「俺の装備は？」

「すぐ横です」

横に自分の装備がたたんで置いてあった。

石倉は装備をつけた。

テント外に出ると、軽装甲機動車…愛称ライトハンマーが停車していた。

―軽装甲機動車は陸上自衛隊と航空自衛隊に配備されている軽装甲車である。普通科などの隊員の防御力と移動力を向上させるのが目的の装甲車であり、固定武装は無いが、乗員が天井ハッチから身を乗り出して5・56mm機関銃MINIMIや01式軽対戦車誘導弾等の火器を使用できる設計になっている。車体は装甲化され、避弾経始も考慮されているが、具体的な防弾・防爆性能は公開されていない。小型かつ軽量であるためC-1輸送機、C-130H輸送機、CH-47J/JA輸送ヘリコプターなどで空輸することが可能となっている。

今回は5・56mm機関銃MINIMIを装備している。石倉は軽装甲機動車のドアを叩いた。

どうせなら、74式戦車か90式戦車でも乗せてもらいたいものだ。石倉は89式小銃を装填した。

「結構やばそうだな」

これじゃもう、陸上自衛隊ではなく、陸軍に入隊してる気分だ。

今回の護衛、骨の1本や2本では済まなさそうだ。まったく、この世はユニークなこと

再突入（後書き）

＞i33433—4203＜

軽装甲機動車

武器学校の軽装甲機動車

基礎データ

全長 4.4 m

全幅 2.04 m

全高 1.85 m

重量 4.5 t

乗員数 4名（ターレットハッチを開け、後部座席間に機関銃手を座らせた場合は5名）

乗員配置 前席2名、後席2名（+1名）

装甲・武装

装甲 圧延鋼板・防弾ガラス

機動力

速度 約100 km/h

エンジン ディーゼル

160 ps / rpm

懸架・駆動 フロアシフトタイプ4速AT（運転席右端の操作パネル部分にはボタン式のATスイッチが装備されている）及びHi・Lo切替レバー装備、デフロック等（高機動車と同様の装備）

前輪…ダブルウィッシュボーン 後輪…セミトレーリングアーム

登坂能力…tanθ60%

行動距離 約500 km

感染地へ（前書き）

これまでの自衛隊の装備

89式小銃

> i 3 3 4 4 0 — 4 2 0 3 <

ミニミ機関銃

> i 3 3 4 4 1 — 4 2 0 3 <

軽装甲機動車

> i 3 3 4 4 2 — 4 2 0 3 <

チヌーク

> i 3 3 4 6 5 — 4 2 0 3 <

ブラックホーク

> i 3 3 4 6 4 — 4 2 0 3 <

偵察用オートバイ

> i 3 3 4 7 1 — 4 2 0 3 <

M2火炎放射

> i 3 3 4 6 9 — 4 2 0 3 <

対人狙撃銃

> i 3 3 4 6 6 — 4 2 0 3 <

9mm拳銃

$$\begin{array}{r}
 > \dot{i} \\
 &3 \\
 &3 \\
 &4 \\
 &7 \\
 &0 \\
 &— \\
 &4 \\
 &2 \\
 &0 \\
 &3 \\
 <
 \end{array}$$

感染地へ

俺、石倉陸曹長はゾンビなんて怖いと思ったことはなかった。

腐りかけた死体が起き上がって、人肉を欲して地上を彷徨う。昔そういう映画を何本か見たことある。宇宙線や謎の流行病や悪魔が原因……ってやつだ。

そんな怪物が暴れるなんて、正直俺は怖がるどころか笑ってしまった。俺にとってゾンビ映画はコメディ映画と同じもんだ。

いつだって一番恐ろしいのは人間だ。戦争を始めるのも、犯罪を起こすのも、人が死ぬ原因を作ってるのも、いつだって人間だ。

俺達自衛隊は、普段は厳しい訓練をつんで、災害などが発生すると、人命救助のために現地に派遣され、人々のために戦った。そう思えばゾンビなんて猫みたいに可愛いぜ。

だが、ゾンビは存在した。いや、厳密にはゾンビではない。狂犬病に類似した謎の伝染病に感染した人間——すなわち感染者が東京を歩き……いや走り回っている。

ゾンビは腐ってるから走ることなんて出来ないが、感染者は違う。謎の伝染病に感染した人間は運動神経が上達し、未感染者を発見すれば、襲う。

そんな狂気に満ち満ちてる感染地——すなわち東京に、俺を含む4人の陸上自衛隊と1人の厚生労働省の博士が突入する。まさに、5人の勇者だな——

俺達5人は軽装甲機動車に乗った。本来、軽装甲機動車は4人乗りだが、後部座席上部ハッチを開け、1人が機関銃手になれば、5人乗りは可能になる。

今回は矢倍が機関銃手になった。まさにやばい。

俺は後部座席に乗り、良治って博士は俺の左に座った。運転席には永田、助手席には尾崎が乗った。

この機動車は防弾性だが、5人の命を任せるには少々心配だな。ど

うせなら、戦車でいきたいものだ。

車は発進し、ゲートらしい所の前まで行った。防毒服を着用した隊員が運転席の永田に話しかけた。

「立ち入るには許可が必要です」

「許可なら出てる。現場責任者の前原一等陸佐が出した」

「失礼しました。どうぞ」

ゲートが開いた。俺達の命を乗せた機動車が東京に入っていく。

狂気の街に突入した。もう後戻りは出来ない。俺は緊張感のせいか、銃の点検をした。

俺の持つ89式小銃は自衛隊が制式化した自動小銃である。90年代以降、陸上自衛隊の主力小銃となっている。諸外国のアサルトライフルに相当する。89式5.56mm小銃は64式7.62mm小銃の後継として開発され、1989年に自衛隊で制式化された。

自衛隊の他、海上保安庁、警察の特殊部隊（SAT）においても制式採用されている。開発製造は豊和工業が担当し、1丁あたりの納入単価は20万円台後半から34万円（調達数によって変動）。納入先が自衛隊など日本政府機関のみに限られるため、現役の主力小銃として高価な部類に入る。

5.56mm口径は、自動小銃の中でも西側のアサルトライフルとして標準的な口径であり共通の規格の弾薬、すなわち5.56mm NATO弾とSTANAG4179に準じた弾倉を採用しており、必要があれば在日米軍などの同盟軍と弾薬を共用できる。また、自衛隊・米軍で採用されている5.56mm機関銃MINIMIとも弾薬互換性を持つ。

形状は日本人の平均的な体格に適した設計がなされている。銃身長420mmというカービン（短縮小銃）に近い長さでありながら、大型の消炎制退器の銃口制退機能によって高い制動性を有する。また取り外し可能な二脚を有し、接地することで安定した射撃ができ

る。銃床は固定式だけでなく、コンパクトに折りたためる折曲銃床式が空挺隊員や車両搭乗隊員向けに配備されている。

材質・製造方法は大量生産が容易なように選択されている。銃床、銃把、被筒には軽量かつ量産性に優れた強化プラスチックを採用し、金属部分はプレス加工を多用している。さらに銃を構成する部品数が64式から大幅に減り、生産性や整備性が向上している。

冷戦末期に設計された本銃であるが、海外派遣やゲリコマ対策など新たな課題に向けて、各部の改修・改良が実施されている。進捗は部隊によって異なるが、左側切換レバー設置や光学式照準器の装着などが進められている。さらには本銃を試作原型とした「先進軽量化小銃」が開発中である。

標準付属品の89式銃剣、負い紐スリングを装着する機構を備える他、専用発射機を必要としない06式小銃で弾を銃口に装着し発射できる。広報向けの一般公募愛称は「バディー」であるが、部隊内では単に「ハチキュウ」と称されることが多い。

そんな小銃を、俺は握ってる。引き金の切れがいまいちで、命中精度はアメリカ軍のアサルトライフルに負けるが、俺達の小銃は職人さんにちよつと魔法をかけてもらったから、アメリカ軍のライフルよりあたる銃になった。この小銃は重い。だが、この重さは人の命を絶つ重さだ。

俺は今日の記憶を失ってる。感染者、一体どういう奴らだろうか？
そんな思いを抱えながら、車は走っている。

良治の正体

石倉は自身の小銃を何回も点検している。

「隊長、一体何回点検するのですか？」

尾崎はバックミラーで石倉の様子を見ていた。

「気が済むまで何回でも」

「隊長、今回の任務は？」

そういえば聞いてなかった。

良治が代わりに答えた。

「この場所に向かってください」

良治はそう言いながら、印の付いた地図を渡した。

「ここに何があるんだ？」石倉はそう聞いた。

「実は、ブラックホークの墜落現場です」

ブラックホークの墜落現場と聞いて、尾崎は不安に襲われた。

「誰が乗っていたんですか？」

「最重要人物だ。政府関係者ではないが、今回の事態の関係者だ」

石倉は考えを張り巡らせた。今回の事態の関係者ってことは、研究員か？

尾崎は地図を永田に見せた。

「案外近いですね」

「何分くらいにつきそうだ？」

「もう目の前です」

ブラックホークの墜落現場に付いた。そこは、狭い道路だった。ブラックホークは無残な姿をさらしていた。爆発が起きていないのか、原型は留めていた。

「よし降りるぞ」

石倉はそう言った。良治を残して全員、機動車から降りた。

尾崎がブラックホークの中に入った。

「隊長、操縦士たちの死体以外何もあります」

石倉はすぐ近くのマンションらしい建物を見た。

「最重要人物はこの建物に逃げた可能性がある」

そう言って1人でマンションに入った。

すると、物音が聞こえた。

「3階から聞こえますね」

いつの間にか尾崎が居た。

「そうか、3階か」

石倉はエレベーターのスイッチを押した。

だが、電力が供給されてないのか、何の反応もなかった。

石倉は仕方なく、エレベーターの横の階段に上がった。

「よせ、感染者が居るかもしれない！」

石倉は良治の忠告を無視し、1人で向かった。

3階では女性の鳴き声が聞こえた。先の物音といい、女性の鳴き声といい、暴漢に襲われたのか？

マンションの廊下で女性が座り込んで泣いていた。

「すいません、大丈夫ですか？」

石倉はなるべく丁重に言った。怖がらせないためだ。だが、女性は顔を上げた。そして、近くのドアに入り込み、鍵を掛けた。

「待って！」

石倉はドアを開けようとしたが、開かなかった。

その時、何者かに足を掴まれた。石倉は床を見た。そこには、瀕死の警察官が倒れていた。

「大丈夫ですか」

「……われた……」

「しっかりしてください！何が割れたんですか？」

「…う…ばわ…れた…」

「何を？」

「拳銃を…」

「動くな」

いつの間にか、サラリーマンのような男が警察官用の回転式拳銃をリボルバー

「待て！ 撃つな！ 俺は何も危害を加えない！」

「分かった。渡すから撃たないでくれ」

石倉は銃を渡そうと男に向いた。その瞬間、石倉は男の拳銃を持つてゐる右手首を掴み、捻った。

男は拳銃を落とした。すかさず、小銃を男に向けた。

「両手を頭の後ろに置け」

男は両手を頭の後ろにやつた。その時、銃声が鳴つた。

彈丸は、男の額に炸裂した。男は倒れこんだ。即死だった。

「大丈夫か？」

「部屋に逃げ込んだ女か？」

「名前？」

警察官は黙り込んだ。

石倉は警察官の胸を見た。胸には2つ小さい穴が開いていた。銃で撃たれたのだろう。

脈をはかった。完全に死んでいる。

「隊長！」

尾崎たちがやって来た。石倉は尾崎の下に駆け寄った。

「いまの銃声は？」

「なんでもない、それより扉を開けるのを手伝ってくれないか？女性を立てこもってるんだ」

「いいですが、どの扉ですか？」

「あの扉だ」

石倉は指を指そうと振り向いた。だが、女性の入った部屋の扉は開いていた。警察官の死体もなかった。

「馬鹿な！」

石倉は部屋に入った。リビングに入った瞬間、衝撃が待っていた。

警察官が女性を食っていた。女性の首筋を噛むたびに食いちぎっていた。

「嘘だろ…」

警察官は死んだはずだった。だが、石倉の目の前で女性を食っている。

「隊長！どうし…うわあ！」

尾崎は思わず悲鳴を上げた。警察官は石倉を見た。そして、うなり声を上げながら立ち上がった。

「待て！俺だ！」

警察官は恐ろしい奇声を発しながら石倉に向かって走った。石倉は右手で殴った。

「正気に戻れ！」

警察官は石倉の頭を掴んだ。尾崎は警察官を後ろから取り押さえた。「隊長！撃ってください！この人は感染者だ！」

石倉は銃を構えた。

「許せ」

引き金を引いた。89式小銃は火を噴き、弾丸を放出した。弾丸はまっすぐ検察官の頭を貫いた。

警察官は2度死んだ。

良治と残り2人の隊員が来た。

「どうした？」

石倉は良治の胸倉を掴んだ。

「お前！ 一体何を隠してる！」

「隊長落ち着いて！」

尾崎は石倉と良治を離した。

「一体何の感染だ！」

「単純な感染とは違う」

「あれ見れば誰にだって分かる！！」

「隊長、どうしたんですか？」

石倉は警察官を指した。「あの警察はな、つい1分前までは何ともなかった！ 死体だったんだ！ なのに死体が立ち上がって、人を食った！ 狂犬病と明らかに違う！！」

「君達は、私の発令する命令を実行すればいい」

「あんた何者だ！ 厚生労働省と聞いたがどうもおかしい！」

「何を馬鹿な……」

永田は冷静な声で聞いた。

「あんた何者だ？ 厚生労働省だろう？」

「労働省は何も関係ない。真相は知らされてないし、この事態の担当でもない」

良治はポケットに入っているカードを見せた。永田は見た。

「冗談きついで：隊長、こいつは本州生物科学研究所の人間だ」

本州生物科学研究所だと？ あそこは半年前に出来たばかりの研究所だ。

「おい、ここは何に汚染されてる？」

永田はからかい口調で聞いた。

「バイオセーフティーレベル4の機密ウイルスが東京に漏れたんだ」
永田は笑った。やけくそ笑いだ。

「どんなウイルスだ？ 狂犬病か？ 新型狂犬病か？」

「新種のウイルスだ」

尾崎と矢倍は驚いた。

「半年以上前に起きた、大羽中学校封鎖事件で発見された新種のウイルスだ」

「どんなウイルスだ？」

「呆れたな。自衛隊は情報を全ての隊員に伝えてないのか？」

「あの事件の真相を知ってるのは幹部と事件関係者だけだ」永田は冷静に答えた。

「一体何のウイルスに汚染されてる！」

「ラブドウイルス科で極秘機密の新種感染症、デモニーヨ DEMONYO」

「デモニーヨ？」

「ある科学者のレポートによると、ウイルスはフィリピンのある少女に発見され、それを日本に持ち込んだ。ウイルスは、感染すると、感染者の脳に侵入し、感情を司る神経を破壊し、凶暴性を剥き出しにする。つまり、殺人衝動を引き起こす」

「実はこのウイルスに免疫を持った少女がいる。名はソフィー・ヴェルネで、封鎖事件の生還者の一人で、ウイルスに感染しながらも発症してない。つまり保菌者だ」

「この子はしばらく研究所で研究されてた。だが、研究所で停電が発生し、この子は脱走した」

「それで感染が広まった？」

「少女はすぐに捕獲されたが、彼女を運んだヘリコプターが何らかのトラブルが発生したのか、墜落した」

永田は笑った。「で、俺達に少女を探せと？この拾い東京でどこに居るか分からない少女を？」

「少女が行きそうな場所は検討がついてる」

「事情は分かった。さっさと少女を見つけて、この狂気の街からさっさと出よう」永田はそう言って、外に出て、機動車に向かった。

尾崎と矢倍も後に続いた。

「少女の血液で、ワクチンが作れるかもしれない。頼むぞ」

良治も外に出た。石倉は、近くの椅子に座った。

くそみたいだぜ。これがアメリカ、イギリス、フランス、スペインならまだ分かるぜ。でも何でよりによって日本なんだ？

そんな思いを抱えながら外に出た。すると、階段の上から、白いワンピースを着た外国人少女が降りてきた。石倉は警察官の遺言を思い出した。

「そこのお嬢さん」

なるべく優しくそうに言った。少女は石倉を見た。明らかに怯えてる。

「大丈夫だよ、俺は何もしない。安心しろ」

小銃を背中に隠した。少女は上へ逃げた。

「持って！」

石倉は追いかけた。だが、居所が分からなくなった。

「まったくついてないぜ」

だが石倉は気づいていなかった。その少女こそが、任務の目標であることを

保菌者の対面（前書き）

無症候性キャリア（むしようこうせい一、無症候キャリア）とは、病原体による感染が起こっているながら、明瞭な症状が顕れないまま、他の宿主（ヒトや動物など）にその感染症を伝染させる可能性のある宿主のこと。特に細菌による感染の場合は、無症候性保菌者、健康保菌者と呼ばれることもある。

さまざまな病原体がその宿主（ヒトや動物など）に感染することで感染症が引き起こされるが、このとき感染が成立しても、その感染症特有の症状がはつきりと判らない、無症候の場合がある。宿主の免疫などの感染に対する防御機構の働きによって発病するに至らない場合（不顕性感染）や、その病原体に特有の性状（慢性疾患の原因であるなど）によって症状の出ない時期がある場合が、これにある。

この状態の宿主は、症状が顕れないために外見上は健康で非感染者との見分けがつかないが、その病原体が宿主の体内で増殖している場合があり、特にヒトからヒトに感染する伝染病などでは、本人が気付かないままに感染源としての役割を果たす場合がある。このような状態にある宿主を無症候性キャリアと呼ぶ。

代表的な例の一つに、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）感染症（後天性免疫不全症候群、エイズ）の場合がある。HIV感染症では感染直後に一過性の風邪様の症状があらわれるが、その後長い場合は10年間以上、症状の顕れない時期（無症候期）が続き最終的にエイズを発症する。しかし、無症候期の間もHIVは血液中でT細胞に感染しながら徐々に増殖しており、この時期の宿主も感染源と

して血液や性交渉を介してHIVを伝染させる能力を持った、無症候性キャリアの状態にある。このほか、ヒトT細胞白血病ウイルス（ヒトTリンパ球向性ウイルス）や、慢性ウイルス性肝炎の原因となるB型肝炎ウイルス、C型肝炎ウイルスなど、潜伏感染や慢性感染を起こす病原体による疾患で多く見られる。

HIV感染症のように進行の遅い疾患以外にも、クラミジアや淋菌による性行為感染症では女性に自覚症状が出にくいため、一種の無症候性キャリアとなりうる。またノロウイルスによる食中毒などの流行にも無症候性キャリアが関与している可能性が指摘されている。

無症候性キャリアになった人物としては、腸チフスの原因となるチフス菌が胆嚢に感染した結果、その無症候性キャリアとなったメアリー・マローンが知られる。

保菌者の対面

ソフィーは、4階の一室に入り、鍵を掛けた。

「また自衛隊が捕まえに來たの。しつこいわね」

彼女は自衛隊を見かければ、自分を捕まえに來たと思っている。それもそのはずだ。彼女を捕まえたのは自衛隊だからだ。

彼女は全てを覚えていた。。大羽中学校で感染し、完成していたワクチンを打たれ発症せずに済んだ。数え切れぬほどの回数に及ぶ、血液や細胞組織が採取され、自由を奪われた体には無数の電極が繋がれ、彼女の肉体に関するありとあらゆるデータが記録された。彼女という生命体はさまざまな計測機器によって丸裸にされ、彼女の知らない情報が恐るべき精度で数値化された。

得体の知れぬ薬剤がひっきりなく投与された。興奮をもたらすもの、死を予感させるまで鎮静させるもの、意識を薄れさせるもの、神経を過敏にし、1秒を10分にも錯覚させる作用を持つものなど。囚われた彼女の精神は翻弄され、肉体は蹂躪され続けた。ワクチン開発に必死になっていた研究員達は彼女にさまざまな試作段階のワクチンなどを投与していた。彼女にとって、彼等は道徳心も論理観も捨てた無情な人間に見えた。

その中で、とりわけ狂ったように見える女が居た。

人体実験を主導するその女は、彼女を人格を持ったただの実験体ナンバー001としか見ていなかった。常に彼女に笑顔を見せた。狂気の笑顔だ。大澤は彼女を試作段階の抗ウイルス剤の被験体第1号と選んだ。

抗ウイルス剤の完成を待つ間、ソフィーは冷凍保存を施された。その処置が、彼女の運命を大きく変えた。＜大羽中学校封鎖事件＞以降、治療済みのDEMONYO（悪霊）ウイルスが再び活発化したのだ。その結果、彼女の体に強力な抗体を生み出すきっかけとな

った。

それに気づいた大澤は、彼女の体から抗体を摘出し、DEMONのオリジナルタイプの毒性を抑えるのに利用した。保菌者となった彼女は、生きがいを感じない生活を続けた。

「もう絶対に捕まりたくない！」

ソフィーは不意に呟いた。

「同感だな」

後ろから、渋い男の声がした。ソフィーは振り向いた。

リビングルームのソファーにトレンチコートを着た、フードを被った男が座っていた。

「お前の気持ちは痛いほど分かるよ」

男は同情だという素振りをした。

「あなたは…誰？」

男はテレビをつけた。テレビからニュースが流れた。

「見ろ、東京に関するニュースが流れてる。可哀相な連中だ。真実を知らされてないなんて」

男は笑った。その笑いは狂っているように感じる。

「質問に答えて」

不思議だった。この男とは、どこかで会った気がした。

「俺か？ そうだな、苗字は忘れたから名前だけ教えよう。名前は大輝。大きい輝きと書いて大輝」

大輝：自分にワクチンを打ち、自殺したかつての教師を思い出した。

「お前は俺を知らないだろうが、俺はお前を知ってる」

「ストーリー？」

「違う違う！俺もそこまで変態じゃない！」

「そこまで…つまり変態？」

「言い方が悪かったな…俺は怪しい男じゃない」

「夏なのにコート着てて、よくそうやって断言できるわね」

大輝は立ち上がった。

「つまり、フードをはずせば信じてくれるか？」

「今よりは」

「今よりか…か？」

大輝は迷った。

「まあ、少しは汚名返上しなくてはな」

大輝はフードをはずした。ソフィーは絶句した。

大輝は死体以上に肌が白かった。血管は吹き上がっており、頭：いや、こつと体中の体毛が抜けており、強膜は黒く、虹彩は赤く染まっていた。犬歯が異常に発達しており、爪は鋭くなっており、まるで吸血鬼ノスフェラトウのようだ。もっとも、ノスフェラトウはネズミに似ているが、こっちは狼を連想する顔だ。禿げ上がった頭、狼のような顔、鋭い爪、黒いコート、悪魔的な印象を受ける。

大輝はゆっくりと歩いた。ソフィーはそのたびに下がった。前にも化け物と対峙したことはあるが、こっちのほうが恐ろしい。

「怖がらなくてもいいよ、お嬢さん。俺は何にも危害を加えない」
大輝は紳士的な素振りをした。

「し、信用できない…」

「こんな外見じゃあ仕方ないな。まあ、一杯紅茶でも飲もうや」
大輝は紅茶を入れた。リビングの中央のテーブルに置いた。紅茶の香りを楽しみながら、大輝はゆっくり飲んだ。

「スコーンもあるぞ、食べるか？」

ソフィーは横に首を振った。大輝はスコーンに蜂蜜をかけ、むさぼるように食べた。

「あ、あなたは何者？」

化け物のような外見をしているのに、知能を保っているこの生命体に、ソフィーは恐怖を感じていた。

「俺か？俺はお前と同じ保菌者だ」
キャリアー

これには驚いた。保菌者は自分だけかと思っていた。

「お前と違ってな、俺は毒性の低いウイルスに感染した。体の細胞組織や遺伝子、生体組織、体内色素、あらゆるものが突然変異して、

今に至った」

これは気の毒に。そう思った。

「さらに、タイプ2と呼ばれるウイルスにも感染した。これは発症しないで、血液中や唾液中にある」

なるほどね、だから保菌者になったんだ。

「わ、私はこれで失礼します」

「いいのか？外は危険だぞ」

「だ、大丈夫です」

「外には自衛隊と感染者だけだと思ってるのか？違うな、外には発^{クレ}狂者やら、怪物がいるぞ」

聞きなれない用語が出てきた。

「怪物？」

「今はまだ教えない」

大輝は立ち上がった。そして、うなり声を発した。

「た、大輝：さん？」

大輝はどの感染者よりも恐ろしい奇声を発した。

ソフィーは急いでドアを開け、外に出た。

そして、1階まで逃げた。

「はあ、はあ、はあ、何：あの人？」

ソフィーはそのまま信二達の居る学校に向かうことにした。

大輝は、走り去るソフィーを見た。

「ふ、お前さんは期待通りの動きをするな」

大輝は、怪しげな目でソフィーを見守った。

保菌者の対面（後書き）

どうも、作者です。ちょっとちんたらしすぎたので、ここから一氣に話を進めようと思います。

また、ご感想などいただけたら、まことにうれしいことです。これからもよろしくお願いします

班別行動、4人目の発狂者（前書き）

クレイジーズ
【発狂者】

老婆

孫を失い発狂。感染者に殺される。

妨害者

怪物じみた防御力を誇る。転落死したと思われる。

川原あゆみ

祖母を失い発狂。処刑人に殺される。

【謎の感染者】

処刑人

頭巾を被った巨漢。分厚い脂肪と、ウイルスの分泌する化学物質で強化された筋肉の層で包まれている。

【謎の保菌者】

岡本大輝

保菌者。怪物じみた容姿をしている。なぜかソフィーのことを知っている。

班別行動、4人目の発狂者

「皆、提案がある」

信二は体育館のステージに乗り、大声で言った。

「どんな提案だ？」

真人は大きな声で聞いた。

「まず1つ目、体育館から出よう」

吉川は反発した。

「は、やだし〜ここに居たほうが安全だもん」

むかつく言い方だな。首をへし折りたい。出っ歯め！

「確かにそうだが、処刑人は鉄製の扉を壊せるんだぞ」

「だから？」

本当にいらつく男だ。出っ歯め！

「それに食料がない。救助もきつと難航すると思う。だから、ここよりもっと安全な場所にいく必要がある」

総督はうなずいた。「一理あるな」

「まず、渋谷区から出る必要がある。反対意見は？」

吉川は手を上げた。

「俺反対だし〜」

「この馬鹿以外は？」

誰も手を上げなかった。

「じゃあ、決定だな」

信二は地図を出した。

「班別行動しよう」

真人は首を傾げた。

「全員で行かないのか？」

「この数だと、感染者に見つかりやすいし、全滅の可能性が大きい」
「なるほど」

信二は班を作った。

A班

信二十茜

真人

真希

真斗

紀子

須田

猫野

B班

聖夜

武田

トリエン

雑賀

鳥山

綾瀬

小島

D班

総督

蛸田

吉川

佐々木

五右衛門

「バランスは大丈夫だな」

「ああ、そのはずだ」

信二は地図を出した。

「待ち合わせ場所はここだ」

「渋谷外の：遠いな」

全員、外に出た。感染者はいない様子だ。

「じゃあ、健闘を祈る」

信二はそう言つてメンバーを連れて歩き始めた。聖夜と総督も別々に歩いていった。

信二たちはしばらく歩いていると、1軒の家に着いた。

「人気がないな…」

「言ってみようぜ」

真人は家の中に入って言った。他のメンバーも後に続いた。

真希は庭に行った。

庭では、1人の男が何かしていた。

「あの、ここの住人ですか？」

「返せ」

突然返せと言われ、困惑した。

「あ、あの」

「返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ」

「あの！」

「返せ！」

男は振り向いた。赤い長ズボンだけ履いて、裸足で上半身裸だった。麻袋を紐でぐるぐる巻きにて被っており、右目だけを覗かせた。何よりも恐ろしいのは、伐採用大型チェーンソーを持っていた。

「ま、待ってください、落ち着いて」

「力工セ！返せ！！」

男はチェーンソーにエンジンを掛けた。チェーンソーの恐ろしい回転音が響いた。

「かえせええええ！！！」
「1」

男はチェンソーを構え、走ってきた。生命の危機を感じた真希は玄関まで走った。玄関の扉が閉まつてる。鍵が掛かっていないから、普通にドアを開けられた。

真希が家に入った瞬間、何者かに殴られ、倒れた。

殴った人物は、上半身裸で、平均男性より大柄で屈強な肉体を誇っていた。

「うんがうんが！」

巨漢は真希の両肩を掴み、軽々と持ち上げて、投げ飛ばした。

真希はリビングルームまで投げ飛ばされた。

「いたたたた」

チェーンソーのエンジン音がした。よく見ると、チェーンソー男がチェーンソーを振りかざした。

真希は横に転がることで避けた。

「危なっ！」

真希が立ち上がろうとしあ瞬間、巨漢が両拳を会わせてあと振り下げた。両拳は真希の背中に当たり、再び倒れこんだ。

真希は姿勢を低くしながら、階段を駆け上がった。

階段のすぐ近くのドアから叩く音が聞こえた。

「誰か開けてくれ！」

信二の声だった。

「信二君！どうしたの！」

「全員閉じ込められた。鍵がかかってる！」

鍵穴があった。残念ながら鍵を持っていない。

チェーンソーのエンジン音がした。下を見ると、チェーンソー男が居た。ズボンのベルトに鍵がぶら下がっていた。

「嘘でしょ！冗談きついよ！」

男はチェーンソーを構えながら階段を駆け上がった。

「さて、どうしましょうか？」

急速（前書き）

どうも、作者です。
旅行に行っていたため、更新が遅れました。
本当にすいません。

〔登場発狂者〕

チェーンソー男一（麻袋男）
麻袋を被ってチェーンソーを振り回す男。

巨漢

平均男性よりも大柄な男。凄まじい筋肉を誇り、プロレスラーのような男。

急速

不愉快なチェーンソーを回転させながら麻袋を被った男が階段を駆け上がった。

真希は廊下の奥の扉に入った。そこは物置なのか、沢山の物がホコリだらけで置かれたいた。

部屋は狭く、一人一人がやっと通れるスペースがあった。スペースを通ってみると。窓があった。

チェーンソー男がチェーンソーで扉を壊し、中に侵入した。真希はすかさず、近くのタンスの中に隠れた。男が部屋を見渡した。

「何処だ？出て来い！返せ！殺してやる！返せエ！」

真希はさっきから思っていた。返せ？まるで意味が分からない。初対面の男に何を返せばいいのか：

チェーンソー男は真希のタンスの前に立った。真希はタンスの扉と扉の間から覗いていた。

チェーンソー男が近くの布切れに被った物を見た。それは人型だった。

「見つけたぞ！」

男は布切れを取った。そこにはマネキンが立っていた。男は苛立ちの声を発し、チェーンソーでマネキンの首を切った。

「糞つたれが！あの雌豚が！どこ行っただ！」

雌豚と言われて平気な女性は中々居ない。真希はむっと来たが、今ここで出たら間違いないと殺される。

「待てよ？このタンスはどうだ？」

男はタンスに近づいた。

まずいと真希は思った。何かないかなとタンスの中を探していると上に物を掛けるための横棒があった。真希は棒を両手で握った。

男がタンスを空けた瞬間、真希は棒を握った両腕に力を入れ、自身の体を持ち上げ、両足で男の顔を蹴った。男は倒れこんだ。チェー

ンソーのエンジンは止まっていた。真希は男に乗っかり、顔を右手で殴った。男は悲鳴を上げた。

「河豚雄！助けろ！」

男が叫んだ数秒後、巨漢の男がやって来た。

「河豚雄！この雌豚を殺せ！」

巨漢は突進してきた。まずいと思ったときには遅く、真希は巨漢の突進をまともに食らった。

真希の体は軽々と吹き飛ばされ、窓を割って外に出された。

幸い、落下地点は柔らかい地面だった。またあの庭だった。柔らかい地面に落ちたが、衝撃は防ぎきれなかった。

「いててっ！」

落下の衝撃がまだ体に響いていた。弱弱しく立ち上がると、あの巨漢が飛び降りてきた。

巨漢は見事に着地し、変態のような息遣いをしながら、また突進してきた。

だが、今回は軽々と避けられた。

「同じ手は効かないよ！」

巨漢はスピード落とすことなく、コンクリート製の塀にぶつかった。信じられないことに塀にひびが入った。

「嘘っ！」

巨漢は振り返り、また突進してきた。真希は縁側から家に入った。居間のようだ。

すると、階段からチェーンソー男がやって来た。

「この雌豚め！返せ！」

「何を返せばいいのよ！」

いい加減にしろ間抜けと言おうとしたが、殺されるからやめた。だが、どの道このままでは殺されてしまう。

「落ちていてください、いいですか？あなたは何を返してほしいですか？」

なるべく優しく丁寧に言った。男はチェーンソーを下ろした。

「返してくれるのか？」

「まず何を返してほしいのか、教えてください」

男はしばらく黙り込んだ。

「俺の娘だ。娘を返せ」

「娘さんの名前は？」

「あゆみ、川原あゆみだ」

絶句した。川原は死んだと言ってしまったら、たぶん天国行きになる。

「あいつの妹は死んだ。妻も死んだ。母さんも死んだ。俺には、親友の河豚雄とあいつしか居ない」

ますます娘の死を伝えられなくなってしまった。

どうしよう…死んだって言えばこっちが殺される。でも、このまま黙っててもやばい。知らないと言ってもやばい。どうしよう…一緒に探そうって言おうかな？

「えっと、何とおっしゃればいいのでしょうか…その…」

「娘は死んだのか！」

「い、いえ！まだそんなこと…」

「おのれ！娘を殺しやがって！」

男はチェーンソーに再びエンジンを掛けた。あの、チェーンソー独特の回転音が響いた。

「河豚雄！殺すぞ！」

巨漢が縁側の窓を割って入ってきた。そう言えば、あの巨漢は一言も言葉を発してない。もしかして知能障害者かな？そう考えているうちに、2人が真希に向かって走った。

真希は右側に飛んだ。

2人は正面衝突した。男のチェーンソーが巨漢の腹を引き裂いた。

巨漢の切り口から腸が飛び出し、大量の出血をした。

「河豚雄！おのれ雌豚め！」

「逆切れとはこういう男のことを言う」真希はそう呟いた。

男はチェーンソーを振りかざした。真希は避け、男の急所に出せる

だけの力を振り絞って右足で蹴りつけた。男は絶叫を上げた。あそこを抑えながら、男は倒れこんだ。

真希は男のベルトから鍵を奪った。

「じゃ、貰っていくね」

そう吐き捨てて信二達の閉じ込められている2階の部屋に向かった。

2階の鍵を開けた。中に入る全員が出てきた。

「大丈夫か真希？」真人は真っ先に聞いた。

「まあ、大丈夫だね」

「糞！狐狩り幹部がこんな失態を！」須田は悔しそうに言った。

「くくく：お前生きて出てきたら、幹部に介入させてやろう」猫野は髭を整えながら言った。

「結構です」真希はきっぱり断った。

その時、チェーンソー音が聞こえた。

「糞！殺してなかったのか？」猫野は拳銃を構えた。だが、何かが切り裂かれる音がした。

すると、それは現れた。

人の皮で出来たエプロンらしいものを腰に纏っており、肌は白く、血管は吹き上がっている。頭には、巨大な鉄製兜を被っている。筋肉は異常くらい発達し、ジャイアント馬場を連想する身長を誇っていた。大勢のゴキブリを率いて、右手に大鉈を引きずってやって来た。先の処刑人とは別の異様さを誇っていた。体の筋肉は、この人型の怪物の怪力と不死性を強調していた。

怪物は信二達を見つけたか否か、階段を上がり始めた。

「皆逃げろ！」

信二が叫ぶと同時に全員奥の物置室に向かった。だが行き止まりだった。

「どうするんだ？」真人は怒鳴った。

「飛び降りるんだ！」

「本気か！」

「私が大丈夫だったから、きっと大丈夫だよ」

真希はさり気なく言った。信二は茜をしっかりと背負って飛び降りた。

「皆！大丈夫だ！」

「クレイジーだぜ」真人はそう言いながら飛び降りた。

須田が弓を構えた。真希が飛び降りた。同時にあの怪人がやって来た。

須田は矢を放った。矢は怪人の右肩に当たった。だが、発達した筋肉のせいか、そんなに貫通しなかった。真斗が飛び降りた。

「猫野！先に行け！」

「レディーファーストさ」猫野は拳銃を撃った。弾丸は怪人の右胸に炸裂したが、大して効いていなかった。

「2人でいこう」猫野は強引に須田を引っ張った。

「お、おい……！」猫野は須田と共に飛び降りた。

怪人は雄たけびを上げた。

B班と処刑人の対決。勝つのは・・・（前書き）

B班メンバー

聖夜

武田

トリエン

雑賀

鳥山

綾瀬

小島

『謎の感染者』

処刑人

頭巾を被った巨漢。ギロチンで作った斧を武器にする。

謎の怪人

信二たちと遭遇した怪人。鉄製の兜を被り、大鉈を武器として扱う。

B班と処刑人の対決。勝つのは・・・

聖夜たちは1軒の小さな店に隠れていた。理由は簡単だ。外は感染者だらけだ。

「知ってるか？」聖夜は外の様子を見ながら言った。

「何がだ？」武田は店で見つけた煙草を口に銜えた。

「煙草は健康に悪いぜ」

「知ってるよ。でも死ぬ前に吸ってみたい」

「今はやめろ。煙で感染者に気づかれる」

武田は舌打ちしながら煙草をポケットにしまった。幸いなことにこの店は、入り口は木製にドアで、窓には鉄格子がついていた。しかもここは飲食店だ。しばらくはここで隠れてもいいだろう。聖夜はそう思った。

「食事はどう？」

綾瀬は2人のところに寄った。2人は入り口を見張っていた。綾瀬の両手には皿があり、皿には焼きたてソーセージや、チーズや、手製ピクルスなどが乗っていた。メニューは悲しいが、見張りをする2人はいざって時に行動が出来ないといけないので、むしろ丁度よかった。

「「どうも」」

2人は受け取り、食べ始めた。

「うまいな」

「ソーセージがいい具合に焼けている」

この店の店主はどこに行ったのだろうか？聖夜は疑問に思っていた。2階建てのこの店の2階はいわゆる、家みたいなものだった。必要最低限の家具はそろっていた。だが店主はいなかった。恐らく逃げたのだろう。

「なあ、聖夜。家族は居るか？」

聖夜は食うことに夢中で自分が話しかけているのに気がつかなかっ

た。2度目の呼びかけでようやく気づいた。

「家族？居るよ勿論。両親に兄貴」

「お前の家族大丈夫か？」

「大丈夫だろ」

「妙に樂觀的だな」

「だって東京に居ないんだ」

武田は吹きそうになった。

「東京に居ない？」

「俺は家族と離れ、アパートで1人で暮らしている。生活費は家族が送ってくれるんだ」

武田はうなずいた。

「お前は？松江」

「大佐って呼べ」

「大佐」

「居ないな。孤児院で生活している」

聖夜は失礼なことを聞いた気持ちになった。「何だ、その、すまない」

「いいさ、両親はとくに他界してるんだ」
むしろ寂しく聞こえる。

独特なガスマスクの呼吸音が聞こえる。

「武田松江。お前の心が読める」

雑賀が大鎌を持ちながらやって来た。

「嘘コケ、サイコ」

「むっ？信じてないようだな。ならば、学校1のサイコキネシスとテレパシーを見せてやる」雑賀は笑い、天井を向いた。

「馬鹿馬鹿しい」

「読める…読めるぞ…お前の両親は交通事故で亡くなったな。お前は孤児院で生活しているな。お前は軍人に憧れているな。お前は大きなになりたいと思っているな。お前は——」

武田の過去を読み始めた。どれも正解だった。

「お前は……」

「もういい！」武田は怒鳴った。

「もういい……」

雑賀は武田に向いた。

「悲しい過去を持っているな。お前は両親に怒りを感じているな。いいぞ。怒りはお前の動力源だ。怒りがお前を強くしている。怒りこそがお前のあるべき姿だ」

聖夜には言っている意味が分からない。

「武田松江：お前は強い。だが自制心が弱いな。大佐と呼ばせるのはキャラ作りの為だろ？今にも爆発しそうな怒りを痛みで抑えているのだろうか？」

武田は太腿のベルト絞めた。ベルトには鋭い小さな棘が並んでおり、締め付けることで腿に刺さる。

「知っているか？怒りは絶望に勝る。お前は……」

武田は雑賀の胸倉を掴んだ。

「調子に乗るなよ。お前の読心術なんか、ほとんど間違えている。いい加減にガスマスクを外して、現実見ろ。現実はお前の読心術ごときで東京の惨劇なんか救えないんだよ。蛸！」

この時の武田は、本物の軍人に見えた。少なくとも聖夜には。

鳥山が2人を離れた。

「落ちて武田っていう奴。それに雑賀、勝手に他人の心を読むな」
雑賀はガスマスクを直した。

「私がいつ読心術をするかは私の——」

雑賀が突然黙り込んだ。

「どうした、雑賀？」

「今、大きな気配を感じる。すぐ近くに」

その時、店の入り口の扉が壊れた。

処刑人が入り込んだ。巨大な斧を引きずりながら。

「どうしたんですか？」綾瀬が2階から降りてきた。処刑人を見て驚いた。

「裏口から逃げろ！！」聖夜は叫んだ。小島が来た。

「裏口は駄目ですわ！感染者だらけです！」

聖夜は舌打ちした。椅子を持ち上げ、処刑人に投げつけた。椅子は処刑人の体にあたり、粉々に壊れた。処刑人は斧を振り回した。全員しゃがみこんで避けた。

「2階にあげって窓から他の家の屋根に飛べ！」聖夜は叫んだ。全員、2階に行った。

だが武田は処刑人の後ろに回り込み、包丁で背中を刺した。処刑人は大して怯みもせず、武田を掴み上げ、厨房に投げ込んだ。

「武田！」聖夜は厨房の扉を開け、武田に駆け寄った。

「俺のことはいい！早く2階へ！」

「だが…」

「早く！俺に考えがある！」

聖夜は厨房の梯子で2階に上がった。

「必ずあがってこいよ」

「ああ」

武田は立ち上がり、ガス栓を全開した。が、処刑人が厨房に入り込み、武田を右手で殴った。武田は頭を思いつきりうった。

「いってーな！今畜生！」

武田はふらふらしながら、厨房の隅に言った。

処刑人はゆっくりと近づいた。

武田は座り込み、煙草を銜えた。そして、マッチで火をつけた。

一服吸うと、咳き込んだ。

「なんだこれ？」

だが、2度目は急に体がのびのびとした。

「煙草っていいな」

処刑人はすぐ近くにいた。

「よお、一緒に天国行きだ。父さんと母さんに会えるぞ。母さんは美人だぞ」

処刑人は斧を構えた。だが、部屋に充満したガスが、煙草の火で爆

発した。

武田と処刑人は炎に包まれた。

聖夜は店の隣の家の屋根に飛び移った。その時1階が大爆発を起
こした。

「武田…武田!!」

1階は激しく燃えていた。

感染者の襲撃

「吉川裕也の視点」

気がつくと、俺達の班は、どこかのサイゼリアの中に隠れて居た。俺の班は狐狩りのリーダーの液田井に幹部の蛸田、剣道部の実力者である佐々木と五右衛門がメンバーだ。心強い身代わりだ。俺は彼らをとことん利用する。そして、切り捨てる。

俺はトイレに向かった。幸い、このサイゼリアの窓という窓は全て板で打ち付けられている。

男子トイレに入ると、俺は一瞬吐き気に襲われた。警察官の死体がトイレに座ってあった。

ホラー映画のおかげで、はかずにすんだ。

「さてよ？警察といえど…」

期待を胸に、俺は警察官のベルトのホルスターに手を伸ばした。

案の定、回転式拳銃リボルバーがあった。

コルトディティクティヴスペシャル。38口径、38スペシャル弾使用、装弾数6発の回転式拳銃。

日本全国都道府県警察制式採用銃で私服警官なども使っている。

俺は拳銃をホルスターから抜こうとした。だが、銃把グリップの底とゴム製っぽい紐が繋がっていて、持ち出しが不可能だ。悪態ついたかった。

だが、俺は護身用にと厨房から持ち出した包丁で拳銃の紐を切った。そして、拳銃をポケットに隠した。俺はとことんついてる。強力な利用できる連中と班を組み、拳銃を拾えるなんて……

もう怖いものは無い。この拳銃さえあれば、俺は液田井にも勝てる。

結局、地味で気持ち悪いと言われていた俺が、生き残れるんだよ。

俺を見下してた連中は後悔するだろう。俺は無敵だ。

「液田井の視点」

俺は真ん中のテーブルに座り、メリケンサックを磨いた。

他の班は無事だろうか？俺の幹部が居るから、心配は無いだろう……たぶん。

俺は吉川が信用できん。あいつは、地味でルックスも悪いが、地味な奴ほど根は悪い奴だと、不良の世界を生きてはじめて知った。きっと何か企んでるだろう。あいつは俺達を利用する気だな？

あいにく、利用するのは俺だ。

「蛸田の視点」

さっきから胸騒ぎがする。なぜだろうか？

つい数分前に、どこか遠くの店で爆発が起きた。心配する俺に、ボスは「車が衝突したんだろう。心配するな」とか言っていた。確かに、他の班の連中で自爆するような奴なんて居ない。

だが、なぜか胸騒ぎする。

俺は伐採用の斧を見つめた。

今は渋谷中の住民が感染者になっている。

まったく、ゾンビ事件はアメリカだけで十分だ。よりによって日本だなんてな。

百を越える感染者相手に、1本の斧で戦うのは無理がある。

すまないがボス、俺はいざとなったら、あんたを裏切る。

「五右衛門の視点」

油断は死を招くぞ。

「奈々子の視点」

日本でゾンビだなんて、冗談みたいだな。

私は、何故か真人が心配だ。彼は無事なんだろうな……死んで無

いよな……

いくら退部した裏切り者でも、こんな状態では心配になってしま
う。私の頭はいかれているのか！

なぜ真人ばかりを心配する！他の奴も心配しないとな！

……

やはり真人が心配だ。私の隣ですすり泣く少女が居る。先にサイ
ゼリアに逃げ込んだ少女だ。

この子は両親が心配で泣いている。両親……そうだ！父さんと母さ
んは無事なんだろうか！

無事を確認したい。後真人の安否……なぜ真人が出てくる！

私は厨房に飾ってあった日本刀を眺めた。これは真剣だ。切れ味
も素晴らしいの一言だ。

私は少女の頭を撫でた。

「大丈夫、お父さんも、お母さんも無事だよ」

「ひっく……う、うん」

私は、少し暗い気分になった。

突然、少女が顔を上げた。

「お父さん！お母さん！」

少女は窓に駆けた。

「危ない！」

私は少女に駆け寄った。

だが、時は遅かった。

窓がわれ、板が折れ、少女は外の世界に居る住民に腕を掴まれ、
引っ張られた。

ウイルスによって、人間らしさを失った哀れな感染者が、少女の
右腕を外に引っ張った。

私は助けを求めながら、少女の左手を引っ張った。

「お姉さん助けて！」

少女は泣き叫んだ。他の班のメンバーがこっちに走ってきた。

「痛い！痛い！助けて！」

頼む、助かってくれ!!

「少女の視点」

外の怖いおじさん達が、あたしの腕を引っ張ってる。腕が千切れそう……!

「お姉さん、助けて!」

あたしはお姉さんに助けた欲しかった。

あたしの腕を引っ張ってるのは、お父さんだ。

「お父さん?」

お父さんはあたしの腕を噛んだ。

「痛い! 痛い! 噛まないで! お願い!」

お父さんはあたしの腕を食べてる。

「お父さんやめて!」

お父さんは腕をはなしてくれた。

腕を引っ張ってたお姉さんは転んで、あたしはお姉さんの上に転んだ。

お父さんから噛まれた腕が、とても痛かった。

腕だけじゃない。頭も痛い。割れちゃう!

あたしはお姉さんを見た。

綺麗なお姉さん……

あたしの頭が壊れそう。お姉さんを襲いたい。

背中が痒い。お腹が減った。

頭が痛い。背中が痒い

痛い痒い痛い痒い——お姉さん美人ね——憎い

ひどくおなかがへる あま 痛い

いたい

かゆい

ころしたい

「神の視点」

幼女は血を吐いた。奈々子は少女の身を案じた。

幼女は奈々子を見つめた。目は正常だ。

次の瞬間、虹彩が突然赤くなった。

「大丈夫か！」

液田井（総督）は奈々子に駆け寄った。

突然、幼女が奇声を発しながら、奈々子の首筋を噛み付こうとした。

「やめろ！私だ！しっかりしろ！」

奈々子は幼女の首を掴み、顔を遠ざけた。

「佐々木！踏ん張れ！」

蛸田は斧で幼女の後頭部を割った。後頭部が割れ、大量の血と脳の破片が流れ出した。

「油断は死を招くぞ」

五右衛門は奈々子に手を差し出した。

「あ：ありがとう：」

その瞬間、次々と感染者が窓を割って入ってきた。

「全員厨房の裏口から逃げろ！」

総督はそう怒鳴って、進入して来る感染者の頭をメリケンサックで殴った。

「行くぞ！」

蛸田は全員を誘導した。奈々子は幼女の死体を見た。

「すまない……！」

絶命した幼女に謝って、厨房に走った。

総督は感染者を殴りつけた。

「おら！その程度か！」

総督はテーブルに乗った。

「おいしい餌がここに居るぞ！ご馳走だ！」

総督は上がってくる感染者を次々とメリケンサックで殴り殺した。殴られた感染者は、骨が砕かれ、棘で肉を引き裂かれた。

「どうしたゾンビ！あの処刑人^{デカマッチョ}が居ないと雑魚だな！」

次々と感染者が殺されていた。だが、同時に次々と窓を割って進入してきた。

「糞！増える一方だ！」

奈々子が日本刀をさやから抜いて、厨房から来た。

「早く来て！」

総督は思いついた。

「ガス栓を全開だ！」

「え？」

「全部のガス栓を全開だ！」

感染者の1人が奈々子に向かった。奈々子は反射的に感染者を刀で切り裂いた。

感染者の頭は胴体から落ちた。大量の血が、噴出した。奈々子は一瞬吐きそうになった。

だが、総督の言うとおり、厨房に戻り、ガス栓を全開した。

「やったぞ！」

厨房から叫んだ。

「お前は出る！」

奈々子は裏口から外に出た。そして、ワゴン車に向かって走った。運転席で、蛸田が待機していた。全員、後部座席に座っていた。

「ボスは！？」

「もうすぐ来る！」

総督は厨房に入った。トースターに雑誌をさしこみ、スイッチを入れた。

「バーベキューだ」

総督は裏口から外に出た。感染者が次々と、厨房に入りこんだ。総督はワゴン車の助手席に座った。

「出せ！」

蛸田はアクセルを踏んだ。

だが、なぜかワゴン車はバックした。

「ごめん、間違えてバックした」

今度こそアクセルを踏んで前進した。
感染者が裏口から出てきた。
が、

突然サイゼリアが大爆発を起こした。店内の感染者は爆死し、付近に衝撃波が発生した。

「何があった？」

蛸田は驚いた。

「簡単さ。どこかの映画の真似をした」

ワゴン車は、そのままサイゼリアを離れた。

「感染者の視点」

感染者の1人、幼女の父親は走っていく車を見つめた。爆発で吹き飛ばされたが、五体は無事だ。

父親は奇声を発した。

そして、次なる獲物を求め、彷徨い始めた。

虫の王 特殊感染者

ソフィーは見覚えのある声を聞いた。2階建ての家の中から、間違いない信二の声を聞いた。

信二君！

彼女は大きく壊れた玄関から何の迷いもなく、家に入った。

そして、2階に上がった。

だが、廊下の奥でそれを見た。

ざわざわと聞こえる音。

虫の群れだ。

洪水のようにうねりながら、それは廊下の奥で湧き出ていた。が、奥の部屋から何かがこっちにやって来た。

それは虫ではなかった。

それは虫たちの王のように、群れを率いてソフィーの方へと歩いてきた。その姿は、ある種の威厳があった。

上半身は裸だ。逞しいその体には、歴戦戦士のように無数の切り傷の跡が残っていた。

その盛り上がった逞しい肩の上にあるのは、頭ではなく、巨大な鉄製の二等辺三角形型の兜を被っていた。顔面部分が前に突き出ていた。まるでピラミッドのようだ。

金属製の兜は、黒かった。錆付いていて、血がついていた。そして、右手には巨大な大鉈を持っていた。

その腰にだらりと下がっているエプロンのような布があった。

凝視すると、それは布ではなく、皮であることが分かった。大勢の人間の皮を剥がし、それを縫い合わせ、身に纏っている。

それは虫の絨毯を踏んで進んできた。

これ以上恐ろしい生物は地球上に居ない。理性を失った感染者のほうが、まだ可愛い。個体にもよるが……

ソフィーは迷い無く1階に逃げた。だが、何者かに後ろから捕ま

った。

「保菌者確保！」

自衛隊だ。ガスマスクをつけた自衛隊員4名がソフィーを拘束してきた。

「すぐに研究所に連行する！」

先のマンションで出会った自衛隊とは違う部隊らしい。

「放して！じゃなくて逃げて！」

1人の隊員が首を傾げた。

「感染者か？」

だが、すぐに違うことに気づいた。

あの男が大鉈を引きずりながら、階段を下がってきた。大勢の虫を率いて。

「隊長！何ですかあれは！？」

「分からん！特殊感染者かもしれん」

特殊感染者？聞きなれない言葉だった。

自衛隊員3人は89式小銃を構えた。1人はソフィーを抑えたまままだ。

「武器を捨てて床に伏せろ！」

男は自衛隊の警告を無視し、近づいてきた。

「構わん！撃て！」

3人は一斉射撃した。

兜を撃ち込まれる度に、一瞬動きが鈍くなる。

ぱっと出るのは、血なのか錆なのかは分からない。

だが、致命傷は負ってない。

「頭じゃない！胸だ、胸を撃て！」

3人は胸を目掛けて撃った。

小銃の銃口から吐き出される5.56ミリNATO弾が男のあらゆる箇所炸裂する。

だが、本来なら貫通するはずだが、弾丸は貫通し無かった。それどころか、傷口はかなり浅い。

「隊長！武器がまるで弱い！」

「馬鹿な！全弾命中のはずだ！」

ソフィーは油断している自衛隊員の指を噛んだ。

隊員は悲鳴を上げ、放した。

この隙に、玄関まで走った。

3人の叫び声が聞こえた。

振り返ると、3人の隊員が狂ったように腕を振って、足踏みしている。

まるで踊っているようだ。

よく見ると、あの虫たちが隊員を襲っていた。

3人は倒れこみ、虫の波に飲まれた。虫の山は少しずつ小さくなった。

きつと3人は……そう思うと、哀れに思えてきた。

「逃げて！」

恐怖で立ちすくんでいる最後の隊員に怒鳴った。

隊員は我に返り、泣きじゃくった。

「助けてくれ！死にたくない！」

「早く逃げて！」

虫たちが、隊員に近づいた。隊員は小銃で床を無茶苦茶に撃った。

沢山の虫がばらばらになったが、それでもまだ多い。

隊員は装填した。

だが、いつの間にか男が隊員の目の前に居た。男は隊員よりも遙かに大きかった。

そして、小銃よりも遥かに重いであろう大銃を掲げた。

一瞬だった。

男は大銃を振り下ろした。

隊員の頭から股まで真っ二つに裂けてしまった。

本当に一瞬だった。

男は隊員の割れた体左右の足を持ち上げ、両方をソフィーに投げつけた。

死体はソフィーの両側の壁にぶつかった。

右側の体には、右手に小銃、ホルスターには自動拳銃オートマチックの9mm拳銃があった。

拳銃をホルスターから抜いた。思ったよりも軽かった。

小銃も拾った。これはかなり重かった。1キロのお米袋を3個持っている気分だ。

小銃を両手で抱え込んで、外に出た。

玄関を出ると、感染者の1人が奇声を発しながら、ソフィーに走った。

ソフィーは突撃してくる感染者を避けた。

感染者は止まることなく、玄関から家の中に入った。

虫たちが、感染者に襲い掛かった。自衛隊員と同じように、狂ったように腕を振り回した。

そして、倒れこみ、なおも暴れた。

所々骨が露出していた。

感染者は、ついに骨だけになった。

ソフィーはやはり逃げた。両手で抱えてる小銃と右手の拳銃のせいで、思うように速く走れない。

だが、男は遅かった。男は重々しい大銃を引きずりながら、歩いてソフィーを追いかけていた。

そんな速度で追いつけるはずが無かった。

後ろを振り向けば、男は米粒ほどの大きさに見える。

信二達はどこかのビルの裏側で休憩していた。

信二は裏口の南京錠を消火器で叩き壊し、ビル内に入った。

「感染者は居ない」

「本当か？」

「1階はな。居ればとっくに走ってきてるさ」

信二は全員をビル内に入れさせて、裏口を閉めた。

「ここで休憩しましょう。トイレなどは速く済まして」

確かに済まさなければ。そう思った茜が言った。

「兄ちゃん、トイレ」

「マジか？じゃあ行こう」

真希は信二を止めた。

「さっきから妹さんを抱えてたから、結構疲れてるでしょ？私が代わりに連れて行くよ」

信二は反論しようとしたが、確かに人一倍疲れている。いや五倍だな。

「：分かった、頼む」

信二は茜を真希に渡した。

真希は茜を抱えながら、近くの地図を見た。

「トイレは2階にあるのか」

真希は近くにあった消火器を持って2階に上がった。

2階は誰も居ない。少なくとも廊下は。

真希は近くの女子トイレに入った。

トイレにも誰も居ない。

近くの個室に入り、茜を便座に座らした。

「ドアを閉めてくよ？」

「うん」

真希は個室から出て、ドアを閉めた。中から鍵を掛ける音がした。

ドアの前で見張りをしていると、何かが聞こえた。

最初は感染者かと思ったが、そうじゃないと分かった。

感染者はすすり泣きはしない。

「ここで待ってて」

「分かった」

真希はトイレから出て、廊下ですすり泣きのする場所を探した。

廊下の奥の、女性更衣室と書かれたドア向こうから、聞こえた。

「誰か居ますか？」

返事がない。真希はドアノブを回した。ドアは難なく開いた。

中ではロッカーが並んでいた。

部屋の中心で、女性が泣いていた。背を丸め、膝を抱え込んで座っていた。

「あの、大丈夫ですか？」

この惨状で大丈夫な訳ない。自分で心の中でつつこんだ。消火器をドアに置き、女性に近づいた。

「何か助けが要りますか？」

ミニスカートのレギンズ、色が塗られた爪、金髪：ギャルだな。

「すみません！」

真希はいい加減に怒鳴った。女性は泣き止んだ。

同時に立ち上がり、振り向いた。

その目は赤かった。

真希は彼女が感染者だと理解するのに数秒かかった。

消火器を拾おうと思ったとき、首に何かを感じた。

急に息苦しくなった。

首に何かが巻きついていていた。

女性だ。

女性が右手の親指以外の全ての指が伸び、真美の首を絞めていた。

真希は我が目が信じられなかった。

確かに常識はずれの怪力を誇った巨漢は居たが、これは明らかにおかしい。

まるで骨が無いように、指は伸び、巻きつくなんて。しかもかなり強く絞めている。

真希は慌てて息を吸ったが、空気が喉を通らない。

このまま抵抗しなければ、絞殺されるのが運命だ。何かしなければ……！

助けを求めようとしても、喉からはうめき声しか出ない。

めまいがしてきた。頭痛もした。

意識が薄れる中、絞殺されていくのを感じてきた。

だが、感染者はもう片方の指で消火器を持ち上げ、真希の頭を殴りつけた。

一瞬、意識が飛んでしまった。

腕がだらりと下がる。

だが、運が良かった。

感染者は真希が死んだと思い、絞めつけている指の力を緩め、消火器を捨てた。

意識が戻った真希は、消火器を拾い上げ、感染者に突撃した。感染者は再び強く絞め付けた。

また苦しくなったが、真希は消火器で感染者の顔面を殴った。鼻が折れる音がした。

感染者が倒れこんだ。

真希は首に絞まつてる指を解いた。

咳き込んだ。久しぶりに空気を吸った気分だ。

茜……そうだ茜がトイレに居た！

真希は咳き込みながら、座り込み、息を吸って頭痛を軽減させた。その時、感染者が立ち上がり、指を伸ばそうとした。

だが、奇声を発した数秒後、背中から鉋が刺さり、胸まで貫通した。

「…大丈夫…？」

真斗が鉋を引き抜いた。

「大丈夫、助かったよ」

真斗は、感染者を殺したことに罪悪感を感じていたが、指を伸ばす感染者を眺めた。

「これ…何？」

「分からない、信二君に聞こうよ」

真希はトイレの茜を抱え込み、1階に向かった。

真斗は鉋を真人に返した。

「血塗れだな、何か刺したか？」

「指が伸びる感染者」

全員、驚いた。信二もだ。真希は驚いた。

「信二君、知らないの？」

信二は首を振った。

「そいつは知らないが、別の特殊な感染者は居た」
須田は弓を構えながら聞いた。

「どんな奴だい？」

信二はかつて、自分の学校で出会った特別な感染者を思い出した。

「天井を這う、一番最初の感染者さ」

「本当か？こわい……」

信二は静かにと指示した。

信二は裏口のドアを少し開け、外を見た。

感染者が6人は居た。

舌打ちしながら、全員を黙々とドアから離れさせた。

だが、銃声が6発鳴り響いた。

自衛隊の直人と教師の蛇谷が89式小銃を構えながらやって来た。

信二は裏口を開けた。

「速く中へ！」

2人はビル内に入った。

ドアが閉まった数秒後に大勢の感染者がやって来た。

「危なかった、助かったよ信二君」

直人はドアを背中を押さえながら小声で言った。

だが、外ではフードを被った男——岡本大輝が感染者の群れの中で歩いていた。

そして、再び何処かへと向かった。

ソフィーは近くの細い路地で休憩を取っていた。座り込んだ。

しかし、あの男は何なんだろうか？

ゴキブリを率い、大蛇を振り回す。人間ではないだろう。だが、きつと感染者でもない。

虫の王——ソフィーは「ベルゼブブ」を思い出した。

ベルゼブブは悪魔であり、虫の王だ。

ソフィーは男をベルゼブブと呼ぶことにした。

虫たちの王、ソフィーからベルゼブブと呼ばれる男は、何かを求め
るように彷徨った。

大勢の虫が、彼の後に続いた。

感染者の牙

「ここで止めろ」

良治はそう言った。

「どうした？」

石倉は怒りをこらえたような声で言った。

「あのアパートが見えるか？」

機動車のすぐ隣に5階建てアパートが立っていた。

「あれがどうした？」

「あれは今回の事件で流行しているウイルスの第1発見者が住んでいた場所だ」

全員驚いた。

「彼は学者でもあった。だから研究結果のレポートなどがあるはずだから、取って来いと研究所から命令があった」

永田はガムを膨らましながら聞いていた。

「その研究者の住んでいた部屋は？」

「最上階の左側」

「行くぞ」

4人の自衛隊は89式小銃を構え、機動車を降りた。

アパートに入り口には扉があった。

石倉は入り口を蹴り開け、1階を確認した。

「隊形を組め。俺と永田は前方を立つ。矢倍と尾崎は後方に、博士は真ん中に立ってください」

5人は慎重に最上階に上がった。

「ここだ！間違いない！」

最上階の左側のドアを指差しながら、良治は叫んだ。

石倉はドアノブを回した。

「駄目だ。閉まってる」

永田は銃底でドアノブを殴った。

ドアノブと共に鍵が壊れた。

石倉は永田を睨んだ。永田は肩を竦めた。

「これで入れるでしょう？」

「まあな」

4人はドアを開け、小銃を構えながら部屋に入った。

「博士、大丈夫です。入ってください」

良治は部屋に入った。

部屋は暗かった。

1つ目の部屋には壁に外国の新聞記事に注射器やメスや鋏などがあつた。

「博士と尾崎はここに残れ。永田はドアを封鎖したら奥の部屋に入れ」

石倉と矢倍は奥の部屋に向かった。

永田はドアを封鎖し、奥の部屋に向かった。

「分かってると思うが、何も触るな」

良治は尾崎に注意した。

尾崎はテープレコーダーを見かけた。

再生ボタンを押した。

『酵素に強い感染力があると判明した。俺は不安になり、やめようと考えたがやえた。』

昨日蚊に刺されたがどうも気になる。

いつまで立ってもウイルスに対する有効な治療薬の完成が夢の中の夢だ。

だが1つ分かった事がある。ここでは駄目だ！もう少し大きい空間と設備が居る！

ここで分かっている事は最新の変異型は感染者の脳に侵入し、精神を司る部分を破壊し、凶暴性を剥き出しにすることだ。原型の特徴は依然不明だ』

「なるほどな」

いつの間にか良治が隣にいた。

「このテープは資料として回収する」

そう言ってテープを小さなビニール袋に入れた。

「他に何か無いか調べろ」

尾崎はため息つきながら部屋を見渡した。

その時、外から何かが落ちる音がした。

部屋の奥の3人がやって来た。

「どうした？何の音だ？」

「分かりません」

4人の隊員は部屋の外に出た。

「待て！危険だ！戻れ！」

良治は4人を止めた。

「感染者かも知れないんだ！危険だ！」

「生存者かもしれない」

「生存者救出は今回の任務ではないはずだ！」

「あんたはな。俺達は自衛隊だ。永田、矢倍、降りろ」

2人は言われるがままに階段を下りた。

残り2人は後ろから支援していた。

「待て！戻って来い！」

「矢倍、援護するから降りろ」

永田は3階で銃を構えながら言った。

「了解」

永田は駆け足で階段を下りた。

2階の右側の扉が開いていた。

「来たときには閉まっていたから、きっとこの中だ」

そう言って部屋に入った。

部屋は暗かった。

部屋の廊下を慎重に進むと、音楽が聞こえてきた。

ヴァルディレクイエムの怒りの日だった。

廊下の壁側の中心にドアがあった。

「隊長、音楽が流れている」

『注意しろ。感染者が潜んでいる可能性がある』

矢倍は部屋の入った。

部屋は狭かった。

テレビにベッドにタンスなどの家具しかなかった。

アナログテレビの上にラジオがあった。音楽はそこから流れていた。

『何かあったか？』

「パーティーの邪魔をしたかも」

ラジオを止め、部屋を出た。

廊下の奥から何か物音がした。矢倍は銃を構えながら廊下の奥を確認した。

その時だった。

背後から何者かが矢倍に牙を向けた。

無線越しから矢倍の悲鳴が聞こえた。

「矢倍！応答しろ！矢倍！」

石倉は叫びに近い声で矢倍に連絡を取った。

やられたのか？感染者に？

そう思った瞬間、石倉は自分に怒りを感じた。

自分の判断ミスだった！

「全員来い！」

石倉は先頭に立ち、永田と尾崎を連れて矢倍の入った部屋に入った。

「矢倍！どこだ！」

廊下の真ん中で誰かが倒れていた。

まさか…そんなはずはない。

石倉は倒れている人物に駆け寄った。

矢倍だった。

首筋を食いちぎられ、血を流しながら倒れていた。

「大丈夫か！」

石倉は矢倍の脈を調べた。

「隊長、どうですか？」

永田は警戒しながら聞いた。

「…死んでる」

「畜生！俺のせいだ！」

永田は壁を殴りつけた。壁が敗れそうになるくらい力を込めて。信じられない……本当に感染者に襲われたのか？

「永田、部屋から誰か出てきたか？」

「出てない…矢倍が入ったときり誰も出入りしていなかった」
良治がやって来た。

「どうした？誰かやられたか？」

「矢倍が死んだ。何かに食われてな…」

永田は良治の襟を掴んだ。

「何をする！」

「矢倍が死んだ！白目をむきながらな！」

石倉は慌てて永田の肩を掴んだ。

「よせ！博士は何もしていない！」

「こいつは感染者は狂暴になるだけだといった！」

「確かに私は言った」

「だが！矢倍は何かに襲われた！感染者の奇声が聞こえることなく
こいつの悲鳴だけが響いた！」

石倉は永田の腕を掴んだ。

「落ち着け…取り乱すな。俺だって今猛烈に怒ってる。だが取り乱
したら全滅を招く」

永田は深呼吸した。

「確かに……すいません」

その時だった。

部屋の奥のシャンデリアが落ちた。

4人は一瞬痙攣を起こした。

「何だ？」

「確認するぞ」

3人は銃を構えながら部屋の奥に向かった。
部屋は広かった。

ベッドが左隅に置かれ、右隅には本棚があった。

「何も居ない？」

「なぜシャンデリアが落ちたんですかね？」

「腐り果てたんだろ？」

永田はシャンデリアの鎖を調べた。

「違う：食いちぎられた跡がある」

「食いちぎられた？」

良治が何食わぬ顔で入ってきた。

永田は再び襟を掴んだ。

「おい！もう任務は終わりだ！さっさとこの街から出よう！」

「永田！」

石倉は永田の両肩を掴んだ。

「いいか！取り乱すな！落ち着け：これからは全員放れずに行動する。いいな？」

「はい」

「とりあえずここは危険だ。機動車に戻ろう」

永田は自分頬を平手打ちしながら廊下に出た。

「そんな馬鹿な！」

永田は叫んだ。

「どうした？」

「矢倍の死体がない！」

石倉は耳を疑った。

死体が無い？そんなことありえない！
だが確かに矢倍の死体が消えていた。

「死体：死体はどこだ？」

4人は廊下を進んだ。

引きずった跡すらない。

その時、背後から気配を感じた。
4人は振り返った。

落ちたシャンデリアの前に矢倍が顔を下げながら立っていた。

「矢倍！生きてたのか？何に襲われた？」

矢倍が顔を上げた。

目は真っ黒に染まっていた。本来白いはずの強膜も黒くなっていた。

「やばい！絶対やばい！」

そう思ったとき、矢倍は奇声を発しながら走ってきた。

その奇声は恐ろしげだった。

石倉は矢倍の首を掴んだ。

「落ち着け！やめろ！矢倍！」

その時石倉は矢倍の歯を見た。

全ての歯が鯊の牙のように鋭く尖っていた。

永田は矢倍の顔面を素手で殴った。

「よせ！やめるんだ！」

石倉は矢倍を羽交い締めした。

「博士！これは何だ！」

「感染者だ！彼は感染した！」

永田は矢倍を蹴りつけた。

矢倍は壁側にある部屋に倒れこんだ。

永田はドアを閉め、鍵を掛けた。

矢倍はドアの向こうから叩いていた。

「博士！一体何なんだ！」

永田は再び襟を掴んだ。

「一体何の感染だ！」

「落ち着け」

「永田は5分前までは何ともなかった！何の感染だ！えっ！言ってみろ！」

「分かった。話すからまずは機動車に戻ろう。ここは危険だ」

「分かった：隊長！」

「行くぞ」

永田は我先にと部屋を出た。

石倉達も続いて部屋を出た。

だが永田は呆然と1階を見ていた。

「どうした？」

石倉は1階を見た。

ショックが大きかった。

1階に大勢の赤目の感染者が居た。

感染者達は奇声を発しながら走ってきた。

4人は階段を駆け上がった。

目指す場所は最上階だ。

4人は最上階に着くと、科学者の部屋に入り、ドアを閉めた。

鍵を掛けたかったが、あいにく永田が壊してしまった。

石倉はチェーンを掛け、ドアの横のタンスを倒した。

玄関はタンスに塞がれた。

全員無事か？

「ああ無事だ」

「はい：怪我はありません」

「私は大丈夫だ」

石倉は返事に満足すると、座り込み、休憩を取った。

そう言えば、まだ入ってないドアがあったな。何も無いと思うが、

安全は確認しよう。

石倉は立ち上がると、永田と尾崎を連れ、部屋の奥に向かった。

部屋の奥は広間のように何も無かった。

厳密には小さなテーブルの上に怪しげな医療器具しか置いていなかった。

部屋の奥にドアがあった。

古く錆付いた鉄製のドアが。

石倉はドアノブを回した。

だが錆付いて動かなかった。

石倉は永田に「やれ」とばかりに睨みつけた。

永田はドアを蹴った。

鉄製のドアは外れた。

ホコリが散る。3人は咳き込んだ。

良治が来た。

「まだ部屋があったのか？」

「ええ、安全確認のために」

4人は入った。

そこは狭い通路のような場所だ。

慎重に進んだが、先は行き止まりだった。

「安全だな」

永田はそう呟き、壁を見た。壁には資料が置いてあった。

永田は資料を取り、中身を確認した。

「酷い：狂気の沙汰だ」

中には血塗れの子供や頭蓋骨を切られた子供や脳を露出されている子供の写真ばかりだ。

「誰がこんなことを」

石倉は呆然と資料を見ていた。尾崎は祈りの言葉を呟き始めた。

「これもお前らの研究か？」

「違う。私達ではない」

資料に名前が書かれていた。

黒木大輝

「黒木大輝：最低な研究者だな」

永田は資料を良治に渡した。

「研究所は資料が欲しいんだろ？おまえらくれてやるよ」

良治は黙って受け取った。

良治もこの資料を見て何かしらの感情を抱いていた。

他にも資料があった。

今度は写真は無い字だけの資料だ。

永田は声に出して読んだ。

「タイプ2…眼球が黒く染まる、歯が生え変わる、体の細胞が変異し身体能力が上がる等の症状アリ

タイプ3…脳の感情を司る部分は破壊され、狂暴性がむき出しになる、虹彩が赤くなる等の症状アリ

タイプO…症状不明、毒性が強く、たいていの感染者は死に至る」
「どういう意味だ？石倉は理解できなかった。

「それもくれないか？」

「ほらよ」

永田は渡した。

「とにかく、私が任務終了を告げるまで東京からは出られないからな」

石倉はため息ついた。

本当の戦場とゾンビのような連中だらけの場所とどっちがましだろう？

俺だったら生きて食われるくらいなら、銃で撃たれたほうがいいな

料理人、虫

「とびっきりの料理を作ってみるよ!」

その冷酷な声と共に信二は目を覚ました。

「殺してやる! くそコック! 殺してやる」

誰かがのしり続けた。

ここは何処か厨房のような場所。ホテルの厨房だろうか?

信二は自由の身だった。何にも縛られること無くテーブルに座らされていた。

「あのガキは何で縛らない!？」

「あの子は駄目だ。大事な大事なお客さんなんだから」

縛る? お客さん? 意味が分からない……そもそもここは何処だ? 全てを思い出そうと記憶を辿った。

あのビル内で何者かに後ろから注射器を首に刺されて、それで意識が……あれは注射器か何かか?

意識をはっきりさせた。大柄の血塗れエプロンを纏った男が鍋に水を入れていた。

「お客様は神様だ」

「何で俺が<食材>に!!」

食材……?

「お前は清潔だ。外の感染者^{ゾンビ}よりはずっとましだ」

大柄の男は顔に何かを被っていた。

皮だ。

人間の皮を被っていた。

もう1人男が壁に繋がった鎖で手を縛られていた。

「やあ、目が覚めたか?」

大柄の男は信二に気づき、声をかけた。

「僕は浅野^{あこのすむ}進。一流フランス料理人さ」

浅野は肉切り包丁を右手で持った。包丁は怪しげな輝きを見せた。

「頼む！助けてくれ！」

浅野は男に近づいた。

「な、何を……」

「する」と言い終える前に浅野は包丁で男の喉を切り裂いた。

喉の傷口から血が噴水のように噴出した。奇妙なことに、信二は噴出す血が美しく見えた。実に奇妙だ。

男はぐったりと頭を下げた。

「人と豚は同じだ。首を切ればすぐに死ぬ」

浅野は笑いながら男の鎖を解き、男を担ぐと、厨房の中心にある鉄製のテーブルに載せた。

「待っててね、すぐに極上スープを作るから」

浅野は包丁で男の腹を切り、手際よく胃腸などの内臓を取り出した。

信二はここから抜け出したかった。

だが、体の感覚が痺れている。麻酔の効果が残っていた。

「腹が減っては戦が出来ぬって言うね。確かにそうだ」

浅野は男の内臓を抜き終えると、部屋の奥の鉄製の引き戸を開けた。

中から若い女性が飛び出してきた。浅野は女性を見事にキャッチし、肩に担いだ。

「いや！やめて！放して！お願い！」

女性は必死に叫んでいた。

浅野は女性を豚をつるすフックに近づけた。

「何をするんですか……？」

信二は聞いた。

浅野は女性の両肩を掴むと、軽々と持ち上げた。

「やめろ……！」

遅かった。

女はフックにつるされた。生きたまま……

フックが女の背骨に食い込み、自身の体重でフックがめり込み、

苦痛が全身に響き渡る。女はフックを抜こうと両手で掴んだが、もがけばもがくほど、フックが食い込む。

「いやあああああっ！！痛い！放して！助けて！」

女は苦痛の叫びを上げた。信二は耳を塞ぎたくなった。狂ってる：あの料理人は狂ってる！

浅野は手術用メスを取り出し、女の頭に当てる。

鮮やかな手際だった。たちまち頭皮に切れ目を入れた。ペンチを使って皮膚を引き剥がすと、鈍い灰色の頭蓋骨が現れる。女は悲鳴を上げる。

浅野は皮膚の端を鉗子で押さえつけ、固定した。

信二は、ただ見守っていた。

「待っててね、すぐに解体するから」

浅野は工具用電動ドリルをキュイイイインと耳障りな音を出した。「うるさい音がするから」

女の頭蓋に、金属の先端が突き刺さったのだ。

浅野はドリルをしっかりと腕で固定し、脳に触れないように、慎重に下ろしながら、小さく、4つのポイントを穿った。ほぼ正方形が出来た形だ。穴からたちまち血が――体液が――流れさした。

信二は唾を飲んだ。きつと恐ろしい苦痛だろうな……

ドリルを置き、浅野は続いて、小さな円形の刃が先端に付いている電動ノコギリを手を取った。

「黒板を引っかく音がするから」

信二ははっとした。何じつと見てるんだ俺！

「やめろ！やめるんだ！」

浅野はスイッチを押し、刃を回した。

そして、女の頭蓋骨に近づける。ノコギリの刃が女の頭蓋骨を切断し始めた。女は絶叫を上げた。刃が骨に当たり、黒板を引っかくよりも不愉快な音が響く。切られているのは骨だ。

切断が終わった頃には四角形の穴が繋げられ、脳への入り口の扉が出来た。

頭蓋骨を剥がす。

浅野は鋏を取り出した。

脳と頭蓋の間には、薄い皮膚のようなものが張っていた。それを切り取って、脳を露出した。

女は疲れ果て、絶叫を上げられなかった。

「脳は柔らかいからね。慎重に取り出さなきゃ」

おびただしい体液と共に脳が出口一杯に膨らみ、浅野は慎重に脳を取り出した。

女は反応しなかった。

浅野は鋏で脳と繋がる神経などを切り取り、脳を台に乗せた。

女の頭は文字通り空っぽだ。

浅野は女はフックから降ろし、テーブルに載せた。

「そろそろ出来たかな？」

浅野は煮えている鍋に近づき、ふたを開け、スープを味見した。

「にんにくが足りないな」

信二は自身の足を見た。

右足に足枷が付けられていた。

これじゃ逃げられないな……

浅野はテーブルにステーキを乗せた。

「出来立てだよ、うまいよ、人肉ステーキ」

信二は唾然とした。

人肉ステーキだと？こいつは本当に狂ってる！

「あんたは人を食材にしてるのか！」

「おお、誤解しないでくれ、人肉とチキンは大して変わらない味だよ」

そういう意味じゃ……

「まあ食べてよ、今日はフルコースだ」

その時、厨房の扉が開いた。

「信二、そこに居たか！」

真人だった。

「探した……誰だそいつ！」

浅野は真人を見た。

「君は生きがいい……食材にしよう」

「逃げる！こいつはいかれてる！」

もう1人厨房に入ってきた。

「信二君そこにいたの」

真希だった。

「探したよ、もう……誰！？」

浅野は真希を見た。

「君、可愛いね……食材にしよう」

「こいつはいかれてる！ステーキ肉にされる！」

「真人君、あの人の相手をして。私はあしかせをはずす」

そう言った瞬間、浅野が突撃し、真人の両肩を掴むと、投げ飛ばした。

真人は壁に勢いよくぶつかり、床に倒れた。

真人はゆっくり立ち上がると、血のたんを吐いた。

「喜んで……」

弱弱しく呟く。

浅野は真人に切りかかった。真人は慌てて近くの消火器で防いだ。

「こいつの相手はするが、早くしてくれ！俺は3分も持たない！」

真希は信二に駆け寄った。

「足枷を付けられてるね……鍵は？」

「持ってればとつくにはずす」

「そうだね……」

そう言って、電動ノコギリを持ってきた。

「な、何を？」

「電動ノコギリで鎖を切るの！」

信二の返答を待たず、真希はノコギリを回転させ、鎖に近づけた。

「火花で火傷したらごめんね！」

「やめろ！失敗したら足が切れる！」

真希は鎖を切り始めた。

やめろやめろやめろと心で叫んだが、声に出なかった。

神様！俺の脚が無事だったら、毎日祈りをします！どうかご加護を！

真人は厨房の中心のテーブルを回っていた。

浅野は真人を追いかけて、回っていた。

「真希！早くしてくれ！こっ殺される！」

真人は陸上部で鍛えられた足と体力でどうにか逃げていた。

が、浅野がテーブルに乗っかり、真人の前に下りた。

「はっ反則だ！男として最低だぞ！」

真希は急いで鎖を切っていた。

「分かっていると思うが、足は切るな！」

「分かっている、切ったら謝るから！」

別に切られるのが怖いわけじゃない。だが、もし足が切られたら、満足に走れず感染者に襲われるのが目に見えてる。東京を出られるなら足なんて1本でもくれてやる。だが、今は失いたくない！

真人は浅野と対峙していた。

「落ち着いてください、ね？こんなことしたら、警察に捕まりますよ」

「今は警察もゾンビになってるよ」

「そ、そうけど……」

「黙って食材になりやがれ！！」

浅野が始めてみせる荒々しい口調。

同時に手にある肉切り包丁を投げた。

真人は横の跳び、間一髪避けた。

「俺の料理は絶品ものだ！だが新鮮な食材が無ければ味が落ちるんだよ蛸！！」

「だからって俺を食材にしないでください！」

「死ね！」

浅野はチェーンソーを持ち上げ、エンジンを掛けた。

「危ない危ない危ない！」

浅野はチェーンソーを振り上げ、真人に突撃した。

「あと少し……」

真希は鎖を見ていった。

「やばいぜ」

「分かってる」

「いやあんたの相方が」

真希は意味を知らずに鎖を切っていた。

「あと少し……できた！」

鎖は見事に切られた。真希は電動ノコギリを止めた。

「あれ？何で回転音するの？」

「後ろを見れば分かる」

真希は言われたとおり後ろを見た。

浅野がチェーンソーを持って真人を追いかけていた。

「やばっ！」

「そうだろう」

信二は立ち上がり、フライパンを持った。そして投げた。

フライパンは浅野の顔面に直撃した。浅野は倒れこんだ。チェー

ンソーが浅野の右腿に乗った。

「うぎゃあああああ！」

チェーンソーは浅野の腿を切り裂き始めた。

浅野は慌ててチェーンソーをどかした。腿は半分切れていた。

「痛いよ、ママ！」

浅野の叫びは本当に痛々しい。

浅野は立ち上がり、右足を引きずりながら、厨房を出た。

「大丈夫か？」

信二は真人に駆け寄った。

「肉体面では大丈夫だが、精神面ではアウトだ」

信二はうなずき、肉切り包丁を拾って厨房を出ようとした。

音が聞こえる。

紙袋を無数の針で引っかくような音。

信二は厨房を出た。

そこには、何千何億という虫の群れだった。鈍く輝く背中に触角。外見こそはゴキブリだったが、体長は30センチを優に超えている。食堂に多い尽くされた虫の群れの中心に、浅野が狂ったように踊っていた。よく見れば、虫に襲われている。

浅野は立っていらなくなり、床に倒れ、虫に覆われた。

絶叫は少しの間だけ聞こえ、右手を天井に伸ばした。

虫の山が、小さくなっていく。

悲惨な死を最期まで観賞するつもりは無かった。信二は逃げると叫びながら、厨房の扉を閉めた。

「一体どうしたの？感染者？」

「ある意味じゃ感染者よりたちが悪い！でっかいゴキブリだ！」

「マジでか!？」

虫たちが入り込みたいのか、ドアが押されていた。信二は扉を押さえた。まるで大人が数人押して来るような虫の圧力が掛かっている。

「何か引っ掛けるものを！」

信二は叫んだ。厨房の奥に、空気を送り込む大きなファンがあり、歪んだパイプが突き出ていた。真希はそれを取ろうと駆け寄り、パイプを外そうと力を込めた。腕が、肩が、腰がみしみしと音を立てて痛んだ。

信二と真人が必死で押さえている扉の向こうで虫が這う音がした。

「早くとってくれ！」

真人が叫んだ。

「分かっているわよ！はずれた！」

真希はパイプを掴み、ドアへ駆け寄って、3人でドアに挟んだ。

「これでしばらくは安全…だと思う」

「でもな、どうやってここを出す」

信二は天井にある正四角形の金網を指差した。

「エアダクトから脱出する」

「「ご名案」」

2人は同時に言った。

信二はテーブルに乗っかり、網を外した。

そして、梯子を使ってダクトに入った。

「何も無い、安全だ」

次に真人が、最後に真希がダクトに侵入した。

ダクトは人1人は通れる空間だった。

信二がダクトを匍匐で進み、2人は付いて来た。

どれくらい進んだんだろうか？

ダクトを進んでいると、金網が見えてきた。

「もうすぐだ」

信二は少し安心した。

「あっけない脱出だった」

真人が笑った。

と、金属が金属を擦る神経に障る音がした。

信二は用心深く音の方角を推測した。

「処刑人かな？」
あいつ

真希は呟いた。

がつつと音がした。

ダクトを破って上から剣が突き出てきた。

信じられないほどの巨大な剣だ。きつと大鉈だ。

刃は真希の目の前に現れ、ダクトの下部分を貫通した。

「危なかった：けど進まないニヤ」

真希は下がろうと思った。

が、大鉈が引っこ抜かれた。

大鉈が真希の後ろに突き出た。

やばいと思える前にそれは起きた。

ダクトの下は大きく裂けてしまった。

真希の身体は宙に浮いていた。

そして落ちた。

「真希！」

真人が戻ろうとしたとき、ダクトの上部分が落ちてきた。

「危ない！」

信二は真人を引っ張った。

「今は助けられない！後で必ず助けよう！」

「畜生！上に居る奴！お前は必ずぶっ殺してやる！」

信二と真人は前に急いで進んだ。

後ろでは大鉈が突き出では引っ込みまた突き出では引っ込む。刃は確実に2人に迫っていた。

信二は正面の行き止まりに当たった。

だが、完全な行き止まりではなく、目の前には金網があった。

信二は両手で金網を殴った。

「開け！この！この！」

「急いでくれ！」

金網が前に飛び出し、ダクトの出口が出来た。

信二は急いでダクトを出た。

真人も急いで出てきた。

そこは暗いビルの廊下だった。

「居たぞ！大丈夫か！」

直人が懐中電灯で2人を照らし、駆け寄った。

「信二君はどこに？」

「食堂に居ました。変なコックに捕まって……じゃなくて、急いで逃げましょう！」

「逃げる？誰に？それより集合地点に————」

天井から大鉈が突き出てきた。

大鉈は信二と直人の間に伸びた。

「何だこれ！？」

「上に巨人が居るんですよ！」

直人は89式小銃で天井を3発撃った。弾丸は裂け目を通り、上

に居る何かにあたった。

上に居る何かは大鉈を引っ込めた。

「走れ！」

3人は廊下の奥に走った。

悪霊の帝王

目が覚めれば、真希は廊下に横たわっていた。

全身が酷く痛む。ちゅっと動いただけでうめき声が漏れる。

嗚咽が漏れた。

怖かったのだ。恐ろしいのだ。

このまま横たわり眠りたい気分だった。

ざわざわと聞こえる音に顔を上げる。

虫の群れだ。

ゴキブリ型の大きな虫たちが洪水のように湧き出てきた。

虫の波の中央に何者かが居た。

虫に食われている哀れな犠牲者かと思った。

だが違った。

それは虫の王のように、群れを率いていた。その姿には圧倒された。

それはソフィーから虫の帝王<ベルゼブブ>と呼ばれている正体不明の生命体だ。

上半身裸の逞しい傷だらけの肉体を見せつけながら、それは大蛇を引きずりながら近寄ってきた。

腰に纏っている人の皮で出来たエプロンは犠牲者の苦痛と数を物語っている。

ベルゼブブからは尋常ではない殺気と威圧感を感じられた。

この人型の生物ほど恐ろしい生命体はこの地球上には存在しないだろう。

真希は立ち上がり、走った。

走れ、走れ、走れ！

ここが地球であろうが無かろうが、ただ走っていればいい。今は私はマラソン選手なんだ！

前へ、奴からなるべく、いや確実に遠くに行かなければ！

真希はただ、走った。

蛇谷は89式小銃をしっかりと握り、食堂に入った。

食堂は静かだった。

人は愚か、感染者1人さえ居なかった。

だがそれは違った。

食堂の中心に誰かが倒れていた。

いや、何かが落ちていたといったほうが正しいだろ。

それは人骨だ。

肉ひとつ付いていない綺麗な人骨だ。

そして感じたのだ。

それを人に説明するのは難しい。

胸騒ぎを感じたのだ。

一瞬、ほんの一瞬

自分の真下で尋常ではないただ因らぬ殺気が感じられた。

真希は扉を押し開け、廊下に出た。

そして走った。

片側にロッカーが並んでいた。

真希は走り続けた。だが限界に達した。走ってるつもりが、いつの間にか歩いていた。いや、走ってはいるが歩いてるのと同じ速度だ。

膝の力が抜け、その場に座り込んでしまった。

一度止まると、走るどころか立ち上がることさえ難しかった。

するとまた、虫の這う音が聞こえた。

しつこいわね……

壁に手をつき、立ち上がった。

脳は全身に逃げろと命じたが、疲れきった全身は走ることなく、歩いた。

焦りはするが、速度が上がらない。

もう駄目なのか。

正直、感染者が恋しい。

狂暴で慈悲のない感染者が恋しい。

どんなに狂暴で指が伸びる奴が居ても、感染者の相手をするほうがまだ良い。

今、真希を追いかけているのは大きな虫とそれを率いる殺意に満ちた死の先導者だ。

死神が近づいてくる。

もう駄目なのか。

真希は死を覚悟した。

と、明るい光が射してくる。

綺麗な銀髪が見える。

天使が現れたのかな？

なら、死が近いのか……

手が引かれた。

そのまま引きづられる。

扉が閉まった。

どこかの部屋に引き込まれたらしい。

新しい敵なのか？

覚悟して、真希は足元からそれを見上げた。

彼女は……立花……立花裕香！

目の前に立って居たのはあの転校生、立花裕香だった。扉を身体全体で押さえながら、立花は言った。

「そのパイプを取って！」

真希は部屋の奥を見た。そこには空気を送り込むファンがあり、歪んだパイプが突き出ていた。彼女はそれに駆け寄り、パイプを外そうと力を込めた。腕が、肩が、腰がみしみしと音を立て痛んだ。立花が押さえている扉の向こうで、虫たちが這い回る音が聞こえた。

「早く取って！」

立花が叫んだ。

「取れた！」

ドアのところにへと駆け寄り、立花と2人でドアに挟み込んだ。
これで安全だろう。

感染が始まってから初めて一息つくことが出来た。

「ここから出る方法はあるかな？」

真希の質問に立花は素っ気なく答えた。

「ないわね」

草むしり用の鎌を真希に渡した。

「これで身を守って」

事態は好転している。

「ありがとう」

真希はそう言って首をならした。

「でも」

立花は厳しそうな顔をした。

「脱出できる可能性は絶望的」

「本気でそう思ってるの？」

「外に虫が居る限り…よ」

「厳密んは大型のゴキブリね」

「ゴキブリは苦手」

「私もよ、裕香さん」

立花は真希を見た。

「どうしたの？」

「別に…いえ、初めて下名前と呼ばれたから…いつもは皆苗字で
呼ぶから」

真希は考え込んだ。

下の名前の裕香の方がまだ可愛いのに…なぜ？

「夏休みの日記にどう書けばいいのかニャー」

「この期に及んで、まだ日記を？」

「日記は必ず書くの。1つの出来事を日記に書くのにどれほど大変

か。赤い目の感染者といい、自衛隊といい、真紅計画といい、虫の群れといい、1ページじゃ書ききれないわ。友人達も無事か分からないし」

「そうね」

「どうせなら、恋人作ればよかったかしら？」

立花は暗い顔で扉を見つめた。

「そうね……」

「どうしたの？」

「…別に…」

まるで愛しい人を失ったような目で扉を見つめていた。

と、金属と金属を擦る神経に障る音がした。

真希は震えた。

立花は用心深く扉を離れた。

「あいつだわ」

「誰？知り合い？恋人？」

「常に殺気立ってる変人よ」

「その手の人物は変人というより狂人の方が正しいわよ」

大きな音がした。

扉が裂け、そこから輝く刃が伸びてきた。

信じられないほど大きな大鉈だ。

狭い部屋の端まで切っ先が伸びる。

刃は2人を求めて、左右に動かされた。まるで獲物を求める猛獣だ。

そこから、黒板を引っかくよりも嫌な音を立てて、大鉈は引っ込んだ。金属製の扉には大きな穴が開いた。

穴から虫たちが押し寄ってきた。

2人を目掛けて這いよってくる。

真希と立花は虫たちを踏む潰した。

虫の一匹が立花の胸元までのぼり、噛み付こうとした。その時、虫たちが戻り始めた。

そこに立って居たのは虫たちの帝王であるベルゼブブだった。彼は虫たちに撤退命令を出し、虫たちには任せず、2人の始末を自らの手でやり遂げるつもりだった。

大鉈を掲げて、ベルゼブブは近づいてきた。

立花は工具用のアメリカ製ネイルガンを構え、釘を飛ばした。

釘はベルゼブブの体に次々と命中した。

だが、怯むことなく近寄ってくる。

真希は出口が無いか探した。

そう言えば、自分の足元にある金網が緩んでいる。

真希は金網を蹴った。

金網ははずれ落ち、下へと繋ぐ穴が出来た。

「ここから降りるよ！」

真希はそう言って降りた。

下は上と同じ部屋だ。

立花も降りてきた。

穴はベルゼブブが降りれないほどの狭さだ。

「よく見つけたわね」

「あいつが入ってきたおかげだよ」

突如、天井から刃が突き出てきた。

2人は部屋を出て、廊下を走った。

ベルゼブブは体を反転させた。

刃を下ろし部屋を出て行く。

虫たちもベルゼブブについて行く。

ベルゼブブは苛立つ。

次なる獲物を求め、廊下を進む。

だが、自分が進む廊下に何者かが立っていた。

それは、武田が自爆し道連れにしたと思われていた処刑人と呼ばれる巨漢だった。

2人の巨漢がみ睨みあった。

虫たちは処刑人を排除しようと近寄った。

だが、ベルゼブブは虫たちを止めた。

ベルゼブブは大蛇を、処刑人は大斧を掲げて、ゆっくり近寄った。虫たちの帝王と狂気の処刑人がゆっくりと確実に相手を殺そうと近寄った。

そして、振り下ろす。

血の乾いた獣

『梶尾聖夜』

俺は苛立っていた。

勇敢な軍人もどきの友人が糞忌々しい巨漢を道連れに自爆した。
普通の中学生なら出来ない、いかれた行為だ。

そのおかげで助かったのも事実だ。

この東京でゾンビ物の感染なんて、冗談みたいだ。

アメリカや、フランスや、イギリスとかならまだ分かる。

けど、よりによって日本なんて、糞みたいな気分だ。

「大丈夫だ、危険は無い梶尾」

雑賀っていうサイコ野郎がどっかの小学校の職員室で休憩してる俺に報告してくれた。

俺は携帯電話でもう一度連絡を取ってみた。

繋がらない。

今は電話は使えない。いや、電話だけでなくパソコンのインターネットも使えない。

完全に外部と連絡が取れない状況だ。

マスクミに今の状況を伝えたいもんだ。

その時、職員室の入り口を破壊し、何かが入ってきた。

感染者
血に飢えた獣だ。

俺は図工室にあったノコギリを構えた。

感染者は奇声を発しながら走ってきた。

「くたばれ！」

俺は叫ぶと同時にノコギリを感染者の首筋に振り下ろした。

刃が食い込む。

俺はノコギリを引く。

感染者の皮が、肉が、動脈が、切り裂かれた。

感染者は奇声を発しながら倒れた。

俺は快感を覚えた。

「ざまーみろ！この間抜け共が！」

雑賀は黙って俺を見ていた。

「何だ？」

俺は雑賀に聞いた。

「……変わってしまったな」

雑賀はそう言って職員室を出た。

変わった？という意味だ？

俺は雑賀を追いかけようと職員室を出た。

だが、廊下の奥から感染者が走ってきた。

俺よりも若く小さい感染者だ。

俺は玄翁を投げつけた。

玄翁は感染者のおでこに命中した。

何かが碎ける音がした。

感染者は倒れた。

俺は感染者に近寄った。まだ生きていた。

俺は玄翁を拾うと、感染者の頭を殴った。

殴り、殴り、殴りまくった。

気づけば原型は留めていない。むしろいい気味だ。

俺は図書室に向かおうと思った。

集合場所……というより皆が待機している場所だ。

だが、渡り廊下に誰かが倒れていた。

警察官だ。

手に刑事ドラマで見る回^{リボルバー}転式拳銃を持って。

俺は銃を取り、ベルトに挟んだ。

すると、後ろから何かが走ってきた。

ランドセルを背負った、まだ1年生くらいの幼い男子感染者だった。

俺は躊躇いを感じた。だが向こうは躊躇無く俺に飛び掛った。

俺はそいつを窓に投げつけた。

窓が割れ、破片が体中に刺さっても、そいつは俺に飛び掛った。俺はそいつを抑えると、玄翁を構えた。

「正当防衛、正当防衛だ！」

俺はそいつの後頭部に玄翁を振り下ろした。

そいつは動かなくなった。

後頭部の皮膚がゆがみ、骨が砕かれ、血が湧き出てきた。

俺は多少の罪悪感を感じた。だがこいつが俺を殺そうとした。

俺は駆け足で図書室に入った。

そこには全員居た。

「大丈夫ですか？ 梶尾さん？」

小島が優しいげに聞いてきた。

「ああ、大丈夫だ」

大丈夫だ……俺は大丈夫……

自分に言い聞かせるように心の中で呟いた。

『綾瀬マユ』

私は校内の教室で女の子を慰めていた。

「大丈夫、お母さんは無事だから」

女の子は泣いていた。

廊下で何かが動いた。

私は丸腰。でも安全は確認しないといけない。

私は勇気を振り絞った。

「いい？ 掃除用具入れに隠れて」

女の子はうなずくと、掃除用具入れに隠れた。

私は箒を持って廊下に出た。

背後に心配を感じた。

気づいたら、首にチクリと鋭い痛みを感じた。意識がなくなる

『俺』

は、綾瀬を拉致した。

ついに！

俺は興奮を抑えられない。
さあ綾瀬よ、俺の願いを叶えてくれ。

『綾瀬』

気が付くと、私は地下室に居た。

いや、ボイラー室が正しいか……

椅子に座っていた。両手両足がガムテープで椅子に縛られていた。
絶望感が全身に走る。

同時に怒りと闘争心も沸いてきた。

私はこんなところで死なない！私は生き延びる！

誰かが部屋に入ってきた。

「やあ、綾瀬ちゃん」

吉川ってクラスメートだ。

相変わらず地味で変に首を回していた。

「あなたなの？私を拉致したのは？」

私は怒りを抑えた声で言った。

「そうだよ、僕は綾瀬ちゃんの命を握っている」

この変態！私は叫びたかった。

けど、ここであいつを怒らせたなら何をするか分からない。ここは
辛抱よ！

吉川は拳銃を構えた。

「これは本物の拳銃だ。下手な真似してみろ？その自慢の顔が台無しになる」

私はこいつを馬鹿にしたかったが、ここは辛抱！

吉川は私のポールシャツのボタンを外し始めた。

「何をするの？」

「いいこと」

吉川はポールシャツを脱がせた。

「いい！いい体だ！いいブラだ！」

私の素肌とブラが露出する。

吉川は胸を触った。

「いい！Bカップか！いい大きさ！」

そもそも吉川は別の班だったはず…

吉川はブラを外した。

「この変態！」

ついに言ってしまった。

吉川は何故か怒った顔になった。

「また言ったね」

また？

吉川は突然私の頬に平手打ちした。

「また言ったな！」

また平手打ちした。

「どうして殴るの？！」

吉川は拳銃を向けた。

「君は僕の告白を断った」

はい？

「僕は君が好きだった！なのに君は僕の告白を断った」

思い出した。

こいつは2年生になってからしつこく電話やメールを入れてきた。

夜中にも！

拳句の果てには人気の無い場所に連れて行き、私と付き合えと行ってきた。誰だって断るだろう。

「俺は友人達に失望され、馬鹿にされた！お前は俺の人生を滅茶苦茶にした！」

自分で招いた事態だろう……自己責任だ。

私はこいつの頭に一発殴りたかった。

「けどいいんだ。これで君は僕のもの」

変態！変態！変態！この不細工！

「あんたのあそこは小さいでしょ！」

「お前！僕のコンプレックスを…！」

本当に小さいんだ……

「まあ、君の胸を触れば、気分は良くなる」
そう言って私の胸をもみ始めた。

「ああ！いい気分だa！」

私は侮辱された気分だ。

手足さえ自由だったら！

『感染者』

感染者は校内を彷徨った。

血に飢えた猛獣は血を撒き散らしながら歩いた。

抑えきれぬ殺人衝動が溢れ出て、本能のままに行動した。
声が聞こえた。

「僕は君が好きだった！なのに君は僕の告白を断った！」

声は下から聞こえた。

感染者は走った。

獲物を求めて。

『雑賀照夫』

俺は強い性欲を持った人物の気配を感じていた。

この性欲は……尋常ではない。

こいつは狂^{クレイジー}ってるだ。

だが、もう1人の発狂^{クレイジーズ}者の気配を感じる。

強い、殺人衝動を持った奴の気配が！

俺は鳥山に話しかけた。

「ちょっと付いて来てくれ」

「いいが、何のようだ？」

俺は鳥山を連れて廊下に出た。

『綾瀬』

私は耐えていた。

このふざけた男のふざけた行動に耐えていた。

「たまらん！もう耐えられない！」

吉川はズボンを脱いだ。

ブリーフパンツを脱ごうとした。

「何をするの？」

「俺の性欲を解消してくれ！」

私はガムテープを外そうともがいた。

吉川がパンツを脱ごうと手をかけた。

「やめて！お願い！」

その時、扉が開いた。

同時に吉川は殴られ、倒れた。

「大丈夫か？」

鳥山さんと雑賀さんだった。

「鳥山さん！」

私は思わず歓喜の声をあげた。

「縛られてるのか？雑賀、鎌をよこせ！」

雑賀は大鎌を鳥山に投げた。

鳥山は私を縛ってるテープを切った。

「ありがとうございます」

私はこの2人に抱きつきたくなった。

本当にありがたい！

雑賀は吉川を見つめた。

吉川は気絶していた。

「性欲の正体はお前だったか」

雑賀がそう呟いた。

その時、吉川が拳銃を向けた。

私を含め、全員手を上げた。

「よくも邪魔したな！」

吉川は立ち上がりながら、言った。

「殺してやる！誰からだ！」

鳥山は大鎌を置いた。

「落ち着け、お前の目を見れば分かる。お前は本当は撃ちたくないんだろ？」

「黙れ！」

「ここで撃てば、お前は俺みたいになる。俺みたいな奴にはなるな」

吉川は一瞬拳銃を下ろした。

鳥山はすかさず吉川の顔面を殴った。

鼻が折れる音がした。

吉川は入り口まで飛ばされた。

慌てて立ち上がり、部屋を出た。

雑賀は大鎌を拾った。

私はブラを付け直し、ポールシャツのボタンを閉めた。

「あの、本当にありがとうございます」

「礼はいいから、図書室に行こう」

雑賀は上を見た。

「早くしたほうがいいな、尋常ではない殺意を感じる」

尋常ではない殺意？ 一体どういう意味かしら？

私は2人と共に図書室に向かった。

『梶尾』

俺は廊下を歩いた。

感染者の1人が俺に向かって走ってきた。

俺は玄翁で頭を殴った。

打ち所が悪かったのか、怯んだもののまた襲ってきた。

俺はまた頭を殴った。

今度は倒れ、血を流して動かなくなった。

また感染者が現れた。

俺はノコギリで喉を切った。

血を噴出しながら、そいつは倒れた。

まだだ。

俺の怒りはこの程度で収まらない。

俺は玄翁で死体を殴った。

俺の怒りはこの程度では収まらない。

感染者が走ってきた。

俺は玄翁を掲げた。

俺の怒りは収まらない。

第2特殊感染者

真斗は呆れながら歩いていた。

理由は簡単。

後ろに居る猫野と須田が口喧嘩しているからだ。

しかも原因は弓と拳銃とどっちが信用できるか？だ。

暗い廊下を懐中電灯で照らしながら真斗は歩き続けた。

だが、真斗はある意味喜びのようなものも感じていた。

不良と行動を共にするのは不安だったが、2人からは不良のような感じはしなかった。

むしろ幼稚さを感じた。

世界中の不良がこうだったら世界は少し平和だろうな……

「拳銃は暴発や不発があるから信用できない！」

「くくく、弓はいちいち引かなきゃならんからその間に殺されるだろうが」

口調は少々荒いが……

真斗は何か横切るのを見た。

「……ゴキブリ？……」

形状はゴキブリのようだったが、大きさは遥かに大きかった。

何かが這う音が聞こえた。

「……2人とも……」

2人は今だ口論をしている。

真斗は見た。

何百何千何万何億の虫が目の前に這うのを。

そしてその中心に居る者の姿を。

「……2人とも……」

2人は今だ口論をしている。

「2人とも」

2人は今だ口論している。

「2人とも！」

やっと気づいた。

自分達の目の前に虫たちとその王「ベルゼブブ」が居ることを。ベルゼブブは大鉈を引きながら近寄ってきた。

3人はどうするか議題した。

「こっちのドアへ行くよ！」

「くくく…だから女は、こっちのドアだろう」

「どっちでもいいから速く！」

須田は左側のドアを開いた。

「早く来い！」

真斗と猫野は言われるがままに部屋に入った。

須田はドアに鍵を掛けた。

「これで一安心」

「くくく…あいつごとき拳銃で殺せばよかった」

「ねえ、今さらだけど部屋に入るより逃げたほうが良くなかった？」

「「あっ」」

2人はそうだったとばかりに啞然とした。

だが幸いだった。

この部屋に他の部屋と繋がるドアがあった。

「あそこしかないね」

「くくく」

「速く行こうよ」

3人はドアに入り、鍵を掛けた。

そこは会議室のような部屋だった。

「これで一安心だな」

「くくく」

「猫野さんは何で笑い続けるの？」

「くくく…キャラ作りさ」

キャラ作り？

その時、会議室で何かが這った。

2人は拳銃と弓を構えた。
また何かが這った。

真斗は懐中電灯で照らした。
それは四足歩行する生命体だった。
それは人型だった。

それは感染者だった。

だが、目は真っ黒に染まっていた。
牙は歯のように鋭くなっていた。

爪は獣のようなかぎ爪だった。

それは同世代の少年だった。

だが、体つきが獣そのものだった。

3人は唾然とした。

それは人間の頃は端整だっただろう顔つきで恐ろしい奇声を発した。

「糞！死ね！」

須田は弓を射た。

矢は少年に向かって飛んだ。

だが、四足歩行の少年はそれを避けた。

同時に3人に向かって走った。

人間とは思えないスピードだった。

3人はそれぞれ横に飛んだ。

理由は簡単。

少年が3人に飛び掛ったからだ。

少年は壁に当たった。

だが、そのまま壁を這った。

3人は驚愕した。

須田はすかさず廊下とを繋ぐドアを開けた。

あの虫とベルゼブブは居なかった。

「早くここへ！」

猫野よ真斗は走った。

猫野は廊下に出れた。

真斗も出ようとした。

だが、首に何かが巻きついた。

舌だった。

少年が舌を伸ばし、真斗の首を絞めた。

真斗は持ち上げられ、壁に叩きつけられた。

真斗に巻きついた舌は一旦離れた。

だが、今度は右足首に巻きつけた。

そして引っ張られた。

「糞！放せ！」

須田は弓を射た。

矢は少年に――当たらなかった。

当たる直前に少年が右手で受け止めた。

だが、銃声が鳴り響くと同時に少年の右肩の肉片と血が噴出した。

「くくく、言ったら？拳銃のほうが信用できる」

少年は壁から落ちた。

だが、立ち上がり、どこかへ逃げた。

「な？あの獣も拳銃で恐れた」

須田は真斗に近寄った。

「ほら、大丈夫か？」

「うん、一応」

「くくく、お二人さん、集合場所に向かおうか？」

2人はうなずくと、集合地点に向かった。

ベルゼブブと狼少年に出会わないことを願いながら――

ソフィーは近くのデパートで大きなリュックサックを見つけると、拾った拳銃一丁と89式小銃を入れた。

「抱えるより背負ったほうが楽」

そう言うなりリュックを背負った。

だが、すぐに近くの更衣室に隠れた。

感染者が居た。

十数人の感染者が走り回りながら獲物を探した。

ソフィーは更衣室で覗きながら見つからないようにイエス・キリストと神に祈った。

願いが届いたのか、感染者達がどこかに向かった。

「ふっふっ」

とりあえず一安心した。

が、再び不安に駆られた。

翼の音が聞こえた。

まさか――あいつが来たの？

音はデパートの外から聞こえた。

ソフィーのヘリコプターを墜落させた張本人だ。

翼の音は遠ざかった。

再び一安心し、更衣室を出ると、しゃがみながら歩いた。

この街の脅威は感染者だけではなかった。

大勢の虫とその先導者のベルゼブブ、特殊な感染者、そして巨大な翼を持つ何か＞が。

再会

信二は集合場所に戻ってきた仲間と共に廊下に出た。

全員、この忌々しいビルから出たかった。

正体不明の怪物が数々このビルの中に居る。

虫の群れとその王、指を伸ばす感染者、野獣のような感染者、恐らくもつと居る。

「なあ、あの刃の正体は何なんだ？」

真人は警戒しながら聞いた。

信二も刃の正体を知らない。

真希は全身の痛みに耐えながら言った。

「頭に兜を被ってる巨人だニャ」

真人は苦笑した。

やっと彼女らしくなったと思っていたのだろう。

「くくく、巨人だけじゃないぞ。野獣もどきの少年が居る」

「ああ、狼少年だね」

猫野と須田は己の武器の確認をしながら言った。

「このビルは化け物屋敷か？」

蛇谷は後ろを警戒しながら誰かに聞いた。

「いや、感染者屋敷だ」

真人は訂正した。

が、無線の受信音が響いた。

『真人、応答しろ』

「冬樹か！俺だ！」

真人は友人と話す少年のように歓喜の声で応答した。

『真人！今はどこだ？』

「東京都内だが？」

『お前の煙草は何だっけ？』

「ピースライトだが？」

『銘柄を変えろよ?』

直人は理解した。これは周波数を変えろって意味だ。

「お勧めは?」

「ニコチン27%でその他3%だ」

指定の周波数に変える。

『何で東京に居る!?!』

「帰りの電車に乗り遅れたんだ」

『今は真紅計画の真っ最中だ! 救助は来ないぞ!』

「俺は幹部じゃないからその赤い計画なんて知らないな」

直人は少し笑った。

信二は首を傾げた。

こいつは命知らずの兵士かな?

『幸いだったな。俺はブラックホークで飛んでる。迎えに行くぞ!』

「民間人も居るぞ」

『これは真紅計画だ! 民間人乗せて基地に戻ったら撃墜される!』

「俺から言わせればな……真紅計画なんて糞くらえだ!!」

『いいか! 民間人は連れてくるな!』

「おい! おい!」

雑音ばかりで返事が返ってこない。

周波数を変えたのだ。

「糞! あの野郎、自衛隊は軍隊じゃないんだぞ!」

直人は近くのゴミ箱を蹴りつけた。

信二は心底予想していた。

これはある意味狂犬病より危険なウイルスだ。

今隔離エリアである東京外に感染者が現れればたちまち広まるだろうね。

噛むだけでいいんだから。

あるいは唾をかければいい。

さすがは親父……やること半端ないな。

親父と連絡取りたいが、電話もネットも使えないからな。

完全に外部と遮断されている。

直人は周波数を覚え、適当に変えた。
音声が聞こえた。

『行け、行け、総員配置に付け』

『こちらアルファチーム、配置に付いた』

『ブラボーも同じく』

全員またかと思った。

また狙撃チームが来たのか？

ヘリコプターが上がる音がした。

無線ではなかった。

ビルの真上からだ。

『こちらブラボーチーム、突入班はビル内に突入、狙撃班は屋上に配置する』

遙か遠くで扉が破壊される音がした。

全員直人を見た。

「……ビル内に居るな」

直人は弱々しい笑みを浮かべた。

廊下の奥で4つの光が見えた。

直人は光とは逆方向に走った。

全員直人について行った。

奥に階段の扉があった。

「よし、開けるぞ」

直人は扉を開けた。

目の前に感染者が居た。

慌てた直人と蛇谷は89式小銃を感染者に乱射した。

感染者は体を揺らし、倒れた。

『銃声だ!』

『奥から聞こえた』

直人はまずいとばかりに全員階段を下るのを確認すると、扉を閉め、ドアノブにパイプ椅子を引っ掛けた。ほんの足止めになる。

直人は階段を下った。

何階か下ると、一回に着いた。

一回の出口が開かない。

「どうします?！」

真人は慌てた声で尋ねた。

「こうする!」

蛇谷は扉を蹴り壊した。

外の世界が見える。真夜中なのか、暗い。

感染者が一人走ってきた。

直人と蛇谷は小銃を構える。

だが、直人でも蛇谷でもない銃声が聞こえた。

同時に感染者の頭から血が吹き出た。

「くそっ! 屋上から狙撃だ!!」

直人は苛立ちの感情を露にした。

信二は特に驚いていない。

もう何でもありだからだ。

真紅計画という名の無差別殺人作戦。

大きな斧を持った処刑人。

クレイジーズ
発狂者

指伸ばしの感染者。

野獣感染者。

虫の群れ。

その王。

ただでさえ凄いのが居るのだ。

今さら何に驚けと?

そう思った信二は苦笑した。

ここで空飛ぶ怪鳥でも現れれば驚いてやるよ。

奴らが会談を下る音がする

その時、無線越しから声が聞こえた。

『ブラボーチームよりアルファチームへ! 試作品が暴走! 食い止め

られない!』

『糞!いくら撃っても死なないぞ!』

『だっ弾薬が!』

『撤退するぞ!』

無線越しから銃声と悲鳴が聞こえた。

『アルファよりブラボーへ、応答を願う』

『ブラボーチーム! 応答を!』

『全滅か?』

『くそ、救助に向かう。全員ヘリに乗れ!』

上がる足音がする。

信二は試作品とやらに感謝した。

ありがたい、これで俺達は助かった。

ヘリコプターが飛び立つ音がする。

信二は外を見た。

ヘリコプターが去っていく。

が、

大きな翼の音がした。

すると、人を遥かに超えた大きさを誇る何かが上空で現れた。

細身で紫色を基調とした翼竜にもドラゴンのも似た、体長は約1

2フィートの飛行生物がヘリコプターに向かって飛んでいった。

ドラゴンの様な足でヘリコプターを捕らえた。

『メーデーメーデー!』

『墜落する!』

『司令部へ! 脱走した試作品227に襲われている!』

ドラゴンの様な生物がヘリコプターを足で投げた。

ヘリコプターが回転しながらビルに飛ぶ。

『げっ激突する!』

『衝撃に備えろ!』

『助けてくれ!』

ヘリコプターがビルに激突する。

プロペラが折れ、機体が凹み、操縦不能になったヘリコプターは地面に落ちていく。

落下地点に、タンクローリーがあった。

ヘリコプターはタンクローリーに激突した。

そして大爆発が起きる。

衝撃波が信二達の居るビルにも届く。

タンクローリーとヘリコプターは炎上する。

飛行生物は巨大な蝙蝠・悪魔の様な翼を羽ばたかせ、どこかへと去っていった。

信二は呆然と見ていた。

まさか……本当に怪鳥が出てくるなんて……

だが、それで終わりではなかった。

爆発音を聞きつけ、ビル内からも外からも感染者が大勢で走ってきた。

「俺について来い！」

直人はそう言って走った。

全員ついて行った。

炎上するローリーを背後に、全員必死で走った。

感染者軍団が信二達を追いかけた。

後ろを見れば赤目の元人間が奇声を発しながら陸上選手張りの走りを見せる。

小銃で撃っても無駄だと悟っているのか、直人と蛇谷は撃たず、走ること集中した。

運が尽きた。

前方にも感染者が現れた。

直人は逃げ道が無いか探した。

大きなデパートがあった。

直人はデパートに向かった。

全員デパートに入った。

そして、デパートの裏口を目指した。

信二は久しぶりのまともな感染者と出会えて正直苛立ちを感じた。いつもいいタイミングで現れる。

そう思った矢先、信二は横から感染者に飛び乗られた。頭を強く打ち、そして、足を引っ張られた。

蛇谷は振り返った。

「くそつたれ」

冷静な声で言い、小銃を構えた。

狙いは感染者の頭だ。

だが、予想のしない事態が起きた。

弾切れだ。

蛇谷は悪態つきながら装填し、再び構えた。

だが、感染者と信二の姿はどこにも居ない。

後ろから直人は引っ張った。

「何してる！早く逃げるぞ！」

「相沢が連れて行かれた！」

「何？探すぞ！」

と言った瞬間、感染者達がデパートのガラス製の入り口を割って中に入った。

「今はやめよう」

「そうするしかない！」

2人は裏口に向かった。

信二は朦朧とする意識の中、感染者に引っ張られた。

俺……死ぬのか？……感染するのか？

銃声が響く。

何だ？…自衛隊か？蛇谷先生？直人さん？

金色の何かが見えた。

金髪……天使か？

意識がはっきりしていく。

端整な知ってる顔だ。

こいつは……ソフィーか！

ソフィー・ヴェルネがそこに居た。

「信二君大丈夫！？」

早口だが聞き取りやすい甘い声だ。

信二は立ち上がった。

「辛うじて、大丈夫だ」

「良かった……」

彼女の手元には自動拳銃9mm拳銃がある。

自衛隊の拳銃だ。

「それ、どこで？」

「自衛隊から頂いたの、信二君にはこれ」

そう言ってリュックサックから89式小銃を取り出し、渡した。

重い……だが頼りになる重さだ。

「ここは？」

「2階の家電売り場だよ」

確かに家電製品が沢山あった。

薄型デジタルテレビからゲームの映像が流れる。

同時に感染者の奇声も聞こえる。

「痛めている所は無いか？」

「ないけど？」

「なら……走れ！」

後ろから感染者が5人走ってきた。

店員らしい。

信二はソフィーを走らせると、感染者の1人をぎりぎり近づけせ、

近くの小さなテレビを持ち上げ、感染者の頭に殴りつけた。

画面が割れ、破片が刺さり、感染者は倒れる。

信二は再びテレビで殴りつける。

感染者は動かなくなる。

右の掌を見ると、破片で切れたのか、大きな切り傷ができ、血が流れる。

感染者がまたやって来た。

信二はお手ごろな破片を拾うと、投げた。
破片は右足首に刺さる。

感染者は転んだ。

信二は冷蔵庫に駆け寄り、倒す。

冷蔵庫は感染者の頭を潰す。

また来た。

信二は近くのコードを抜き、感染者の首を絞めた。

感染者は苦しんだ。

いくら狂暴でも、ゾンビではなく、あくまで生きた人間だ。呼吸もする。

信二はコードの先を右目に刺した。

感染者は奇声を発しながら無茶苦茶に暴れだした。

信二は親指で左目も潰す。

感染者は完全に盲目だ。

4人目の感染者が走ってきた。

信二は小銃を構える。

そして、狙いを定め、引き金を引く。

確かな反動が伝わった。

弾丸は目に見えない速度で感染者の頭を貫いた。

5人目が居ない？

そう思ったとき、5人目は勝手に倒れている冷蔵庫に足を引っ掛

け、頭を強く打ち、自滅した。

遠くで見ていたソフィーは思わず拍手した。

「かっこいい…」

信二は倒れている感染者の服で手の血を拭いた。

そして、ソフィーに駆け寄った。

「怪我は？」

「ない——」

言い終える前に、突然、激しくソフィーは咳き込んだ。

「おい、大丈夫か？」

ソフィーの口から出てきた何かが信二の右手に当たる。

信二は掌を見た。

血だ。

自分の血と混ざってソフィーの血が掌に付いていた。

「吐血は……よくあるの……」

「よくある？何か病気にかかってるのか？」

首を横に振る。

「何も病気になってない」

信二は本当かとばかりに首を振った。

その時、右手に激痛が走る。

切り傷だろう……信二はそう頷いた。

傷は後から痛むものだ。

「外に出よう、仲間が居る」

「じゃあ、行こうよ」

信二はソフィーの手を引いて走った。

右手の激痛に耐えながら。

不良

<液田井蛇尾の視点>

何でこんなことに……

頭の中で怒りと後悔が混雑している。とにかく、戻さなくては。俺達はある大きな家の様な物件の様な場所で身を潜めた。

無論、感染者から身を守るためだ。

この家は要塞だ。

1階の窓は全て鉄格子が張られ、正面玄関は鉄製で出来ている。全員、2階の部屋で睡眠を取っている。

吉川ってガキは……1階のトイレに居る。

長いな……30分は経過してる。

大便にしても長すぎる。便秘か？

俺はトイレに向かった。

ドアを開けたら——あいつは——マスを搔いてやる！

「何やってるんだ？」

知ってるが、意地悪く聞いた。

吉川は慌ててズボンを上げ、とぼけた顔をした。

「何もやってないよ」

「皆生き残るのに必死なのに、お前はのんきにトイレで快楽を求めたのか？」

「ち、違うよ！」

逆切れしやがった。

俺は肩をすくめる。

「悲しいね、彼女の居ないお前は二次元の女性をオカズにあそこ圧迫して快感を覚える。哀れだ」

こいつに限ったことじゃないが、この状況でやるなんて信じられない。

こいつは怒った顔をした。

「不良はやらないのか!？」

「そういう問題じゃない。時と状況を考えろって意味だ」

「いいじゃないか」

「ここは100%安全じゃない。お前の身勝手な行動で仲間を危険にさわすことってありえる」

「もーいーし!俺外に出る」

「何？」

俺は聞き返す。聞こえなかったわけじゃない。

「聞こえたら？」

「いや、もう一度」

俺は意地悪く言う。ああ、確かに俺は不良だ。ここは不良らしくするか。

「外に出る」

「なら出て行け!」

俺の怒りが爆発する。

そうさ、俺は短気だ。

あいつは玄関に向かった。

勝手にしろ!

俺はすぐに後悔した。

全員が睡眠を取っている間にも、俺はあいつと連絡を取った。

だが回線が繋がらない。

なぜだ?

いや理由は分かっている。

恐らく政府か何かが東京内の状況を漏らさないために回線を止めたんだ。

なら、インターネットも使えないかもな。

赤の他人に等しいとはいえ、今は仲間だ。優しくしてやれたのに……マスを搔くからだと腹を立てる自分が小さくなっていく気がする。

蛸田がやって来た。

「ボス、あんたは睡眠を取ってませんね、寝たらどうです？」
確かに眠気には勝てない。

「少し仮眠を取らせてもらうよ」

俺は仮眠を取るつもりで階段を上がろうとしたが、目の前の鉄製の扉に気づいた。

そう言えば、この部屋はまだ未確認だったな。

俺はドアを開けようと押した。

腕っ節に自信はあるが、これが中々開かない。

俺は押しに押したがびくともしない。

俺はやけくそになって、扉を引いた。

あっさり開いた。

………引き戸なのね………

俺は中を確認する。

中には錆付いた階段が延々と下まで延びている。

そして部屋の隅にバットがある。サボテンみたいに釘が沢山打ちつけられている。

俺はバットを拾い上げた。

だが、メモ用紙が落ちていた。

俺は拾い上げ、読んだ。

”岡本紘輝の作品“

誰だ？

まあいい。こいつはありがたい。

元々骨を折る威力のあるバットが釘を打ちつけることで殺傷力が上がった。

俺は壁にかけている懐中電灯を取って階段を下った。

下は闇の世界だが、懐中電灯の光のおかげで視界は確保できた。階段を下りきると、今度はトンネルが続く。

俺はトンネルを通る。

行けるだけ行こう。

ついに行き止まりに来た。

目の前には、大きな鉄の扉が微かに見える。
引き戸だな。

俺は力一杯引く。

今度は明かりがついていた。

そこは例えるなら広いバスルームだ。

シャワー栓や便器は無いが、代わりに手術用の道具や怪しい薬品、
大きな冷蔵庫、資料などがある。

小さな秘密研究所の様な場所だな。

俺は適当に資料を取る。

そこには、アジア人風の少女の写真が無数に貼られている。
どれも不自然だ。

牙が生えていたり、目が赤かったり、まるで化け物だ。

別の資料を見た。

そこには逞しい巨漢の写真が張ってあった。
体に無数の切り傷があった。

被験者第1号

被験者名…ジョン・ハドソン

コードネーム…ベルゼブブ

突然変異型

ジョンハドソン？

ベルゼブブ？

突然変異？

訳が分からない。

別の資料も見た。

そこには大きなゴキブリが写っていた。

被験体…ゴキブリ

症状…巨大化
ベルゼブブと連携を取る。

俺は台を見た。

そこに新しいテープレコーダーがあった。

隣に封筒に入れられた手紙がある。

封筒には”相沢信二へ”と書かれていた。

俺はテープレコーダーと手紙をポケットに突っ込み、この地下室から出ようとした。

俺は何を考えたか、冷蔵庫を開けた。

中には試験管や注射器が沢山置いてあった。

1本の注射器を取った。

ラベルには抑制剤と書かれている。

一体何の抑制剤だ？

俺はとりあえず注射器もポケットに突っ込んだ。

俺は隣のテレビを見た。

監視カメラの映像か？

俺は画面に釘付けになった。

画面は全員が睡眠を取っていた部屋の扉の廊下の映像が映っていた。

扉は閉まっている。

扉の前に誰かが居る。

そいつはどこかの中学校の制服を着ていた。

顔には何重にも巻かれた包帯があった。

そして、扉をつるはしで破ろうとしていた……

俺はすぐにこの部屋から出て、トンネルを走った。

トンネルは来るときは気にならなかったが、なぜ今は長く感じる。

トンネルを抜けた先に階段があった。

俺は階段を上がった。

頼む、間に合ってくれ！

俺は廊下に出た。

丁度、包帯少年がつるはしで扉を壊しているところだ。

「おい！変態野郎！」

俺は思いつきり叫んだ。

包帯野郎が振り向いてきた。

そいつは感染者ではない、人間らしい奇声を発した。

目は殺意に満ちて居たが、普通の目だ。

つまり、こいつは発狂者クレイジーズか始めからいかれた野郎だ。

俺はバットを構える。

奴はつるはしを振り回しながら走ってきた。

奴は俺の頭部目掛けてつるはしを振り下ろした。

だが、伊達に不良の世界を生きた俺だ。

鍛え上げた反射神経で避ける。

つるはしは床に突き刺さる。

俺はすかさず奴の頭部にストレートを食らわせる。

反撃のチャンスを与える間も無く、俺は奴の腹部を左手で3発殴る。

奴は一瞬悲鳴を上げた。

我ながら惚れ惚れする動きだ。

だが失敗だった。

バットで殴れば一発で済んだ勝負だった。

奴は俺に掴みかかった。

俺は奴の右手を掴んで一本背負い投げを繰り出す。

奴は床に叩きつけられた。

俺はバットを構えた。

これで決着が着く。

そのはずだった。

だが、奴は、飛んだ。

気づいたらいつの間にか俺の後ろに居た。

何て運動神経――――

そう思った瞬間、奴は俺の頭を掴み、壁に叩きつけた。
一体何回叩きつけたかは覚えてない。

俺は脳震盪を起こした。

奴がつるはしを持ってば終わりだった。

だが、運命は俺を味方してくれた。

奴の腹部に何かが刺さった。

日本刀だ。

五右衛門って奴が奴の後ろに居た。

「油断は死を招くぞ」

五右衛門はそう言った。

確かにそうだった。

奴は俺との戦いに夢中で油断していた。

それが死を招いた。

奴は自分の腹部を貫いた刀を見ながら、倒れた。

五右衛門は刀を抜く。

俺は頭を振りながら

「借りができたな」

と言った。

五右衛門は刀を鞘に収めた。

「無駄な殺生をしてしまったな」

「正当防衛だ。気にするな」

俺はそう言ってやった。

「部屋で休んでろ」

俺はそう言って1階に下りた。

外を見た。

感染者の姿は無いな。

俺は玄関を開け、外に出た。

目の前はデパートだ。

すると、デパートの入り口から何かが出てきた。

サラリーマンか？違う、感染者だ。

感染者は俺に気づいたか、奇声を発しながら走ってきた。
俺はため息をついた。

バットで感染者の頭を殴った。

釘が突き刺さる。

感染者は口をぱくぱくさせながら、倒れた。

地面に血が広がる。

俺はバットを引っっこ抜く。

「蛸田！蛸田！」

俺は部下であり仲間である蛸田を呼んだ。

「何ですか？ボス？」

「俺はデパートに行行って必要物資を取ってくる。お前は仲間と一緒にここで待ってろ」

「OK」

俺はバットを構えてデパートに向かう。

中は思ったより広かった。

1階は丁度食品売り場だ。

俺は缶詰のコーナーに向かった。

調理不要の缶詰をリュックに詰める。

すると、足音がしたから俺はバットを構える。

感染者が1人居た。

奴は走ってきた。

俺はバットを振り下ろす。

だが、天井にぶら下がっていた看板に突き刺さり、バットが手から抜ける。

感染者が俺に掴みかかり、俺は倒れた。

感染者が俺に噛み付こうと必死になって顔を近づける。

俺は奴の顔を1発殴った。

それでも怯みはしない。

俺は近くに落ちていた缶を拾い、それで殴る。

一瞬怯んだ。

それだけで十分だ。

俺は立ち上がり、バットを取って感染者の後頭部に叩きつける。
いや、突き刺したが正しい表現だな。

感染者は動かなくなった。

俺は首を回す。

ふと、右腕に激痛が走った。

俺は右腕を見る。

まだ幼い少年――感染者が俺の腕を噛み付いていた。

俺は慌ててそいつの顔を殴る。

傷口から血がドクドクと流れる。

俺はバットを引っこ抜き、そいつの頭に振り下ろそうとした。

だが、一瞬躊躇った。

感染者は走ってきた。

俺は決心してバットを振り下ろす。

その子は無残な姿になった。

俺は心の中で祈りの言葉を呟いた。

そして呪いの言葉も。

俺は感染してしまった。

後ろから気配を感じた。

俺は振り返る。

そこには――相沢信二と見知らぬ外国人美少女が居た。

「良かった、未感染者か！」

相沢は安堵の声を漏らす。

俺は頷いた。

「俺もまともな人間に会えてよかったぜ」

だが残念なことに、俺は感染者だ。発症も時間の問題だ。

俺は残された時間を有効に活用しようと心に誓った。

「仲間がいる、案内しよう」

「遠いのか？」

「いや、正面の家だ。それと……」

俺はポケットからテープレコードと手紙と注射器を渡す。

「お前宛だ。有効に使い」

相沢はポケットにしまった。

「案内してくれ」

俺は正面の家まで案内する。

相沢から頼もしいオーラを感じた。

相沢のポケットから雑音がした。

相沢はポケットから無線機を取り出す。

『信二君、聞こえるか？』

蛇谷の声だ。1度は担任になった野郎だ。

信二は送信ボタンを押す。

「僕です！信二です！」

『良かった、無事か！』

「ええ、他の未感染者も居ます」

『そうか、なら合流しよう』

「合流地点は？」

俺は相沢を見守った。

こいつは俺と違って本当にまともなのかも知れないな。

俺達は他のグループの合流地点に向かった。

「お前は前にも同じ状況になったのか？」

「はい、今よりかはスケールが小さいですが」

俺と相沢は会話をした。

俺達は道路を歩いた。

平和な時間だったかもしれない。

だが、右手の激痛が増している。

「止まって！」

相沢は大きな声で言った。

俺は前方を見る。

自動車やフェンスで出来たバリケードが道路を塞ぎ、その前に何百の感染者が居た。

「ここは避けたほうがいいですよ、ボス」

蛸田は俺に提案する。

「そうですね、回り道しましょう」

相沢はそう言って回り道できないか探した。

俺は近くのタンクローラーを見た。

ドアが開いている。

運転席を見ると、鍵が刺さったままだ。

「さすがボス」

蛸田がいつの間にか後ろに居た。

「それで特攻する気ですか？」

俺は近くのワゴン車を見る。

それも鍵が刺さったままだ。

「全員ワゴン車に乗れ」

俺はそう言う。

俺は相沢を引き止めた。

全員をワゴン車に乗る。

「相沢、ワゴン車はお前が運転しろ」

「いいですけど、あなたは？」

「タンクローラーで特攻する」

「特攻！？自爆する気ですか！」

「いや、道を開けるだけだ」

「なら、僕が……」

俺は傷口を見せる。

「俺は感染者だ。時間は有効に使わせてくれ」

相沢は驚き、渋々頷く。

そしてワゴン車に乗る。

俺はタンクローラーに向かった。

だが突然吐き気に襲われた。

俺は吐いた。

出たのは血だった。

鼻血が出始めた。

時間が無い。

俺はタンクローラーに乗った。

助手席に、ガスボンベが置いてあった。

俺はドアを閉める。

ボンベの栓を開ける。

バックミラーで俺は顔を見た。

右目が赤かった。

時間は有効に使おう。

そして、不良だった俺も最後はまともになろう。

俺はエンジンを掛け、タンクローラーを走らせる。

感染者が気づいたのか、走ってきた。

俺は出来るだけバリケードに近寄った。

そしてぶつかる。

バリケードは半壊した。

だが、タイヤがパンクする。

俺は火をつけるものが無いか探した。

激しい頭痛が走る。

頭が割れそうだ！

自分でも分かる。

血管や筋が浮き出る。

俺は煙草の箱を見つけた。

……やはり最後は不良っぽく終わるか。

俺は煙草を口に銜える。

そして、ポケットから写真を出す。

まだ小学生の妹の写真だ。

「悪いな、誕生日は祝えないぜ」

俺は皮肉っぽく言う。

煙草の箱からライターを取る。

この車は感染者に囲まれていた。

感染者が助手席の窓を割り、中に入ってきた。

そして俺に噛み付いてくる。

俺は運転席のドアも開ける。

感染者が入ってきた。

「歓迎するぜ、俺は機嫌がいいからな」

感染者が次々と俺の体を食い千切る。

いくらでも噛め！最後の晚餐だ！

俺はライターを煙草に近づける。

自然と涙が流れる。

血の涙だ。

やはり怖い。死ぬのは嫌だ！

俺はライターを遠ざける。

俺はやはり人間だ……死ぬのは怖い。

再び激痛が走る。

嘔吐もした。

サイドミラーを見れば、両目は完全に赤い。

俺の意識が薄れる。

俺は煙草にライターを近づける。

ゲームオーバーだ！

俺は内心叫ぶ。

覚悟を決めた。

妹の誕生日を祝えないのが心残りだな……俺が不良ですまなか
った

「道連れだ！！！！」

俺は叫び、ライターをつける。

車内に充満していたガスが引火し、そして

遺品

信二は見届けた。

不良の頭がタンクローリーで特攻し、自爆で感染者とバリケードを破壊したところを。

彼のおかげで道ができ、ワゴン車で走り抜けられた。

不良であった彼も最後はまともな人間として人生の幕を閉じた。

そして合流場所――警察署に着いた。

署内に大勢の未感染者――生存者とも言うべきか――が大勢居た。

信二は心底感動した。まだまともな人間が大勢居たなんて。

外には狂暴な人が走り回り、中はまともな人が体を休めている。

信二はベンチに座った。

警察署の正面玄関はベンチやロッカーで、窓は板やシャッターで塞がれている。

信二のベンチの隣には、妹の茜が座りながら寝ていた。

ありがたいことに、信二が感染者に連れ去られたとき、茜は真人が運んでくれた。

信二は茜をそっと寝かせ、洗面所に向かった。

洗面所で顔を洗っていると、ポケットに何か入っていることに気づいた。

ポケットから出してみると、ミニサイズのカセットレコーダー、

封筒、注射器が入っていた。

封筒には信二の名前が書かれている。

封筒をあけ、中の手紙を取り出す。

1通目には単純な文章しか書かれていなかった。

“テープを聴け”

信二は書かれた通りに再生ボタンを押す。

テープが回りだす。

『テープ回ったかな?――』

懐かしい渋い声だ。

黒木大輝――ある意味全ての原因だった男の声だ。今はもう亡き人物だ。

『――今回の記録は俺にとってうれしい記録だ。なんとってDE
MONYOウイルスオリジナルタイプ――今は始祖型と呼称したが――その症状が判明した。このウイルスは感染した生命体の遺伝子に作用し、適合できれば精神、肉体に損ねることなく知的、肉体的に超強化が施される。つまり適合者に対しては劇的な進化をもたらすものの、反対に不適合であった場合は、このウイルスに感染した生命体は、外的要因を必要とせず自発的な突然変異を続けるため、死ぬまで予測不能な進化を繰り返すようになる』

信二は耳を疑った。

突然変異?強化?適合?

訳が分からない。

『簡単に言うと、感染者のうちこのウイルスに完全な適応能力を持つ者は進化するが、適応能力を持たぬものは突然変異を起こして化け物になる』

突然変異も進化の1つだと信二は言いたかった。

要するに、感染者は超人になるか怪物になるかということか?

『先に予測不能な進化を繰り返すと言ったが、なぜ予測不能かは理由がある』

信二は聞いた。

『知っての通り遺伝子もDNAも個人差がある。遺伝子は基本的に誰でも同じだが、0・1%程度の個人差がある。このウイルスは遺伝子に作用するから僅か0・1%の個人差でどう作用するか人によって変わって来ると言うことだ』

もはやSFの領域だ。

狂犬病に似たウイルスが東京に流行したと思うと、今度は突然変

異を起こすウイルスが存在すると言われている。

一体何を信じれば？

手紙の2通目と呼んだ。

“始祖型デモニー・ウイルスが及ぼす人類DNAへの影響

生きるに値する優秀な遺伝子を持つ人間は新たな歴史を作る新人類に進化する。

生きるに値しない劣等な遺伝子を持つ人間は地を這う野獣になる。

地球に人間が増えすぎた。

自然界の動物には天敵の関係がある。

草食動物を野獣が食らい、野獣は天敵の襲われ、植物は草食に食われる。

自然界は天敵の関係でバランスを保ってきた。

人間に天敵は居ない。

地球の支配族である人類は血塗られた歴史を作る。

だがもうすぐ終わる。

人類の歴史は幕を閉じる。

新たな人類が生まれる。

東京は新たな歴史の始まりの地となる。

お前は どうする？

コINSTと同じ確率の進化。

化け物になるか新人類になるか

それはお前のDNA次第。

それが嫌なら拳銃で頭を撃て。

変異には激痛が伴うぞ。

言っておくがアインシュタインが新人類になれるとは限らない”

病的な手紙だな。

要するに、どんなに天才でもウィルスに適應できるとは限らない。どんなに馬鹿でもウィルスに適合できない訳ではない。どうなるかは自分の遺伝子次第。

信二は呆れながら3通目の最後の手紙を読んだ。

“ワクチンは出来なかった。だが抑制剤は作れた。変異が始まったから抑制剤を打て”

ポケットにある注射器のラベルを見る。

“抑制剤”

確かにそう書かれている。

信二は手紙を丸めてゴミ箱に捨てた。

テープは取っておく。黒木の遺品だからな。

封筒の中にまだ何か入ってる。

拳銃だった。

回転式拳銃の弾室にはごく丁寧に弾が1発装填されていた。

感染したら自分でけりをつけるてか？

信二は拳銃を腰に納めた。

だがその時だった。

右腕に激痛が走った。

まるで骨を折られている痛みだ。あるいはそれ以上だ。

あまりの痛みに信二は床に倒れこんだ。

右腕を見ると、血管や筋が浮き出ている。

本人の意識関係なく指が勝手に動く。

信二は注射器を本能的に打った。

すると

先の痛みが嘘のように消え、浮き出た血管や筋が元に戻る。指も勝手に動かず、信二の意思で動く。

だが感じたのは喜びではない。
恐怖だった。

いつの間にか始祖型に感染したのだった。
だがいつかは心当たりが無い。

いや、心当たりが無いと言えは嘘になる。

本当は心当たりはある。

ソフィーが吐血した時、彼女の血が信二の右掌に付着した。

丁度その時、掌に切り傷があった。

ソフィーは始祖型の保菌者だ。

まさかあの時感染したのか？

掌を見る。

傷口は完全に塞がっている。

圧倒的な絶望感が信二を襲う。

超人になるか怪物になるか、宝くじと同じ確率の変異なんて嫌だった。

超人ならまだしも、怪物だけはお断りだ。

信二はゆっくり立ち上がった。

抑制剤があつて幸いだった。ワクチンだったらもつと幸いなのに。

そう思いながらポケットにある抑制剤の数を確認した。

残り6本——決して多いとは言えない数だ。

彼は癌を宣言された患者と同じ気分で洗面所に出る。

洗面所で真人が待っていた。

真人は信二の顔を見た。

「大丈夫か？ 顔色悪いぞ」

信二は頷いた。

「大丈夫だ、ちょっと目眩がしただけだ。すぐに良くなるさ」

「そうか、なあ、ひとつだけ聞いていいか？」

「何だ？」

「癌を完全に克服する方法は？」

「何だって？」

「癌を克服する方法だ。一度癌になった姉が俺に聞いた謎々だ。姉の癌は直ったから、今は答えが聞けないから」

「なぜ今聞く？」

「俺は友人全員に聞いてみた。全員適度な治療と答える。お前なら違うこと答えが出ると思ってた」

「今は関係ない」

「すまない、だけど休息の時間帯である今はユーモアな会話が必要だろ？」

信二はなるほど、と頷く。

確かに今は楽しい会話をしたい気分だ。

「ああそうだな」

近くのベンチに座り、胸の前で腕を組んで真剣に考える。

癌を克服する方法——治療では感知できない癌も存在する——癌を克服する方法。

分からなかった。

癌を完全に克服する方法なんてあるはずがない。再発の可能性があるからな。

それより今は癌よりウイルスに克服したい気分だ。

今は抑制剤で体内に眠る始祖型デモニョだが、いつ目覚めるかは分からない。

信二は深呼吸する。

落ち着け、冷静になれ、ここで感染したと悟られたらおしまいだ。幸運にも真人は信二が真剣に謎々に悩んでいると勘違いした。

「そんなに悩まなくていいよ、また後で答えを聞く」

そう言って歩き出した。

「お前の妹と遊んでくる。お前も兄なら妹の面倒を見ろ」

そう言って真人は茜の所に言った。

信二は苦笑いし、茜の所に向かおうとした。

だが何かを感じた。

何かが警察署内に入り込んでくるのを感じた。

信二は無意識に歩く。

気づけば、そこは警察署の資料保管室だ。

保管室の窓が割れていた。

信二は窓から外を見た。

保管室は2階だ。

何かが壁をよじ登って進入してきたのか？

信二は天井を見た。

それは居た。

形状は人間だった。

だが人間ではなかった。

人間に鋭い大きい無数の爪は生えていない。

人間は背骨を露出しない。

人間は天井を這えない。

人間には鮫の様な牙は存在しない。

そして――人間は筋肉組織を露出しない。

それは信二を見た。

口は耳まで大きく裂けていた。

目は――眼球は黒くなっている。

それはとあるビルで真斗達が遭遇した四足歩行の感染者と同種の存在だ。

信二の目の前に居るのはそれが短期間で進化した種族だった。

この東京で生き残るために短期間で進化した。

長い年月をかけて進化した人類の生態系を捨て、新たな生物に生まれ変わった。

それは新生者^{ニューボーン}だった。

新生者は飛び掛った。

信二は横に飛ぶことで避けた。

だが新生者は凄まじいスピードで信二のところまで這った。

気づけば、信二の足を引っ張った。

信二は振りほどく。

だが新生者は飛び掛る。

信二は新生者の首を締め上げた。
あっさりと振り解かれる。

新生者は逃げるように信二に遠ざかった。
だが再び走ってきた。

信二は右腕に力を入れる。

新生者が飛び掛った。

信二は先生者の顔面目掛けて拳をぶつける。

何かが折れ、碎ける音がした。

新生者は倒れこんだ。

顔面はめり込み、首が不自然に曲がっている。

信二は右腕を見た。

血管と筋が浮き出ていた。

力を抜くと、すーっと元に戻った。

完全に信二は感染者だった。

外に居る自我を失った感染者とは別の存在。

新たな可能性を秘めた感染者だった。

“分かってるだろ”

目を覚ませば屋上に居た。

信二はゆっくりと起き上がる。今は真夜中だ。

地獄で目を覚ます気分は最高^{最低}だ。素晴らしいことに外には狂暴な感染者。

中には大勢の市民。

「外側」は無能、「内側」は有能が支配する世界となってしまうた。

厳密に言えば「外の連中」が「中」に入ることも容易。それを殺すのも容易。

まったくおかしい世界だ。

また、日本の首都東京も「内側」となってしまった。

巨大な壁が東京を世界から隔離した。

これは危険なウィルスを取り扱う研究所で生物^{バイオハザード}的災害が発生した際に取る措置、封じ込めに非常に似ている。

きっとこれは大規模なく封じ込め＜なのだろう。

信二はそう思いながら立ち上がる。

「おや？」

誰かが居た。

中年男性だった。

男性は写真を見ている。

「そこで何をしてるんですか？」

信二は話しかける。

男は振り返る。

「分かってるだろ？」

表情が――笑っている。

現実を受け止められない表情だ。

「はははっこんなことがあるはずがない」

汗をかいている。

目が、明らかに【正常】ではない。

「夢……っそう悪い夢だ！悪夢を見てるんだ！」

やはり現実を受け止めていない。

無理も無い。

「起きよう、起きて職場に行こう」

男はフェンスを上がり、飛び降りた。

信二は止めなかった。

これも彼の選択だ。

頭から落ちればきつと即死だ。

そう思った。

だが現実は甘くなかった。

男は落ちたが、感染者がクッションになってしまった。

男は生きている。

だが、それも一瞬だった。

大勢の感染者が男を食い殺した。

もつとも原始的な本能が彼を食えと命じた。

感染者も死者ではない。食わなければ生きられない存在だ。

信二は聞こえた。

男の悲鳴、肉が裂ける音、感染者の奇声。

自衛隊の真紅計画も今はどうなっているんだろう？中断かな？

そんな思いをしながら屋上の端を見た。

かなり高齢の老夫婦が仲良く立っていた。

信二は近寄った。

「そんな所で何を？」

信二は尋ねる。

夫の方が答える。

「ここは景色がいいね」

「本当にね」

2人は笑った。

信二は首を傾げた。

「これからわしらは旅立つんだ」

信二は瞬時に理解した。

また自殺か。

俺に止める権限は無い。

そう思ってた。

「どうして？」

「この食料は限られている」

夫は空を見た。

「大勢の市民が居る」

目を閉じる。

「自衛隊の救助も難航している」

信二を見た。

「だから、わしらみたいな古い先短い老人は先に行くんじゃよ」

「そうよね」

さっきの男とは違う理由。

他者のために自身たちの身を投げる。

ある種の感動を覚えた。

ソフィーがやって来た。

「信二君そんな所で何をしてるの？」

信二は答えようとした。

「わしらと一緒に星空を見てたんじゃ」

ソフィーは空を見上げる。

「確かに光が少ないから星が良く見えますね」

信二はソフィーの腕を掴むと歩く。

「中に行こう」

「え？」

信二はソフィーを連れて入る。

老夫婦は笑みを見せた。

「かっこいい男の子と綺麗な女の子でしたね」

「ああ、あんな娘と息子が欲しかった」

2人はいつでも落ちれる体勢にした。

「来世が楽しみじゃ」

「ですね」

2人は――――

真人はトイレで小便をした。

トイレを流し、手を洗う。

が、物音がした。

振り返る。

誰も居ない。

真人は金属バットを構える。

トイレのドアを1つずつ順番に開ける。

ついに一番端っこに来た。

真人はバットをしっかりと握る。

ドアを開ける。

中にフードを被った大の大人が便所で座っていた。

すぐに襲わないところを見ると感染者ではないそうだ。

真人はほっと一安心する。

が、それは一瞬だった。

男は突然立ち上がり、真人の口を塞いでトイレの個室に入れる。

ドアに鍵を掛け、フードを降ろす。

その時真人は本能的な恐怖を覚えた。

男の毛は禿げ上がり、目を胸膜は黒く、虹彩は赤く染まっていた。
何より恐ろしいのは浮き出る血管と全ての歯が犬歯のように鋭く

発達している。

「騒ぐなよ、あんたに頼みがある」

見た目に反して声は渋い普通の人間の声だ。

男はミニサイズのカセットレコーダーを見せる。

「相沢信二を知っているか？」

真人は頷く。

だが後悔した。

学校で知らない人には教えてはいけないと先生に言われていた。

「なら話が早いぞ安藤真人」

こいつ、俺の名前を？

「いいか、相沢に出会ったらすぐにこれを渡すんだ」

カセットレコーダーを渡す。

「それと来るべき時が来たら俺の言う真実を全て相沢に話せ」

男は口を耳元に近づけ、喋りだした。

「俺の名前は岡本大輝。いいか、もうすぐ自衛隊の救助ヘリが来るが――」

立花は眠る茜と亜矢子と言う少女の頭を自分の太腿に乗せた。

愛らしい寝顔――外で恐ろしい出来事が起きていることをすっかり忘れさせる。

はたして最新の情報は信じていいのかしら？

自衛隊が救助ヘリコプターを飛ばした。

まずは各警察署に来るから生存者は警察署に来いと。

はたして信用していいのかしら？

相沢君の真紅計画のこともある。

はたして……

そんなことを考えても無駄だと立花は思った。

実際、今は動けなくなってしまった。

外は感染者の数が未感染者を大きく上回っている。

外での行動は禁物だ。

誰かがテレビをつけた。

そこに若いニュースキャスターが映っていた。

『……です。東京各地で頻発する暴動に対し、政府は緊急対策を施

したと発表』

全員テレビに注目した。

『暴動を鎮圧するために警察のみならず特殊部隊SATや消防隊、さらに陸上自衛隊までもが出動しました。東京の周りにも巨大な壁がそびえ立ち、暴動にしてはこの対策は過剰だと言う声も日本各地で見られます』

カメラが周りの様子を映す。

『見てください、東京を出るための検問所に武装した警察隊や自衛隊が厳重に警戒しています。両勢力はガスマスクの様なものを着用し、不安を募らせます』

『最新の情報によりますと、負傷死者は1000名を超えたと――』

その時、自衛隊の誰かが叫んだ。

『感染者だ!』

銃声が響く。

『発砲です!警察隊と自衛隊が何かに発砲しました!繰り返します!ついに発砲が始まりました!状況は不明ですが、検問所に居る市民が混乱を起こし……』

キャスターの顔に恐怖が浮かび上がる。

『ちよつと……何……あれ?』

カメラがバンする。

そこには、血塗れの男性――感染者がバットを持ちながらゆっくりと近寄る。

『お前、止まれ!』

カメラマンが叫ぶ。

同時に感染者も奇声を発しながらカメラマンを殴った。

カメラが落ち、画像が乱れた。

同時に倒れたキャスターの顔が映る。

『ちよつとやめてやめてやめて!!!!!!』

感染者が押し掛かり、キャスターが首筋を食いちぎられた。

カメラはそれをしっかりと収めた。
感染者が撃ち殺される。

『隊長！このカメラが！』
『破壊しろ！』

カメラの映像が途切れる。
代わりにスタジオが映る。

若い男のキャスターが解説を始めた。

『現場の小山アナに何か問題が起きたようです。これからは現場取材が危険なため、スタジオでお送りします』
誰かが叫んだ。

「ふざけるな！暴動って何だよ！」

『ええ、東京都内に居る住民は屋外は大変危険なため、可能な限り自宅や近くの建物に出ないでください。自宅や近くの建物の窓・入り口はしっかり施錠し、窓などは可能な限り補強を施してください。』

東京都外の住民は自宅待機し、東京付近には近寄らないように。日本政府は非常事態宣言を発令しました。東京を最重要隔離地区に指定しました。都内で何らかの理由で建物に入れない場合、指定された避難所に避難するように。今から指定された避難所を発表します――』

感染者は検問所にまで達したのか。

立花は何とも言えない何かを感じた。

最初は小規模封鎖が今や大規模封鎖だ。

この世の終わりを感じてしまう。

感染者達が黙示録を始めた。

手始めに東京を落とそう。

そう考えているのかな？

もはやどうでもいい。

地上で東京を出るには検問を通る必要がある。

だがはたして自衛隊はすんなり通してくれるだろうか？

即射殺、ありえる。

即焼却、ありえる。

即隔離、ありえる。

何でもありえる。

立花は少し眠ろうと目を閉じた。

他の人は無事だろうか？

聖夜達は警察署内にいる。

まだ信二たちとは再会してないが、ラジオで警察署に救助ヘリが来ると知ったからだ。

真人は謎の男――岡本に驚愕する話を聞かされた。

「そ、それは本当か？」

岡本は頷く。

「ああ本当だ」

「なら、」

「そうだ」

「今すぐ仲間を集めなきゃ！」

「ちょっと待て」

岡本は別のテープレコーダーを渡す。

「もしもだが、機会があったら大澤博士にこれを渡して欲しい」

「大澤博士？」

「甘い声の美人だ。普段は研究所に居るから渡すのは無理だろうな」

「いつ皆に真実を話せばいい」

「分かってるだろう？」

真人は拳を握り締める。

「これを渡す」

岡本は鍵を渡した。

「これは警察署の武器庫の鍵だ。2階の南東にある部屋だ」

「ありがとう」

「ここを出るのは今から1時間以内にしろ、その間は感染者も襲ってこない」

「ありがとう」

「頼んだぞ」

2人は強く握手をする。

真人はトイレを出た。

仲間を集めに。

岡本は満足したように頷く。

そしてフードを被った。

「さて、信二、感染したお前の決断を見届けさせてもらおうぞ」

脱出

真人は急いで仲間を集めに警察署内を走り回った。

ありがたいことに、信二のグループ、聖夜のグループ、今無き狐狩りリーダーのグループと自衛隊と元自衛隊が1階に集まっていた。

真人はなるべく控えめな声で言った。

「全員、俺についてきてくれ」

そう言うと、全員、疑問に思いながらも真人についていった。

真人は武器庫の扉の前に立った。

「武器庫に来てどうする？」

聖夜は胸の前に手を組んで言った。

「まあ、待ってくれ」

真人は武器庫の鍵を使って扉を開けた。

この鍵はもう必要ないようだ。

真人は捨てる。

蛇谷が驚いた顔をした。

「お前、その鍵を何処で？」

そんなことはおかまいなしで武器庫に入った。

拳銃、散弾銃、短機関銃、色々あった。

真人は大きな袋で手当たり次第の武器を袋に詰めた。

信二が聞いた。

「そんなに焦ってどうした？」

「自衛隊が救助ヘリを警察署に飛ばしてるって知ってるか？」

ソフィーは自衛隊という単語に拒否反応を起こしたように一瞬痙攣を起こす。

信二以外は知っていたようだ。

「それがどうした？」と聖夜が聞いた。

「実際は救助ヘリじゃなくて輸送ヘリなんだ」

「輸送？何を輸送するんだ？」

「武装自衛隊員だ」

綾瀬が頷く。「まあ武装してても違和感はないよ？外には感染者――」

「要点を言え」

直人は鋭い声で言った。

「救助つてのは嘘で本当は生き残った市民を集めるためのデマだ」
「何のために？」

「いいか、政府と自衛隊は事実を隠蔽したがっている。政府からすれば危険なウィルスの存在を隠していたことが国民に知られるのを恐れている。知られれば政府の立場が危なくなる。自衛隊は市民を無差別発砲した事実が暴露されるのを恐れている」

「だから？」

「だからデマを流して市民を集めて“始末”するんだ」

信二、ソフィー、立花、直人、以外は驚いた。

「ははは、冗談はきついで」

聖夜は笑いながら言った。

「嘘だと思うなら信じなくてもいい。けど俺は始末されるのはごめんだ」

真人は武器を詰めながら言った。

真希も始めは半信半疑だったが、考えれば感染が始まった後、自分のお隣さんである主婦とその息子が殺された。信じられないがありえる。

直人は自分の仲間である狙撃手達が上層部の命令で市民を無差別発砲したことをついさっきまでのように覚えている。

ソフィーは自衛隊員に何度も捕まりそうになった。

信二は自分の父の性格をよく知っている。基本家族には優しいが、任務達成には手段を選ばない非道な性格だ。今回も機密維持の為に冷酷な判断をするだろう。たぶんな。

立花はもはや何が起きてもおかしくないと考えている。

故にこの5人は真人の話を真に受けた。

それでも蛇谷以外の仲間は今だ信じられずに居る。

だが真人の話を裏付ける決定的な出来事が次に起きた。

無線から自衛隊の会話が聞こえた。

『これより真紅計画^{コードレッド}を再開と上層部から伝達があった。これから機密維持作戦に入る』

『情報は？』

『テレビやラジオで流している』

『封じ込め作戦は？』

『全ての検問を封鎖した。唯一の検問は高速道路だ』

『後は情報を信じて集まってくる市民をしま……』

『周波数を変えろ』

以後、無線から雑音しか聞こえなくなる。

全員殴られたような顔をした。

無線から“殺す”や“始末”などの単語は出てこなかったが、“しま”という惜しいところまでは聞こえた。

蛇谷は決心した顔をした。

『真実を、皆に伝えなくては』

そう言って他の生存者に真実を伝えに向かった。

今や全員が武器を集めるのに手伝っている。

ありったけの武器を集め終え、全員が真人に聞く。

『出るべきはどうする？』

『出るのは今のうちだぜ。今は感染者は襲ってこない』

『その根拠は？』

『……とにかく信じて』

武器を出来るだけ袋に詰めたら、真人は言った。

『駐車場にある装甲車で脱出しよう』

そう言ってポケットから装甲車の鍵を出し、真人に投げた。

真人は見事にキャッチする。

『これをどこで？』

『気にしないで』

信二は茜を連れに1階に向かった。

茜の隣に誰かが寝ている。

亜矢子と言う少女だった。

仕方ないと信二は茜を背負い、亜矢子を抱えた。

誰かが近寄った。

「あの、娘を連れてどこに？」

信二は振り返る。

亜矢子の母親だった。

「警察署から出るんです。自衛隊の情報がデマだと無線で判明しまして、よかったですらご一緒に」

「いいえ、娘だけを連れてください。私は」

そう言って自分の右腕を見せた。

噛まれた傷が痛々しくあった。

「噛まれたのですか？」

「はい、頭痛が起きてきたんでそろそろ発症するのではないかと思
って」

そして一礼した。

「娘をお願いします」

「あなたは？」

「あなた達の出発を見届けた後、分かりますよね？」

信二は頷く。

蛇谷が近寄った。

「駄目だ、誰も信用しない」

「仕方ないですよ、それが彼らの“選択”ですから」

「選択？」

「彼らを選んだ道です。選んだ道は何がであろうと自己責任だ」

信二はそう言って駐車場に向かった。

駐車場ではパトカーが並んでいる。

よく映画で見かける特殊部隊を輸送する装甲車があった。銃器対策警備車と呼ばれている。

全員既に乗っていた。

信二と蛇谷は急いで警備車に乗る。

直人がエンジンを掛け、警備車を出発させる。

地下駐車場の入り口が閉まっていた。

だがお構いなしに猛スピードでシャッターを破壊し、警察署から出た。

全員一安心した。

上空でヘリコプターが警察署に向かっているのを確認した。

直人は車を止める。

そして様子を見た。

若い自衛隊員がブラックホークに乗っていた。

落ち着かず、そわそわしている。

「落ち着け」

隣に居た自衛隊員に肩を叩かれる。

「せ、先輩」

「俺だってやりたかないさ」

ブラックホークが警察署の屋上で着陸した。

武装した7人の自衛隊員がブラックホークを降りた。

1人が拡声器で呼びかけを始めた。

「こちら陸上自衛隊です、署内に居る市民はただちに屋上に来てく
ださい」

瞬時に大勢の市民がやって来た。

「やった、助けがきたぞ！」

「あいつの話は嘘なんだ！」

「これで東京から出られるぞ！」

自衛隊員の隊長がやって来た。

「ここの責任者は？」

「いませんが」

「警察は？」

「あまり居ません」

そう言うなり突然銃を向けた。

「な、何を！」

「これから検査を始める。感染した人間は乗せられない」

「壁に並べ！」

銃を恐れた市民が壁に並ぶ。

「いくつか質問します、正直に答えを。感染者と接触した人物は？」

「感染者？」

「狂暴な連中です」

全員渋々手を上げる。

「感染者の血液や唾液が口に入った人は？」

誰も手を上げない。

隊長は頷く。

「射撃用意！」

全員銃を構える。

「なっ！俺達を撃ち殺すのか！」

「我々の安全の為だ！」

1人の自衛隊員がやって来た。

市民1人1人の熱を測定した。

そして隊長に報告する。

「全員平常値より若干高いです」

「撃て！」

自衛隊員全員が戸惑いを見せたがすぐに撃った。

89式小銃から放たれる弾丸が次々と市民に炸裂する。

市民は次々と悟っていく。

蛇谷の言っていたことが真実だと。

気づけば市民は1人残らず撃ち殺されていた。

火炎放射を持った自衛隊員が死体を焼き始める。

1人の自衛隊員が隊長に聞く。

「なぜ撃つんです？火炎放射で焼いたほうが弾も時間も無駄にせずに済むのに」

「……せめてもの情だ……」

ガスマスクのせいで表情が見えない。

隊長はさらに言う。

「これは殺人行為だ。だが壁の外に居る市民のために、感染を広げないための小さな犠牲だ」

死体が全て燃やされた。

「全て焼きました」

「よし撤退だ」

全員ブラックホークに乗る。

ブラックホークのプロペラが回る。

ブラックホークが離陸する。

信二達は確かに聞いた。

銃声を

悲鳴を

真人の言っていたことは正しかった。

市民が銃殺された。

考えればブラックホークは市民を乗せるのに不十分なヘリだ。

きっと他の警察署でも——ソウ思うと何ともいえない哀れみを感じた。

直人はアクセルを踏む。

追撃 処理

【追撃】

AH-1S愛称“コブラ”と呼ばれる攻撃ヘリコプターが2機飛んでいた。

胴体中央部のスタブ・ウイングには4ヶ所のパイロンがあり、TOW対戦車ミサイルを装備していた。

機首下面のターレットには、M197ガトリング砲を装備していた。

コブラを操縦していた自衛隊員が警察署から脱出した警備車を発見した。

「コブラ1より本部へ」

『こちら本部』

「走っていく車両を確認」

『了解、コブラ1攻撃を許可する。コブラ2はそのまま目標へ向かえ』

「了解」

直人は嫌な音を聞いた。

ヘリコプターのプロペラ音——民間ヘリならいいのだが……サイドミラーで空を見る。

思ったとおり。攻撃ヘリコプターが飛んでいた。

「少し嫌なものが来た」

信二は聞いた。

「何ですか？」

「対戦車用のミサイルとバルカン砲を持ったヘリコプターと言えば？」

「戦闘ヘリですか？」

「そんなものだ」

見たことのある形状だ。

自衛隊じゃ“コブラ”と呼ばれているヘリコプターが2機飛んでいた。

1機が直人達の乗る警備車に向いて飛んできた。

この車は防弾性だから機関銃なら何とかなるかもしれないが、ミサイルは防ぎきれない。

直人は猛スピードで逃げる。

無線機から声が聞こえた。

『コブラ1、＜目標＞破壊の為の機関砲使用の許可を求める』

「目標って？」と 真人が聞いた。

「俺達だ」と信二が答える。

『機関砲使用を許可する。＜目標＞を破壊せよ』

その時だった。

機関砲が凄まじい速さで回転し、弾を撒き散らす。

弾丸が車体の隣のコンクリートの塀が一瞬で破壊された。

車をUターンさせ、コブラの下を通る。

コブラもUターンするが、それより早く再びUターンさせ、コブ

ラの下を通り、右の道路に曲がった。

再びコブラが追いかけてくる。

蛇谷が窓から体を出して、小銃を乱射する。

撃った弾のうち3分の1ほどは当たった。

『攻撃された、目標は銃器を所持している』

『支障は無い、追撃を続けろ』

再びコブラが機関砲を発射する。

蛇谷は慌てて体を戻す。

車の屋根に数多の弾丸が命中し、凹む。

「防弾性の車でよかったな！」

直人は叫ぶ。

「だが長くは持たない！」

蛇谷が叫び返す。

「ロケットランチャーがあればな！」

蛇谷は再び体を出して乱射する。

全員外を見た。

ヘリは相変わらず追跡してきた。

直人は希望を持った。

目の前に長いトンネルが見えた。

『ミサイル発射の許可を』

『ミサイル発射を許可する』

「まずい！」

直人はそう叫びながらトンネルに直進した。

『目標捕捉』

直人は間に合ってくれと心の中で願う。

トンネルまでもう数メートルもなかった。

その瞬間だった。

ミサイルが放たれた。

凄まじいスピードで車との距離をつめていく。

直人はトンネルに入ったと同時に曲がる。

ミサイルは直進して別の車に命中した。

車が大爆発を起こし、部品を飛ばす。

爆発の衝撃でひび割れていた天井が崩れ、入り口を塞いだ。

「畜生！」直人は怒鳴り声を漏らす。

入り口が塞がれば、ヘリは出口で待ち構えればいい。不利な状況だ。

案の定、遠くの出口でヘリが待ち構えているのが見えた。

まさに絶望的な状況だ。

だが別の存在が一同の前に現れた。

目の前で感染者の集団が1人の老人を捕食していた。

血管などが剥き出しになり、内蔵を抉り取られる老人の姿は哀れだった。

感染者達は警備車に気づき、走ってきた。

ドアや窓などを叩くが、防弾性の警備車では簡単に進入できなかった。

「これからどうする？」

蛇谷が聞いた。

直人は考え込む。

このまま出口に向かえば機関砲かミサイルで大破される。かといって非常用出口はないし、外は感染者が囲んでいる。

警備車を乗り捨てても痛い。

本当に困った状況だった。

「これに似た車があればな……」

綾瀬がそう呟く。

「どういう意味だ？」

「いえ、これに似た車があれば、何らかの小細工をして出口まで直進させ自衛隊の大破させるんです。

そうすれば向こうが勝手に死んだと思って去ってくれるはず（と思う）」

「無謀なアイディアだ」聖夜はそう言う。

「いや、いい案だ」直人は言う。

直人は指差す。

この警備車に似たマイクロバスがあった。

カラーリングもそっくりだ。きっと軍事マニアか何かが改造したマイクロバスだろう。

直人は車を直進させる。

正面に居た感染者は轢き殺され、すぐに直人と蛇谷が車から降りて残りの感染者を射殺する。

外の感染者はあっという間に全滅した。

直人はマイクロバスに駆け寄る。

エンジンは掛かっていなかったが、鍵は刺さったままだ。すぐにエンジンを掛けた。

「何か棒とテープをくれ」

テープと金属製の棒が届いた。

テープでハンドルを曲がらないように固定した。

長い棒でアクセルを押し付け、固定した。

マイクロバスが猛スピードで直進する。

直人は慌ててマイクロバスから降りる。

無人のマイクロバスは出口まで直進する。

『目標捕捉』

ミサイルが放たれた。

ミサイルはマイクロバスに命中し、木っ端微塵にした。

『目標の破壊を確認、元の任務に戻る』

ヘリが去っていく。

直人は苦笑した。「馬鹿め、ミサイルを無駄にしたな」

そう言って警備車に戻る。

全員が心配そうな目で見つめていたのに気づいた。

「あれくらい朝飯前だ」

【処理】

東京都外部とある一軒家

この一軒家の前に特型警備車が止まり、中からSAT隊員が下りてきた。

『狙撃班は位置に着きました』

無線から連絡が来る。

相沢信二の兄――相沢信一が防弾ベストを着込み、強力なライトと標準用レーザーサイトを装備したオートマチック・ライフルを構えた隊員達が玄関の前に立つ。

鉄製の大型ハンマー“バッティングラム”を持った技術支援班が玄関の前に立った。

隊員はかつて“大羽中学校封鎖”と関与した人物達で編成されている。

『こちら指揮班、東京から逃れてきた7人家族がこの建物に潜伏していると思われる』

「なぜ東京から逃れられた？」信一は聞き返した。

『不明だ』

「なぜ武装するんだ？」

『近所から叫び声と物音が聞こえたと通報があった』

「感染者か？」

『可能性は否定できない』

信一は頷いた。

「再びクソツタレな任務に就けてありがたいこった」

「同感です」

隣の隊員が答えた。

『これは白昼の作戦だ、市民を脅かさないように行動は速やかに』
イエッサー！と雄々しい声が隊員たちから上がる。

『任務はいたって簡単。突入し、内部の人間を拘束、あるいは射殺せよ。3班に分かれろ、制圧1班は突入、2班、3班は待機』

1班の班長である水谷達也が黙って左手を上げ、それを下ろした。同時にバツティングラムを持った隊員が蝶番を叩き壊し、1班の隊員が中へと入っていく。

信一は最後に入った。

2班が入り口から銃を構えて後ろから1班を見守った。

建物内は暗かったが、強力なライトが隊員の視野の助けになった。ヘルメットとマスクを着用しているため、隊員の顔は確認できない。

隊員達は階段を慎重に上がる。

暗闇のせい、よりいっそう緊張感が隊員達を襲う。

階段の上に誰かが居た。

隊員達は一斉に銃を構える。

そこに居たのは――40代前半くらい男だった。右手には金属バットを握っていた。

「武器を捨てろ！」

水谷が大声で言った。

男は怯えていた。

「もう1度言う！武器を捨てろ！」

男はバットを捨てる。

2人の隊員が駆け上がり、男の腕を捻って手錠を掛ける。

「班長！男が何かを呟いています！」

「何を呟いている？」

「家族は異常じゃない、そればかりです」

残りの隊員が階段を駆け上がった。

ドアが4つ並んでいた。

きつとどれも鍵が掛かっている。

隊員がドアを順に蹴り飛ばす。

3つ目までは中はただの部屋だった。

4つ目を蹴り飛ばした。

隊員全員が銃を構えた。

中に2人の人影があった。

1人は椅子に拘束され、もう1人は立っていた。立っているほう
は男だ。

2人とも老人に見えた。

「ひざまずけ！」

男はひざまずかない。

「ひざまずけっ！」

男は何も答えない。

代わりに――奇声を発しながら走ってきた。

水谷は瞬時に男の頭を撃ち抜いた。

男は脳と血を撒き散らしながら倒れた。

信一が男に駆け寄って、目を確認した。

黒だった。眼球が黒く染まっていた。

「制圧1班より指揮班へ、＜感染者＞が居た。事態は深刻だ」

『予想されていた事態だ、作戦の遂行を』

信一は椅子に縛られている老婆を見た。

こっちも眼球が黒く染まっていた。

「悪いな」

信一はホルスターから拳銃を抜き、老婆の口に突っ込む。そして引き金を引いた。

銃声と共に、後頭部が破裂し、血と肉が吹き飛んだ。

水谷が報告した。

「制圧1班より指揮班へ、2階を制圧、7人のうち2人は射殺、1人は拘束した」

『了解、残り4人を搜索せよ』

「了解」

水谷は叫んだ。「1階を確保するぞ！」

隊員達は次々と1階に下りた。

まずは1階のリビングルームに入った。

誰も居ない。

食卓に向かった。

誰も居ない。

洗面所、トイレ、お風呂場に向かった。

やはり誰も居ない。

「制圧1班より指揮班へ、1階を確保、誰も居ない」

『誰も？おかしい、確かに――』

「班長！」

1人の隊員が叫んだ。

台所の冷蔵庫の後ろに隠し扉の様なものがあった。

「訂正、まだ確保していない部屋があった」

『了解、安全を確保せよ』

1人の隊員が扉のノブを捻った。開かなかった。

扉は金属製だった。蹴り開けるのも無理がありそうだった。

「技術支援班を要請」

『了解、突入させる』

バッテリーグラムを持った隊員が入ってきた。
そして手際よく扉を破った。

「突入！」

隊員が続々と入っていく。

中には地球の果てまで続きそうな長い階段が下がっていた。

隊員達が階段で下に下りていく。

ついに下に着いた——と思うと今度はカビだらけのトンネルがあった。

「建物に地下が存在していた」

『2班を突入させる、引き続き搜索を——』

その瞬間、出入り口であった階段の扉が閉まった。

それは厚い鉄製の扉だった。

隊員が慌ててドアを引く。

「開かない！」

足を壁に当てて、必死に引っ張るも開かない。

「1班より指揮班へ！閉じ込められた！」

『技術支援班を送る！』

引っ張るのが無理だと悟った隊員は、今度は押した。

びくともしない。体当たりしても同じだった。

「班長！扉が開きません！」

隊員は必死に扉を開かせようとしたが、無駄だった。

「皆落ち着け、取り乱すな」水谷は冷静に言った。

信一は警戒を怠らなかった。

『こちら技術支援班、プラスチック爆弾を使う、扉から離れろ』
隊員が扉から慌てて離れた。

『321で爆破する、3、2、1』

大きな爆音が響いた。

信一は扉を見た。

相変わらず扉はそこに存在した。

『くそ、特殊合金か何かだ！破壊するにはありったけの爆薬が居る！』

信一はため息つき、改めて人数を確認した。

全員で7人、自分と水谷、後1人は豊和89式小銃、3人はH&M P5、1人は散弾銃を装備している。

散弾銃の隊員は支援班だった隊員だ。

信一は再び真剣になる。

支援班の隊員がバツティングラムで扉を叩く。爆弾で壊れない扉だ、ハンマーでは壊れなかった。

今度はホルスターから拳銃を抜き、扉に3発撃った。弾が跳ね返る。

今度は散弾銃を1発撃った。これも跳ね返される。

隊員は扉を開けるのを諦めたが、他の隊員が必死に引っ張る。

『こちら指揮班、扉を破壊するために色々と方法を取るが、そちらも出口が無いか搜索してくれ』

「了解」

水谷はそう返事し、再び銃を構える。

「これから奥に行く、着いて来い」

水谷が前に進むと、列になって隊員が後に続く。

長い、暗いトンネルだった。

隊員は警戒を怠らない。並みの警官には無い凄まじい神経を尖らせる。

すると1人の隊員が叫んだ。「班長！ドアがあります！」

右側の壁に木製のドアがあった。

技術支援班の隊員がバツティングラムで扉を破った。

「クリア！」

隊員が全員中に入った。

中は学校のバスルーム並みの広さがあった。

数々の薬品や実験器具や写真があった。

「班長、ここは？」

「研究室っぽいが」

水谷は携帯カセットレコーダーを見つけた。慎重に広い、再生ボタンを押す。

『やあ、俺の名前は、どうでもいい——』

聞き覚えのある声だった。

『とにかく、このテープを聴いてる奴は薬品には触れないように。有毒ガスは発生する』

隊員が薬品から離れた。

『ここにある研究材料や実験記録は全ていらぬものだ。この研究室は切り捨てよう』

隊員の警戒心が強まっていく。

「ここには特に何も無い、奥に進むぞ」

7人は元のトンネルに戻った。

そして再び奥に進む。

感染地との通路

「班長！階段です！」

SAT隊員の1人がそう叫んだ。

確かに上がり階段があった。

信一は階段を上がりたかったが、あいにく狭い階段の入り口を金網が塞いでいる。

階段そのものを覆うように金網があった。

入り口の金網は、扉状に開閉できるようになっているが、今は鎖が錠前で閉じられている。早速、巨大なペンチを持った技術支援班の隊員が進み出てきて鎖を切断し、通行可能にした。

先陣の若い隊員が、慎重に階段を上がる。

2人の隊員が後に続く。

短機関銃を持った3人の隊員が金網に入った。

その時だった。金網が信一達の前で閉じた。

同時に階段の上に居た何かが先頭の隊員に飛び掛った。

“黒目の感染者”だった。

2人の隊員が感染者を撃ち殺そうとしたが――そして――スパーク！

映画のように派手に火花が飛び散り、金網に接していた2人の隊員が感電して動かなくなった。

水谷が慌てて感染者の頭部を撃つ抜いた。

隊員は感染者をどかせた。

班長の水谷はさすがだと感心してしまうほど冷静だった。部下達の犠牲を無駄にしないように、89式小銃で金網を触れる。

電気はもう通っていない。

扉を開け、残りの隊員を急いで通らせる。

「制圧1班より指揮班へ、2名の隊員が負傷！」

『救急班を要請した、出口はあったか』

「階段があった」

報告を終えた隊員も階段を上がる。

そこは、どこかのアパートに1階だった。

信一が扉で閉まっている正面玄関から外を見た。

「どうやらここは東京らしい」

全員驚いた顔をした。が、すぐに真剣な顔に戻る。

その時だった。

階段の入り口が閉まった。

鉄製の扉がそこにあった。

隊員が慌てて扉のノブを探したが、ノブは存在していない。鉄の扉を押したが開かない。

今度は持ち上げようとしたが、やはり駄目だった。

「開きません」

隊員は丁寧に水谷に報告した。

信一は隊員の数を確認した。5人だった。さっき2人感電して行動不能になったのは痛い。

水谷は再び報告した。

「地下に東京都を繋ぐ通路があった」

『本当か？直ちに塞がなくては』

「必要ない」

『どういう意味だ』

「通路が自動的に塞がった。よく言えば封鎖する手間が省けた。悪く言えば俺達は東京から出られない」

『東京に居るのか！なんてこった……こちらで何か方法を考えよう』

「了解、それまでゆっくりと待とうか」

信一は内心悪態ついた。

隊員の確認をした。自分を含め、全員マスクを着用しているが、目を見れば見当がつく。

班長の水谷。

若い隊員の伊川

がっしりとした体系の郷田

技術支援班の大角

これはこれがありがたい戦力だ。

そう思ったとき、上から物音がした。

全員上を見た。

「安全を確保しよう」

水谷はそう言って階段を上がった。

全員後に続いた。信一は最後尾だ。

音がしたのは最上階のはずだった。

全員最上階に着いた。

扉は既に壊れていたから、壊す手間が省けた。

全員慎重に中に入った。

部屋は科学者が住んでいたかのように、大量の薬品や実験用具や
らがあった。

「お前は入り口を見張ってろ」

水谷は伊川を指名して、入り口に立たせ、残りは部屋の奥に向か
った。

部屋の奥に人の気配がした。

全員銃を構えて部屋の奥に向かった。

そこには――3人の自衛隊員と1人の白衣姿の男が居た。

4人はファイルに夢中でこっちに気づいていなかった。

「動くなっ！全員腕を上げろ！」

郷田が大声で叫んだ。3人の自衛隊員が気づき、89式小銃を構
えた。水谷は銃を下ろした。

「俺達はSATだ。危害は加えない」

自衛隊員の隊長と思われる人物が銃を下ろした。

「俺は石倉洋、階級は准陸尉」

「俺は水谷達也、見ての通りSATだ」

水谷はゆっくりと近寄った。

「SATがここで何をしてる？」

「地下通路でここに迷い込んだ。お前達こそ、撤退したんじゃないのか？」

「資料や保菌者を探している」

白衣の男――坂本良治が言った。石倉は慌てて良治の口を閉じた。ははん、そういうことか。

「とにかく、俺達は最重要人物を探している」

信一は部屋を出ようとした。

「どこに行く？」水谷が聞いた。

「俺達はSATだ、自衛隊じゃない。連中の作戦に協力する命令は下ってないし、する気も無い」

郷田もそうだとばかりに頷き、信一に続いた。大角は迷っていた。

「部下がこう言ってるから、すまないが俺達は協力する気は無い」

「構わないさ、俺もやる気は無いが命令は命令だ、逆らう気は無い」
そう言っている間にも、良治は資料をバッグに詰めていた。

水谷は信一を追い抜き、聞いた。

「あの態度は何だ？」

「俺は上司に従う性格じゃないんでね」

「そういうもんか？」

「それより、これからどうする？」

水谷は腕を前に組んで真剣に考えた。

「爆弾でも壊せない扉が2つもある。待つより行動だ」

「つまり？」

「病院に患者を運ぶためのヘリコプターがあるはずだ、それを頂く」

「それ名案」

「からかってるのか？」

「いゝや」

出口に出たとき、水谷が叫んだ。

「伊川はどこだ！」

信一は下を見た。

「落ちたんだ」

1階に伊川の死体があった。

「なぜ落ちたんだ！」

「俺の知ったこっちゃ無い」

信一は階段を下り始めた。

「制圧1班より指揮班へ、1名死亡」

『現状の戦力は？』

「4人、1人は技術支援班だ」

『まずいな』

「どうして？」

『自衛隊が東京内の感染率をシュミレーションで調査した。結果、3分の1は感染していると思われる』

「弾薬が持たないな」

『知っての通り救助へりは飛ばせない状況だ。今自衛隊に許可を求めているが、無効も中々譲らないもんだ』

「了解、こちらも脱出方法を考える」

信一は今の会話を下から聞いていた。

まずいなと内心思った。

1階に辿り着くと、仲間の死体を近くの布で隠したが、何かを感じて振り向いた。

来た時とは反対の壁側に入り口があった。扉が無い。

信一はゆっくりと近づいた。

中は長い通路があった。

「班長殿、謎の通路があります！」

入り口の外側に他の仲間と水谷がやって来た。

「よく見つけたな」

「おてのものです……」

言い終える前に突然、入り口が閉まった。

シャッターを下ろすような感じで上から分厚い鉄製の扉が下りてきた。

そのせいで信一は仲間と別れてしまった。

最悪なことに無線機はどこかに置いて来てしまった。

「相沢、相沢返事しろ！」

扉の向こう側から水谷が叫んでいた。

「俺は無事だ！」 信一も大声で返す。

「この扉は開きそうにも無い！」

「じゃあ、俺は先に進む、あんた達は先にヘリコプターでも確保してくれ！」

数秒間沈黙が続いた。

「了解、気をつけろ！」

信一は銃を構えて、先に進んだ。

“クソツタレな気分だよ”

信二達を乗せた警備車は交差点を曲がろうとした。

だが、目の前にある大きな屋敷ともいえる建物があった。

「燃料もまずいな、とりあえずあそこの車から貰うとするか」

直人はそう言って駐車場に車を止め、外に出て隣の車から燃料を抜き始めた。

ソフィーも車から降り、外の空気を吸った。

「都会の空気はまずい」

「まったくだな」

信二はそう言った。

まったく嫌な状況だよ。東京は陸自に隔離され、感染者の数も多い。更に変な生命体も多い。まったく映画やゲームの様な状況だ。

信二はそう思った。

真人と真希がやって来た。

「あゝあ、車の中だと窮屈だ」

「まったくくだよね」

その時、建物内から声がした。

「助けて！」

小さな女の子の様な声だ。

直人が建物内を見ていた。

「俺、見ていきます」

信二はそう叫んだ。

直人が「危険だぞ！」と返した。

「平気です！拳銃があります」

「じゃあ気を付けろ！」

信二は建物内に入った。

中は暗かったが、窓から射し込む光のおかげで視界は確保できた。信二は9mm拳銃を構えながら、声のした2階に上がった。

2階には沢山の部屋があった。

信二は部屋の1つ1つを確認しようとした。

その時だった。

全身に激痛が走った。

あまりに痛みに倒れこんだ。

右腕を見ると、血管や筋が浮き出ていた。指が本人の意識関係なく動いていた。

信二は慌ててポケットの抑制剤を取り出そうとした。

だが、慌てすぎて注射器が散乱した。視界がかすんできた。

信二は1本の抑制剤を取り、右腕に突き刺した。中にある毒々しい液体を注入した。

すると

激痛が無かったかのようにすうっと消えた。

信二は全身に汗を掻いていた。激痛のせいでまだ立ち上がれない。

「信二君、大丈夫だった？」

ソフィーが中に入ってきた。

「しん……信二君!!」

倒れている信二を見て、慌てて駆け寄った。

「どうしたの?! 大丈夫!?!」

信二はゆっくりと立った。

「あ、ああ。糖尿病なんだ。薬を打ったからもう平気だ」

汗を拭った。

「本当に大丈夫なの？」

「俺は無事だ」

立花と真人と真希がやって来た。

「少女は居たか？」

「まだ……見てないな」

信二達は奥の部屋に入った。

拳銃は腰に収めた。

が、すぐに後悔した。

『助けて！助けて！』

カセットレコーダーから少女の音声が流れていた。

同時に吉川と言う少年が回転式拳銃を構えて立っていた。

「腰の銃をよこせ」

吉川はむかつく声で言った。

その顔はニキビだらけで、とある死んだ独裁者の後継者を痩せさせたような顔をしている。

相変わらずムカつく奴だと信二は思った。

「ゆうことを聞け、でないともずはそのイギリス人を撃つ」

「フランス」《『『『『よ』』』』》

ソフィーはフランスを強調して訂正した。

「3数えるからさっさとよこせ」

「殺人者にでもなるつもりか？」

「どうせ皆死ぬんだ」

信二は吉川の目から本気の殺意を感じて、渋々拳銃を床に置いた。
「蹴れ」

信二は言われたとおり拳銃を吉川まで蹴った。

「よし、いいぞ」

突然真希が前に倒れこんだ。

信二は何があったか見た。

森田と言う少年がワイヤーで真希の首を後ろから絞めていた。

信二は助けようとしたが、誰かに殴られた。

真人とソフィーは両手を挙げながら窓側に立った。

信二は見た。

容姿が地味な少年がバットで信二を殴ったのだ。

森田は興奮した声で言った。

「俺を覚えてるか？坂本」

「覚え、てる…よ…」

絞められている喉からやっこのことで出した返事だ。

「俺はお前に喧嘩で負けた。おかげで仲間からは絶交され、皆から

は馬鹿にされた」

より締め付ける力を強めた。

「殺してやりたかったよ！ やっとチャンスが来た」

真希は必死に息を吸おうと口を開けていた。

吉川は演説を始めた。

「俺とそいつは地味な性格と容姿だった。

だから空気みたいな存在だった。無視され続けていた。

今それが終わる！ お前達は地味な僕達に殺される！」

吉川は信二の拳銃を拾い上げ、構えた。

「この現状は僕達の為にあるようなものだ！ 僕を無視した野蛮人め！」

信二は立ち上がりとしたが、再び頭部をバットで殴られた。

信二は言いたいことがあったが、脳震盪を起こしているせいで言えなかった。

真人が代わりに言った。

「それはお前達が直そうとしなかっただろ！ お前達が自分の力で自分を変えようとしなかったただけだろうが！ 人のせいにするな！」

吉川は真人に銃を向けた。

「じゃ、変わろう。お前から死ね」

ソフィーが笑った。

「何がおかしい」

「何が可笑しいですって？ あなた達がよ。

私はてっきり男はプライドの高い高貴な性別かと思ってた。けど、あなた達は自分を変えようとしなない、墮落の道を歩んで来たただの下種野郎よ！」

今の台詞で吉川が銃の対象をソフィーに変えた。

「やっぱりお前からにしよう、フランス人」

信二は見た。

バットの他にもう1人包丁を持った地味な少年が居た。

「私を撃てばいいよ。拳銃を持てば、他者を制することが出来ると

思ってるの？あなた達は銃が無ければ何も出来ない弱虫毛虫よ！ああ女々しい男。このおかま！！」

今ので吉川の堪忍袋が切れたらしい。

「お前は殺さない。俺達の欲求を解消してもらうぞ」

その時だった。

包丁を持った少年が突然倒れた。

「まったく、男らしくない連中だ」

木刀を持った奈々子が居た。

バットの少年は慌てて殴りかかろうとした。

だが、刀を持った五右衛門が少年の後頭部を殴り、気絶させた。

「油断は敗北を招くぞ」

真希も後頭部で森田の顔面を頭突きした。

森田のワイヤーにこもる力が緩んだ。

真希はすかさず、森田の右腕を掴み、人差し指を甲に向かって力を入れる。

ぽきっと折れた。

森田が叫ぶ。すぐに立ち上がり、森田の腹に右拳をめり込ませる。

森田はぐおおおと倒れた。

だが問題は吉川だった。

吉川は拳銃を持っていた。

「動くな！」

全員動きを止める。

「森田、ドアを閉めろ」

「俺に、命令、するな」

森田はドアを閉めた。

中には信二、ソフィー、立花、真人、真希と吉川と森田になった。

「ガキが、調子に乗りやがって！」

吉川がソフィーに銃を向ける。

信二は引き金が引かれるタイミングを計算して、ソフィーの前に立った。

銃声と共に、信二の右肩にぽっかりと穴が開く。

「信二君！」

ソフィーが心配した声で叫んだ。

信二は倒れこんだ。

「くそつたれ！」

吉川はもう1度撃とうとした。

信二は立ち上がろうとした。

吉川は立花に撃とうとした。

だが、信二がいつの間にか吉川の前に立っていた。

吉川が反応する前に、顔面に渾身の1発をぶちかました。

吉川は思わず銃を落とす。

信二は右手で吉川の首を絞め、軽々と持ち上げ、壁に叩きつけた。

首は絞めたままだ。

「おい！この変態野郎！」

吉川は信二の両目を見て啞然とする。

両目が赤かった。

「このくずが！お前は女を撃ち殺そうとした！俺の大事な親友の女2人な！」

絞める力が上がる。

「俺の彼女を殺そうとした！俺の今亡き親友の彼女を殺そうとした！」

信二は腹を殴る。

こんな男はどんなに殴っても、怒りを納めることが出来ない。

「死ね！」

首をへし折ろうとした。

「信二君やめて！」

ソフィーが信二を後ろから抑えようとした。

信二ははっと我に返り、吉川を放した。

両目は正常に戻っている。

「ば…化け物！」

吉川の捨て台詞に信二は怒り、頭を殴った。

吉川は気を失った。

「信二君しっかりして！怒りを静めて！」

信二は深呼吸する。

「ああ…すまない、少し興奮気味だった」

「相手がどんなに酷い奴でも、生きた正常な人間を殺すのだけは駄目！人殺しはよくない！」

「ああ、そうだ…：…そうだな」

信二は2つの拳銃を拾った。

廊下の奈々子と五右衛門が入ってきた。

「かたはついた見たいだね」

「主らの勝利か」

全員ほっと一安心する。

猫田と須田もやって来た。

「さっさと行くぞ」

「くくく、再出発だ」

その時だった。

突然、床が裂けた。

いや、床が開いた。

部屋に居た全員が落ちた。

直人が階段を上がり、信二達の居た部屋を目指した。

だが、部屋の前にはフードの男——岡本大輝が居た。

レバーを引いて、何かした。

「お前、何をした！」

直人が89式小銃を構えて叫んだ。

「今回の主役達を落とした」

瞬時に理解した。

きっと床を開くレバーか何かだ。

直人は引き金に力を入れる。

「お前！子供達もどこへ！」

「試練の場だ」

岡本が振り向いた。

岡本の顔を見た直人は引き金を引いた。

89式小銃が火を噴き、弾丸が1発岡本の頭を撃ち抜いた。
普通なら即死か重傷だ。

だが平然と立っていた。

「お前は邪魔だ！」

岡本が走ってきた。

小銃を連発にし、連射した。

弾丸は岡本の体に炸裂したが、足止めにもならなかった。

岡本は両肩を掴み、投げ飛ばした。

直人は1階まで落ちたが、命は無事だった。

「あいつ、本当の化け物か！」

突然、窓が割れた音がした。

感染者が窓を割って入ってきた。

直人は感染者の頭を正確に撃ち抜いた。

すぐに外に出た。

大勢の感染者が走ってきた。直人はすぐに車に入った。

「あいつらは！」

蛇谷が聞いた。

「後で助けるから！」

直人はアクセルを踏み、発進させる。

「……君……信二君！」

信二は目を覚ます。

そこは、広いバスルームだった。工業用という感じだった。上のほうにシャワー栓があった。沢山の配管が天井から不気味に垂れ下

がり、壁を走っている。壁には鏡、便座、バスタバがあった。何年も放置していたのか、カビや汚れがあった。

ソフィーが信二の体を揺すっていた。

「起きてるよ……」

「良かった、気分は？」

「クソツタレな気分だよ」

立ち上がる。

2人以外にも、真人と真希と立花と奈々子と五右衛門、猫田、須田、吉川、森田が気絶していた。

こんな大勢居るのに、真っ先自分を起こしてくれたソフィーに信二は感謝の様な気持ちになった。

カップル成立か？保菌者カップル。片方は完全な保菌者、片方は抑制剤が必要な保菌者。

ある種の皮肉を感じた。

まったく、神様も冗談きついで。

信二は立ち上がる。

バスルームには鉄製の引き戸があった。

一応開くかは別として、出入り口が存在するのに安心感を覚えた。うっとうしいと言いながら真人も起き上がる。

信二は思わず駆け寄る。

「大丈夫か？」

「んん……クソツタレな気分だよ」

ソフィーが扉を引いた。

「通路が2つあるよ」

2つか…面倒くさいな。大人数だから、2手に分かれるが……全員が目覚まし始めた。

信二は首をならしながら、9mm拳銃を腰に収め、回転式拳銃は握った。

吉川も目を覚ました。

「おい！クズ野郎！」

吉川の口に銃口を突っ込む。

「立ち上がれ！」

吉川は立ち上がった。

「来い！」

太いパイプに鎖が伸びており、先には足枷があった。

「3つの選択肢をやる！拳銃で脳天をぶち抜かれるか！足枷を嵌めるか！黙って俺達の言うことを聞くか！」

「い、言うことを聞く…聞くから…」

「お前は！」

銃口を森田に向ける。

「俺は命令を聞きたちじゃね」

「じゃあぶち抜くか？足枷か？」

「黙って着いていくぜ」

信二はあつそとばかりに拳銃を下ろす。

「相沢」

真人がやって来た。

「通路はどっちを通る？」

「多数決だ」

全員が完全に目を覚ました。

「話は大体聞いた」

猫田は首をならしながら立ち上がった。

「俺の意見としてはな、ここは二手に分かれるんだ」

「駄目だ、ここは未知の領域だ。迂闊に行動はできない」

「だからこそだ。二手に分かれたほうがここの地形の理解も早まる」

「だけど――」

「多数決で決めよう」

猫田が言った。

「二手に分かれる奴に賛成の人は？」

全員が手を上げた。

「決まりだな」

そう言ったとき、突然吉川が信二の回転式拳銃を奪った。

しまったと信二は内心叫んだ。自分の迂闊さを恨んだ。

吉川は拳銃を構えた。

「へへ、形勢逆転だ」

「くたばれ」

真人と猫田がそう言った。

「いくらでも言え！」

吉川は外に出た。

引き戸を閉めた。

真人がまさかとはかりに引き戸を引いたが、開かなかった。

「くそっ！ 鍵を掛けやがった！ くそっ！ くそっ！ こんちくしょうオオオ！」

扉を叩きまくった。

五右衛門が冷静に言った。

「まあ待て、怒り出しても何も始まらない。ここは1つ冷静に考え合おう」

真人は怒りを納めた。

「どうやって開ける？」

「てこの原理だ」

吉川は走り続けた。

興奮と怒りを感じている。

あのフランス人め！ 俺をおかまだと！？ 今に見てろ！ きっと後悔させてやろう！

そう思いながら、鉄製の扉が見えた。

俺は地味だからいじめられた！ それだけだ！ 今日で地味な存在ではなくなる。俺は救世主だ！

扉を開けた。

そこには、殺風景な部屋が広まっていた。

天井に金網が張っており、部屋の中心に棺桶のような箱があった。部屋の奥にまた鉄製の扉があった。

吉川は扉を開こうと、押してみたがびくともしなかった。そこへ人の気配が感じられた。

吉川は振り返る。

フードを被った男――岡本が立っていた。

「動くな！」

吉川は拳銃を構えた。

岡本はゆっくりと近寄る。

箱を開けた。

「手紙がある」

「読め」

“やあ、箱に入れ。いいことがある”

吉川は知っていた。

いいことがあると言う言葉は大体嘘。本当は悪いことばかりだ。

「箱に入れ」

「箱に？」

吉川は銃を構えながら箱の中を遠くで見た。

中はガラスの破片ばかりだ。

吉川は意味が分かった。

この箱に誰か1人を入れて、閉じ込めればいい。いいことってのはきつと扉が開くんのだ。

そう思った吉川は言った。「箱に入れ」

「よせよせ、冷静に話し合おう」

「いいから入れ！」

そう言って岡本を蹴った。

岡本は箱に入れられてしまった。

すかさず吉川は箱の蓋を閉めた。

ロックされる音がした。

ご丁寧にも、箱の蓋はガラスで出来ていて、中の様子が見える。

吉川は箱を押した。

箱が倒れ、床にあった穴にすっぽりと嵌った。隙間無く、丁度いい大きさの穴だ。

ほらな、悪いことだ。

同時に、入り口の扉が閉める。

吉川は慌てて扉を開けようと押したが、びくともしない。すぐに箱に寄った。

箱の中に居る岡本がリモコンのようなものを持っていた。あれで閉めたのか？

「リモコンのボタンを押せ！」

岡本は首を振る。

銃を構えた。

「いいから押せ！」

岡本は渋々押した。

これで扉が開く——そう思った。

だが違っていた。

部屋の両側にある壁が動き出した。

部屋の中心に向かって、ゆっくりと進む。

この部屋には障害物が無い——このままでは——壁に潰される。慌てた吉川は、入り口の扉を押したが、びくともしない。

はっと吉川は箱を見る。

箱は穴に嵌っている。あそこは安全空間だきつと。

そう思って拳銃を構えながら言った。

「箱を開けろ！」

だが岡本は首をフル。

ふざけるな！

吉川は拳銃を撃つ。何発も撃った。

だが、箱のガラスは傷1つ無かった。強化ガラスだった。

吉川は箱を蹴った。

「箱を開けてくれ！」

岡本は首を振る。

仕方なく吉川は、右側の壁により、押し返そうと押した。だが、押されているのは吉川だった。足が床をすべり、足止めにもならない。

押しても無駄だと悟り、再び入り口を引っ張ったが、びくともしない。

吉川は箱の上に立ち、土下座した。

「お願いします！開けてください！」

だが岡本はガラスに息を吹きかけ、文字を書いた。

“ 自業自得 ”

「準備はいいか？」

全員が扉の隙間に鉄板を入れた。

「せーの！」

全員が押した。

扉ははずれ、通行可能になった。

「よし！」

全員が外に出た。

信二が言った。

「俺、安藤、真希さん、ソフィー、立花は右側、佐々木さん、五右衛門君、猫田さん、須田さん、森田は左側を行きましょう」

全員が頷いた。

「じゃ、健闘を祈ります」

吉川は壁を押したが、壁同士がじよじよに迫る。

もはや棺桶二個分の広さしか残っていなかった。

吉川は拳銃を口に突っ込んだ。

潰されるくらいなら！

「俺が悪かった！もうやらない！反省する！！頼む！俺が悪かった！助けてくれ！神様！」

吉川は泣きじやくった。大粒の涙と鼻水、涎が垂れた。

こんな死に方をすくらいだったら、一生地味でよかった……

そう悟つても遅かった。

「ママアア！ パパ！ 神様ああ！ 仏様ツツ！！ 天使様ツツ！！！！」

[illegible]

右腕が壁の圧力に耐え切れなくなり、骨が折れ、皮膚を突き破って骨が飛び出した。

吉川は動物の様な悲鳴を上げた。

右脚も圧力に耐えられず、骨が飛び出した。

「ぎゃああああああああああ！」

右腕と右脚から新鮮な血が流れ出る。

吉川は壁に挟まった。

だが、壁は容赦なく吉川を潰そうとする。

段々と吉川が潰れていく。

悲鳴が大きくなっていく。

肋骨が飛び出した。

吉川の悲鳴も小さくなっていく。

目が飛び出しそうになり、鼻と口から血が吹き出た。

吉川は、自分の死をゆっくりと悟った。

あちこちの皮膚が引き裂かれ、内臓が飛び出た。

頭蓋骨が砕け、目が飛び出した。

そして、壁と壁はぴったりとくつついた。

まるで、何も挟んでいないように隙間無く接していた。

“クソツタレな気分だよ”（後書き）

今年も終わり新年も近いですね、その前にクリスマスだ。
来年こそいい年であることを願います。

今年は色々ありましたからね。

世界各国の独裁政権が崩壊したり、天皇陛下がマイコプラズマ肺炎
になったりと。

来年はいい年であることを願います。

今年の後悔していることと言えば、吉川の殺し方が残酷すぎました
ね。

苦情があれば、もっと鮮やかな死に方に変えましょう。

メリークリスマス

いいお年を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1037x/>

感染者の沈黙

2011年12月24日00時51分発行